

よし　たけ  
吉武遺跡群

XIX

飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書 13

古代-近世編

福岡市埋蔵文化財調査報告書第965集

2007

福岡市教育委員会

よし  
し  
た  
け

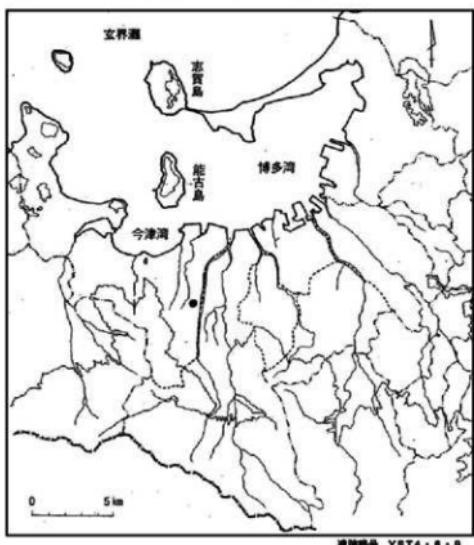
# 吉武遺跡群

## XIX

飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書 13

古代-近世編

福岡市埋蔵文化財調査報告書第965集



成稿番号 YBT4-5-9  
提出番号 0335, 0416, 0535

2007

福岡市教育委員会

卷頭図版1



瓦当類



内面視

瓦

第6次調査SD05清出土遺物



第6次調査MN-16地区鍛冶炉跡群全景（南西から）



1. 1・2区全景（南から）



2. B群SB24（北東から）



1. SD03内八鏡出土状況（東から）



2. SD03出土八鏡鏡



3. SD11出土銅製勾玉



4. 瓢箪土器422・887

## 序

古来より大陸文化導入の窓口であった福岡市域には、東アジアとの交流を具体的に物語る多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも、特に市西郊の室見川左岸に位置します吉武遺跡群は、弥生～古代にかけての遺跡が多く分布する地域として知られています。

さて、この地域では、昭和56年度より飯盛吉武地区土地改良事業の施工に伴って、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、当該年度より事業が完結する昭和60年度まで調査を継続いたしました。

発掘調査の結果、紀元前2世紀に遡る弥生時代の特定集団墓地や紀元前後の墳丘墓・大型掘立柱建物、古墳時代中期の前方後円墳・円墳群、奈良時代末から平安時代にかけての官衙或いは寺院跡と考えられる遺構など各時代の遺構が密度濃く検出されました。

本書は、古代を中心として、中世・近世の遺構について収録したものです。

本書が本市の埋蔵文化財の理解と認識を深めるための手助けとなり、また学術研究や社会教育の分野において活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に関わりお世話をいただいた飯盛吉武土地改良組合や現場作業員の方々、また、報告書作成に携わった方々をはじめ、本遺跡の史跡指定について暖かいご理解とご協力をいただきました地権者の方々に対して心より感謝申し上げる次第であります。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

## 例　言

1. 本書は、飯盛吉武地区土地改良事業(圃場整備)に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武地内に所在する吉武遺跡群第4・6・9次についての調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和56年度から昭和60年度まで福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が実施した。
3. 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、土坑-SK・土壙-SX・溝状遺構-SD・掘立柱建物-SB・柱穴-SP・甕棺墓-Kと表記した。
4. 本書は、発掘調査された遺構のうち、古代・中世・近世期に関するものを収録している。
5. 本書に使用した遺構の実測図は、調査担当者の他に別に記載した調査員が行った。9次においては、「西日本航業株式会社」に委託した航空測量図を併用した。図中の数字は絶対標高である。遺物実測は、担当者の他に、山崎賀代子・井上加代子・平川敬治が行った。
6. 本書に掲載した遺物類の整理は、副田則子、松田弘子、花田友美子、土田由紀、木村厚子、国武真理子、南里美佳が行った。
7. 本書に使用した図面類の整図及び製図は、副田則子、井上加代子が行った。
8. 本書に使用した写真的うち、遺構は力武卓治・下村智の他、9次調査全景は「稻富興産」、西日本航業株式会社による。遺物は加藤良彦・横山邦継が撮影した。
9. 本書で使用している図面の方位は、4・6次は磁北、9次は座標北、旧国土座標第2系による。磁北は、これに6分10秒西偏する。
10. 発掘調査で出土した遺物や図面・写真類などの記録は、本市「収蔵要項」に基づいて整理を行い、埋蔵文化財センターに収蔵し、活用に付す予定である。
11. 表紙の題字は、杉山悦子氏(元埋蔵文化財センター)にお願いした。記して感謝する次第である。

## 本文目次

第一章	はじめに	頁
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
第二章	遺跡の立地と環境	5
第三章	第4次調査報告	7
	-概要-	7
1.	溝状遺構	10
2.	近世墳墓	17
第四章	第6次調査報告	22
	-概要-	22
1.	土坑	22
2.	鐵冶炉	27
3.	掘立柱建物	31
4.	溝状遺構	32
5.	6次調査出土遺物類	42
第五章	第9次調査報告	43
	-概要-	43
1.	第1~3区の調査	44
2.	第2号支線排水路1区の調査	111
3.	第4区の調査	115
4.	出土地不明の資料	116
5.	小結	116
第六章	おわりに	117

## 挿 図 目 次

F i g . 1	周辺遺跡分布図(1/25,000) .....	5
F i g . 2	調査区位置図(第1～9次調査) .....	6
F i g . 3	第4次調査全体図(1/1,250) .....	8・9
F i g . 4	3号水路調査区・北壁土層断面図(1/50) .....	(折り込み)
F i g . 5	3号水路 S D02溝灰褐色砂質土上層出土遺物実測図①(1/3) .....	11
F i g . 6	3号水路 S D02溝灰褐色砂質土上層出土遺物実測図②(1/3) .....	12
F i g . 7	3号水路 S D02溝灰褐色砂質土上層出土遺物実測図③(1/1) .....	13
F i g . 8	3号水路 S D02溝灰褐色粘質土出土遺物実測図(1/3) .....	14
F i g . 9	3号水路 S D02溝灰褐色砂層出土遺物実測図(1/3) .....	14
F i g . 10	3号水路 S D01溝灰色砂層、S D03溝灰黒・黒灰色腐食土出土遺物実測図(1/3) .....	15
F i g . 11	2号支線道路南端部排土・樋渡古墳墳丘上・周溝内出土遺物実測図(1/3) .....	15
F i g . 12	7号支線道路 S D01溝灰黒色粘質土・遺構検出面出土遺物実測図(1/3) .....	16
F i g . 13	G～I-12地区 S D02・04～06・08溝・現代溝・遺構検出面出土遺物実測図(1/3) .....	16
F i g . 14	I-11地区 S D01溝出土斎串実測図(1/2) .....	17
F i g . 15	樋渡近世墳墓出土状況実測図①(1/30) .....	18
F i g . 16	樋渡古墳墳丘上墓地出土状況全体図(1/100) .....	(折り込み)
F i g . 17	樋渡近世墳墓出土状況実測図②(1/30) .....	19
F i g . 18	樋渡近世墳墓出土状況実測図③(1/30) .....	20
F i g . 19	樋渡近世墳墓(甕棺)出土副葬の塗椀・桃櫛実測図(1/2) .....	21
F i g . 20	第6次調査遺構全体図(1/1,000) .....	23
F i g . 21	L・M16地区 S K256土坑出土状況実測図(1/30) .....	24
F i g . 22	L・M16地区 S K256土坑出土遺物実測図(1/4) .....	25
F i g . 23	L・M16地区製鉄関連遺構全体図(1/60) .....	26
F i g . 24	第1号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	27
F i g . 25	第2号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	28
F i g . 26	第3号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	28
F i g . 27	第4・5号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	28
F i g . 28	第6号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	29
F i g . 29	第8号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	29
F i g . 30	第9号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	29
F i g . 31	第10号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	29
F i g . 32	第11号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	30
F i g . 33	第12号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	30
F i g . 34	第13号炉跡出土状況実測図(1/20) .....	30
F i g . 35	炉跡出土遺物実測図(1/4) .....	30
F i g . 36	S B85掘立柱建物出土状況実測図(1/50) .....	31
F i g . 37	S B85掘立柱建物出土遺物実測図(1/3) .....	32

F i g. 38	1号幹線道路3区 S D05溝出土状況実測図(1/250) .....	33
F i g. 39	S D05溝出土遺物実測図①(1/4・1/2) .....	34
F i g. 40	S D05溝出土遺物実測図②(1/3) .....	35
F i g. 41	S D05溝出土遺物実測図③(1/3) .....	36
F i g. 42	S D05溝出土木器実測図(1/4) .....	37
F i g. 43	1号幹線道路1区 S D01・1号幹線道路2区 S D02・MN-16・17S D04溝出土遺物実測図(1/4) .....	38
F i g. 44	S D02溝出土墨書き土器 .....	38
F i g. 45	S D02溝出土木器実測図①(1/4) .....	39
F i g. 46	S D02溝出土木器実測図②(1/4) .....	40
F i g. 47	第6次調査出土遺物実測図(1/4・1/3) .....	41
F i g. 48	第9次調査1～3区遭構分布図(1/1250) .....	44
F i g. 49	A群遭構分布図(1/500) .....	45
F i g. 50	S D01溝遺物実測図①(1/3) .....	46
F i g. 51	S D01溝出土遺物実測図②(1/3) .....	47
F i g. 52	S D01溝出土遺物実測図③(1/3) .....	47
F i g. 53	S D01溝出土遺物実測図④(1/3) .....	48
F i g. 54	S D01溝出土遺物実測図⑤(1/3) .....	49
F i g. 55	S D01溝出土遺物実測図⑥(1/3) .....	50
F i g. 56	S D01溝出土遺物実測図⑦(1/3) .....	51
F i g. 57	S D01溝出土遺物実測図⑧(1/4) .....	52
F i g. 58	S D01溝出土遺物実測図⑨(1/4) .....	53
F i g. 59	S D01溝出土遺物実測図⑩(1/3・135～139-1/4) .....	54
F i g. 60	S D01溝出土遺物実測図⑪(1/4・142-1/6) .....	55
F i g. 61	S D01溝出土遺物実測図⑫(1/4・163～166-1/3) .....	56
F i g. 62	S D02溝出土遺物実測図①(1/3) .....	57
F i g. 63	S D02溝出土遺物実測図②(1/3) .....	58
F i g. 64	S D02溝出土遺物実測図③(1/4) .....	59
F i g. 65	S D02溝出土遺物実測図④(1/4) .....	60
F i g. 66	S D03溝出土遺物実測図①(1/3) .....	61
F i g. 67	S D03溝出土遺物実測図②(1/3) .....	62
F i g. 68	S D03溝出土遺物実測図③(1/3) .....	63
F i g. 69	S D03溝出土遺物実測図④(1/3) .....	64
F i g. 70	S D03溝出土遺物実測図⑤(1/3) .....	65
F i g. 71	S D03溝出土遺物実測図⑥(1/3) .....	66
F i g. 72	S D03溝出土遺物実測図⑦(1/3・371～373-1/4) .....	67
F i g. 73	S D03溝出土遺物実測図⑧(1/3) .....	68
F i g. 74	S D03溝出土遺物実測図⑨(1/4) .....	69
F i g. 75	S D03溝出土遺物実測図⑩(1/4) .....	70

F i g. 76	S D03溝出土遺物実測図①(1/4) .....	71
F i g. 77	S D03溝出土遺物実測図②(1/4) .....	72
F i g. 78	S D03溝出土遺物実測図13(1/4・2 4 9・2 5 0 - 1/3) .....	73
F i g. 79	S D03・11溝出土八稜鏡・銅製勾玉実測図(2/3) .....	74
F i g. 80	S D08・09・10溝出土遺物実測図(1/3) .....	74
F i g. 81	S D11溝出土遺物実測図①(1/3) .....	75
F i g. 82	S D11溝出土遺物実測図②(1/3) .....	76
F i g. 83	S D11溝出土遺物実測図③(1/3・5 3 8 - 1/4) .....	77
F i g. 84	S D11溝出土遺物実測図④(1/4) .....	78
F i g. 85	S D13溝出土遺物実測図①(1/3・5 5 9 ~ 5 6 4 - 1/4) .....	79
F i g. 86	S D13溝出土遺物実測図②(1/3) .....	80
F i g. 87	S D13溝出土遺物実測図③(1/4) .....	81
F i g. 88	S D13溝出土遺物実測図④(1/4) .....	82
F i g. 89	S D16・17溝出土遺物実測図(1/3) .....	83
F i g. 90	S D31・32溝出土遺物実測図1(1/3・626~628 - 1/4) .....	84
F i g. 91	S D32溝出土遺物実測図2(1/4) .....	84
F i g. 92	S K07~09・35・99・295土坑出土状況実測図(1/100) .....	86
F i g. 93	S B27・204・208・209掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	87
F i g. 94	S B05・06掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	88
F i g. 95	S B07・08・28掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	89
F i g. 96	S B201・202・203・204掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	90
F i g. 97	S K08土坑・S B05~08・205・208・209掘立柱建物出土遺物実測図(1/3・669~672 - 1/4) .....	91
F i g. 98	第2号支線道路出土遺物実測図(1/4・678・679 - 1/3) .....	92
F i g. 99	S D14・19・47溝出土遺物実測図(1/3) .....	93
F i g. 100	S E02・04・05井戸出土状況実測図(1/50) .....	94
F i g. 101	S E02井戸出土遺物実測図(1/3) .....	95
F i g. 102	S E04井戸出土遺物実測図(1/3・738~742 - 1/4) .....	96
F i g. 103	S X01・02土壙出土状況実測図(1/100) .....	97
F i g. 104	S B17・18・20・24・25・26掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	98
F i g. 105	S E05井戸・S X01道路状遺構・S B17・24掘立柱建物出土遺物実測図(1/3・764 - 1/6) .....	99
F i g. 106	S D07・33溝出土遺物実測図・1(1/3・771・795~797 - 1/4) .....	101
F i g. 107	S D07溝出土遺物実測図・2(1/4) .....	102
F i g. 108	S C01住居跡・S B01~03・13・31掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	103
F i g. 109	S D15溝・S E01井戸・S B01・31掘立柱建物出土遺物実測図(1/3・829~832 - 1/5) .....	104
F i g. 110	S B41・46・47掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	106
F i g. 111	S B42・59・60~62・64掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	107
F i g. 112	S D36・42・43溝出土遺物実測図(1/3) .....	109
F i g. 113	その他遺構の出土遺物実測図(1/3・847~848 - 1/4) .....	109

F i g. 114	第2号排水路1区遺構分布図(1/500) .....	110
F i g. 115	S B 302~305掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	111
F i g. 116	第2号排水路1区出土遺物実測図(1/3・863~865・867-1/4) .....	112
F i g. 117	第2号排水路4区遺構分布図(1/200) .....	113
F i g. 118	S B 403~406掘立柱建物出土状況実測図(1/100) .....	114
F i g. 119	第2号排水路4区出土遺物実測図(1/3・878-1/4) .....	114
F i g. 120	第9次調査出土地点不明遺物実測図(1/3・888~890-1/4) .....	115
F i g. 121	9次調査時期別遺跡分布図 .....	117

## 図 版 目 次

- P L. 1 1. 横渡近世墓地検出状況(東から)  
2. 横渡近世墓地検出状況(南から)
- P L. 2 1. 横渡近世墓地東側検出状況(南から)  
2. 横渡近世墓地埋置状況断面(北から)
- P L. 3 1. 横渡近世壺棺墓埋置状況断面(北から)・(後円部墳丘西側土層断面)  
2. 近世墓出土状況
- P L. 4 横渡近世壺棺墓・I-11地区 S D01溝出土木製品
- P L. 5 横渡近世墓地の墓石碑①
- P L. 6 横渡近世墓地の墓石碑②
- P L. 7 横渡近世墓地の墓石碑③
- P L. 8 横渡近世墓地の墓石碑④
- P L. 9 1. L・M16地区炉跡群全景(西から)  
2. L・M16地区炉跡群全景(南西から)
- P L. 10 1. L・M16地区炉跡群全景(北から)  
2. 第1号炉跡出土状況(東から)
- P L. 11 第1・2号炉跡出土状況(東から)
- P L. 12 1. 第2号炉跡出土状況(南西から)  
2. 第6号炉跡出土状況(西から)  
3. 第4号炉跡出土状況(南から)  
4. 第5号炉跡出土状況(南から)
- P L. 13 1. 第7号炉跡出土状況(北から)  
2. 第8号炉跡出土状況(西から)  
3. 第9号炉跡出土状況(北から)  
4. 第10号炉跡出土状況(北東から)  
5. 第3号炉跡出土状況(東から)  
6. 第13号炉跡出土状況(西から)
- P L. 14 1. L・M-16地区 S B85建物出土状況(北から)  
2. L・M-16地区 S K256土坑出土状況(西から)
- P L. 15 1号幹線道路第2区調査区 S D02b溝出土木器類
- P L. 16 1号幹線道路第2区調査区 S D02b溝出土木製鏡
- P L. 17 1号幹線道路第3区調査区 S D05溝出土木器類
- P L. 18 第6次調査出土の磚・瓦・羽口
- P L. 19 方形区画溝と飯盛山(東から)
- P L. 20 1. A群西半分出土状況全景(東から)  
2. A群西半分出土状況全景(南から)
- P L. 21 1. A群西半分出土状況全景(西から)  
2. A群区画溝出土状況(東から)

- P L. 23 1. S D11溝内勾玉出土状況(北西から)  
2. A群 S B04・05掘立柱建物、S D01・16溝出土状況(東から)
- P L. 24 1. A群 S B07掘立柱建物出土状況(南から)  
2. A群 S B08掘立柱建物出土状況(南から)
- P L. 25 1. 第2号支線道路区(南から)  
2. S B205・208掘立柱建物出土状況(南から)
- P L. 26 1. S B298掘立柱建物人物対比(南から)  
2. S B205掘立柱建物(左)、S B208掘立柱建物(右)礫石根石出土状況(西から)
- P L. 27 1. B群 S B24掘立柱建物出土状況(北から)  
2. B群 S E02井戸出土状況(北から)
- P L. 28 1. B群 S E03井戸出土状況(南から)  
2. B群 S E05井戸出土状況(東から)
- P L. 29 1. C群全景(南東から)  
2. C群 S B03・01掘立柱建物出土状況(南から)
- P L. 30 1. D群 S B41・46・47掘立柱建物出土状況(南西から)  
2. E群 S D42・43溝出土状況(南から)
- P L. 31 1. 2号支線排水路1区鉄滓出土状況(西から)  
2. 4区全景(西から)
- P L. 32 S D01溝出土遺物 1
- P L. 33 出土遺物
- P L. 34 出土遺物
- P L. 35 出土遺物
- P L. 36 出土遺物
- P L. 37 出土遺物
- P L. 38 出土遺物
- P L. 39 出土遺物
- P L. 40 出土遺物
- P L. 41 出土遺物
- P L. 42 出土遺物
- P L. 43 出土遺物
- P L. 44 出土遺物
- P L. 45 出土遺物
- P L. 46 出土遺物
- P L. 47 出土遺物
- P L. 48 出土遺物

## 表 目 次

T a b . 1	吉武遺跡群調査一覧	4
T a b . 2	9次調査古代～近世土坑一覧表	119
T a b . 3	9次調査溝一覧表	119
T a b . 4	9次調査井戸一覧表	120
T a b . 5	9次調査掘立柱建物一覧表	120

## 付 図 目 次

付 図 1	吉武遺跡群遺構全体図(1/1,000)
付 図 2	吉武遺跡群第9次調査遺構分布図(1/500)

# 第一章　はじめに

## 1. 調査に至る経過

吉武遺跡群調査は、昭和55年(1980)6月11日付けで農林水産局農業構造改善部農業土木課(現農林部農地整備課)から教育委員会文化部文化課に提出された「飯盛吉武地区団体営圃場整備事業」計画によって開始された。

当初事業計画では、事業面積46.4haのうち、昭和55年度 - 3.6ha、昭和56年度 - 9ha、昭和57年度以降で33.8haを整備するものであった。このうち、昭和55年度事業区は地形的に宝見川の新しい氾濫原であることが明らかであることと施工上殆ど影響を受けないために本調査からは除外した。

昭和56年度以降の事業地は、昭和44年に行われた九州大学による早良平野の分布調査やその後の市教育委員会の分布調査によって、全域に弥生時代から古墳時代の遺物が散布することが知られていた。

教育委員会文化課では、昭和56年度事業地7.5haについて試掘調査(昭和56年6月16~19日、同7月8~10日)を実施し、遺構の把握を行った。その結果、対象地には弥生時代前期末から後期はじめの壺棺墓群や竪穴住居跡・溝・柱穴群などの古墳時代遺構が密度濃く分布することが明らかとなった。

試掘調査後、その成果をもとに切り土工事や構造物工事(道路・水路)によって遺構の失われる対象区域を確定するために事業者と協議を重ね、昭和56年11月1日より本格的な調査を開始した。(第1次調査)

第1次調査以降、工事の施工と発掘調査が当該年度で重複するため、各事業年度での調査規模を設計変更などで最低に抑えるため、土地改良組合、文化課、事業指導課(農業土木課)との協議が定期的にもたれ、事業の円滑な進行が踏られた。

また、圃場整備で6次にわたって調査された事業地のうち、豊富な青銅器などの副葬品を伴う吉武高木墓地(7・8次)や吉武大石墓地(9次)の一部は、弥生時代のクニの始まりを考える上で学術的にも非常に価値が高く、地権者の同意を得て国史跡「吉武高木遺跡」として指定を受け、永久に保存されることとなった。

## 2. 調査の組織

昭和58年度の調査関係者は以下の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会教育長 西津 茂美

【調査総括】 文化財部長 中田 宏

　　文化課長 生田征生

　　埋蔵文化財第2係長 折尾 学

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 岡島洋一・古藤国生

【調査担当】 発掘調査 下村 智・横山邦繼、試掘調査 田中寿夫

【調査・整理調査員】 田中克子、緒方俊輔

【調査作業員】 村本健二、溝口武司、中山 章、牧 重幸、川田 初、橋 哲也、大賀敏明、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒテ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、岸田 浩、清末シズエ

倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光イワ子、倉光スマ子、倉光ナツ子、倉光信子、倉光初江、小柳和子、齊藤国子、柴田憲子、柴田タツ子、柴田春代、滝良子、高松美智子、筒井ひとみ、堤直代、土井崎つや子、富崎栄子、富崎フミ子、富永ミツ子、鳥飼タキ子、永井鈴子、中島栄子、中西ヒデ子、中西美由紀、中牟田チエ子、中山サダ子、西島美千代、西原春子、野下久美子、原幸子、原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、宮原富江、官崎泰子、矢富富士子、柳井純子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業員】 花畠照子、溝口博子、安野良、副田則子、伊藤美紀、鳥飼悦子、室以佐子、坂井香代子、持原良子

昭和59年度の調査関係者は以下の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会教育長 西津茂美

【調査総括】 文化財部長 中田宏

文化課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾学

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 関島洋一・松延好文

【調査担当】 発掘調査 下村智・横山邦繼、常松幹雄 試掘調査 田中寿夫

【調査・整理調査員】 田中克子、岩本陽児、矢野健一、猪方俊輔

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橋哲也、亀井照義、北園諭、藤嶋博明、甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齊藤国子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土井崎つや子、富崎栄子、富崎マチ子、富永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中西ヒデ子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山秀子、能美須賀子、原ハナエ、原口マサ子、平田美絵子、堀尾久美子、松尾鈴子、松本育代、溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井純子、柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田チオキエ、結城千代子、吉積エミ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畠照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、副田則子、伊藤美紀

昭和60年度の調査関係者は以下の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会教育長 西津茂美

【調査総括】 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 岡島洋一、松延好文

【調査担当】 発掘調査 力武卓治、下村智、常松幹雄、加藤良彦

【調査・整理調査員】 田中克子、岩本陽児、矢野健一、緒方俊輔、樋口秀信、蓮藤敏雄、溝口孝司

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上 宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田 初、橋 哲也、亀井照義、北園 諭、小路永智明、蓮鶴博明、甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ、岸田 浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齊藤国子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、溝 良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土井崎つや子、富崎栄子、富崎マチ子、富永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山秀子、能美須賀子、原 ハナエ、原口マサ子、平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鈴子、松本育代、溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井純子、柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トオキエ、結城千代子、吉積エミ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畠照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、副田則子、伊藤美紀、木村厚子、国武真理子、能美須賀子、小城信子、芦恵美子、南里三佳

#### 既刊調査報告書

- ①『吉武高木 - 満生時代埋葬遺跡の調査概要 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集」1986年
- ②『吉武遺跡群 - 市道野方金武線建設に伴う発掘調査報告書 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集」1988年
- ③『吉武遺跡群IV』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集」1989年
- ④『吉武遺跡群V - 市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集」1992年
- ⑤『吉武遺跡群VI - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書I -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集」1995年
- ⑥『吉武遺跡群VI - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書II -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集」1996年
- ⑦『吉武遺跡群IX - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書3 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集」1997年
- ⑧『吉武遺跡群X - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書4 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集」1998年
- ⑨『吉武遺跡群X I - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書5 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集」1999年
- ⑩『吉武遺跡群X II - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書6 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集」2000年
- ⑪『吉武遺跡群X III - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書7 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集」2001年
- ⑫『吉武遺跡群X IV - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書8 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集」2002年
- ⑬『吉武遺跡群X V - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書9 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集」2003年
- ⑭『吉武遺跡群X VI - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書10 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第831集」2004年
- ⑮『吉武遺跡群X VII - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書11 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第864集」2005年
- ⑯『吉武遺跡群X VIII - 飯盛吉武園場整備関係調査報告書12 -』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第911集」2006年

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧(平成18年3月現在)

次数	調査番号	遺跡略号	調査地名	分布地図番号	調査期間	調査面積	担当者	文献
1	8102	YST-1	西区飯盛地区 (面積整備1次)	092-A-12(0405)	1981.11.1~ 1982.3.5	12,000m <sup>2</sup>	二宮忠司・田中寿夫 小林良彦	②・④ ③・⑫
2	8234	YST-2	西区飯盛地区 (面積整備2次)	092-A-12(0405)	1982.9.1~ 1983.2.15	21,000m <sup>2</sup>	二宮忠司	②・④ ③・⑫
3	8235	YST-3	西区飯盛地区 (田舎整備1次)	092-A-12(0405)	1982.9.22~ 1983.2.12	5,200m <sup>2</sup>	山崎龍雄 二宮忠司	①
4	8335	YST-4	西区吉武地区 (面積整備3次)	092-A-10-12(0405)	1983.9.12~ 1984.3.24	25,000m <sup>2</sup>	下村 智 横山邦輔	②・④ -⑪
5	8415	YST-5	西区飯盛地区 (田舎整備2次)	093-A-10(0405)	1984.4.13~ 1984.5.31	1,600m <sup>2</sup>	渡石智也 二宮忠司	④
6	8416	YST-6	西区吉武地区 (面積整備4次)	093-A-10(0405)	1984.7.1~ 1985.3.20	36,000m <sup>2</sup>	横山邦輔・下村 智 宮松幹雄	②・④ -⑪ ③・⑫
7	8426	YST-7	西区吉武地区 (野方金武塚1次)	093-A-7(0405)	1985.3.26~ 1985.5.5	1,050m <sup>2</sup>	横山邦輔 下村 智	③
8	8518	YST-8	西区吉武本地区 (面積整備5次)	092-A-10-12(0405)	1985.7.2~ 1985.7.24	470m <sup>2</sup>	横山邦輔	②・④ -⑪ / ①・⑫
9	8535	YST-9	西区吉武地区 (面積整備6次)	093-A-10(0405)	1985.8.1~ 1986.3.31	23,000m <sup>2</sup>	力武卓治・下村 智 宮松幹雄・加藤良彦	②・④ -⑪ / ③・⑫
10	8650	YST-10	西区吉武地区 (面積整備7次)	092-A-12(0405)	1986.11.17~ 1987.2.27	5,000m <sup>2</sup>	力武卓治 宮松幹雄	未刊
11	8662	YST-11	西区飯盛地区 (野方金武塚6次)	093-A-2(0405)	1987.3.1~ 1987.5.10	3,780m <sup>2</sup>	二宮忠司 佐藤一郎	⑤
12	8714	YST-12	西区飯盛地区 (野方金武塚7次)	093-A-2(0405)	1987.6.1~ 1987.9.11	2,810m <sup>2</sup>	二宮忠司 佐藤一郎	⑤
13	8752	YST-13	西区吉武地内 (面積整備8次)	093-A-2(0405)	1988.3.1~ 1988.3.31	1,000m <sup>2</sup>	力武卓治 宮松幹雄	未刊
14	8838	YST-14	西区吉武地内 (面積整備9次)	093-A-2(0405)	1988.7.25~ 1988.9.16	724m <sup>2</sup>	山崎龍雄	未刊
15	9940	YST-15	西区吉武地内 (下水道第1次)	093-A-2(0405)	1999.9.6~ 1999.9.8	37m <sup>2</sup>	大槻紀立	未刊
16	0311	YST-16	西区吉武地内 (下水道第2次)	093-A-2(0405)	2003.5.9~20 2003.5.18	62m <sup>2</sup>	松浦一介	未刊
17	0363	YST-17	西区吉武地内 (史跡整備1次)	093-A-2(0405)	2004.1.19~20 2004.3.26	753m <sup>2</sup>	本田清二郎	未刊
18	0483	YST-18	西区吉武地内 (史跡整備2次)	093-A-2(0405)	2005.1.26~20 2005.3.9	720m <sup>2</sup>	宮井啓朗	未刊
19	0534	YST-19	西区吉武地内 (史跡整備3次)	093-A-2(0405)	2005.7.19~20 2005.9.22	970m <sup>2</sup>	長冢 伸	未刊

## 第二章 遺跡の立地と環境

福岡市西部に位置する早良平野は、室見川を主要な河川として、北流して博多湾に注ぐ東部の金屑川、西部の名柄川・十郎川などによって形成され、氾濫源中央部付近では複雑な微高地が認められ、縄文時代以来の生産活動の舞台となっている。

また、平野の西辺は、背振山塊から北へ延びる長垂丘陵によって西側の今宿平野と区別することができるが、この丘陵の裾部には日向川などの小河川によって形成された標高30~20mの広大な扇状地が南から北側へ傾斜しながら広がっており、吉武遺跡群を含む平野西側の主要遺跡はこの扇状地上に展開する。

一方、平野の東辺は、南方の背振山塊から派生した油山の小支脈である飯倉丘陵付近にあると考えられる。同丘陵は、平野に接する比較的の低平な丘陵地帯で、末端部は浅い解析谷を多く形成している。更に、室見川下流右岸には阿蘇火砕流によって形成される有田丘陵が知られる。規模は、南北がほぼ1km、東西約700m前後で、標高12m程の南北に長い丘陵で、後期旧石器から縄文時代中期～後期・弥生時代前期～後期・古墳時代前期～後期、古代、中世、近世と間断無く続く拠点遺跡である。

特に、弥生時代前期初頭の環濠集落・壇棺墓地をはじめとして古墳時代前～後期集落が丘陵全域に

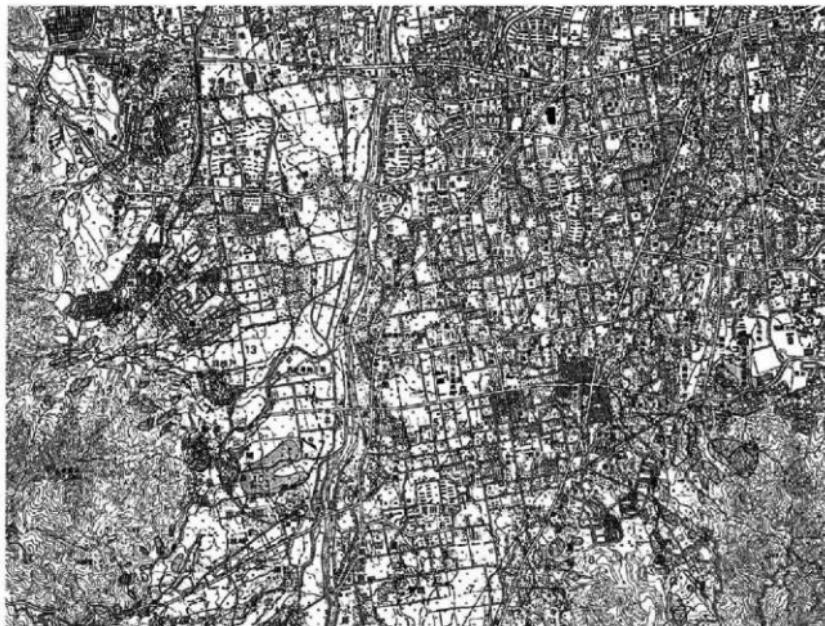


Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

- |           |            |             |              |           |
|-----------|------------|-------------|--------------|-----------|
| 1. 有田遺跡群  | 5. 田村遺跡群   | 9. 吉武遺跡群    | 13. 羽根戸戸C遺跡群 | 17. 七隈古墳群 |
| 2. 原遺跡群   | 6. 四箇遺跡群   | 10. 吉武S古墳群  | 14. 治六町平田遺跡  | 18. 兼古墳群  |
| 3. 次郎丸遺跡群 | 7. 重曾遺跡群   | 11. 金崎古墳群   | 15. 飯倉遺跡群    |           |
| 4. 野井遺跡群  | 8. 重曾村下遺跡群 | 12. 羽根戸I古墳群 | 16. 千葉古墳群    |           |

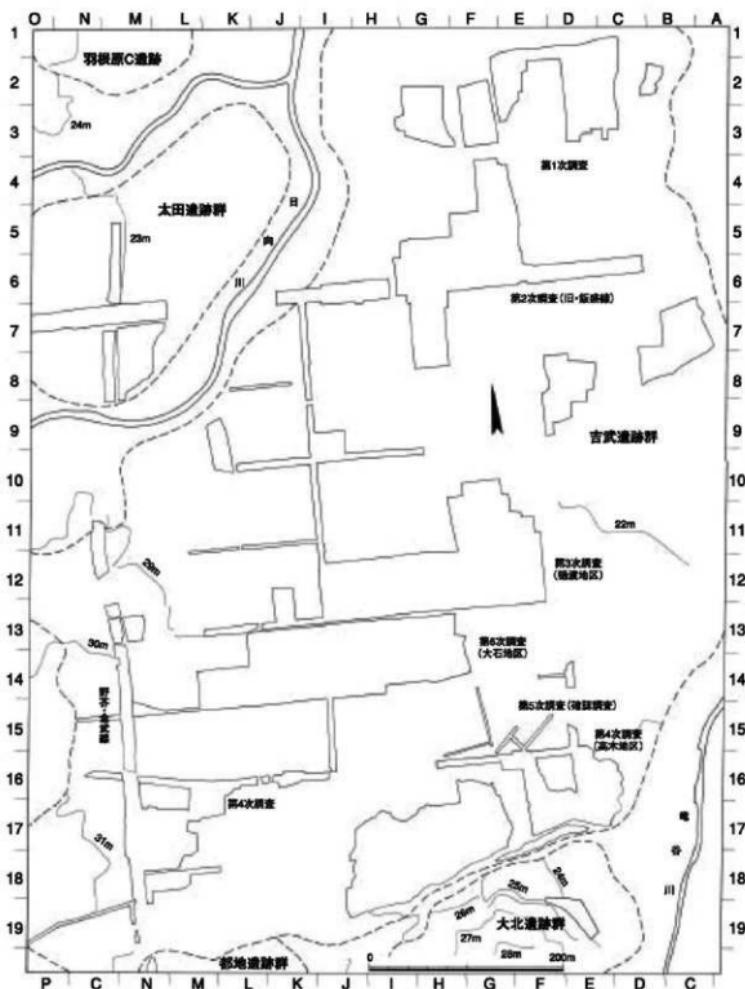


Fig.2 調査区位置図(第1～9次調査)

点在し、中には古墳前期溝で韓国伽耶系陶質土器を出土したものも知られた。

また、平野中央部や氾濫源の微行地は、下流から上流域の平野最奥部まで分布するが、その中央部の田村遺跡群や四箇遺跡群などでは縄文時代後期集落、弥生時代前期～中期にかけての支石墓を含む壺棺墓地・集落とともに、周辺の低湿地には縄文後期湿地層や古墳時代の水田関連構造等が密度濃く分布する。最奥部の入部遺跡群では、弥生前期末から集落が開始され、中期初頭期の壺棺墓地で細形

銅劍や鋼鏡の副葬が知られ、更に継続する中期後半期では不整な方形溝に囲まれた特定集団墓を形成している。埋葬主体となる壺棺墓からは、鉄製武器を主とした副葬品が出土している。また、右岸地域の山麓部にあたる重留B遺跡群や飯倉B遺跡などでは、方形堅穴住居跡・掘立柱倉庫・溝などからなる6世紀後半代の古墳時代後期集落を主に、細形銅劍副葬の弥生前期末~中期壺棺墓地、小型鐵製鏡を副葬した弥生後期墓地などを知ることができる。また、右岸地域に分布する古墳は、古式の横穴式石室をもつ小型の前方後円墳の梅林古墳や良平野最大の前方後円墳である押塚古墳などの主要な古墳の他に、油山西側の山麓に点在する千眼古墳群・七眼古墳群・荒平古墳群など6世紀後半以降に形成された群集墳が知られる。

一方、室見川左岸地域の遺跡群は、背振山から北に延びる山塊にある飯盛山の東麓に形成された広大な扇状地上に立地する。その中心となるのは吉武遺跡群である。遺跡は、弥生時代前期後半から後期の特徴ある集落・墓地、古墳時代前~後期の集落・墓地、古代~近世にかけての官衙・墓地などの遺構で、長期間に、しかも大規模にわたっている。弥生集落は、遺跡群北側から開始され、後期には全域に及ぶ。また、墓地では、これまで約1200基の壺棺墓などが出土している。前期末~中期初頭には朝鮮半島製青銅武器・鏡・玉類が多く副葬した吉武高木・大石墓地が形成され、中期中庸以降では漢代鉄器類を副葬した樋渡墳丘墓が造営されている。

古墳時代では全期間を通じ、堅穴住居跡・掘立柱倉庫・土坑等からなるまとまった集落が形成され、周辺部に古墳群の造営もなされた。この南側には中期の弥生墳丘墓が検出された金武遺跡群が知られる。また、遺跡群の北西側には、弥生後期から古墳時代にかけての集落や平安時代の製鐵遺構が特徴的に見られる羽根戸原C遺跡群がある。

また、遺跡群の北西側端に位置する野方遺跡は、弥生後期から古墳前期にあたる市域では数少ない環濠集落で、壕外に造られた箱式石棺墓から後漢代の船載鏡片や玉類、鐵器などの副葬品が出土している。同遺跡は、地理的に当時の奴国から怡土國へ通じる要衝の地にある。

また、左岸地域に分布する古墳は、南部の金武古墳群で6世紀末~7世紀初の夫婦塚(方墳)や6世紀後半期の装飾古墳を含む金武K群、5世紀前半の樋渡前方後円墳・方墳と6世紀代の円墳からなる吉武S群が分布する。北西側の丘陵部には、割竹型木棺を内部主体とする小型の前方後円墳を始原とし、この地域ではもっとも大規模な群集墳である羽根戸古墳群が知られる。更に、これ以北でも野方古墳群、長垂古墳群などが山麓に沿って形成されている。

### 第三章 第4次調査報告

**概要** 第4次調査では、古代から近世にかけての遺構密度はそれほど高くない。主要なものでは第3号水路の調査区で検出した自然流路S D02溝より古代須恵器・土師器類を中心とする土器類がまとまって出土した。また、第7号支線道路・第2号支線道路、およびG~I-12地区周辺のS D02・04・05・06・08溝などからも古代から中世期の須恵器・陶磁器等の出土があった。

また、近世では、吉武古墳群S 1号墳(樋渡前方後円墳)の墳丘を利用した墓地が顯著である。墓地は、既に改装されており、墓石も原位置を失っているものが殆どであるが、その記念銘から最古のものが宝永三年(1706)、最新では安政三年(1856)であることから、ほぼ十八世紀初めに始まり十九世紀半ばの約150年間継続した墓地と考えることができる。なお、古代以降の主要遺構は、南側の第9・6次調査を中心とした区域に分布する。

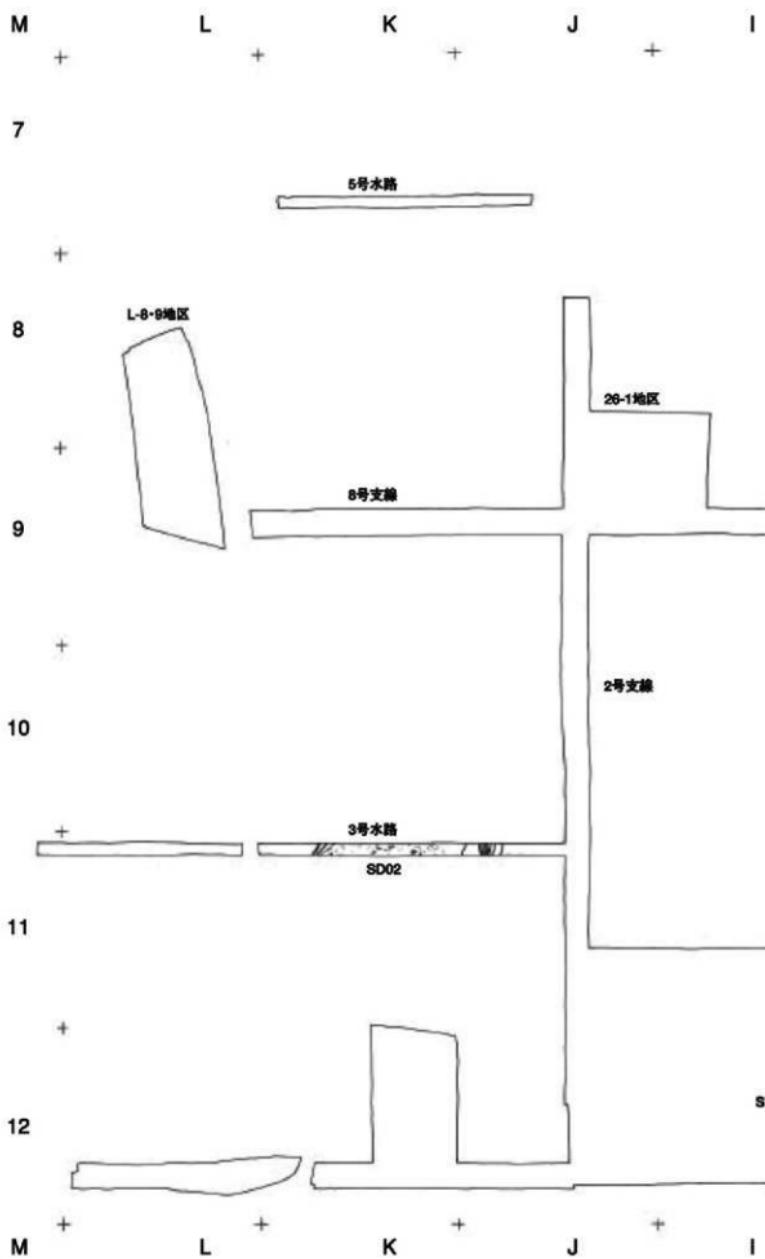


Fig.3 第4次調査

+ H + G + F + E

7

+

8

+

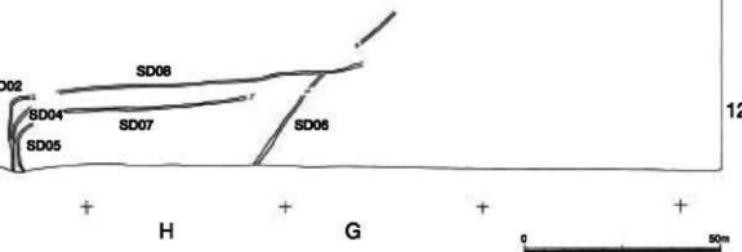
9

+

10

11

12



全体図(1/1,250)

## 1. 溝状遺構(Fig.2~14)

**概要** 第4次調査で検出した古代以降の時期の溝状遺構は、第3号水路調査区 S D01・02溝、7号支線道路調査区 S D01溝、G～I-12地区 S D02・04～06・08溝、I-11地区 S D01溝などであり、扇状地という立地上、自然流路も多くあって寧ろこれを制御して利用することに努力がなされた可能性が高い。調査区はこれら流下する溝の一部を調査したにとどまっている。以下では各溝の出土状況について述べるとともに、関連する古代の出土遺物についても合わせて報告する。

### ① 3号水路調査区 S D02溝(Fig.4・5・6・7・8・9・10)

本溝は、3号水路東半部付近で検出された幅47.5m、深さ0.8m程度を測る幅広い溝である。調査区が狭く、周辺への延長状況は不詳であるが、南西より北東方向に流下するものと考えられる。

#### 溝埋土の層序(Fig.4)

溝の埋土は流堆積のために統一的な層序を把握し難いが、表土下の埋土最上層である灰褐色砂質土、その下層の灰褐色粘質土、これ以下のブロック状層である褐色砂層や灰色砂層が大きく区別でき、最下層の黒茶褐色腐植土層には多くの木材片などの有機物が見られる。なお、底面の基盤は灰褐色砂礫層である。このような状況から、本溝は全体的に激しい流れをともなっていたとは想定できず、緩やかに流れ下るものであったと思われる。出土遺物は相当量にのぼるが、以下では層位毎に区別して報告することとしたい。

#### 出土遺物(Fig.5～10)

##### 灰褐色砂質土上層遺物(Fig.5～7) 全体に須恵器杯・杯蓋などの出土が多い。

須恵器杯身では、08019が平底杯で、底部は回転ヘラケズリ。口径9.4cm、器高2.95cm、底部径6.2cmを測る。08020も平底杯である。底部のケズリ調整が不備である。口径12.4cm、器高4cm、底部径9.6cmを測る。08021は高台杯で、口縁端部・高台を欠く。復元底部径9.4cmを測る。08034は、高台が外側に踏ん張る杯である。底部・胴部とともに回転ナデ調整である。底部径8.9cmを測る。08022もやや丸味を持つ底部外端近くに高台を付する杯である。口径13.3cm、器高5.6cm、底部径8cmを測る。

次に須恵器杯蓋は、摘みを持つものが殆どである。08031は、擬宝珠摘みを持つ小型蓋である。外面は粗雑な回転ナデで、内天井部は回転ナデ後に一部不定なナデ調整。口径9.4cm、器高2.5cmを測る。08032は、低いボタン状摘みを持つ杯蓋である。外面天井部は回転ヘラケズリ後にナデ調整、他は回転ナデである。口縁端部は鈍い嘴状に整えられる。口径13.4cm、器高2.6cmを測る。08030は、小さいボタン状摘みを持つ杯蓋である。外面天井部は回転ヘラケズリ後にナデ調整、他は回転ナデである。08027は、やや大きいボタン状の摘みを持つ杯蓋で、高さが無く殆ど板状である。口径14.9cmを測る。08029は、やや高さのある体部に、大型摘みを持つ蓋である。天井部平坦面は回転ヘラケズリで、他は回転ナデである。口径14cm、器高3.2cmを測る。

次に須恵器壺類では、08016が緩やかに外開する口縁直下に三角突帯一条を巡らす小型壺である。口径21cmを測る。08015は肥厚する口縁下に5条の平行沈線を巡らす中型壺である。内面にカキ目、内外面の一部にヘラナデが残る。口径37cmを測る。08017は須恵器把手付き大型鉢で、甌と考えられる。外面がナナメタキで、内面にアテ具の青海波文が残る。口径約40cmを測る。

次に壺類では、08024が半球状胴部の直口壺である。胴部下半に回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。口径11.1cmを測る。08025は長頸壺の胴部か。胴部は大きく屈曲する。肉厚で、外面に横方向のヘラナデが残る。底部はやや上げ底となり、径15.6cmを測る。

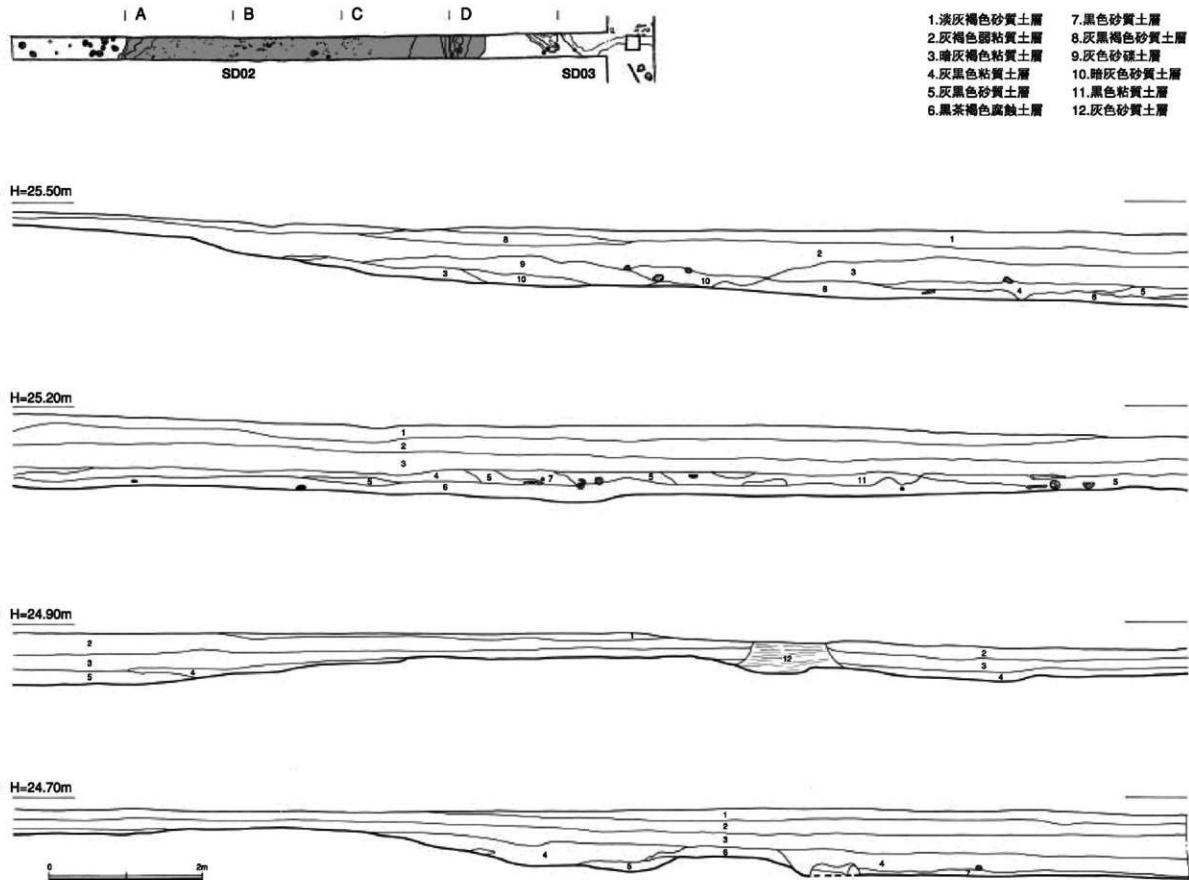


Fig.4 3号水路調查區・北壁土層断面図(1/50)

他の須恵器では、08023が高杯脚部である。外面脚に3本の平行沈線のヘラ記号を描く。脚端径10.4cmを測る。08018は高台杯塗か。内外面共に回転ナデが残る。底部径9.6cmを測る。08026は、小型の横瓶である。胴部の肩付近にカキ目を施し、以下はヘラナデである。他は回転ナデを残す。口径6.2cmを測る。

次に土師器は、08035が口縁端部の小さく内側に折れる杯である。内外面共に回転ナデである。口径14.8cm、器高2.8cm、底部径11cmを測る。08036は、浅い皿状の杯である。内外面共に回転ナデである。口径16cm、器高3.7cmを測る。08038・08037は、短い口縁部が急激に外開する甕である。外面は荒いハケメで、内面胴部にヘラケズリを加える。口径はそれぞれ、19cm・22cmを測る。

その他の遺物では、08039が小型の鉄滓、08048・08033が小型の管状土錐である。

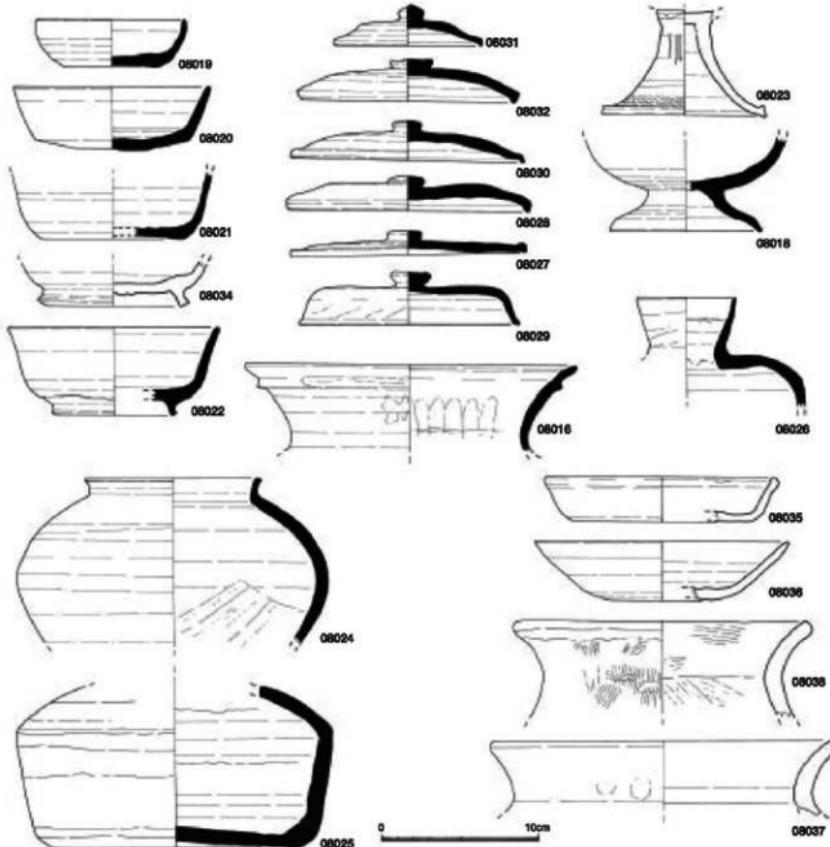


Fig.5 3号水路 S D02溝灰褐色砂質土上層出土遺物実測図①(1/3)

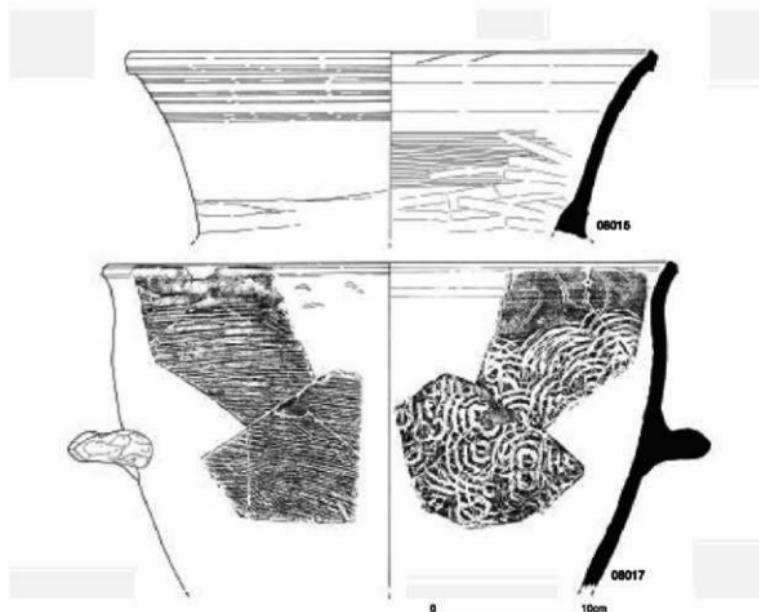


Fig.6 3号水路SD02溝灰褐色砂質土上層出土遺物実測図②(1/3)

灰褐色粘質土層遺物(Fig.8) 本土層からも須恵器杯類の出土が多い。

杯では、高台が殆ど底部外端に近くに付されるタイプが多く見られる。08007は小型杯で、内外面ナデである。口径8.8cmを測る。08008は、口縁部を欠く高台杯である。高台は外側に踏ん張る。底部径9cmを測る。08009も口縁部を欠く高台杯である。高台は外側に踏ん張る。底部径9cmを測る。08010も口縁部を欠く高台杯である。体部は直線的に立ち上がる。底部径8.4cmを測る。08004も口縁部を欠く高台杯である。丸味を持つ杯に低い高台が付く。底部径8.8cmを測る。08002は底部の一部を欠く高台杯である。体部は高台付け根から直線的に開く。口径12.6cm、器高4.5cm、底部径7.2cmを測る。08003はいびつな高台杯である。高台は外側に踏ん張り、外底部は回転ヘラケズリを施す。口径16.6cm、器高5.2cm、底部径11.2cmを測る。08005は、鈍い高台を持つ杯である。底部径10.5cmを測る。08006は高台が外側に踏ん張り、豊み付きの大きい杯である。底部径9cmを測る。08012は平底杯か。外底部にケズリを施し、他は回転ナデである。08013は、大型の高台付き鉢と考えられる。外底部及び胴部外面にヘラケズリを施し、他は回転ナデ・不定方向のナデである。底部径10.8cmを測る。

その他では、08011が短脚高杯で、脚径11.7cmを測る。08014は古式のはそうで口縁部及び頸部外面に精緻な波状文を巡らす。口径12.8cmを測る。また、08001は頭部平坦面に刺突による擂部をもつおろし土器である。調整はナデで、頭部径12cmを測る。

灰褐色砂層遺物(Fig.9) 本層内からは少量の土器・須恵器が出土した。

須恵器では、08040・08041が小型の壺で、それぞれに外面が格子・平行タタキを施し、内面にアテ具の青海波文・ナデを残す。口径はそれぞれ20.8cm・15.6cmを測る。

土師器では、08052の土師器瓶である。把手は外れている。外面と内面口縁側にハケメ調整、内面肩部にヘラケズリを残す。口径20.6cmを測る。

壺では、08053・08054・08055が、口縁く字に屈曲する壺である。外面はハケメ調整、肩部内面にヘラケズリを残す。それぞれ口径22.2cm・26.8cm・20cmを測る。08047は丸底にちかい底部を持つ杯である。底面に板目压痕を残す。口径12.2cmを測る。

08045・08046・08057はいわゆる平底杯である。器面は内画面共にナデ調整を施す。それぞれ口径12.8cm・14.6cm・13.2cmを測る。

高台杯では、08042・08043がある。いずれも底部外端近くに高台を付す。底部径は、それぞれ8.1cm・9.7cmを測る。また、08056は、粗雑な造りの土鍋である。外面肩部と内面口縁部に荒いハケメを施し、肩部内面は斜め方向のヘラケズリを加える。外面にスス付着。口径24cmを測る。

灰色砂層遺物(Fig.10) 少量ではあるが、須恵器・土師器の土器類が出土した。

08044は、土師器高台杯である。高台は外側に広がって踏ん張る。底部径12cmを測る。08049は、低いボタン状摘みを有する須恵器蓋である。体部は低く、板状となる。天井部外面はヘラケズリで、他は回転ナデである。口径14.8cmを測る。08050は、長脚の須恵器高杯脚である。内外面共に回転ナデを施す。筒部径4.2cm程度を測る。

## ② 3号水路調査区 S D03溝(Fig.3・10)

本溝は、3号水路調査区東端部にかかる浅い自然流路である。SD01と同様な層位をなし、最下層は黒茶褐色の有機質土である。遺物では、08081が外面露胎で、内面がオリーブ黄～浅黄色に発色す

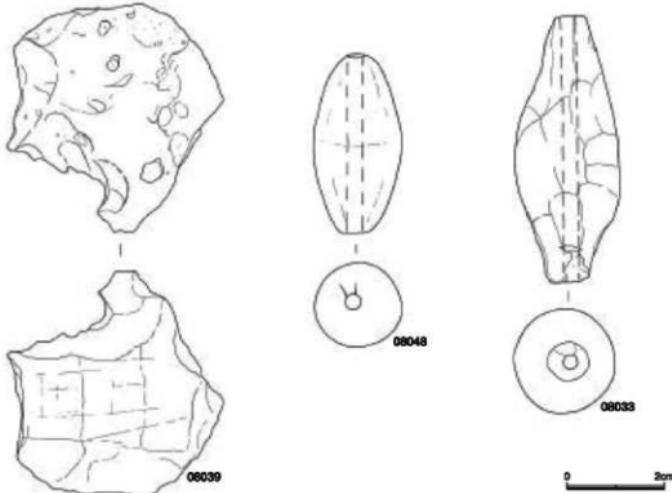


Fig.7 3号水路SD02溝灰褐色砂質土上層出土遺物実測図③(1/1)

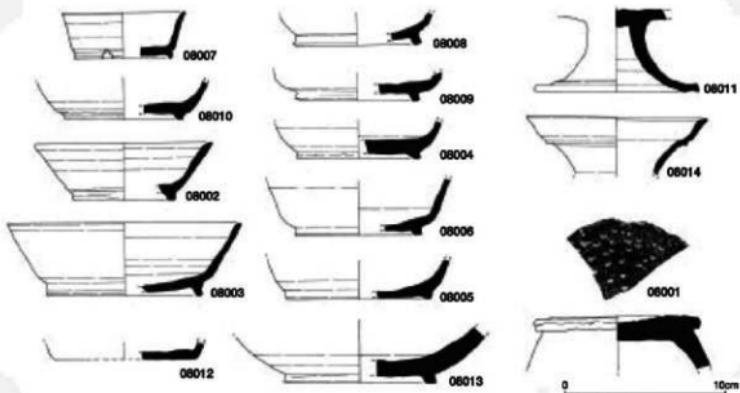


Fig.8 3号水路SD02溝灰褐色粘質土出土遺物実測図(1/3)

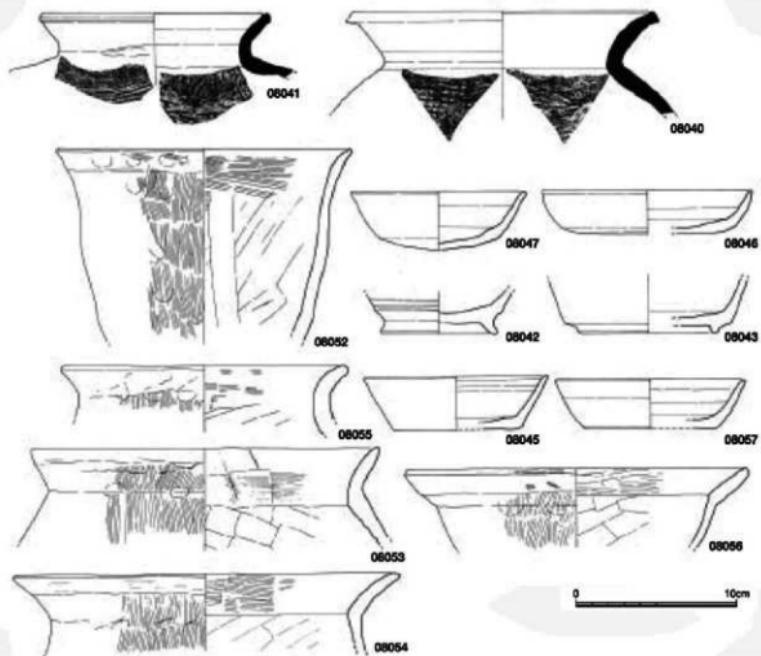


Fig.9 3号水路SD02溝 灰褐色砂質土層出土遺物実測図(1/3)

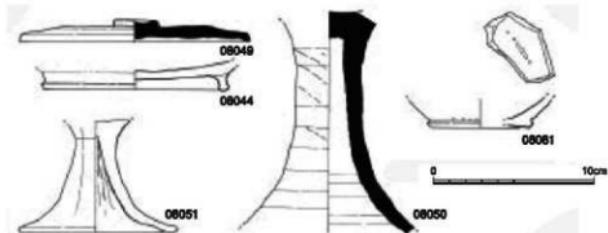


Fig. 10 3号水路 S D02溝灰色砂層、S D03溝灰黒・黒灰色腐食土出土遺物実測図(1/3)

る越州青磁碗である。底部径6.8cmを測る。灰黒粘質土～黑茶褐色腐植土出土。

③ 7号支線道路調査区 S D01溝(Fig.3・12)

本溝は、調査区西端を南西から北東方向に流下する浅い溝で、延長13m、幅4m以上の規模を測る。

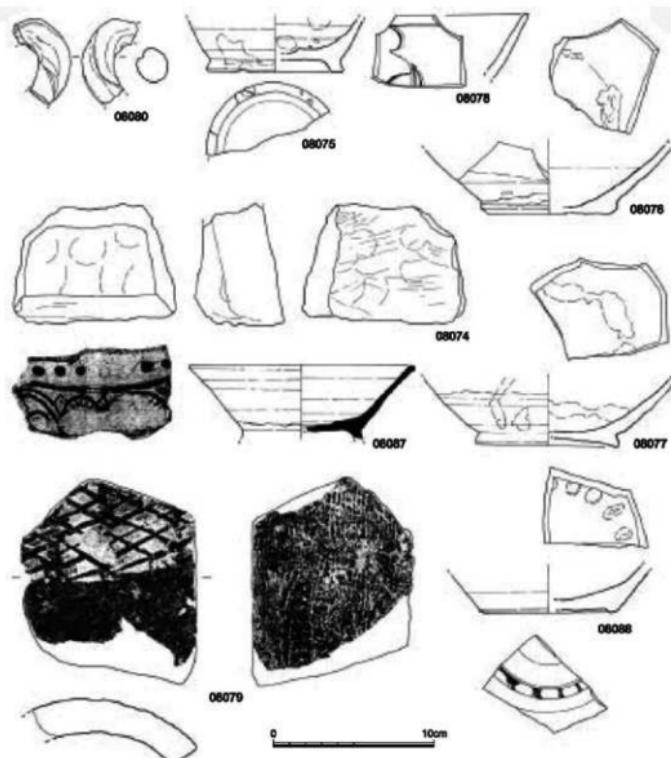


Fig. 11 2号支線道路南端部堆土、積造古墳填丘上、周溝内出土遺物実測図(1/3)

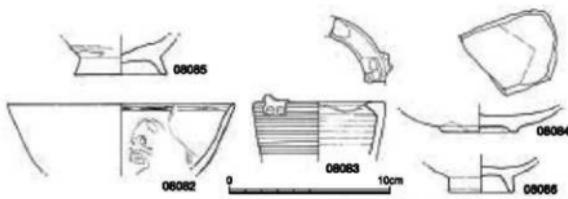


Fig.12 7号支線道路 S D01溝灰黑色粘質土、遺構検出面出土遺物実測図(1/3)

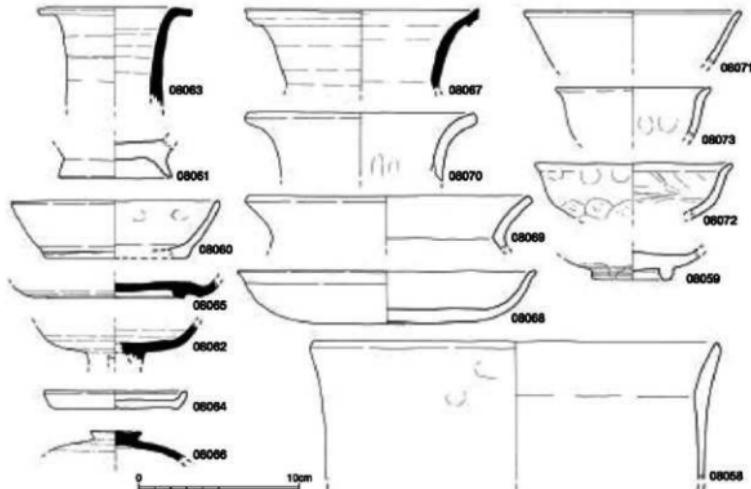


Fig.13 G～I-12地区 S D02・04～06・08溝、現代溝、遺構検出面出土遺物実測図(1/3)

溝内からは、底部径が6.2cmを測る土師器高台付き椀08085や口径16.4cmを測る龍泉窯青磁碗08082が見られ、周辺の溝の検出面からは高台部が露胎となり、体部内外面に灰色を帯びたオリーブ色釉を掛ける磁器碗08084や、青白磁香炉かと考えられる08083が出土した。

#### ④ G～I-12調査区 S D02・04～06・08溝(Fig.3・13)

本溝は、調査区南端部に位置し、東西延長90m、南北長18m以上を測る。溝の中心となるSD07～08間は5.5mを測る。また、溝幅は0.5m程度で浅いものであるが、道路状遺構の可能性が高いと考える(S D02・04～06・08溝)。また、これらの南側に接して現代溝が重複する。

共伴遺物では、08063が須恵器長頸壺、08067は同小型壺、08065は同高台杯、08062は同高杯、08066は天井が窪むボタン状摘みを持つ同蓋である。

また、土師器では、08061が高台杯、08060が横ナデ調整の同杯、08064が同糸切り離しの皿、08070が同壺、08069が同壺、08068が回転ナデを施す同皿、08058が同壺、08073が同小型鉢、08072が脚部下半にヘラケズリを施す杯である。また、08071は明緑灰色釉を掛ける青磁碗、08059も高台は露胎となるが、明緑灰色釉を掛ける青磁碗である。

### ⑤ I-11調査区 S D01溝(Fig.3・14)

本溝は、調査区の西側を南西から北東方向に流下する幅15m、延長70m以上の浅い自然流路である。出土遺物21709は、斎申で頭部を三角に削り、下端は側刃両面から削ぎ落として尖らしている。全長20cm、幅1.6cm、厚さ4mmを測る。

⑥ 周辺の関連遺物(Fig.11) 古代～中世期の遺物が周辺遺構等から見つかっている。

08080は、褐色釉を施し、ねじりを加えた水柱の把手か。樋渡古墳墳丘表土出土。08075は、猿投窓の椀か。疊付・外底部は露胎で、他の内外面に透明感のある薄いオリーブ釉を掛ける。内底部中央は丸く削り取る。高台部径8.4cmを測る。樋渡古墳表土出土。08078は、龍泉窯青磁碗である。樋渡古墳周溝出土。08076は、越州青磁碗である。体部下端及び外底部は赤褐色の露胎となる。他は不透明な淡黄色釉を掛ける。内底に目跡が残る。底部径8.4cmを測る。樋渡古墳近世墓道出土。08074は、鴻ろ館式軒平瓦である。中央の車輪文が特徴である。樋渡古墳墳丘出土。08087は、須恵器高台付き椀である。外底部端に高台を付す。口径14cmを測る。2号支線道路南端排土出土。08077は、越州青磁碗である。底部は緩い上げ底をなし、底部周辺は灰褐色の露胎となる。他は浅い黄色～オリーブ黄色釉を掛ける。内底部に目跡が残る。底部径8.8cmを測る。樋渡古墳墳丘出土。08088は、低い高台の越州窯青磁碗である。外外面ともに不透明なオリーブ釉を掛ける。見込みには目跡が残る。高台部径8.8cmを測る。2号支線道路南端部排土。08079は、外面に斜格子タタキを施す平瓦破片である。内面は荒い布目压痕を残す。樋渡古墳墳丘出土。

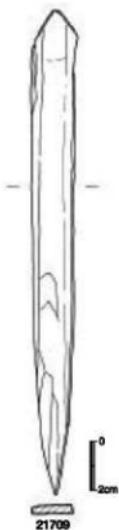


Fig.14 I-11地区  
S D01溝出土  
斎申実測図(1/2)

## 2. 近世墳墓 (Fig.15・16・17・18・19、PL1～8)

近世墓地は、吉武大石地区の樋渡古墳の墳丘を利用した墓地が中心で、周辺には数基の墓が散在するにすぎない。墓地は昭和58年の調査時、既に改葬済みといわれており、墓石の立った状態の墓は全く無かった。

また、昭和35年には墓地を含む樋渡古墳への土取りが行われており、この際にも失われた墓が多数あったものと推測される。

調査は主に樋渡古墳後円部の残丘を多少として行ったが、古墳葺石と接する部分では両者の取り合いで困難を極めた。

本墓地は、南側に進入口があったように思われ、縁に径が50cm程を測る平坦な礎石をもつ $2 \times 2$ 間規模(全長3m四方)の建物があり、これを中心に造墓が行われたものと考えられる。

墳墓は改葬済みということもあり、すべて周辺の石組み構造を残すのみであったことから、調査ではこれらの記録に努めた。

墳墓は、石組み構造から見ると基本的に大型の角礫を方形に組んだものであるが、幾つかのグループがあつてやや大型のものの周辺に小型の石組みが散在するようである。これらは全体で50数基確認できるが、比較的形状が明確なものについては図(Fig.15・17・18)に示した。

記録は出土状況の平面・断面図にとどまっており、下部の調査は行っていない。

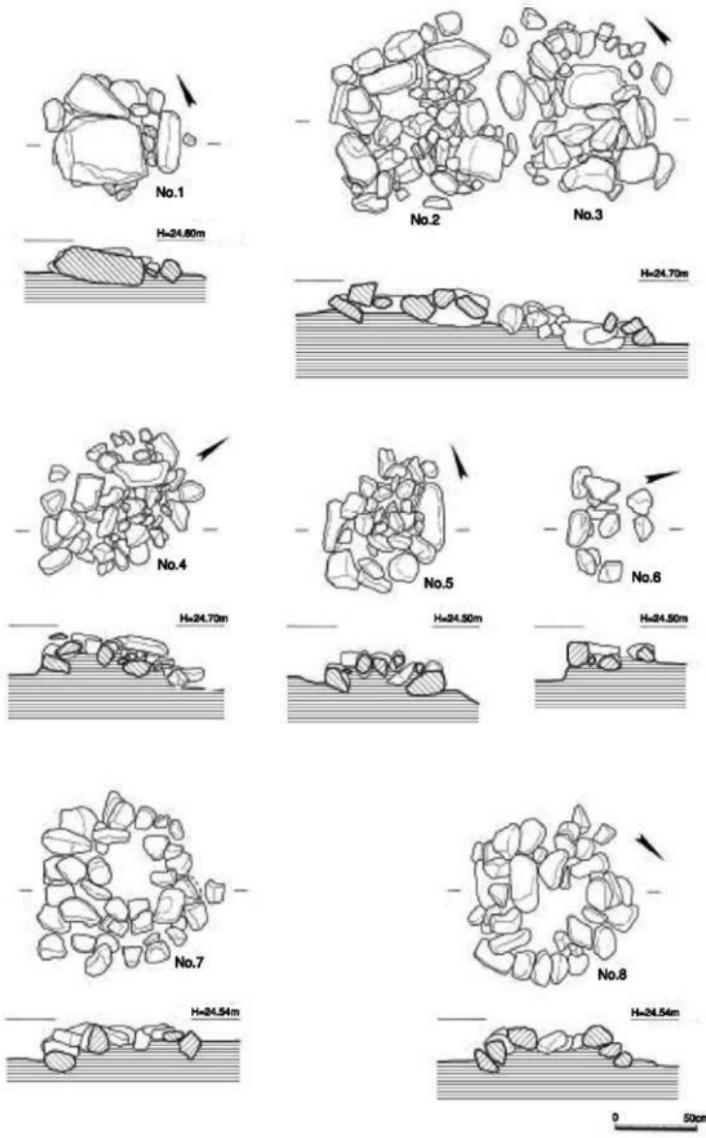


Fig. 15 江塘近世墳墓出土状况実測図①(1/30)



Fig. 16 邢渡古墓堆丘上墓地墓地出土状况全体图(1/100)

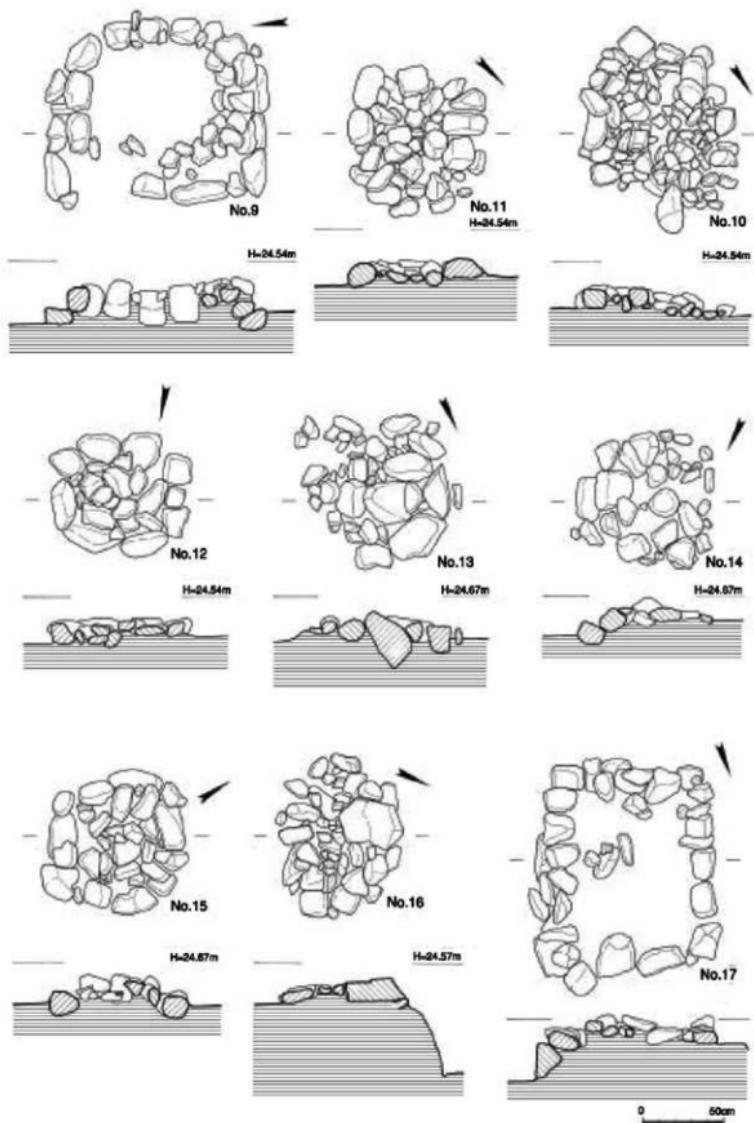


Fig.17 槿遺近世墳墓出土状況実測図②(1/30)

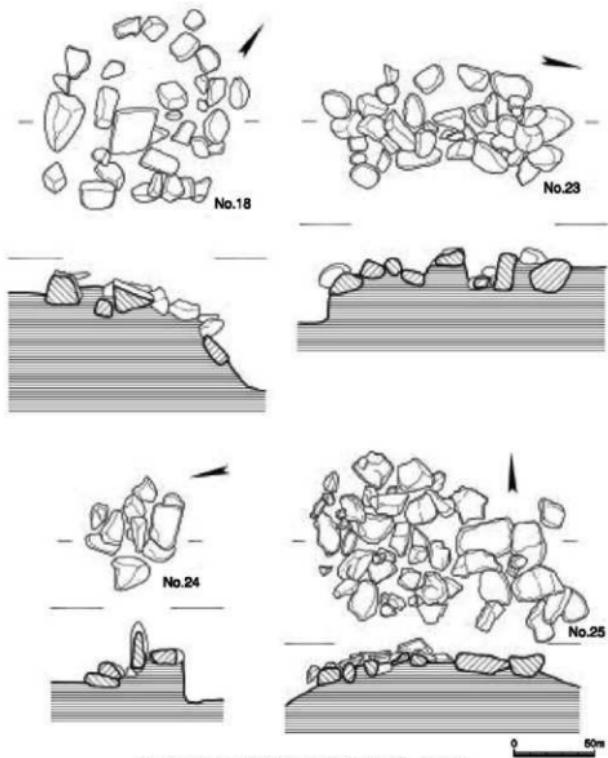


Fig.18 植波近世墳墓出土状況実測図③ (1/30)

を刻む墓石は墓地周辺に埋められ残されていた。以下に掲げるのはそれらの全てではないが、写真記録で解説できたものについて列挙する。

#### (近世墓碑銘一覧)

- ・宝永四年(1706)「○光 覚山宗~~玄~~信士」三月十九日
- ・宝永六年(1709)「□成覺道安信士 霊位」六月三日
- ・享保十四年(1729)「和 玄流 霊位」九月十六日・享保十五年(1730)「秋尖涼覺信士」六月廿五日
- ・享保十六年(1731)「釋□正 □」
- ・享保十七□歳(1732)「○春雪了道信士」十二月□日
- ・延享四□(1747)「□休譽宗因信士」十月十三日
- ・宝曆二□(1752)「開譽儀雲信士」□二日・天明元年(1781)「和□智光信女」八月十五日
- ・文化六年(1809)「釋譽雲信士」巳三月十七日か・天保八酉年(1837)「歡至一念信女」三月十九日
- ・天保十亥年(1839)「良意信士」七月廿八日・安政三辰年(1856)「雪峯連□信士」十一月十五日

なお、墓地内の墓道などの解明も調査対象であるが、緊急調査であったが為にこれをなしえなかった。

調査は、前の石組み群を除去の後、古墳主体部の調査に移ったが、この際に改葬もれの墳墓も数基見つかり、遺体も一部遺存していたことから関係機関に相談を行い、適切に最終処置を行った。

墳墓には2mを越す古墳墳頂部から墓壇を穿ち、斎棺を埋置するものもあり、これらは完全な状態で残されていた。図(Fig.19)に示した家紋入りの漆器椀や桜枝櫛は同一婦人墓に伴って見いだされた副葬品である。

ところで、墓地は改葬されていたが、戒名

- ・□ □三年 濱江氏 「法普妙○」九月十日 □右衛門妻
- ・五歳「妙授信女」□ 九月・〇〇三年 ○○○釋尼妙○〇月十二日 ○立
- ・〇〇〇六年 「法○釋立源信士」二月二日・□八年( )「积妙惠○」六月十日
- ・□早去□童女 十月十七日・正徳口 「應山円空土」四月十日
- ・明譽光照圓 (年号不明)
- ・木心圓土 南無阿弥陀佛 妙慶信女 (年号不明)
- ・因市郎左衛門 (年号不明)
- ・釋教西信士 (年号不明)
- ・敬譽還道信士 (年号不明)
- ・順室智還信女 (年号不明)
- ・承負正□位 (年号不明) ・釋大道信女 (年号不明) ・三界万靈

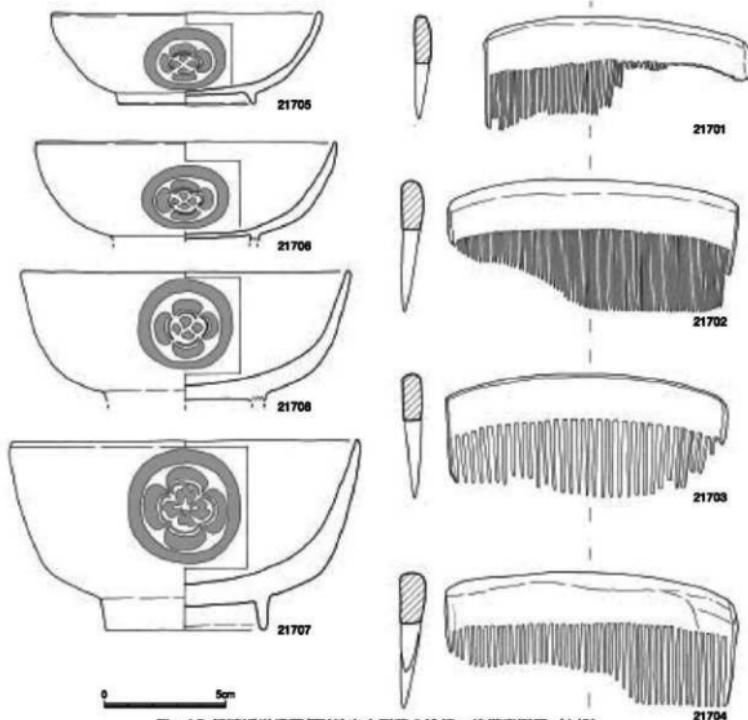


Fig.19 横須賀近世墳墓(塗桶)出土調査の塗桶・塗桶実測図 (1/2)

墓地では、これを遡る時期の墳墓があったことは否定できないが、現存した墓碑から考えると、少なくとも最も古い宝永三年(1706)を初めとする18世紀初め頃には造墓が始まっていたことになる。これ以来幕末までは墓地が利用されている。

## 第四章 第6次調査報告

**概要** 第6次調査で検出した古代～近世期の遺構は、主に1号幹線道路及びL・M-16地区で見つかっている。その主なものは、溝状遺構4条(S D01・02・04・05)、土坑1基(S K256)、鍛冶炉13基及び掘立柱建物2棟(S B85他)等である。

また、遺構としては図示できないが、1号幹線道路と野方～金武線道路とが交叉する付近には非常に大量の鉄滓が積み重なって出土し、中には土師器とともに窯体の一部を含むことから、この周辺が古代後半期の製鉄跡であったことが推定できる。以下、各遺構と出土遺物について詳述することにする。

### 1. 土坑(Fig.20～22, PL.14-2)

S K256土坑は、L・M-16地区の東端隅に検出された不整な長円形を呈する大型土坑である。その規模は、長径が5m前後、短径3.3m前後、深さ26～14cmを測る。土坑は全体に残りが浅いものであるが、周辺部がやや深い傾向にある。土坑の埋土は、黒褐色砂質土で、底面に礫が僅かに混じる以外はほぼ均一なものである。また、壁の基盤土は暗黄色砂質土である。廃棄土坑である。

遺物類は西壁に近い中央部の径1.5m程度の範囲にまとめて出土した。

#### 出土遺物(Fig.22)

09012は、須恵器杯蓋破片である。口縁立上がりは小さい。器面は磨滅。器色暗赤褐色を呈する。

09011は、須恵器高台杯である。内外面とも回転ナデ調整。器色暗灰～淡灰色を呈する。

09013は、土師器高杯である。外面にカキ目を残す。器色赤褐色を呈する。筒部径3.2cmを測る。

09014は、土師器鉢である。内外面にヘラナデ・ミガキを残す。器色は淡褐色である。口径19.6cm。

09017は、土師皿である。口縁にススが付着する。器色は淡褐色を呈する。口径11.4cmを測る。

09016は、土師皿である。口縁に一部スス付着。器色は淡褐色を呈する。口径11.5cm・器高2.6cm。

09015は、土師皿で、外底に板目圧痕を残す。器色は暗赤褐色。口径10.8cm・器高3.2cmを測る。

09021は、土師皿である。器色は淡褐色である。口径12cm・器高2.5cm・底部径8cmを測る。

09022は、土師皿である。内外面共に赤色顔料が付着する。口径12cm、器高2.9cmを測る。

09019は、土師皿である。外底部に板目圧痕を残す。器色は淡褐色である。口径12cm。器高2.9cm。

09020は、土師皿である。外底部に細かい板目痕が残る。器色は淡赤褐色を呈する。口径11.4cm。

09018は、土師皿である。外底部に細かい板目痕が残る。器色は暗褐色を呈する。口径11.9cm。

09023は、高台付き碗である。調整は回転ナデ。器色は暗褐色を呈する。口径14cm。器高5.5cm。

09027は、高台付き皿である。高台は踏ん張る。器色は暗褐色を呈する。口径11.7cm。器高2.85cm。

09025は、高台杯である。内面調整がカキ目状になる。器色は淡褐色。口径12.5cm。器高4.8cm。

09026は、高台杯である。口縁は直線的に延びる。器色は暗褐色。口径12.7cm。器高4.6cm。

09024は、高台杯である。器色は淡褐色である。口径15cm。器高4.9cm。底部径8.2cmを測る。

09008は、越州青磁碗破片である。くすんだオリーブ釉を掛ける。

09009は、越州青磁の小型碗口縁破片である。やや黄色味を帯びたオリーブ釉を掛ける。

09005も浅い越州青磁碗である。オリーブ色釉を全面に掛ける。口径13.2cm。器高3.2cmを測る。

09006も越州青磁碗である。外底周辺の他はオリーブ釉を掛ける。内底に目跡がある。底部径9.6cm。

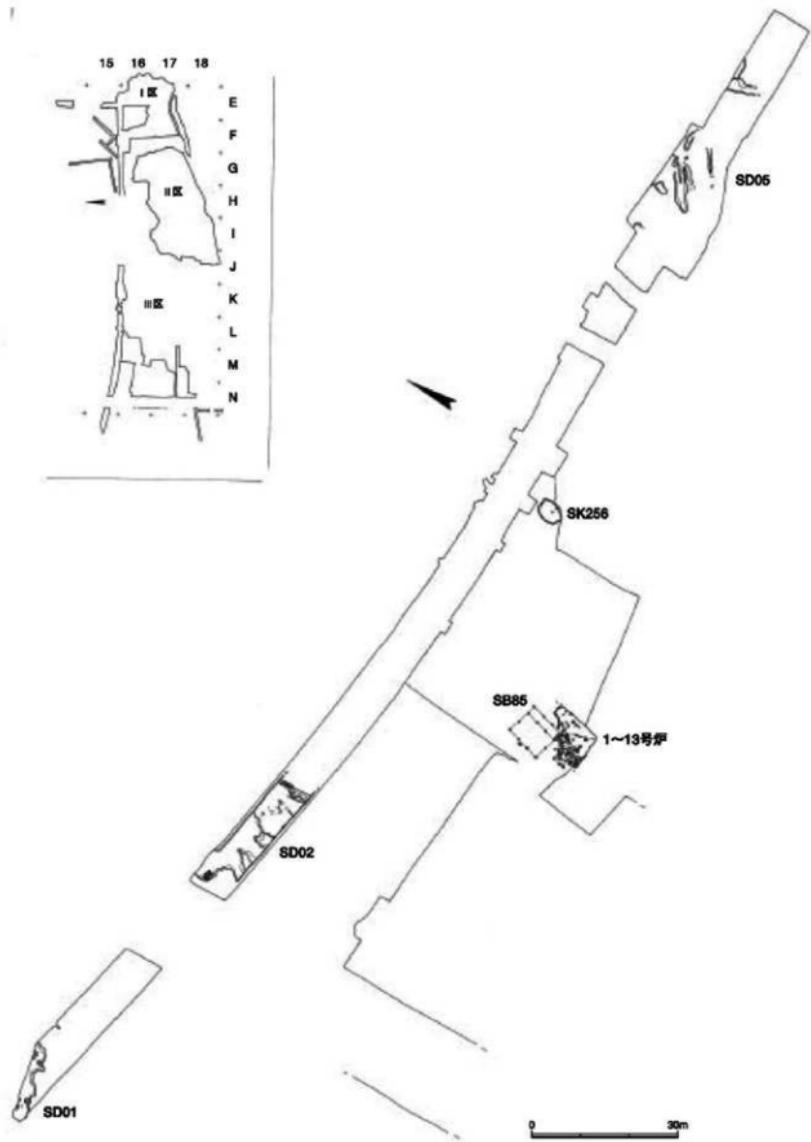


Fig.20 第6次調査遺構全図 (1/1000)

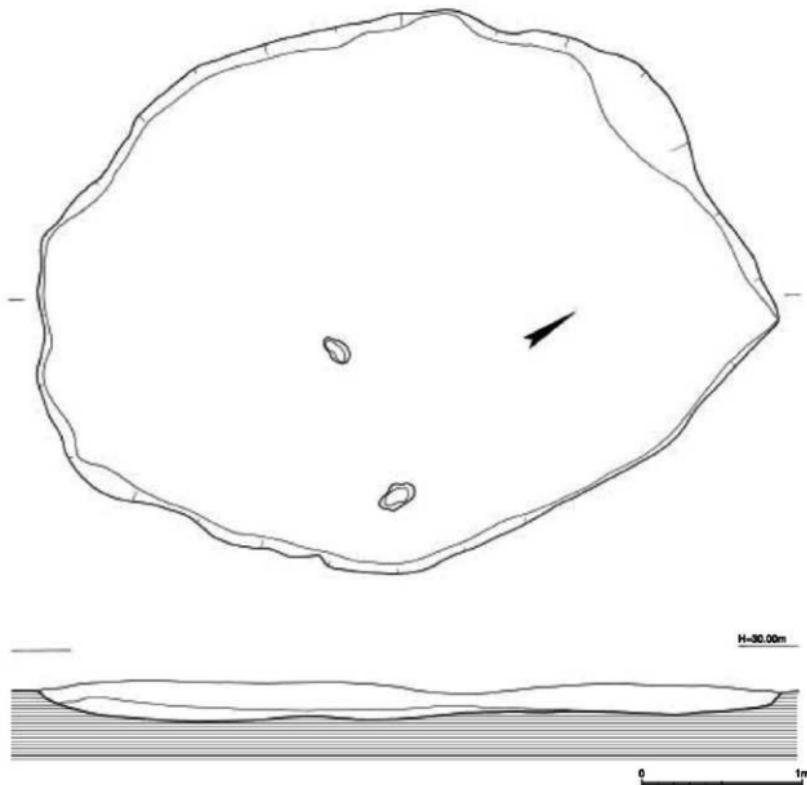
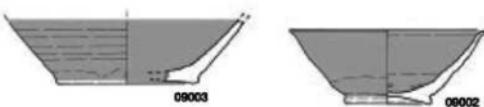
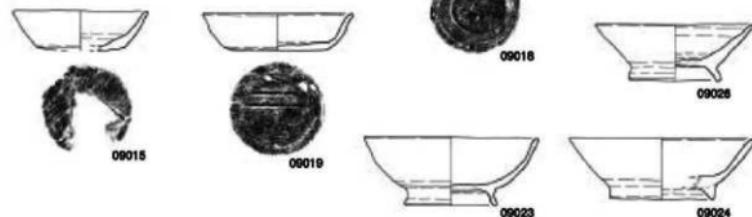
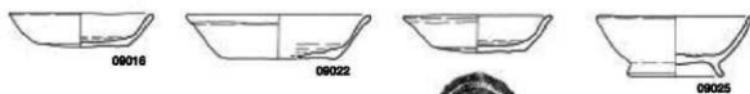
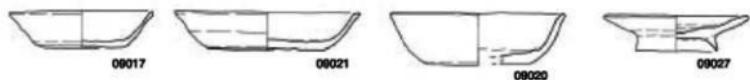
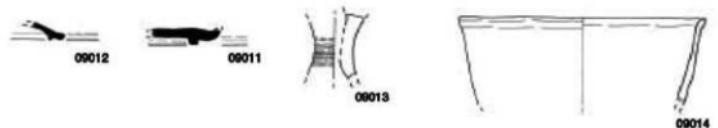


Fig.21 L・M16地区SK256土坑出土状況実測図（1/30）

09007は、端部が外反する越州青磁碗である。ややくすんだオリーブ釉を掛ける。口径16.8cm。  
 09004は、全面にオリーブ釉を掛ける越州青磁碗である。内底に貫入が見られる。底部径8cm。  
 09001は、上げ底の越州青磁碗である。外底部付近は露胎で、他はオリーブ釉を掛ける。口縁端部は外方に引き出される。口縁部は輪花となる。口径15.8cm。器高6cm。底部径6.6cmを測る。  
 09003は、外底部周辺を露胎とし、他はオリーブ釉を掛けるやや大型の越州青磁碗である。内底の油溜付近は一部が露胎となる。底部径11cmを測る。



0 10cm

Fig.22 L · M16地区SK256土坑出土遺物実測図 (1/4)

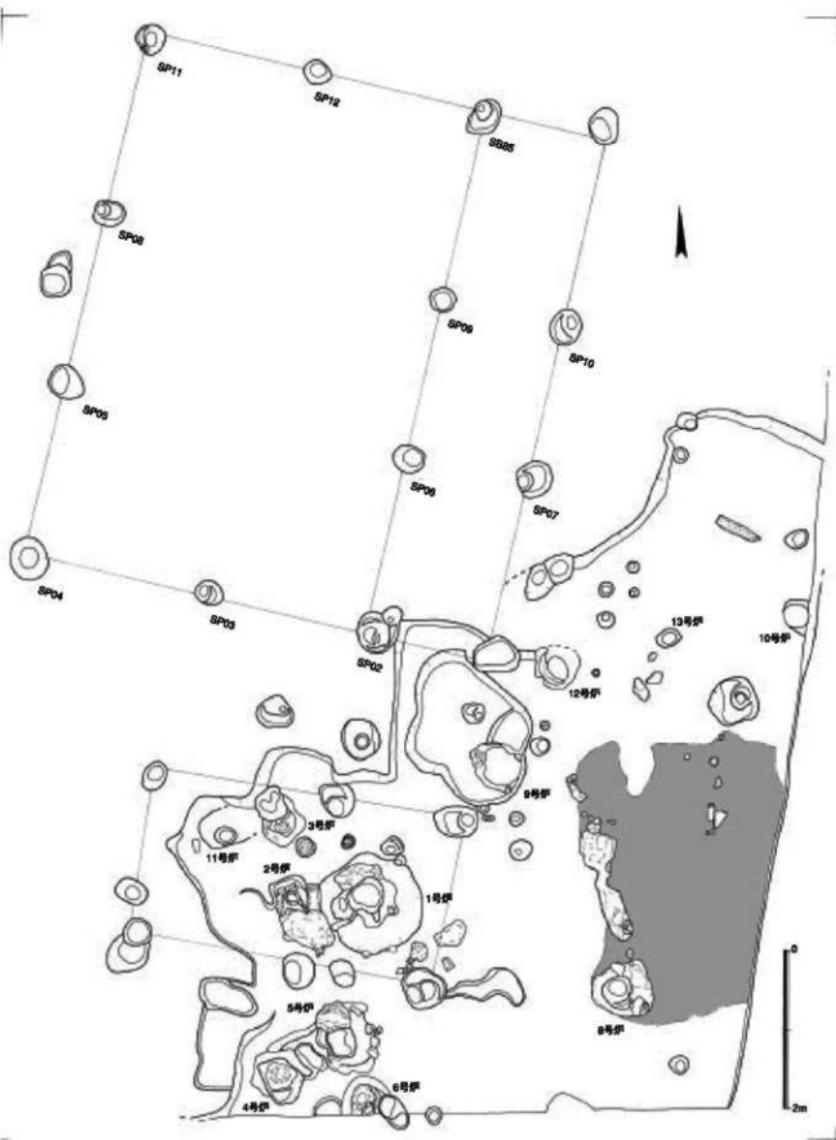


Fig.23 L·M16地区製鉄間連遺構全体図 (1/60)

09002は、やや深い越州青磁碗である。外底部周辺は露胎となり、赤灰色をなす。また、他は内外面ともにオリーブ釉を掛ける。内底部には白色粘土をおいた目跡がある。口径15.8cm。器高6cm。底部径6.6cmを測る。

09010は、肥厚する玉縁状の口縁に、太い短直線による沈線文を肩部に施す越州窯青磁鉢か。口縁部内外は露胎である。また、他はオリーブ釉を掛ける。口径14cmを測る。

S K256土坑では、上記のように土師器を中心とする土器と輸入器である越州青磁が共伴する。

## 2. 鍛冶炉 (Fig.23・24~35、PL.9~13)

鍛冶炉と考えたものは、L・M-16調査区の南西隅で13基を検出した。炉の集合する区域は周辺より20~30cmほどの段差をもって低くなる。そしてこの段落ちの西側縁辺を中心に炉が営まれている。検出炉は全て下部構造のみである。炉周辺には鉄滓・焼土や羽口破片が散在する。また、集合する鍛冶炉1~4上には1×2間の掘立柱建物が同時に併設されていた可能性もある。

1号炉跡 (Fig.24・35、PL.10-2・11) 炉の規模は、径12.5mの円形土坑内に径50cm・深さ20cmのピットが残り、南側の小溝はフィゴ羽口の挿入溝か。周辺に鉄滓の混ざった焼土が多い。

これに伴う遺物類が炉周辺から出土した。09032は越州青磁碗である。くすんだオリーブ釉を掛ける。口径11.6cmを測る。09035は、土師器杯である。器色は暗褐色である。口径13.2cm。器高3.8cm。09034は、土師器杯である。器色は淡赤褐色である。口径14.5cm。器高4.5cmを測る。

09033は、土師器杯である。器色は外面が黒~漆黒色、内面が灰白色である。底部径8.2cmを測る。

09030は、土師器瓶である。胴部外面・口縁内面は荒いハケメ調整、他は横ヘラケズリである。器色は赤褐色を呈する。口径25.4cmを測る。

09031は、フィゴ羽口先端部破片である。径6.5cm・孔径2.5~3cmを測る。

2号炉跡 (Fig.23・25、PL.11・12-1)

炉の規模は、長径0.45m、短径0.4m程の長方形土坑で南側に巨大な鉄滓、東側に長方形石材を据える。深さは10cm程度を残す。内部に赤褐色焼土があり、鉄滓と炭化物が多く含まれる。

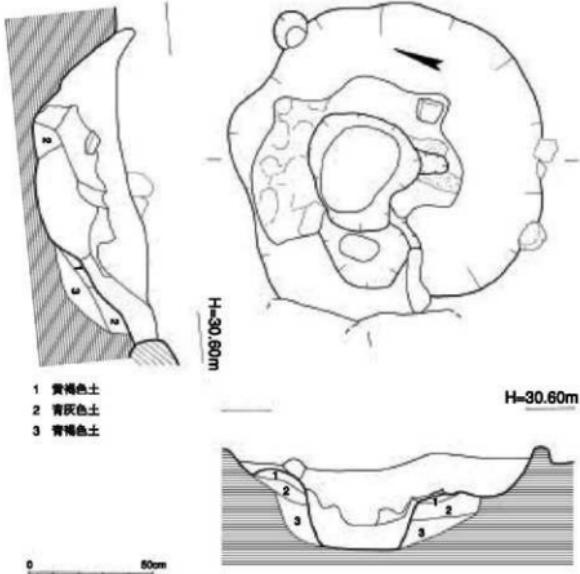


Fig.24 1号炉跡出土状況実測図 (1/20)

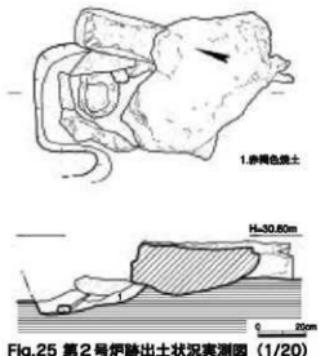


Fig.25 第2号炉跡出土状況実測図 (1/20)

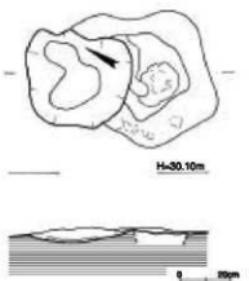


Fig.26 第3号炉跡出土状況実測図 (1/20)

### 3号炉跡 (Fig.23・26、PL.13-5)

炉の規模は、長径0.6m、短径0.5mの不整形で、北側部分を $0.45 \times 0.35$ の円形ピットに切られている。炉底にはスラグが薄く残る。

### 4号炉跡・5号炉跡 (Fig.23・27・35、PL.12-3・4)

両炉跡は、南端部に隣接している。4号炉跡は、 $0.6 \times 0.5$ mを測る不整形で、深さ0.25mを測る。南側には斜めに段をなす部分があり、送風位置か。炉底にはスラグが円形につまっている。また、5号炉跡は、長・短径が $0.7 \times 0.75$ m、深さ0.15mを測る長方形土坑で、北側縁辺には巨大な鉄滓が据えられる。また、東側には砾石で補強された縁部に羽口が原位置で残る。5号炉からは、口縁部上端にスラグが付着した須恵器杯破片09036が出土している。口径は12cmを測る。

### 6号炉跡 (Fig.23・28、PL.12-2)

炉の規模は、 $0.5$ 以上 $\times 0.6$ m程度の長円形と考えられる。深さは0.2mを測り、炉底にはスラグ・羽口破片が残っている。

### 8号炉跡 (Fig.23・28・35)

炉は、 $0.78 \times 8$ m規模の不整な円形の掘方を持ち、中央に径0.4m程度、深さ0.2m以上の円形である。炉東側には壁体の破片と共に羽口が残る。同炉からは須恵器高台杯09038が出土した。口径13.7cm。器高4.5cmを測る。また、羽口先端部破片09039もある。

残存長12.4cm。径6.7cm。孔径3cm前後を測る。

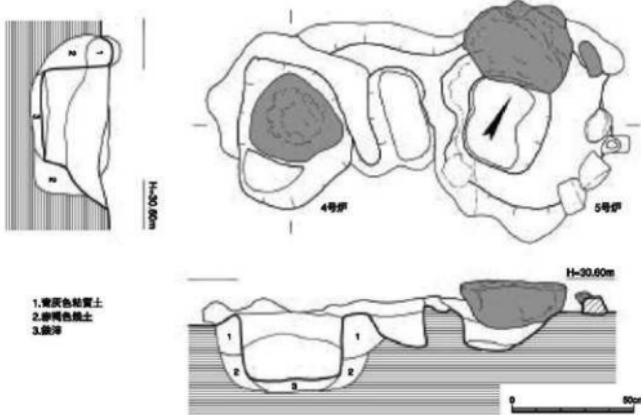


Fig.27 第4・5号炉跡出土状況実測図 (1/20)

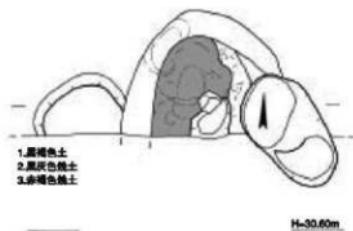


Fig.28 第6号炉跡出土状況実測図 (1/20)



Fig.29 第8号炉跡出土状況実測図 (1/20)

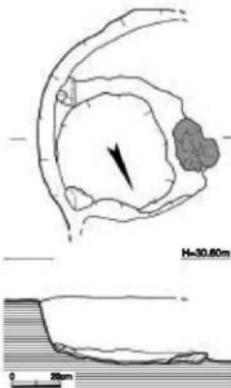


Fig.30 第9号炉跡出土状況実測図 (1/20)

#### 9号炉跡(Fig.23・30、PL.13-3)

炉は、西側の大型土坑東壁に接してつくられる。規模は、0.45m程度の円形土坑で、東側壁上にスラグが乗る。

#### 10号炉跡(Fig.23・31、PL.13-4)

炉は、炉群の北端に位置し、径0.45m程度の長方形掘り方中央に径0.30m、深さ5cmを測る円形をなす。

#### 1号炉跡(Fig.23・32)

炉は、長径が0.5m以上、短径0.4m程度の長方形土坑の南壁寄りに径0.25m弱規模の炉体を築く。

#### 2号炉跡(Fig.23・33)

炉は、径が0.5m程度の不整な円形掘り方内に径0.3mの炉体を築く。周辺は赤褐色焼土で、内部は黒色で良くしまっている。

#### 3号炉跡(Fig.23・34、PL.13-6)

炉は、0.3×0.2m程度のもので、周辺に炉体が散らばっている。

#### 炉周辺出土遺物(Fig.35)

炉周辺では、土師器杯09048・09049、土師器高台碗09040・09050、須恵器高台付き碗09046・09047、滑石製鏡19001、羽口09041・09043などが出土しており、操業の時期幅を限定する資料としても貴重である。



Fig.31 第10号炉跡出土状況実測図 (1/20)

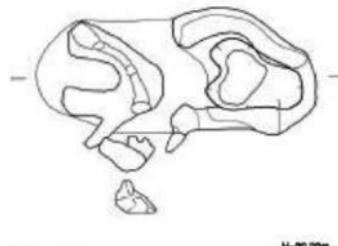


Fig.32 第11号炉跡出土状況実測図 (1/20)

Fig.33 第12号炉跡出土状況実測図 (1/20)

Fig.34 第13号炉跡出土状況実測図 (1/20)

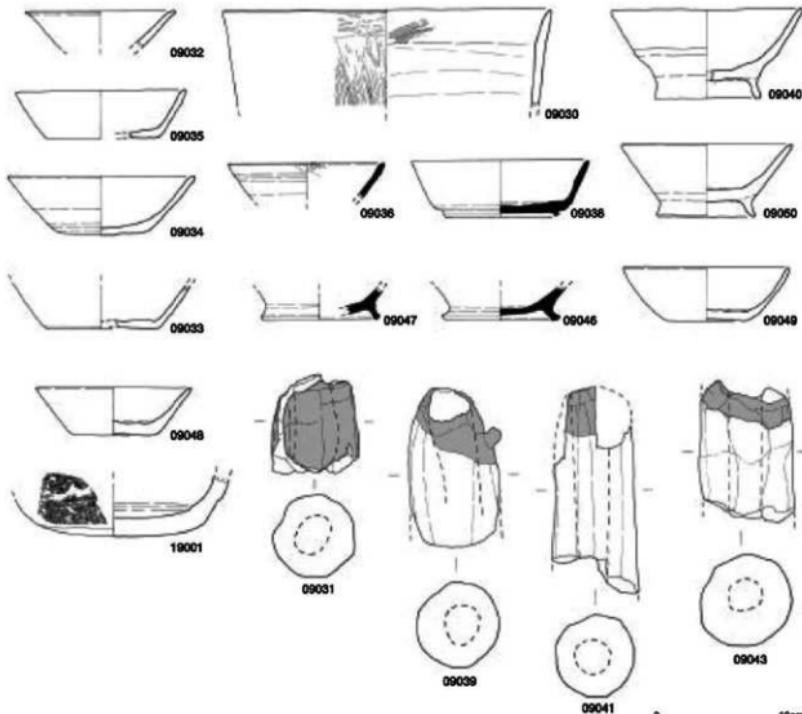


Fig.35 炉跡出土遺物実測図 (1/4)

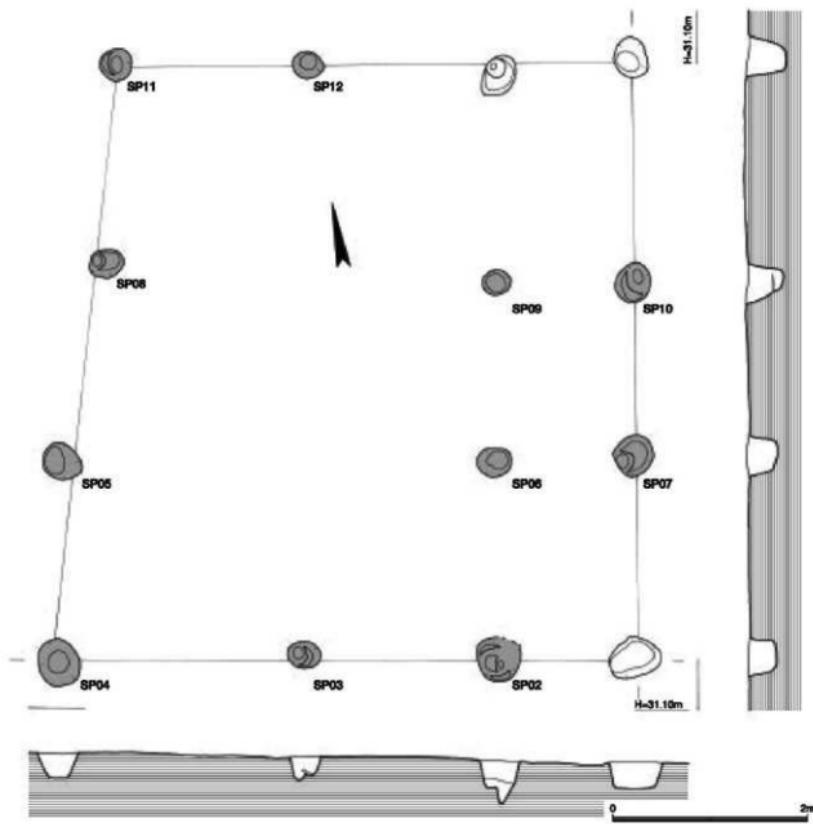


Fig.36 SB85掘立柱建物出土状況実測図 (1/50)

### 3. 掘立柱建物 (Fig.36・37、PL.14-1)

掘立柱建物 S B85は、鍛冶炉群の北側に隣接している。建物は、身舎で梁間2間×桁行き3間の規模であり、東側に1間の庇が付く南北棟建物である。建物はややいびつであるが、梁間全長5m、桁行き全長6.8mを測り、柱間はほぼ2.2mである。また、東庇は軒先1.5～1.6mの規模である。

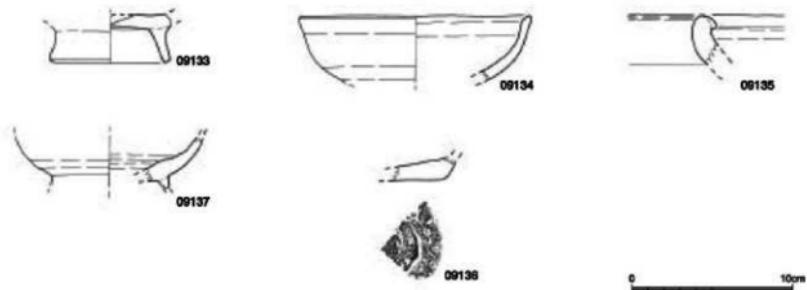


Fig.37 SB85獨立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

#### 出土遺物(Fig.37)

09133は、S P 03出土の土師器高台付き椀である。器色は暗赤褐色である。底部径6.2cmを測る。  
 09134は、S P 06出土の土師器高台付き椀である。器色は淡赤褐色である。口径13.2cmを測る。  
 09135は、S P 08出土の壺口縁部破片である。内外面とも丹塗である。外面にススが付着する。  
 09136は、S P 11出土の底部ヘラ切りの土師皿である。外面ヘラミガキ。器色は淡褐色を呈する。  
 09137は、S P 12出土の土師器高台付き椀である。器色は褐色を呈する。  
 以上のように柱穴出土遺物を比較すると、炉跡群とS B85建物とは時期的に併存しても良い。

#### 4. 溝状遺構 (Fig.20・38~46、PL.15~18)

6次調査で検出した溝状遺構は、1号幹線道路調査区のものが全てである。西から S D01・02・05 溝である。以下各溝について述べる。

##### S D05溝(Fig.20・38~42、巻頭図版1・PL17・18)

本溝は、1号幹線第3区で検出した南西から北東方向に走る自然流路である。溝の壁は不分明であり、岸辺のレベルは西から東へと降下する。埋土は最下層で有機質層となり、土器類、木器類などの豊富な遺物を出土した。

##### 出土遺物(Fig.39~42、巻頭図版1・PL17・18)

**土器類(Fig.39)** 土器類は、土師器・須恵器・輸入陶磁器などがある。

09081は、瓦器椀である。内面ヘラミガキ調整。底部径6.5cmを測る。09080も瓦器椀である。外面ヘラミガキ調整。底部径6.6cm。09093は、大型の瓦器椀である。外面上半部はヘラミガキ、下端部はヘラケズリ調整。口径20cm。

09604は、土師器高台杯である。高台は低い。外底部には板目痕を明瞭に残す。器色は漆黒色。口径17.4cm。器高5.3cm。09095は、土師器高台付き椀である。器色は淡黄褐色。口径15cm。器高7.7cm。09090は、土師器杯である。器色は淡褐色。口径11.4cm。器高3.4cmを測る。09087は、土師器杯である。器色は淡褐色。口径13.5cm。器高4.5cmを測る。09085は、土師器杯である。器色は暗褐色で、外底に板目痕あり。口径14cm。器高4.2cmを測る。09089も土師器小型杯である。器色は暗褐色。外底に板目痕あり。口径13.2cm。器高3.4cmを測る。09088も土師器杯である。器色は暗赤褐色で、

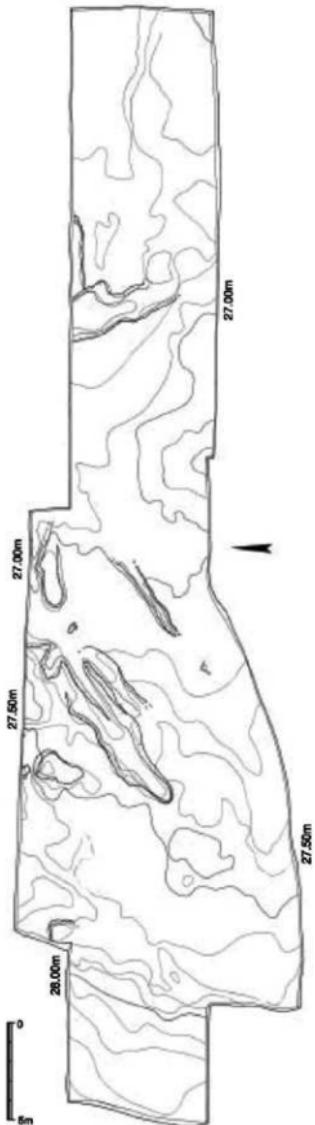


Fig.38 1号幹線道路3区SD05調査状況実測図 (1/250)

外底に板目痕を残す。口径12.4cm。器高4cm。

09084は、土師器脚付き皿である。内面にヘラミガキが残る。器色は暗赤褐色。口径14.8cm。

09105は、土師器高台付き皿である。外面にスヌが付着する。口径16cm。

須恵器では、09099・09086が低い杯蓋である。ボタン状の摘みを付す。それぞれ口径が15cm・17.2cmを測る。また、09100は高台付き小壺である。内外面ともにヨコナデ調整。口径8.6cm。器高4.2cmを測る。

また、09079は緑釉陶器碗である。胎土は白色で、淡緑色釉を掛ける。底部径5.8cm

次に磁器類では、09074がオリーブ色釉を掛ける越州青磁碗である。09075は、上げ底の越州青磁碗である。口径13.8cm。09076は、越州青磁碗か、淡いオリーブ色を掛ける。09077は、蓋形磁器で、明代染め付けか。口径12.1cm。09078は、見込みに花文を持つ青磁碗である。全体に暗いオリーブ色釉を掛ける。口径17.2cmを測る。

#### 石・土製品(Fig.39)

19002は、石鍋再利用の容器残欠である。09083・09082は、小型の管状土錐である。

#### 瓦類(Fig.40・41、巻頭図版1・PL.18)

09117・09116・09115・09118は軒平瓦である。

09118のように中心飾りの車輪文から均正に唐草文を配置するものや文様が粗雑で唐草文がデフォルメされたタイプなどが知られる。

09129・09128・09114・09113は軒丸瓦である。中心の珠文構成が1:6や1:4などが見られ、新しいタイプのものが多い。

09132・09122・09126は、平瓦・丸瓦破片である。

外面のタキは斜め格子が見られる。また、09126のよう焼成が須恵質のものもある。

09112は、鬼瓦である。外周にくずれた珠文帯を巡らす。鬼瓦破片は、本調査区の北側にあたる9次調査でも小破片ながら数点が見つかっている。

#### 木器類(Fig.42、PL.17)

木器類は、生活臭のする製品類である。

21209は、木製檜である。全長36cm、幅7cm以上、平底である。21212は不明木製品である。

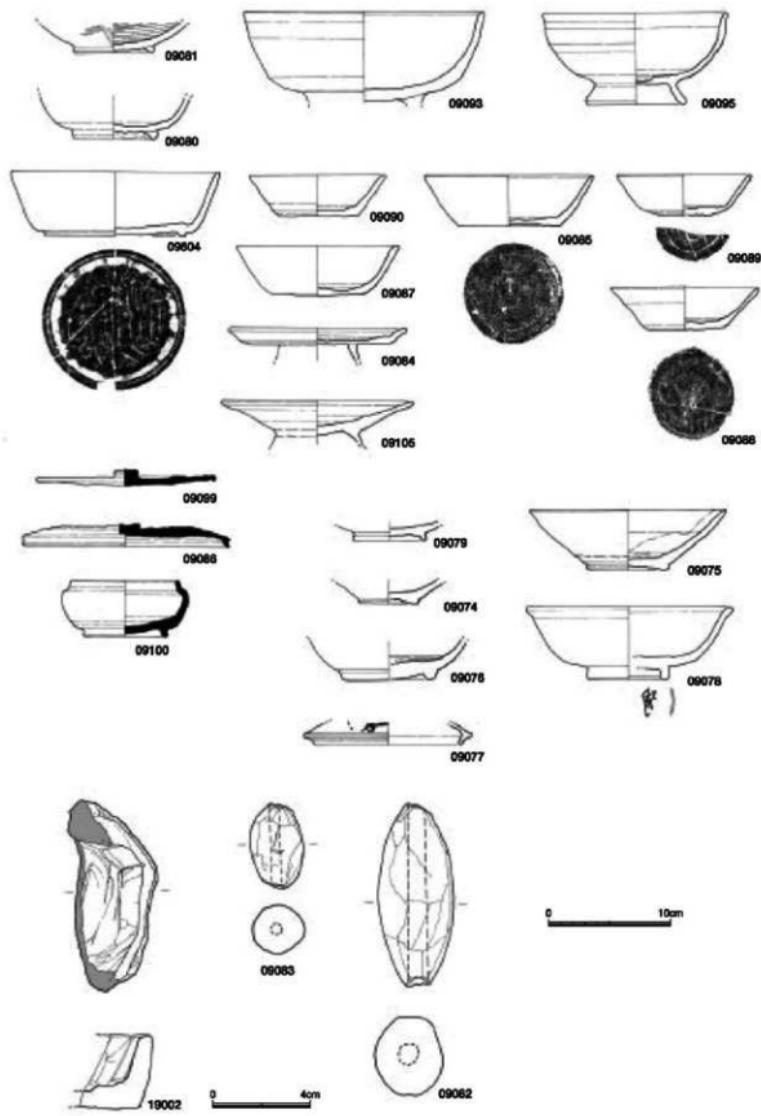


Fig.39 SD05溝出土遺物実測図① (1/4・1/2)

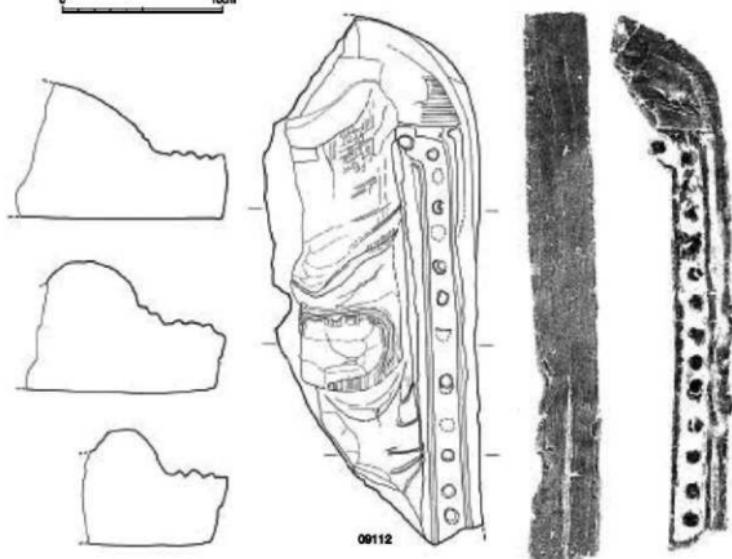
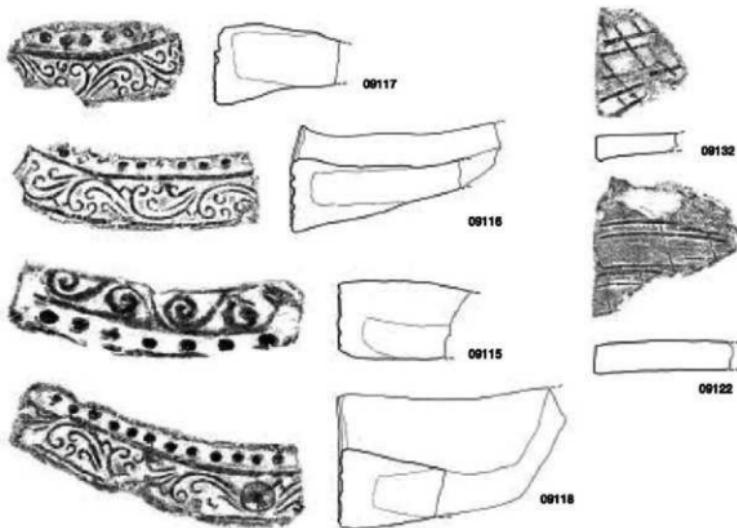
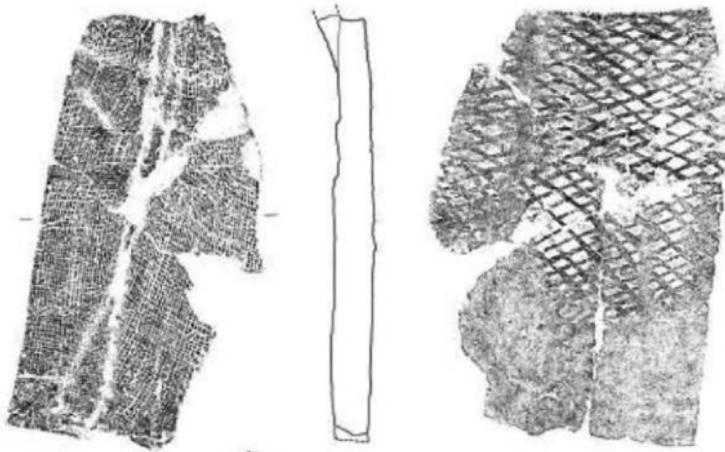
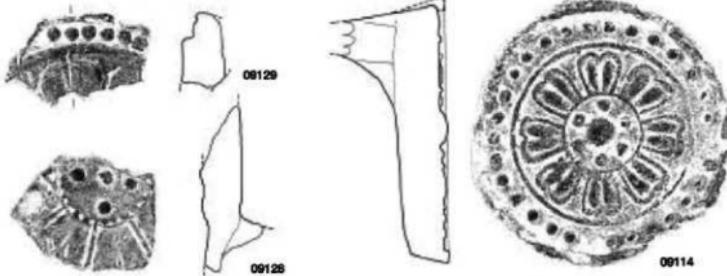


Fig.40 SD05溝出土遺物實測圖② (1/3)



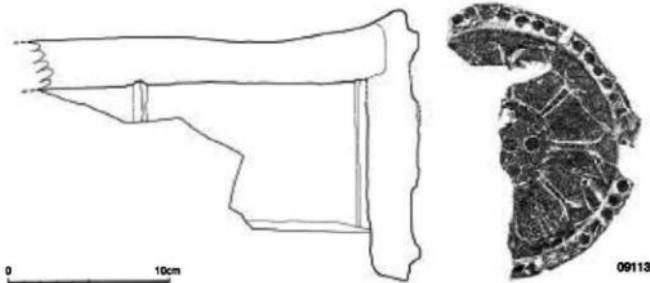
09126



09129

09128

09114



09113

0  
10cm

Fig.41 SD05溝出土遺物実測図③ (1/3)

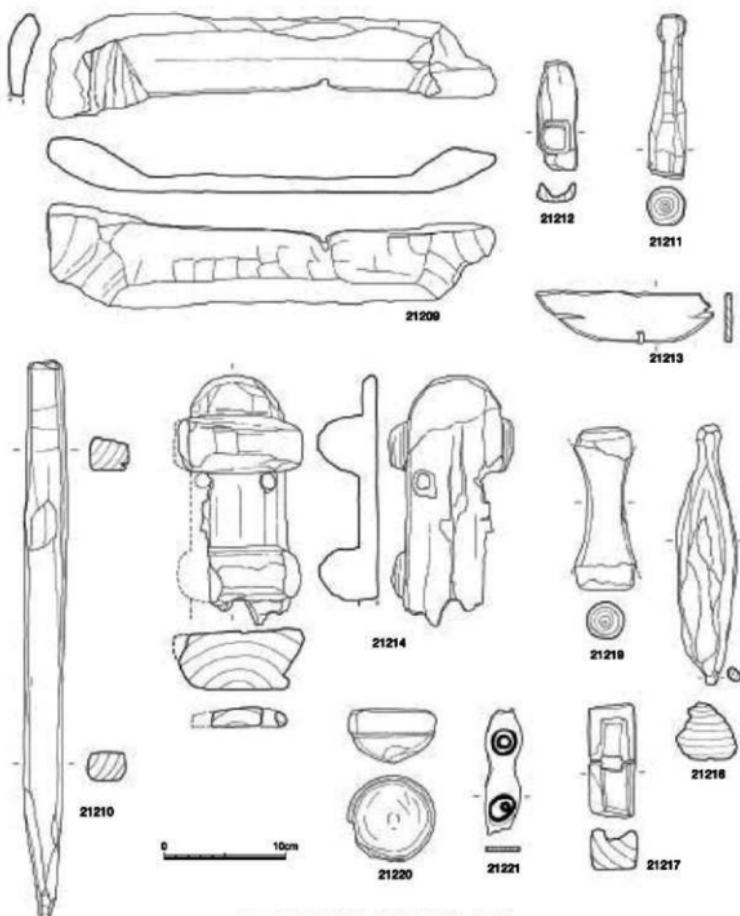


Fig.42 SD05溝出土木器実測図 (1/4)

中央を部分的に穿つている。21211は、木鐸状の木製品である。長さ13cmを測る。21213は曲げ物の底板である。21210は、杭状の木製品である。長さ44cmを測る。

21214は、剃りだしの小型下駄である。前部が無く、現存長20cmを測る。21219は、黒漆塗の高杯脚である。両端を失う。現存長13cmを測る。21216は、木錐か。現存長21cmを測る。

21220は、独楽状木製品である。径6.8cm前後で、周囲に段を有する。21221は、板材の中央に側刃から切り込みを入れ、墨で同心円文を描く。21217は舟形か。これらは祭祀に伴う木製品か。

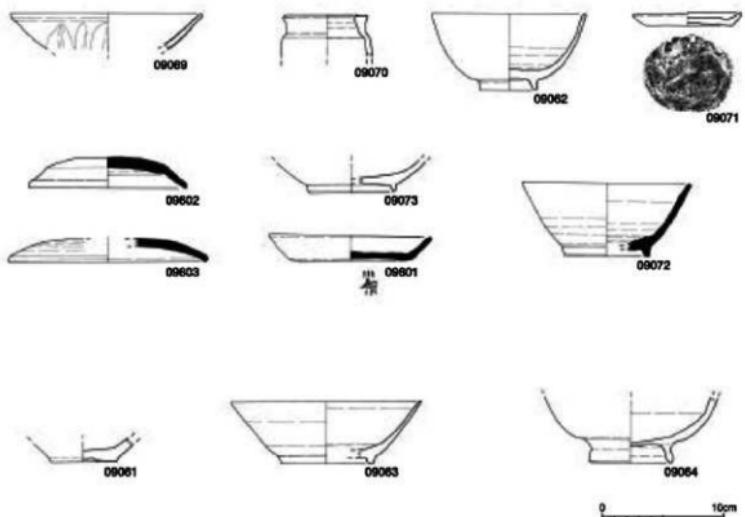


Fig.43 1号幹線道路1区 SD01・1号幹線道路2区SD02・MN-16・17S D04溝出土遺物実測図(1/4)

#### S D01溝(Fig.20・43)

1号幹線道路調査区の西端部で検出した溝である。一部には丸杭による護岸も一部で確認できた。出土遺物は、09069が鑄蓮弁文が特徴的な青磁碗である。口径15.6cmを測る。09070は、淡褐色釉を掛けた陶器壺である。近世期のものか。09062は、磁器碗である。高台以外にセピア色の釉を掛けた。口径12.6cm、器高6.3cmを測る。09071は、浅い糸切り底の土師皿である。口径9cm。器高1.1cmを測る。近世期の所産である。

#### S D02溝(Fig.20・43・44・45・46、PL.15.16)

1号幹線道路調査区西側の溝で自然流路と考えられる。

本溝に伴う遺物類は、土器・木製品があり、特に木製の鐘は特筆される。

須恵器では、09602が低い天井部を持つ杯蓋である。器面調整は、内外面共に回転ナデを施す。器色は明灰色～黒灰色を呈する。天井部には字が不明ながら墨書が認められる。赤外線調査を行ったが、不明である。口径13cm、器高2.4cmを測る。

09603も低い天井部を持つ須恵器杯蓋である。器面調整は内外面共に回転ナデを施す。器色は淡灰色を呈する。本資料も天井部外面に墨書が認められるが、調査の結果は不明である。

口径16.4cm、器高19cmを測る。09601は、須恵器平底杯である。調整は内外面共に回転ナデである。器色は淡灰色を呈する。

外底部には縦書きで墨書が

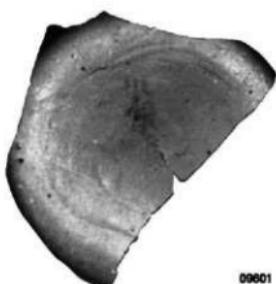


Fig.44 SD02溝出土墨書き土器

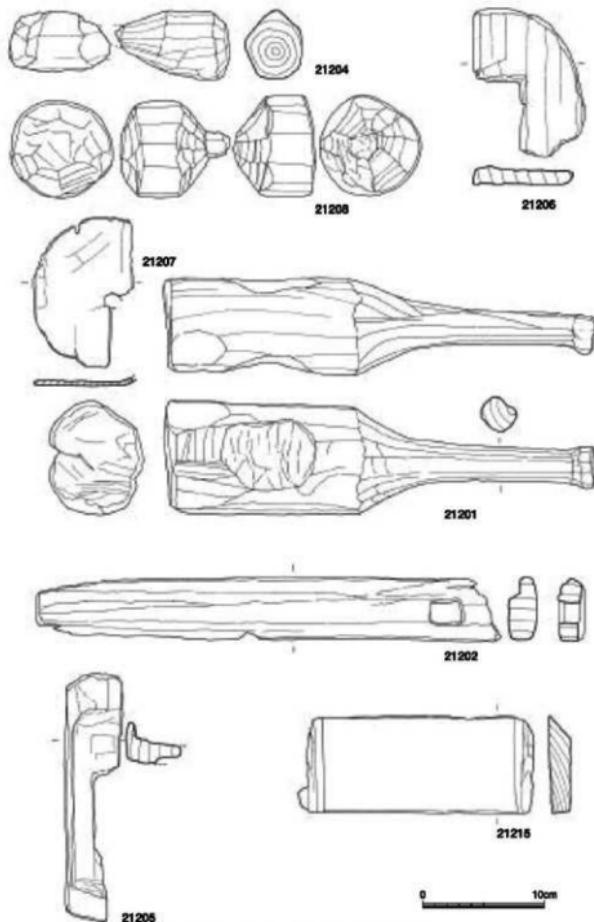


Fig.45 SD02溝出土木器実測図① (1/4)

は良く残り、滑り止めの端部も造り出しが丁寧である。全長36cm、敲打部の長さ16cm・同幅9cmを測る。

21202は、残存長38cm、厚さ2.4cmを測る板状木製品で、中央部に長方形のホゾ状穴を穿つ。一方の端部は本来の状況である。

認められる。

比較的明解で、「川原」と読むことができる。

口径13.4cm、器高22cmを測る。

09072は、須恵器高台付き碗である。外面下半部は回転ヘラケズリを加え、他は回転ナデである。器色は黒灰色を呈する。

口径13.8cm、器高6cmを測る。

**木器(Fig.45・46、PL15・16)**

木器は、生活用具関連が多く見られる。

21204・21208は槌子である造りも丁寧である。両端部も良く調整が残る。

21206は、又鉗の頭部破片か。柄穴の一部が残る。

21207は、有孔の円形木器である。

21201は、良く使い込んだ細身の木槌である。敲打面は表裏に二面あり、よく消耗している。握り部

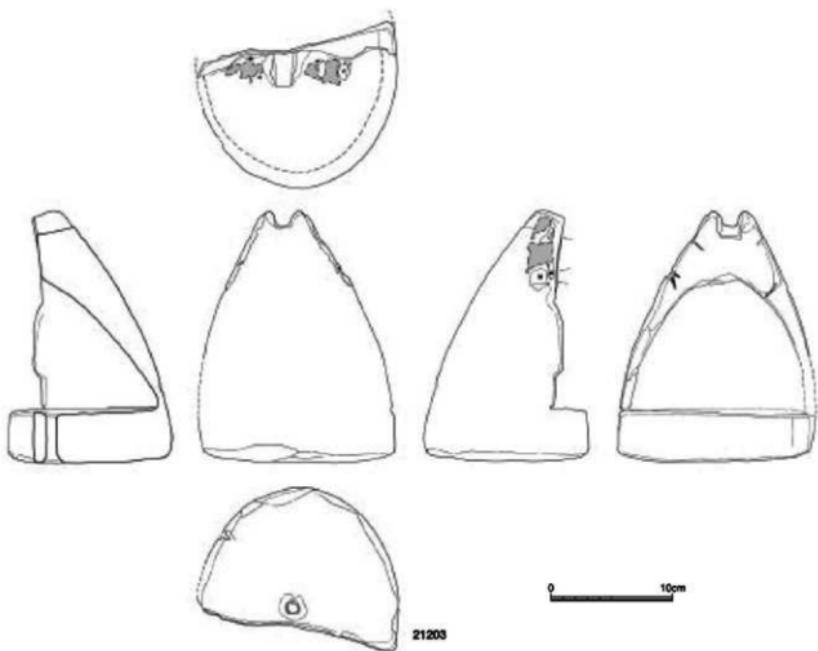


Fig.46 SD02溝出土木器実測図② (1/4)

21205は、小型の槽である。現存長20cm、幅5.4cmを測る。

21215は、両端を直線的に切り断した板状の木器である。現存長19.4cm、幅8cm、厚さ2cmを測る。

21203は、木製壺鏡である。頭部に長方形孔を穿つ。また、アミ掛け部分は黒漆の残存している可能性が高い。

また、頭部には鉛留めの孔が残り、X線撮影でも黒い影となって写る。現存高で20cm、奥行き122cm、各掛け部分の奥行き11.8cmを測る。広葉樹の環孔材使用か。

#### S D 04溝(Fig.20・43)

1号幹線道路調査区の西側に位置する自然流路である。

溝からは、09061が蛇の目高台を有する越州青磁小型碗である。全面に淡緑色の釉を掛け、外面の一部には貫入が見られる。底部径は5.4cmを測る。

09063は、越州青磁碗である。高台を除く体部内外面に淡緑色の釉を掛ける。器面は光沢を放っている。口径15.6cm、器高5.1cm、高台部径7.6cmを測る。

09064は、土師器の高台付き碗である。口縁部を失う。器面調整は、磨滅のために不明である。

器色は淡褐～暗褐色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。底部径6.9cm、残存高5.3cmを測る。

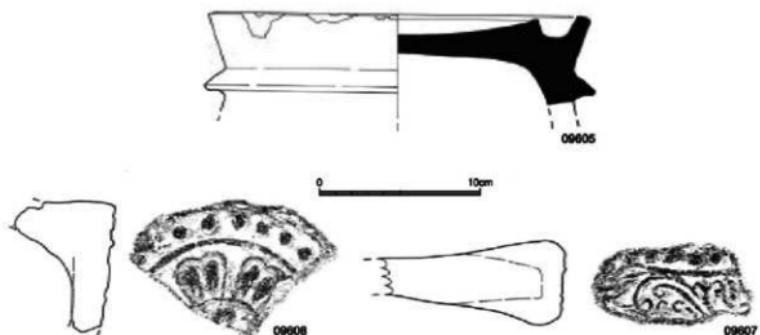
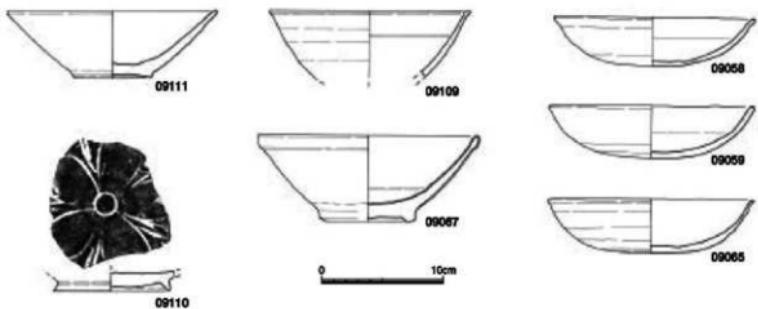


Fig.47 第6次調査出土遺物実測図 (1/4・1/3)

## 5. 第6次調査出土遺物類 (Fig.47、PL.15~18)

6次調査で出土した遺物について収録した。

09111は、やや上げ底となる越州青磁碗である。外底部とその周辺が露胎となり、暗赤褐色を呈する。その他は内外面に淡緑色～淡灰色釉を掛けた。口径16.2cm、器高5.25cmを測る。地区不明。

09110は、内面見込みに線彫りの花文をみる越州青磁碗である。内外面共にオリーブ色の釉を掛けた。底部径8.8cmを測る。地区不明。

09109は、白磁碗である。口縁端部を小さく引き出す。釉はやや薄い透明釉を薄く掛けた。内面には沈線一条を巡らす。口径15.6cm、残存高5.3cmを測る。遺構確認面出土。

09067は、大きな玉縁口縁を持つ白磁碗である。施釉は厚く、均整のとれた碗である。口径17cm、器高6.7cmを測る。1号支線排水路2出土。

09058・09059・09065は、土師器杯である。09058は、MN地区9号古墳周溝西側出土。09059は、MN地区9号古墳周溝西側出土。09065は、G-17地区16号古墳周溝内出土である。

09065は、須恵器大型円面鏡である。うみは良く磨られて光沢を放っている。器色は淡灰色を呈する。外面も一部に自然釉が見られる。脚部は打ち欠きにより失われているが、12個の透かしを持つ。あまり等分のヘラ切りではない。透かし幅2.8cmを測る。内面はヘラケズリを施す。また、灰被りであることから、裏面を下にして焼成を行っている。胎土は粗砂が多く混入する。焼成は堅緻である。外径22.15cm、内径(うみ径)16.3cm、タガ径22.8cmを測る。1号幹線道路2区出土。

09608は、軒丸瓦破片である。遺構検出面出土。

09607は軒平瓦破片である。同様に遺構検出面出土。

## 第五章 第9次調査の記録

### 1. 調査概要

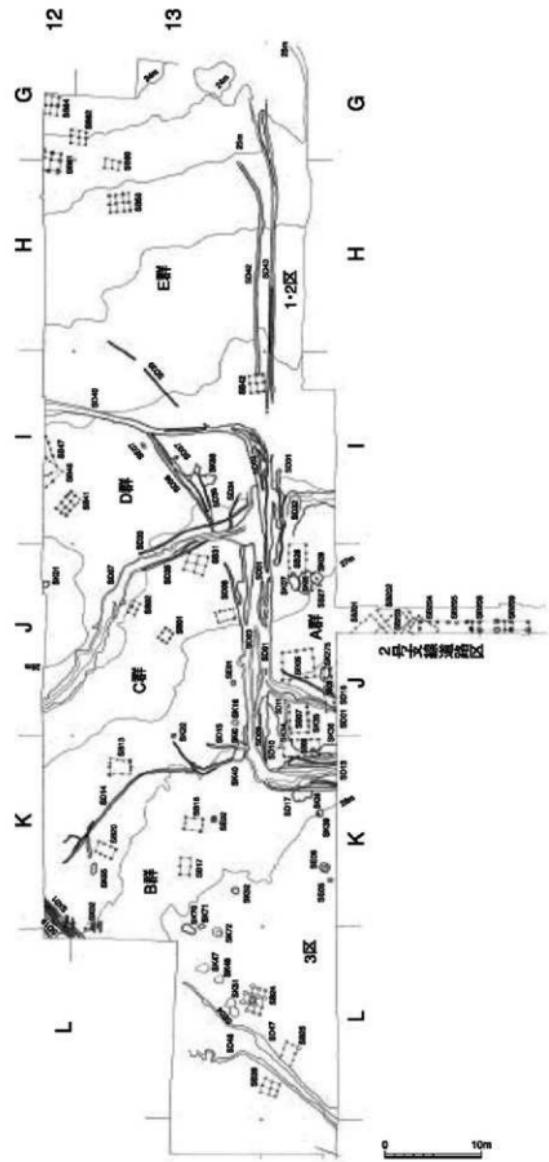
本調査区は吉武遺跡群の中央の低台地のほぼ中央に位置し(Fig.2)、圃場整備事業の第6次調査で最終年度にあたる。標高は24~30mで南西から北東に1.4%程で緩傾斜している。調査対象地は削平を伴う東西300m南北80mの圃場整備本体工事部分と、同部分中央を南北に貫通する幅7mの2号支線道路部分、本体工事部南辺に沿って東西に貫流する2号支線排水路部分である。調査対象地が広大であり、調査と圃場整備工事を円滑に並行に進めるため、本体工事部分を東西に二分し、東の壇棺墓「大石地区」を1区、東半の他の部分を2区、西半部分を3区、3区の北西100m地区を4区、3区南の2号支線道路部分を2号支線道路区、3区西の2号支線排水路部分を2号支線排水路1区、1区東側の2号支線排水路部分を2号支線排水路2区として調査を実施した。小区は第1次調査で設定した、南北を軸線とした50mグリッドを採用している。

調査は2号支線道路部・3区・2号支線排水路1区・2号支線排水路2区・1・2区の順番で実施した。2号支線道路部・2号支線排水路1区・2号支線排水路2区は1/20スケールの全体実測図を作成したが、他は調査区が広大かつ遺構総数が膨大であるため、作業時間を短縮する目的で、個別実測以外の全体図は西日本航業株式会社に委託し航空測量図を作成した。補助図として平板測量図を作成し、これを1/50スケールに拡大し要所のレベルを記録、航空測量図はこのレベル図を援用し作成され、第9次調査分の遺構実測図の大半は航空測量図より抜き出している。図中の細かな数字は絶対高であるが、原図に全てのポイントのレベルが記入されてはおらず、また、長い年月の間にレベル図の多くを紛失しており、3区西拡張区は平板図のみで、遺構断面図の作成が困難になっている。

現況は水田で、耕作土とこの床土の直下約20cmほどが遺構の検出面となっており、この検出面近くまでを重機を用いて掘り下げ、その後手作業で遺構検出を行っている。地山は層状地形のため疊層から粘土層まで様々に切れ替わっており、遺構検出を困難にしている。

検出した遺構は、3区西拡張区の水成堆積層より、624点にのばる良好な細石器製作ユニットを、弥生時代は1区「大石地区」で12点の細型青銅武器と玉類が副葬された壇棺墓202基・木棺墓8基・土壙墓12基・祭祀遺構5基からなる共同墓地が検出され、「高木地区」の下位の「特定集団墓」と位置づけられた。2号支線道路区では35基の壇棺と鉄剣1点・堅拂1点の副葬品・祭祀遺構1基を検出、古墳時代は前期の土器棺1基・土壙1基、5世紀以降で竪穴住居81軒、土壙149基、掘立柱建物は大壁建物1棟を含む31棟以上、溝は10条が検出され第9次調査域が本遺跡群の古墳時代中心集落である。2号支線排水路1区では陶質土器・初期須恵器を伴う円墳2基(S群27・28号墳)を検出、各遺構からは陶質土器・軟質土器・鉄器・鍛錬車など多量の半島系の資料を検出している。

本編の古代から中世初めにかけては、本体工事区の1~3区と2号支線道路区で礎石建物2棟と掘立柱建物群32棟、方形区画溝を含む溝29条、道路状遺構2条、土壙21基、井戸7基を検出。2号支線排水路1区で溝・流路2条、掘立柱建物4棟、4区で掘立柱建物4棟を検出した。弥生・古墳時代ほどの遺構数ではないが、第3の盛期を示す時期であり、溝を中心に鬼瓦を含む多量の瓦・鐵滓・越州窯系青磁や白磁・綠釉陶器・硯・石帯・八稜鏡・墨書き土器等が出土し、金武城田・都地泉水遺跡から続く、製鉄にも関連する官衙の遺構群である可能性が高い。



### 1. 1~3区・ 2号支線道路区

調査は、7ヶ月間に  
28,000m<sup>2</sup>と12点もの青銅器  
を副葬した203基もの壇棺  
墓群を掘りあげる状況の  
なかで実施され、資料の出土  
状況の把握は十分ではなく、  
遺構の時期的な細分は不可  
能な状況である。また、出土  
遺物の殆どは溝からの出  
土で多数の切り合い・数度  
の洪水砂の流入により細か  
な時期設定を困難にしてい  
る。

1~3区は東西300m南北  
80mの圃場整備本体工事部  
分で、本調査の中心部分を  
占める。2号支線道路区は  
同部分中央から南に延びる  
長70m幅7mの道路部分で  
ある。

遺構は内法63m程の方形  
区画溝と礎石建物2棟を中  
心に掘立柱建物群32棟、溝  
29条、道路状遺構2条、土  
塹2基、井戸7基を検出した。  
調査区が広大なため、方形  
区画溝部を中心のA群とし、  
西から各溝の区画ごとのB  
からEの計5群の小区に分け  
詳述する。

Fig.48 第9次調査1~3区遺構分布図(1/1,250)

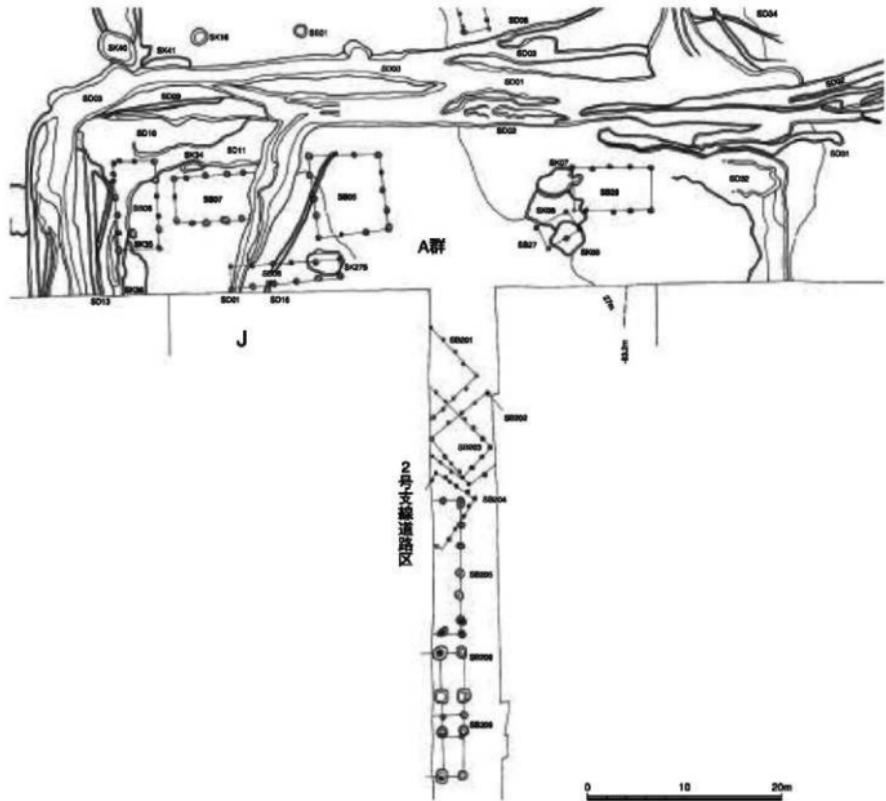


Fig.49 A群遺構分布図(1/500)

### 1) A群

調査区中央南東寄りにほぼ磁北に沿うN-84°-Eの東西方向に幅74m、南北は南端が調査区外で明らかでないが調査区内で94mの範囲を、方形に幅1~4mの大小の溝13条で2~3重に区画された区域で、内部に区画に沿って礎石建物の可能性が高い大型建物2棟・掘立柱建物12棟・土塹6基が検出され、本遺跡群内の中心的施設と考えられる。

溝内部からは鬼瓦を含む1,864片370.2kgの多量の瓦・187片の越州窯系青磁や52片の白磁・新羅無釉陶器・綠釉陶器・硯・八稜鏡・銅製品・コンテナ8箱の製鍊・鍛冶滓・墨書刻書土器等が出土・検出面からは石帶2点が出土し、遺構とともに製鉄に関わる官衙的な様相を強く示している。時期は9世紀中～後半と11世紀を主とし、8世紀から12世紀初頭にわたる資料が混在する。

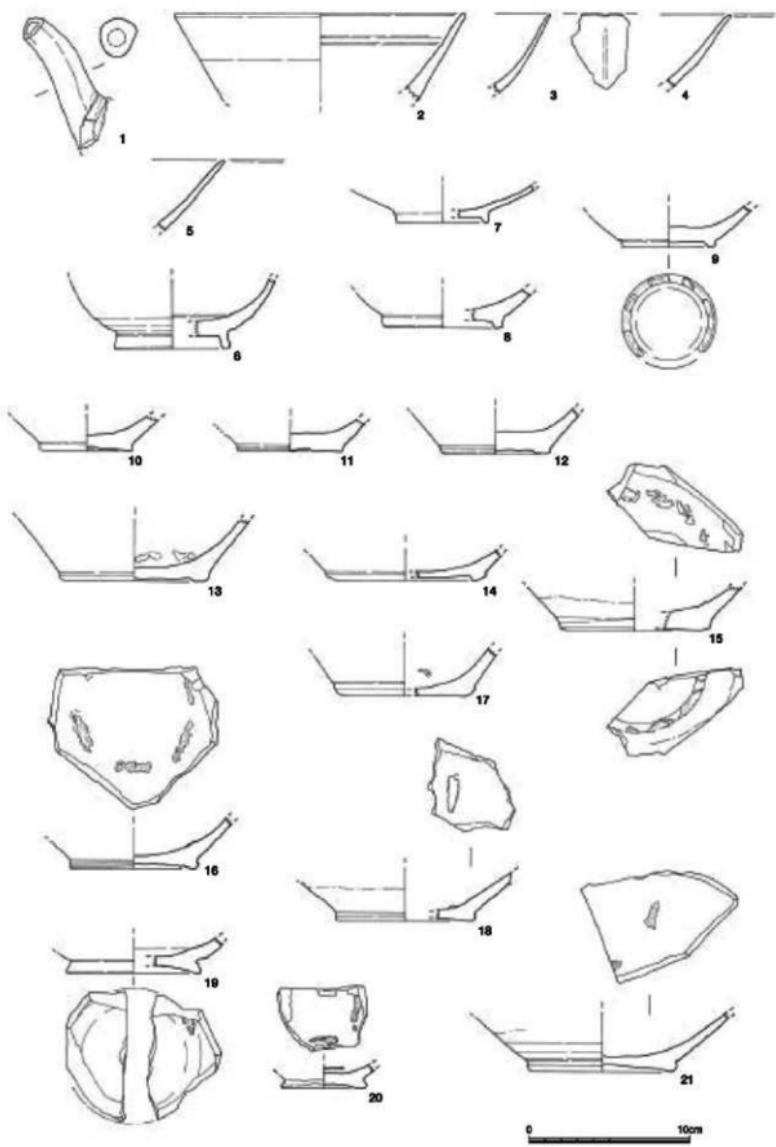


Fig.50 S D01 残遗物実測図①(1/3)

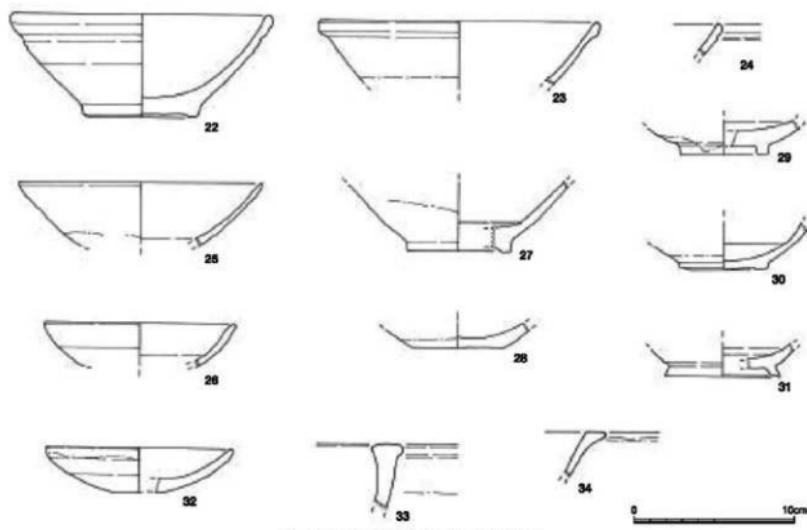


Fig.51 SD01遺物実測図②(1/3)

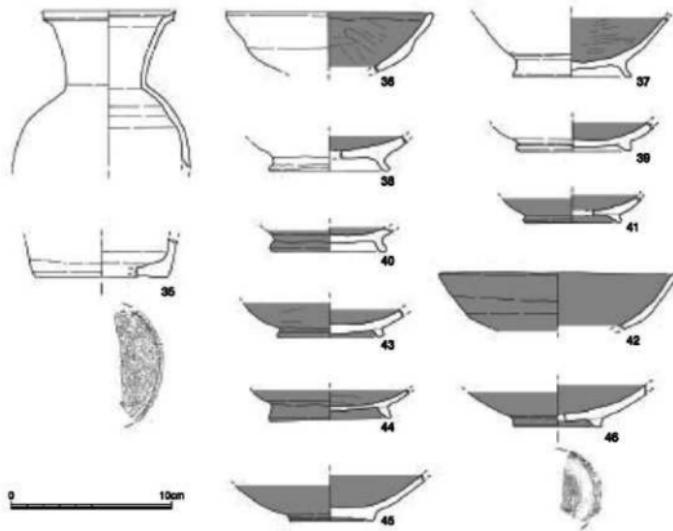


Fig.52 SD01洞出土遺物実測図③(1/3)

SD01 (Fig.49 PL.19~21) SD01は区画西を区切るSD03から東21mの位置に、やや東に角度を振って北流し、SD09・11を切って東に屈曲する。中央部で北に3m平行移動しSD03を切ってこれに重なって東流し、北東隅から直角に屈曲し北流してSD07に連なる。最大幅4.1最深部0.65mを測る。

出土遺物 (Fig.50~61 PL.32~34) Fig.50は越州窯系青磁。1は水注口部。釉は灰緑色を呈し胎土は精良。2~21は碗で、2~5・8~18はI類。2・5は直口で2で口径17.6cm。3・4はゆるく外反し3は輪花で以下に縦凹線を施す。8・9は輪高台。8は底径7.4・9は5.7cm。10・11は蛇の目高台で10は底径5.6・11は8.6cm。12~14は低い輪高台。14は疊付けから内側を露胎で底径9.8・12は6.8・13は9.0cm。15~18はやや上がる平底。体部下位以下は露胎。15は底径9.0・16は7.8・17は8.6・18は8.4cm。6・7はIII類。7は疊付けから内側を露胎。底径は7.0・8は5.6cm。19~21はII類で円盤高台。体部下位以下は露胎。底径は19は8.2・20は5.3・21は9.0cm。Fig.50.22~30は白磁。22~25・27~29は碗で22~24はI・IV類玉縁口縁碗。22で口径14.8器高5.8cmを測る。22・27は低い輪高台で底部が厚い。27で底径6.0cm。25はV類直口縁で径13.8cm。26・28・30は皿。26はVI類で口径10.8cmを測る。28・30はII類で

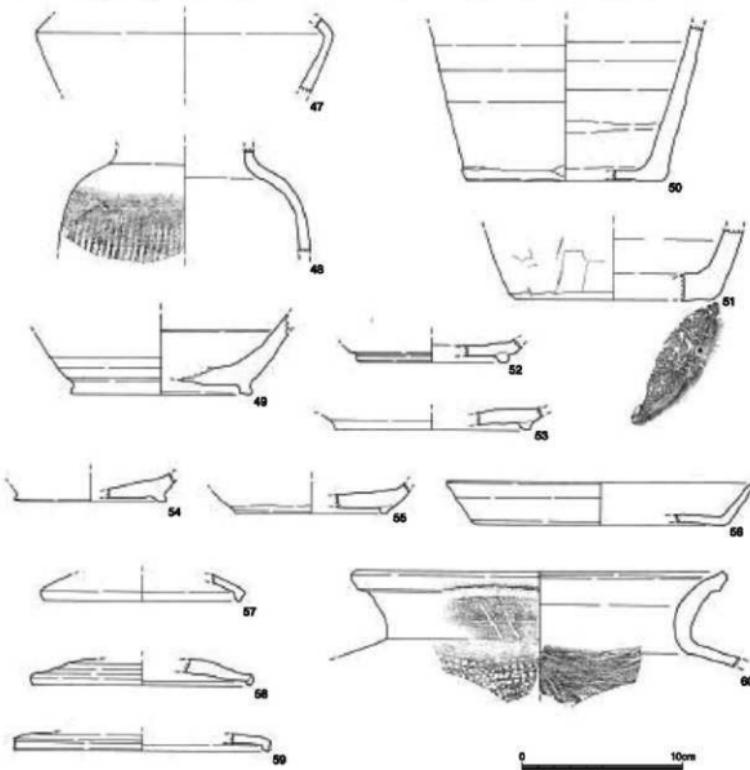


Fig.53 SD01溝出土遺物実測図④(1/3)

28は底径5.0・30は6.0cm。31はバチ高台の縁釉碗。豊付に凹線を施す。32～34は陶器で32は褐釉の灯盡で口径10.4器高2.5cm。33は磁灶麻黄釉盤、34は褐灰色胎土に化粧掛けの白磁鉢。Fig.52-35は新羅無釉陶器瓶。二重口縁で径5.4cm。底部は平底で回転糸切り痕を残し底部脇をヘラケズリ。胎土は暗紫灰色。36～38は黒色土器A類境。36は体部中位が屈曲する。口径14.0cm。37・38は高台が高い。37は底径8.0・38は8.2cm。40・41・44はB類境で高台径40は7.8・41は6.6・44は8.3cmを測る。39・42・43・45・46は瓦器塊。42で口径16.0cm、底径は6.0～7.7cmを測る。Fig.53は須恵器。47は長頸壺。肩径18.6cm。48は瓶で縦位の叩きに丸い肩径で15.6cmを測る。49は高台付壺底部で径11.2cm。高台脇を回転ヘラで削る。50・51は瓶底部で、50は底部脇を回転ヘラで削り外底に板目が残る。径12.8cm。

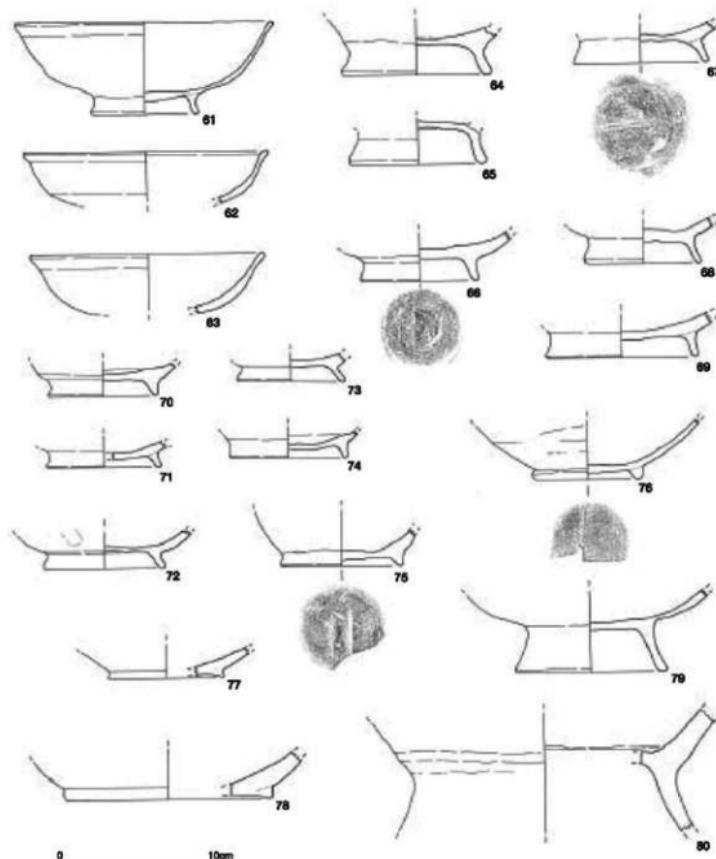


Fig.54 SD01洞出土遺物実測図⑤(1/3)

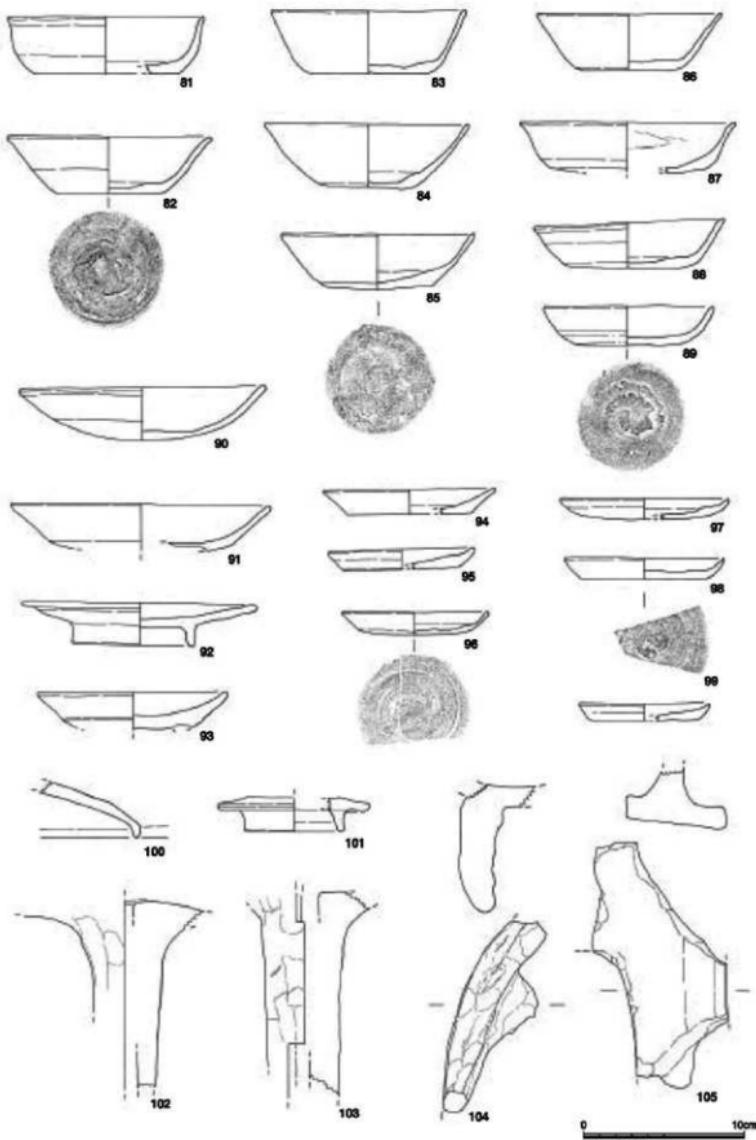


Fig.55 SD01洞出土遺物實測圖⑤(1/3)

51は底部脇以下を手持ちヘラで削る。径13.2cm。52～55は高台坏。52は高台径9.4・53は10.0・54は9.4・55は9.4cmを測る。56は盤で口径19.0器高2.6cm。外底はヘラ切り痕をナデ消す。57～59は坏蓋。57は口径12.6cm。返りは明瞭な三角形を呈す。58は器高が低く口径13.8cm。返りは丸みを帯びる。59は口径15.8cm。返りは明瞭な稜を成すが体部は低く板状を成す。60は壺口縁部で口径23.4cm。外面に粗い格子叩きを施す。頸部に浅いヘラ記号を刻す。Fig.54～56は土師器。坏・塊・皿の外底は全て回転ヘラ切りである。64・65・70・74・75は高台坏底部。体部は立ち上がり、高台は細く高く外方に張る。底径64は9.5・65は8.7・70は6.9・74は7.5・75は7.7cmを測る。61～63・66～69・71～73・76～79は塊。61～63は浅い体部で口縁が緩く外反する。61は口径16.4器高5.8cm、62は口径15.4cm、63は口径14.8cmを測る。66～69は高い高台で66・67は外底に板圧痕を残す。高台径66は6.4・67は8.6・68は7.5・69は9.6cmを測る。71～73は低めの高台で71は径7.2・72は7.7・73は6.8cmを測る。76は瓦器塊に類似し、低い高台深い体部で外底に板圧痕を残す。77・78は越州窯系青磁II類に類似する円盤高台で若干の上げ底になる。77で径7.2・78は13.4cmを測る。79は高足の塊で高台径7.6高さ3.0cmを測る。80は脚付鉢で脚脇で径16.5cmを測る。Fig.55-81～89は平底の坏。81は体部が立ち上がり口縁が緩く外反する。口径12.2器高3.5cm。82～86は体部が開く。口径・器高は82で12.7×3.5・83は12.0×3.9・84は12.7×4.0・85は12.0×3.5・86は11.4×3.5cmを測る。87～89は浅い体部で、口径・器高は87で13.2×3.1・88は11.7×3.1・89は12.5×2.5を測る。90は丸底坏。口径15.3器高3.3cm。調整は不明。91～99は皿。91は大皿で口径16.0器高2.8cm。92は高台付。口径12.4器高2.6cm。93～99は小皿。口径・器高は93で11.6×2.2・94は10.6×1.5・95は9.0×1.2・96は9.0×1.4・97は10.4×1.3・98は9.8×1.3・99は8.0×1.1cmを測る。100は坏蓋。体部は深いが返りは丸みを帯びる。101は托上坏底部で托径9.6高台径5.2cmを測る。102・103は器台脚部。それぞれ脚径4.8・4.6cm。104・105は壺底部の小片である。Fig.56は壺。106は口径29.2cm。外面はヨコナデ。107は口径28.6cm。外面にタテハケが残る。108・109は界隈式の胴部小片で外面に粗い平行叩きを施す。Fig.57～61は瓦。110～116は軒丸瓦。110～112・115・116は単弁8葉で中房に1+4の蓮子を置く。外区は一段低く連珠文を施す。復原径16cm程。113・114は内区は複弁で間弁を持たず外区に連珠文を施す。復原径14.4cm。117～119は扁行唐草文軒平瓦。上外区は無文、

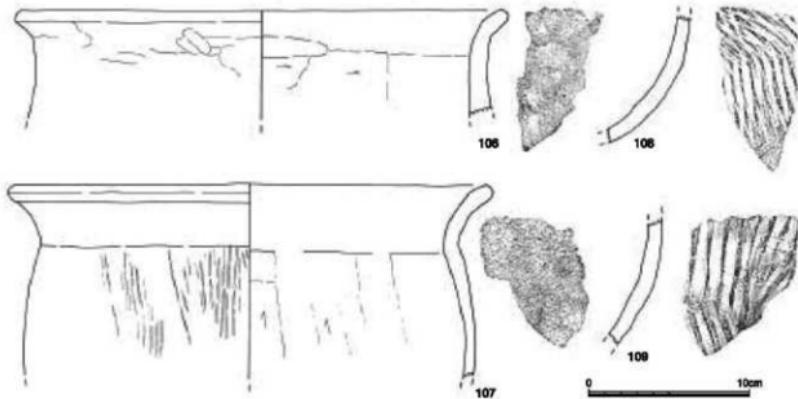


Fig.56 SD01洞出土遺物実測図⑦(1/3)

下外区に連珠文を施す。120・121は鬼瓦下縁部分とおもわれ120は正面・下面に竹管文を押す。122～139は丸瓦。全て側面内側中位までの分割ヘラ切り痕を有す。122・123は鴻臚館分類0類の繩目叩。124は3Aa小斜格子叩。125はヘラナデによる7類無文。126～130は3Ab中斜格子叩。131～134は右上がり複線大斜格子叩で逆字「今行」の文字を叩く。135～137はタテ平行線に同数の右上がり平行線格子叩。138・139はタテ平行線に半数の右上がりり、さらに半数の左上がり平行線格子叩。140～148は平瓦。140は0類の繩目叩。141はヘラナデによる7類の無文。142～144は3Aa小斜格子叩。

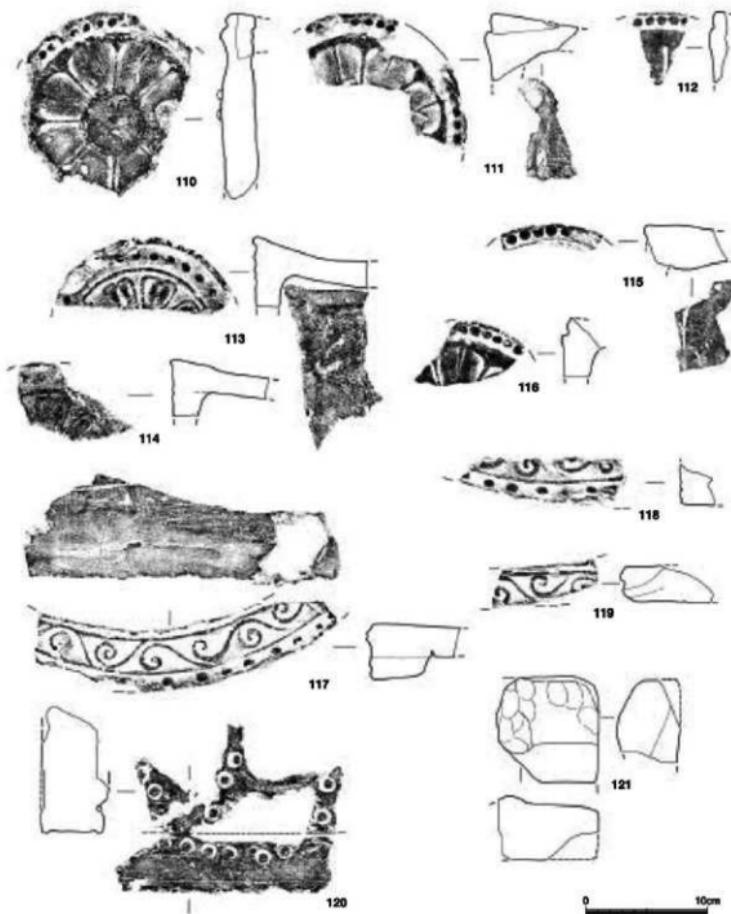


Fig.57 SD01洞出土遺物実測図②(1/4)

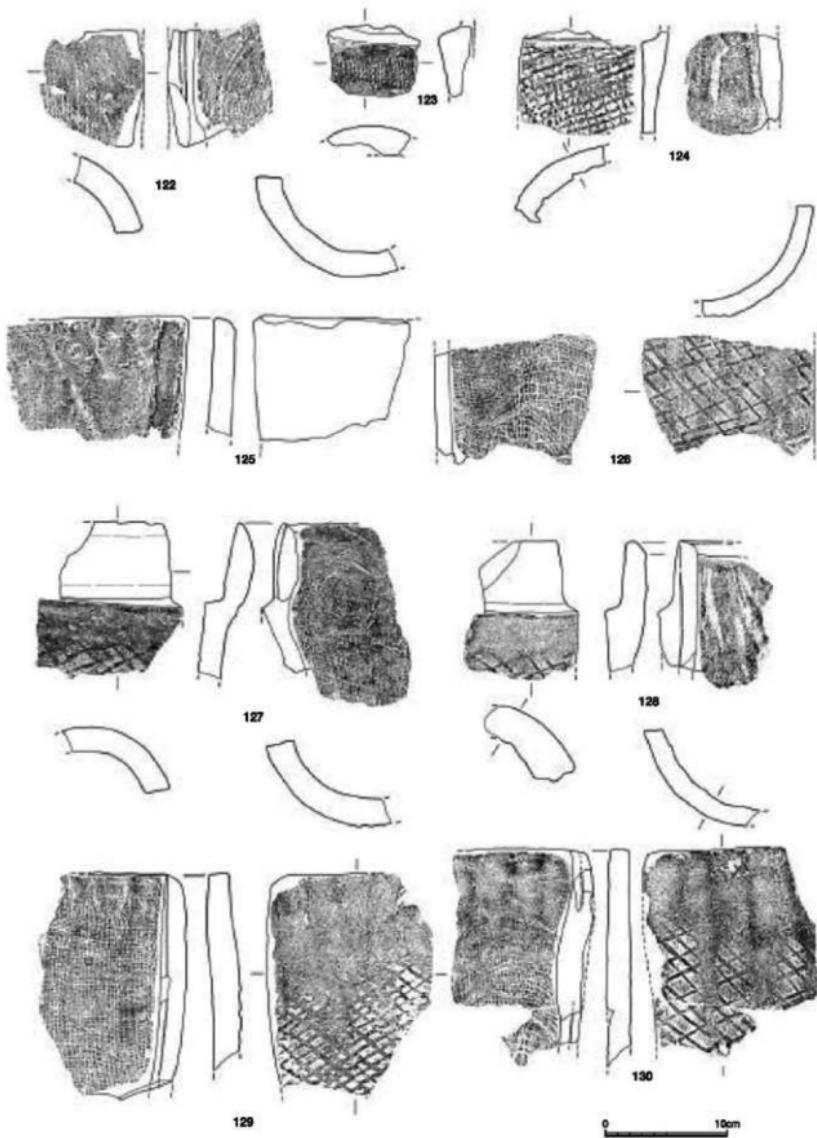


Fig.58 SD01洞出土遺物實測圖②(1/4)

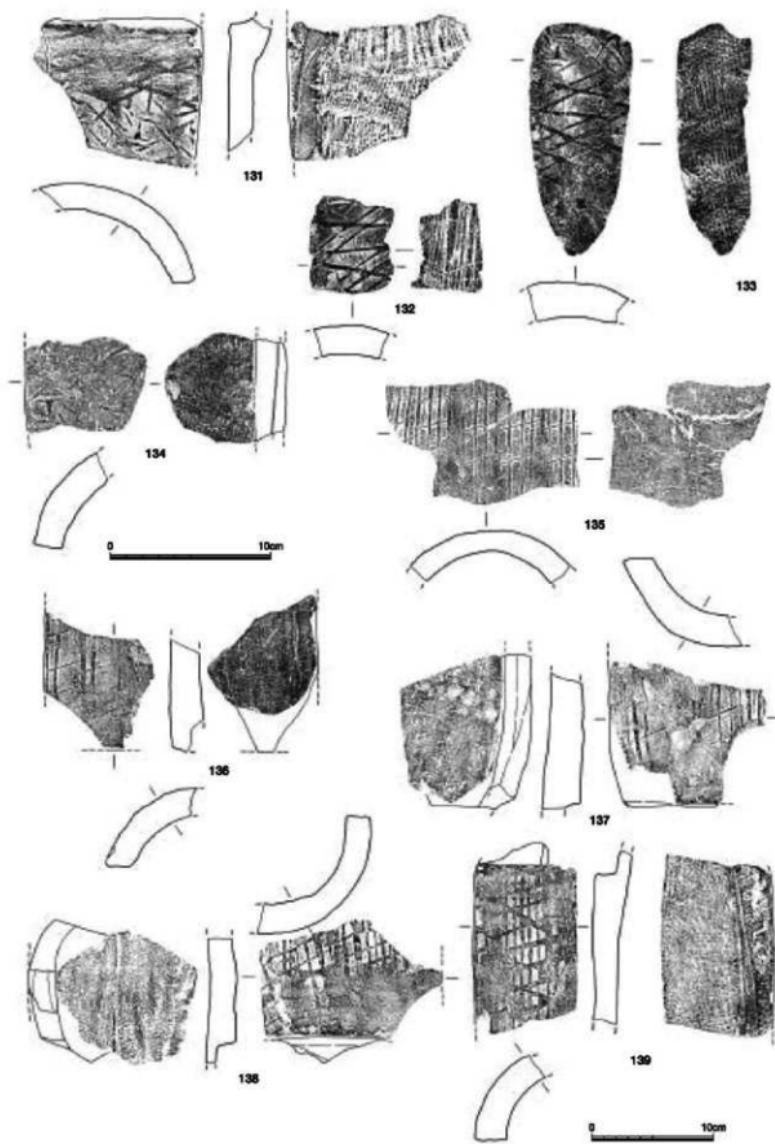


Fig.59 SD01洞出土遺物實測圖(1/3 · 135~139-1/4)

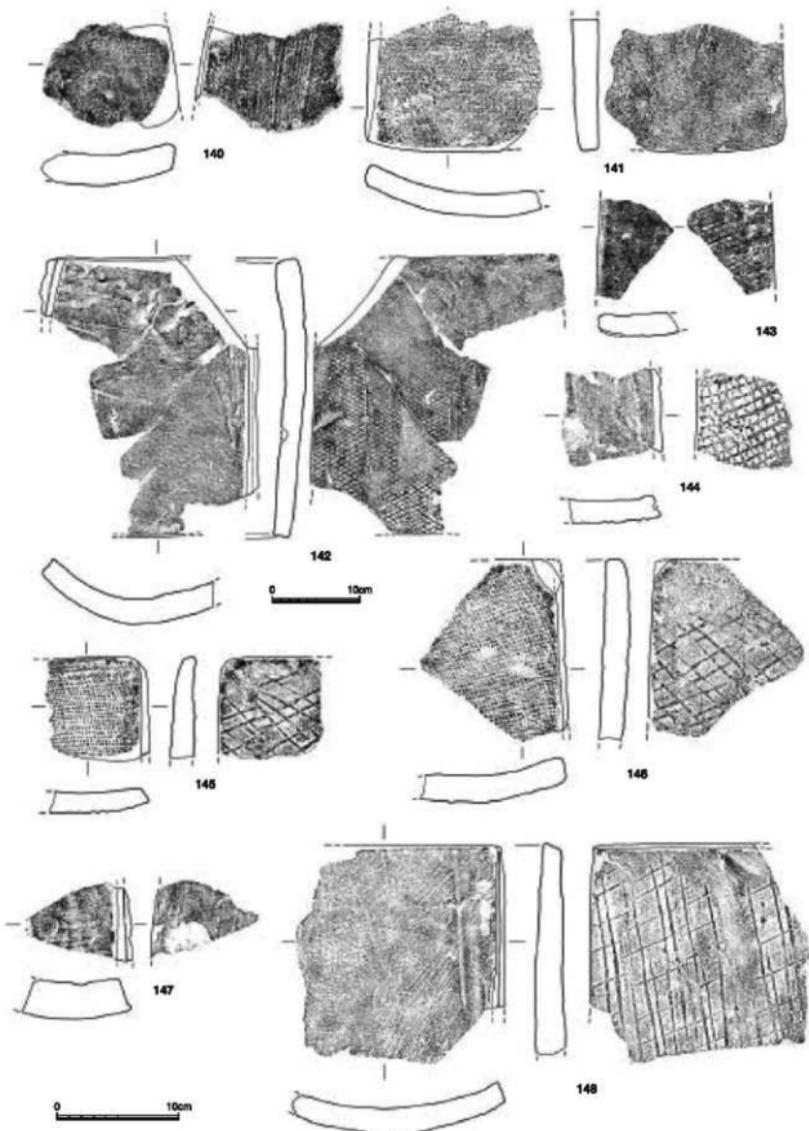


Fig.60 SD01出土遺物實測圖①(1/4 · 142—1/6)

142は幅27縦39.5cmを測る。145・146は3Ab中斜格子叩。147・148はタテ平行線に半数の右上がり格子叩。Fig.61は石製品・土製品。149～154滑石製石鍋。大半は方柱状の把手を持ち、内面は平滑に仕上げ外表面は横向きの鍋のハツリ痕で煤が厚く付着する。149は復原口径25.4cm。器厚1.5cmで深い器形。破片の再加工の中途品。150は大型品の破片の再加工中途品で器壁が厚く3.0cmを測る。151は小型品の小片で器厚0.8cmを測る。152は浅いやや小型の石鍋でSD03の430と接合。口径15.0器高7.8cmを測る。把手が角錐状に四方に延びる珍しい器形である。器厚1.8cm。153・154は底部の破片の再加工中途品で153は平底、154は緩いレンズ底を呈する。156は方柱状の把手部分の再加工品でスタンプ状製品。把手穿孔部から破損する。通常鉄輪を通ることが多い。底面を擦る。残存で $5.6 \times 4.3 \times 3.0$ cmを測る。157は再加工品で $7.0 \times 2.6 \times 1.8$ cmを測り角錐状に削る。158～161は砥石。158・160は細粒砂岩製の仕上げ砥。158は断面 $3.9 \times 1.6$ cmの4面を、160は $3.4 \times 2.1$ cmの3面を砥面とし、上面右に小溝を擦りここを打点として分割する。159は天草石製の仕上げ砥。 $3.3 \times 1.9$ cmの4面を砥面とし中央が大きく減る。161は姫浜石砂岩製の中砥で断面 $5.6 \times 4.0$ cmの6面を砥面とする。162は花崗岩製の塊状品で $9.0 \times 5.3$ cmの隅丸方形の断面で4面を磨く。上下面中央が浅く窪んでおり砥石の可能性もある。163・164は紡錘形の管状土錠。163は $3.7 \times 2.0$ cm孔径2.5mm8.2gで若干の使用痕がある。164は $4.9 \times 1.7$ cm孔径4.5mm10.8gを測

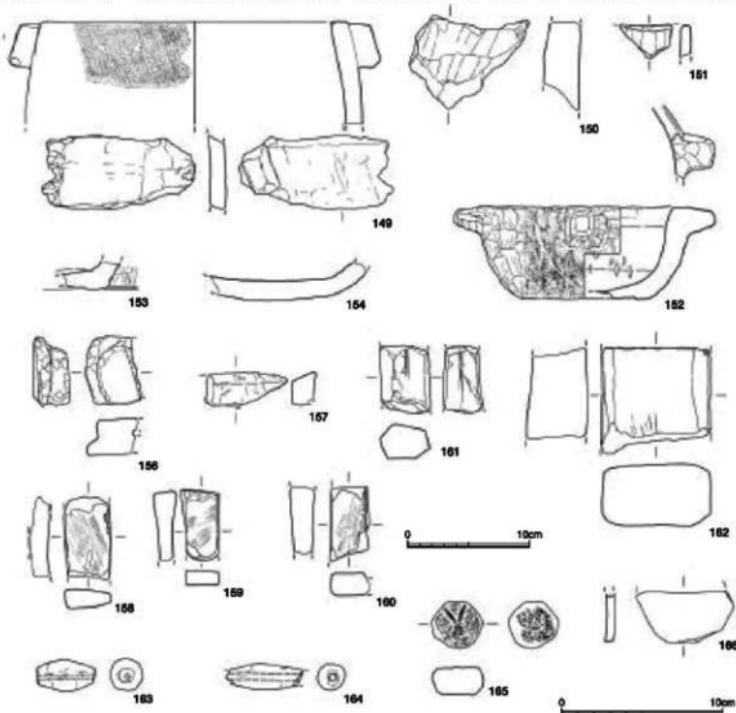


Fig.61 SD01出土遺物実測図②(1/4・163～166-1/3)

る。使用により紐掛かり部が欠ける。165は斜格子平瓦の破片の周囲を打ち欠き粗く研いで円形に整形した瓦玉。径 $3.2 \times 3.0$ 厚 $1.7$ cmを測る。166は越州窯系青磁碗破片を円形に打ち欠いて整形した瓦玉の半損品。径 $6.0$ 厚 $0.7$ cm。PL.33-167～174は鉄滓。170・172の製錬滓、171の塊形滓、168・173の流出滓、169の炉壁などコンテナ8箱分検出している。

以上8世紀前半～中頃・9世紀中頃～後半・11世紀末～12世紀初をピークに8世紀から12世紀前半の資料が混在する。

**SD02 (Fig.49 PL.19～21)** SD02は東西方向の区画溝最南端に位置しSD01を切って東流し、区画北東隅あたりでSD02と分流する。さらに直角に屈曲し北流して再度合流してSD40に達する。最大幅3.35最深部1.12mを測る。

**出土遺物 (Fig.62～65 PL.35)** 175・176は越州窯系青磁。175は輪高台のI類塊。高台径7.3cmを測る。176は円盤高台のII類碗。高台径8.3cm。177は褐釉陶器の灯臺とおもわれ、口径11.7cmを測る。器壁は厚く、胎土は灰色で黒色粒を少量含む。178は黒褐陶器の合子蓋。口径7.7cmで体部が屈曲する。口唇は浅い沈線がめぐる。179～183は白磁。179～182は碗。180はI類で小さな玉縁を有す。179・181・182はIV類。179で口径17.0cm。181・182は厚く低い高台の底部で181で径7.6cm 182で6.6cm。183は皿VI類。薄い器壁で黄灰色の釉を外底脇までかける。184～188は須恵器。184～186は高台坏底部。

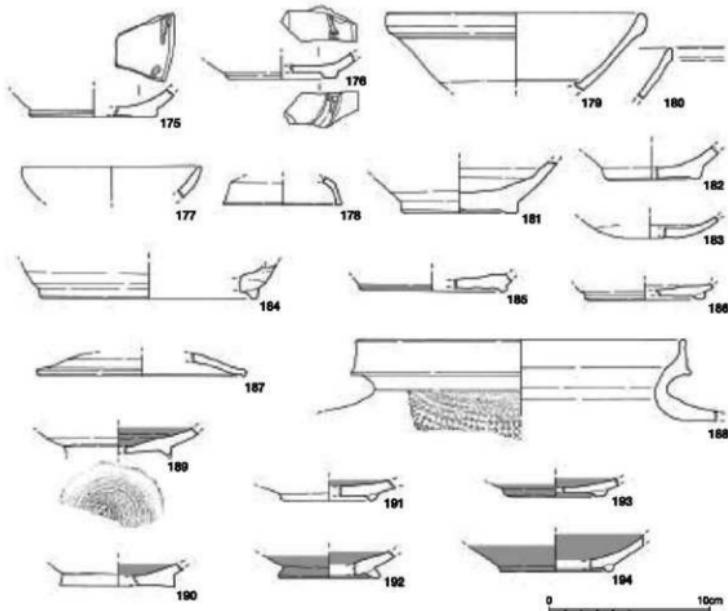


Fig.62 SD02溝出土遺物実測図①(1/3)

184は高台径14.2cmの大型品。185は9.6・186は径7.8cm。187は坏蓋で口径13.6cm。返しは明瞭な稜を成す。188は二重口縁の壺で口径23.4cm。外面に粗い格子目叩とカキ目を施す。189～191は黒色土器A類境。189・191は輪高台で189は径7.0・191は6.4cm。190は円盤高台で径6.5cmを測る。192は黒色土器B類境。円盤高台にちかく、上げ底になる。径6.6cm。193・194は瓦器境。193は幅広の輪高台で径7.0cm。194は聞く体部に広い高台で径7.5cmを測る。Fig.63は土師器。外底は全てヘラ切りである。195・199・200・202は高台壺。195は体部が下位で屈曲し口縁が立ち上がる。口径11.8器高5.1cmを測る。199は底径8.4cm。200は高台脇で体部が屈曲し底径6.5cm。202は細く高い高台で径8.0cm。196・197・201・203・204は碗。

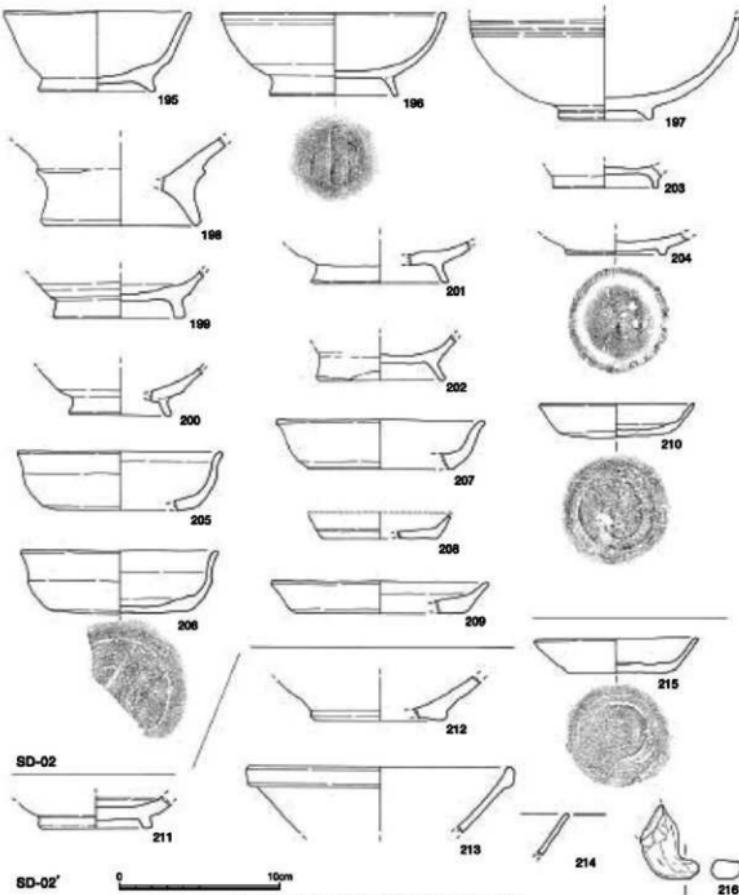


Fig.63 S D 02調出土遺物実測図②(1/3)

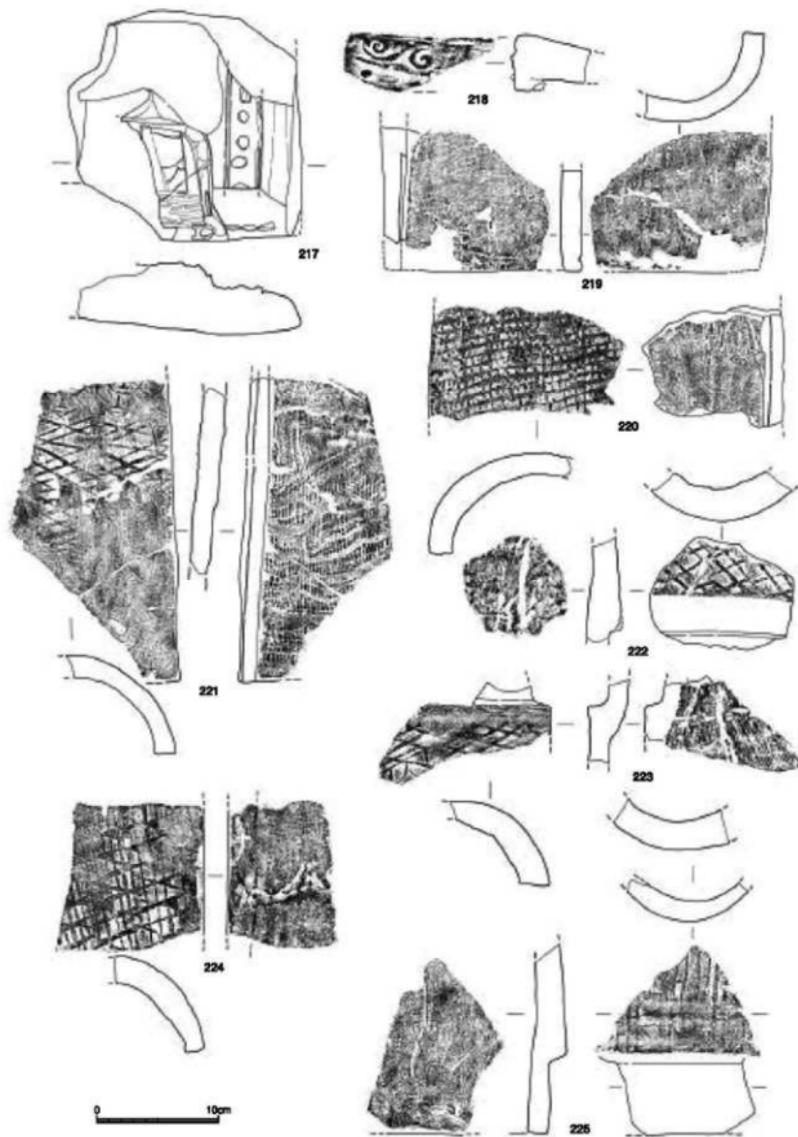
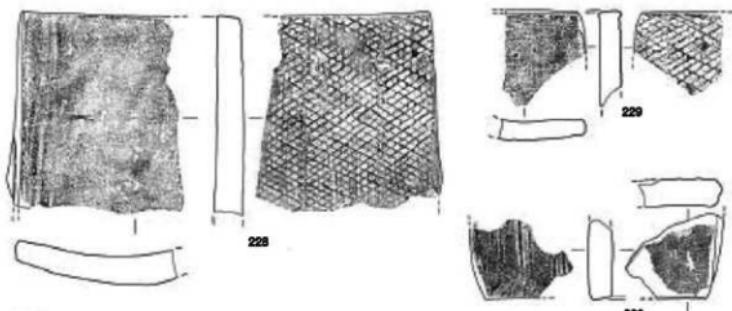
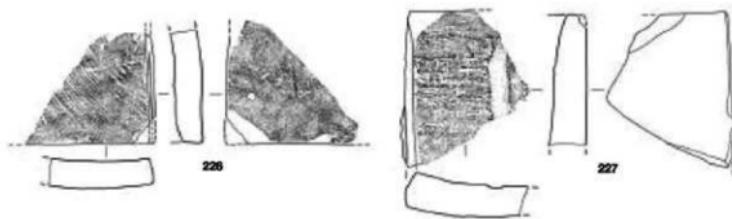
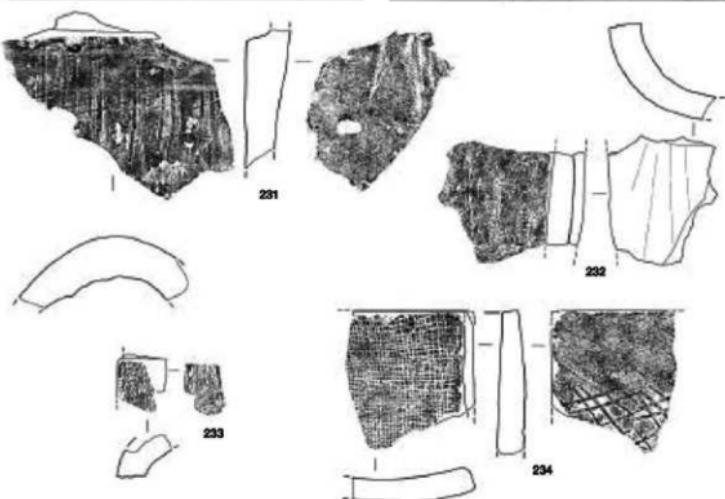


Fig.64 SD 02洞出土遺物測量圖③(1/4)



SD-02



SD-02'

0 10cm

Fig.65 S D02洞出土遺物實測圖(1/4)

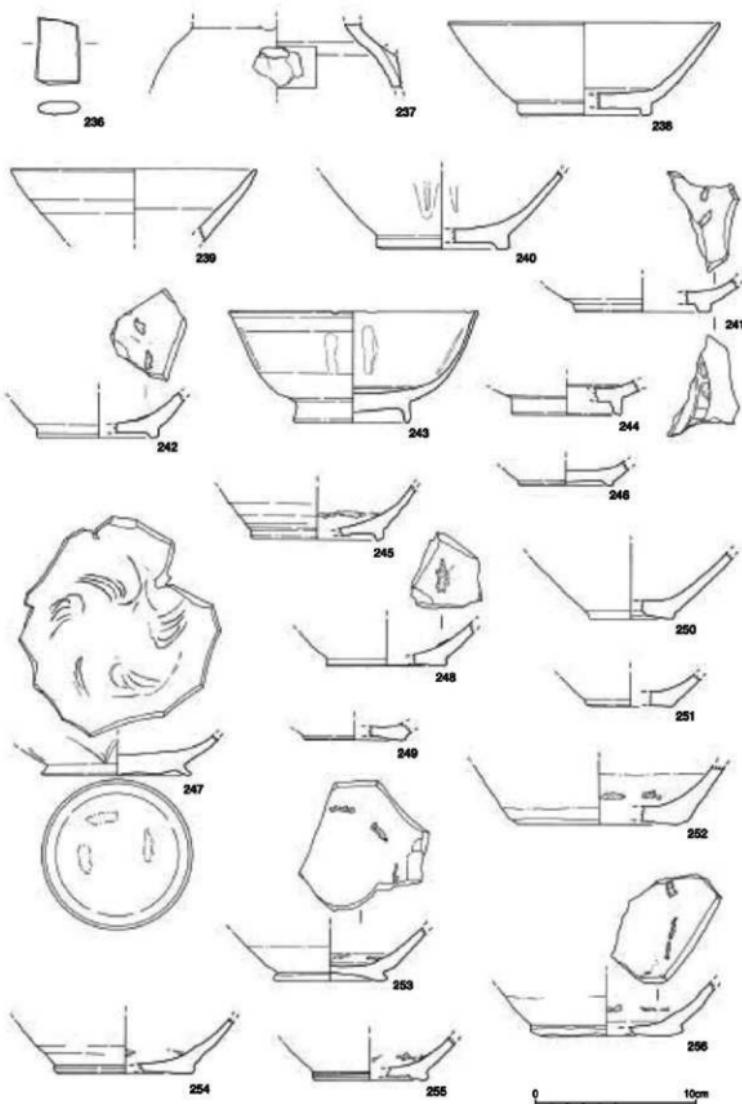


Fig.66 S D03洞出土遺物測量圖①(1/3)

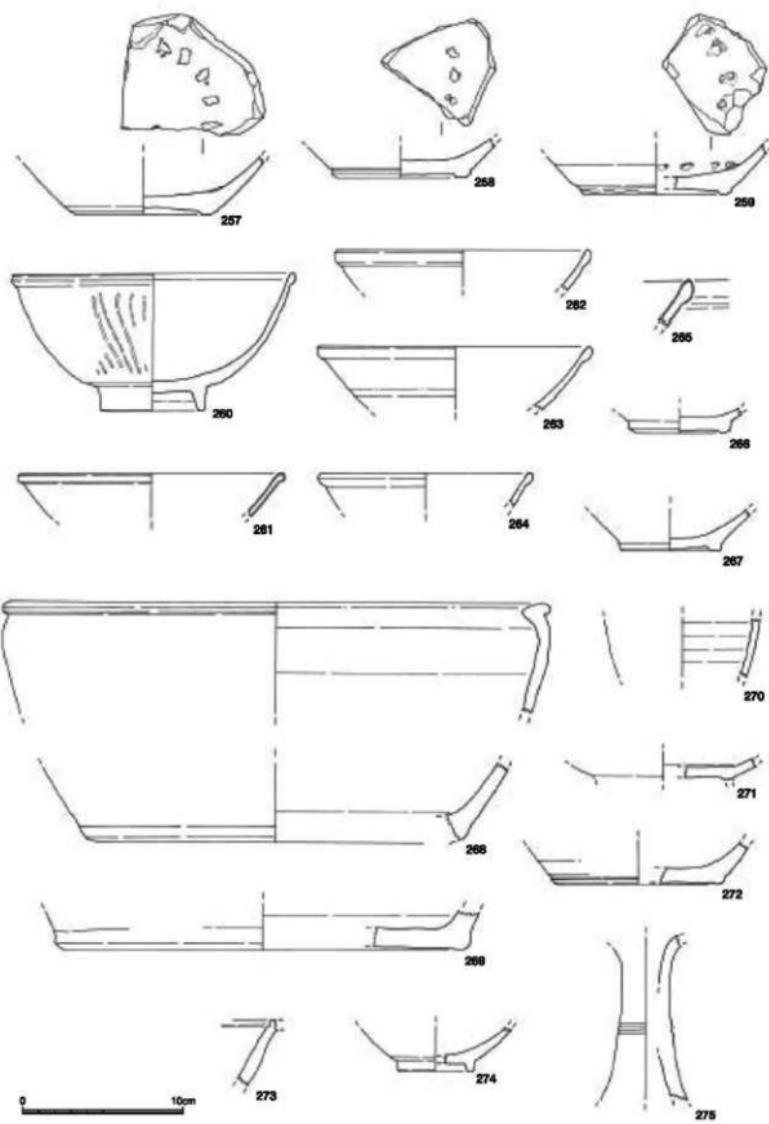


Fig.67 SD 03洞出土遺物測量圖②(1/3)

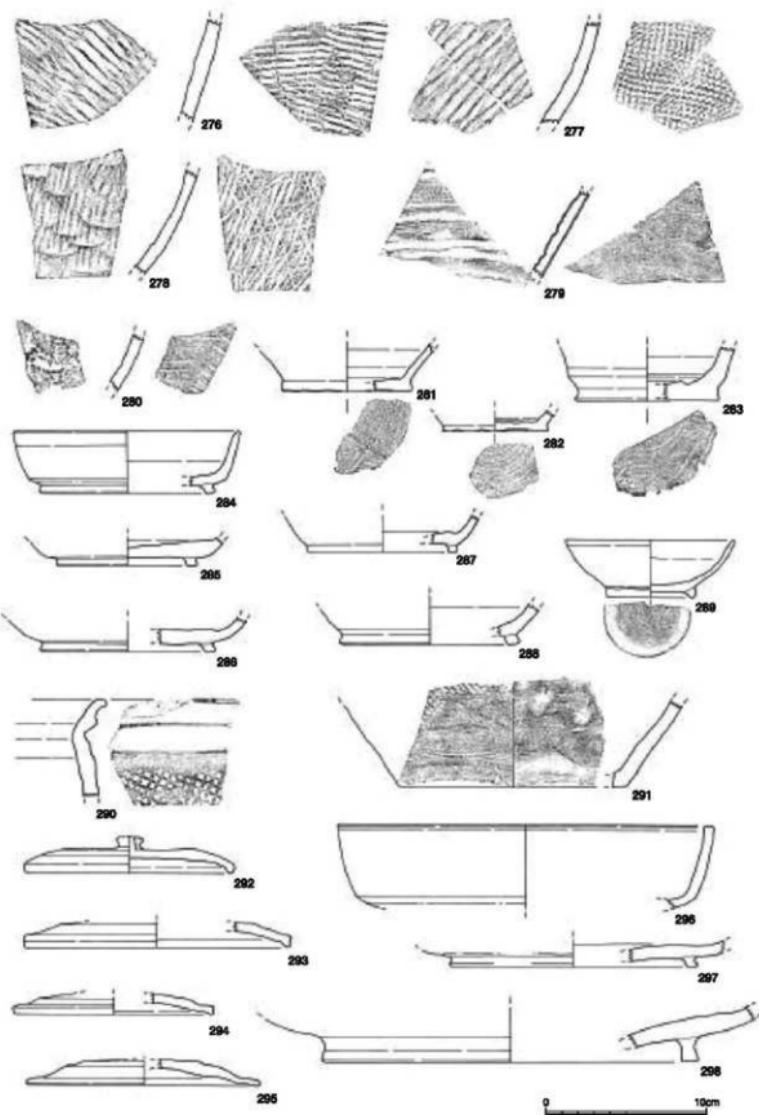


Fig.68 S D03洞出土遺物測量圖③(1/3)

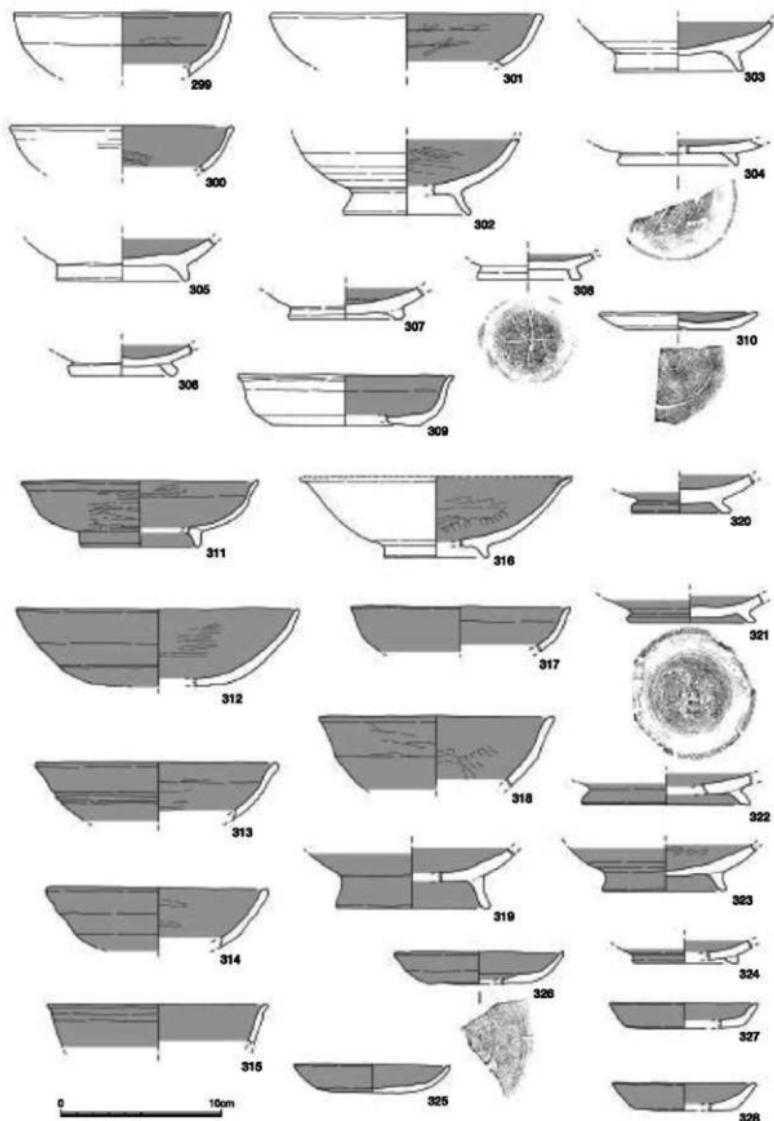


Fig.69 S D 03洞出土遺物測量圖④(1/3)

196は高く細い高台に低く湾曲する体部で口径14.2器高5.2cm。外底に板圧痕が残る。197は低い高台に球形の体部で瓦器塊に類似。残存で口径17.2器高6.7cm。201は細くやや高い高台で径8.6cm。203は底径6.7cm。204は低い高台で瓦器塊に類似し径6.5cm。205～207は壺。205は体部が立ち上がり口縁がゆるく外反する。口径13.0器高3.7cm。206は体部中位で屈曲し口縁が外反する。口径12.4器高4.0cm。207は体部下位で屈曲し口縁が外反する。口径13.2器高3.1cm。208～210は皿。208は口径9.0器高1.6cm。209は口径13.8器高2.0cm。210は丸底で口径9.8器高2.1cm。211～216はSD02'出土。211・212は越州窯系青磁I類碗。211は輪高台で底径7.0cm。212は平底で底径8.6cm。213・214は白磁。213はIV類碗で口径17.0cm。214はⅤ類碗か。215・216は土師器。215は皿で口径10.4器高2.2cm。216は鉢か盤の獸脚。Fig.64・65は瓦。鬼瓦以外全て側面内側中位までの分割ヘラ切り痕を有す。

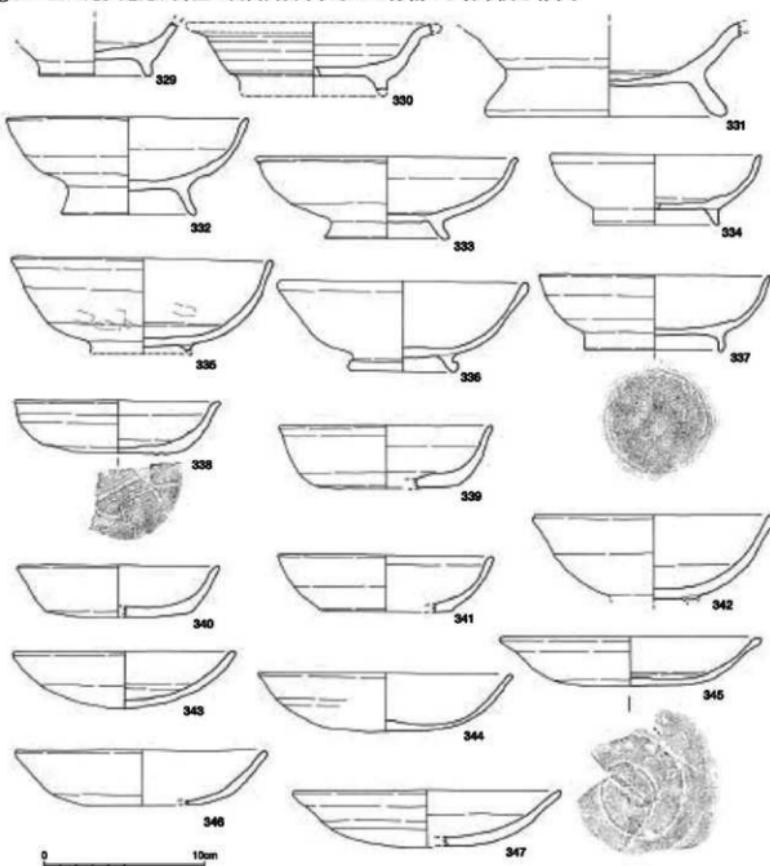


Fig.70 SD03洞出土遺物実測図⑤(1/3)

217は鬼瓦の右下縁部。外区に連珠文を施す。218は扁平唐草の軒平瓦。下外区に連珠文を施す。219～225丸瓦。219はナデ消しの7類。220は3Aa類の小斜格子叩。221・223は左上がり半数の斜格子叩「今行」銘瓦。222は3Abの中斜格子叩。224は5類の縦平行線に半数の斜格子叩。225は縦平行線に半数の右上がり平行線格子叩。226～230は平瓦。226・227は7類ナデ消し。226は凹面に木挽き痕を残す。228・229は3Aa類の小斜格子叩。230は縦平行線に半数の右上がり平行線格子叩。231～234はSD02'出土。231は230と同類の丸瓦。232は7類ナデ消しの丸瓦。233は0類繩目叩の丸瓦。234は右上がり平行線に放射線の不整斜格子叩。PL.35-235は袋状鉄斧の手斧。鉄滓はコンテナ1箱分出土している。

以上8世紀から12世紀前半までが混在するが、11世紀末～12世紀初をピークとし、SD01より後出

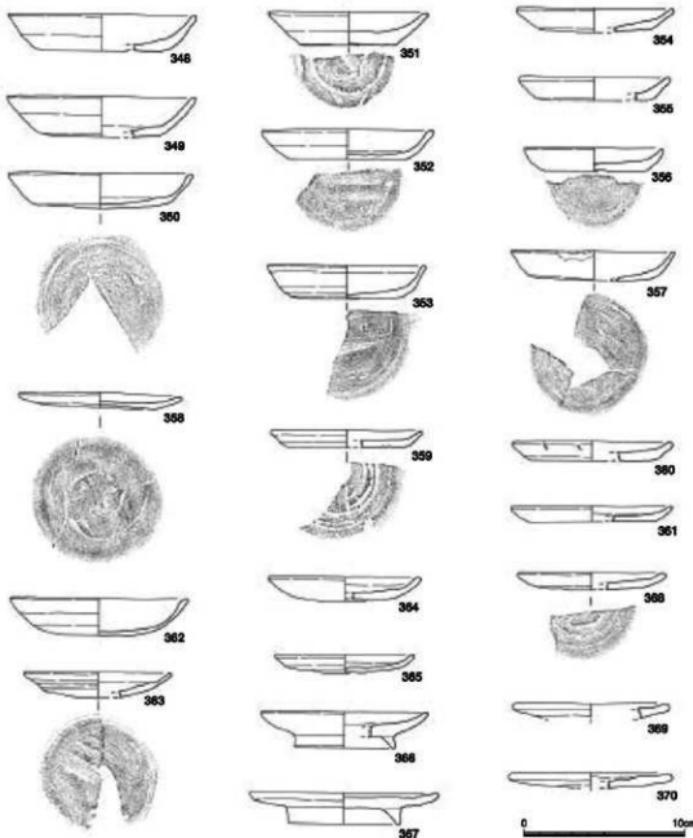


Fig.71 SD03洞出土遺物測量図②(1/3)

する様相が見て取れる。

**SD03** (Fig.49 PL.19~21) SD03は方形区画西を区切り、SD09・10を切って東に直角に屈曲して区画最外側を東流し、中位でSD01がこれに重なる。このSD01の北側に並行して分流しさらに北にSD08が分岐する。東端は、SD01が北に分岐するSD07に切られる。最大幅4.6最深部0.85mを測る。

**出土遺物** (Fig.66~79 PL.36~39) Fig.66~236は長沙窯系褐釉水注の取手小片で幅2.7厚0.8cmの板状取手の外面に平行沈線3条施す。237~259は越州窯系青磁。237は小型の水注の頸肩部取手部片で、頸部で径10.6cmを測る。238~242・245・246・249~252・257~259はI類碗。238・239は直口口縁で、238で口径17.0・器高5.9cm。239は口径15.5cm。238・240・241・242は輪高台、底径は240で8.4cm。体部にタテヘラ押し線を有す。241は8.6・242は7.6cm。245・246は小さな輪高台で245は8.4・246は6.4cm。249・251・252は平底。249はやや上げ底で6.5・251は5.4・252は底際を斜めに削りやや上げ底で11.4cmを測る。250は蛇目高台で5.2cm。257は基筒底に近く9.2cm。258・259は低小さな輪高台で平底に近い。258で8.6・259で9.4cm。243・244・247はⅢ類塊。243は口径15.6器高7.0cmで口縁輪花の下にタテヘラ押し線を刻む。見込みに圓線1条。244も同様で径7.9cm。247はバチ高台で径9.3cm。見込みに花文をヘラ描きし、体部外面に線刻で8葉の連弁を刻む。248・253~256はⅡ類塊。248・255は蛇目高台で248で径7.6cm・255で7.4cm。253・254・256は円盤高台。

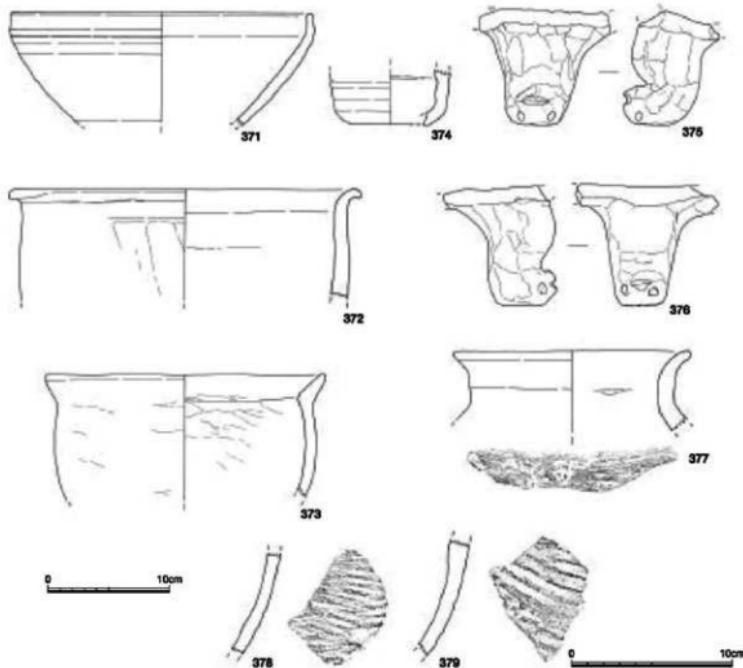


Fig.72 SD03溝出土遺物実測図(1/3・371~373-1/4)

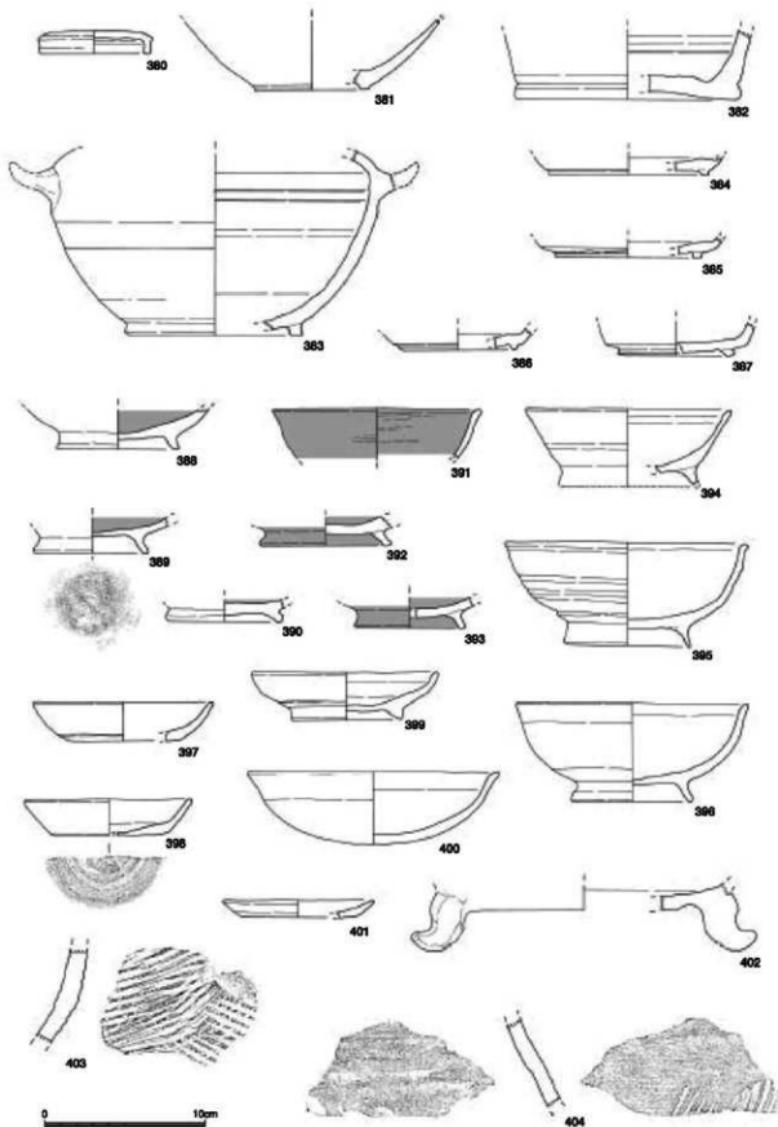


Fig.73 SD 03洞出土遺物實測圖②(1/3)

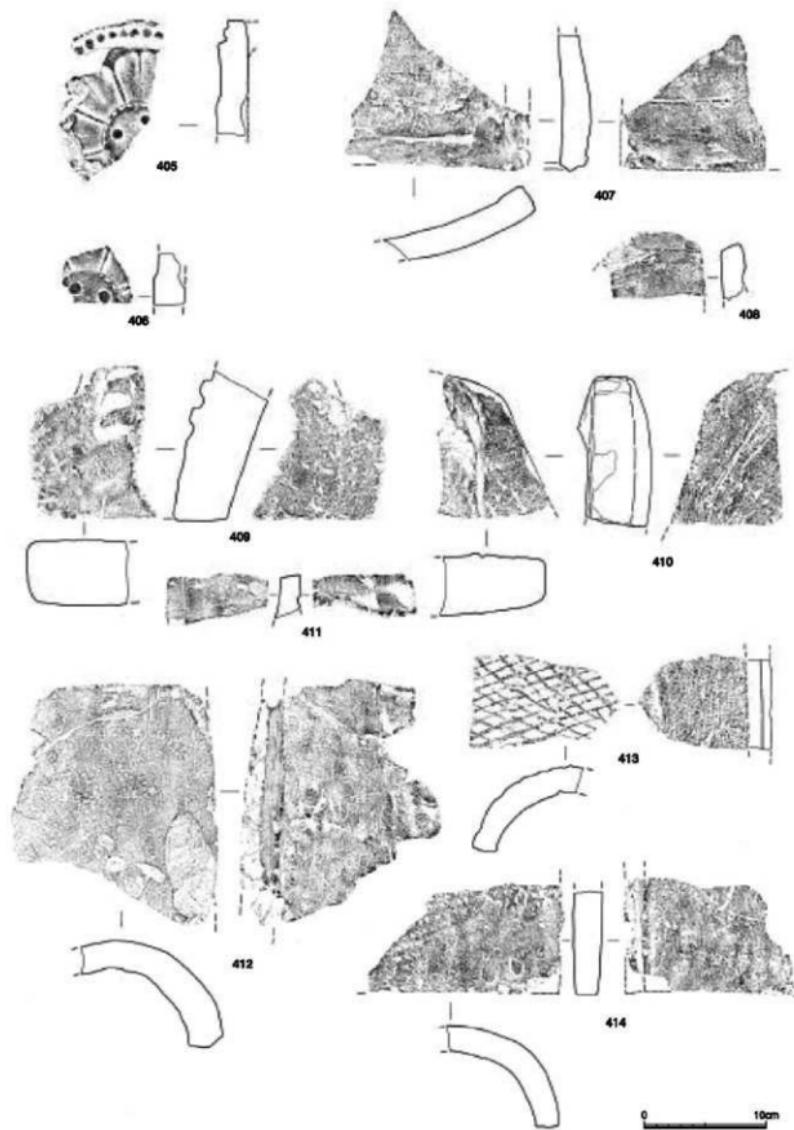


Fig.74 SD03洞出土遺物實測圖②(1/4)

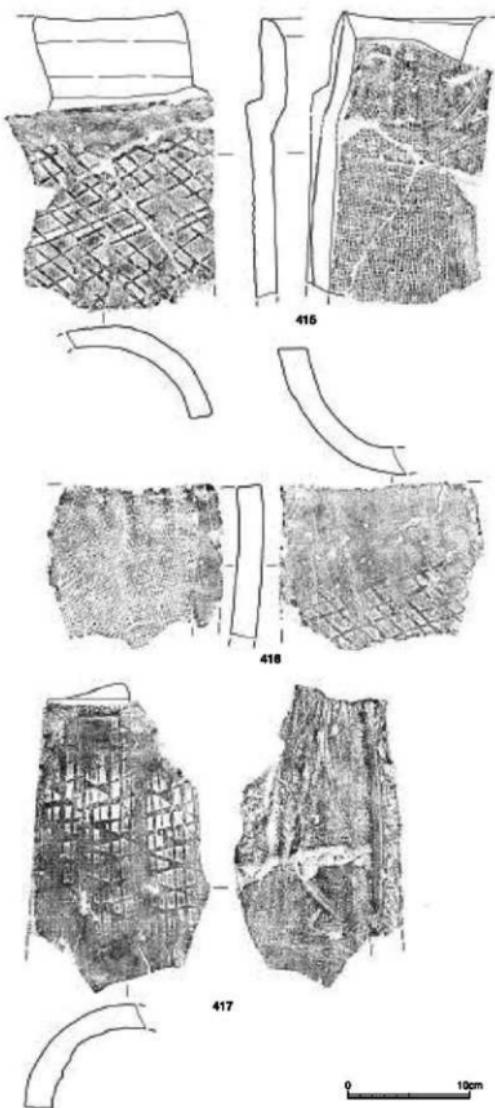


Fig.75 SD03溝出土遺物実測図⑩(1/4)

253で底径7.2・254は8.8・256は9.6cmを測る。Fig.67-260~267は白磁。261~264は玉縁I類塊。261は口径16.6・262は16.0・263は17.0cm。264は後日263と接合。同一個体であった。260はV類塊。口径17.6器高8.5cmを測り、小さな玉縁口縁下にタテヘラ描花弁文を施す。265はIV類塊。267はIX・X類にく似混入の可能性がある。底径6.3cm。266はII類皿で底径6.4cm。268は黄灰色釉陶器鉢。口径34.0cm。器高15cm前後。269は磁灶窯黄釉盤。底径25.8cm。270は黄褐釉瓶胴部で内面は露胎。長沙窯の可能性がある。272は露胎の壺底部で径10.8cm。越州窯系青磁の可能性がある。271は灰釉皿。見込みは蛇の目に搔き取る。273~275は綠釉。273は鉢で胎土は灰白色。274は境で高台径4.8cm。胎土は灰白色。275は高坏脚。胎土は灰色で須恵質。Fig.68-276~283は新羅無釉陶器と思われる。276~280は壺胴部小片。276は平行叩きに平行當具痕・277は格子叩に平行當具痕・278は不定方向の細い平行叩に鱗状の平行當具痕・279は格子叩に平行當具痕のナデ消し・280は不定方向の細い平行叩に車輪状當具痕を施す。281~283は糸切り離しの平底瓶。281は底径8.2・282は6.6・283は9.0cmを測る。289は瓦器小塊に類似し口径10.7器高3.6cm。陶質で胎土は灰白。外底は糸切り。神出・魚住産か。284~298は須恵器。284~288は高台坏。

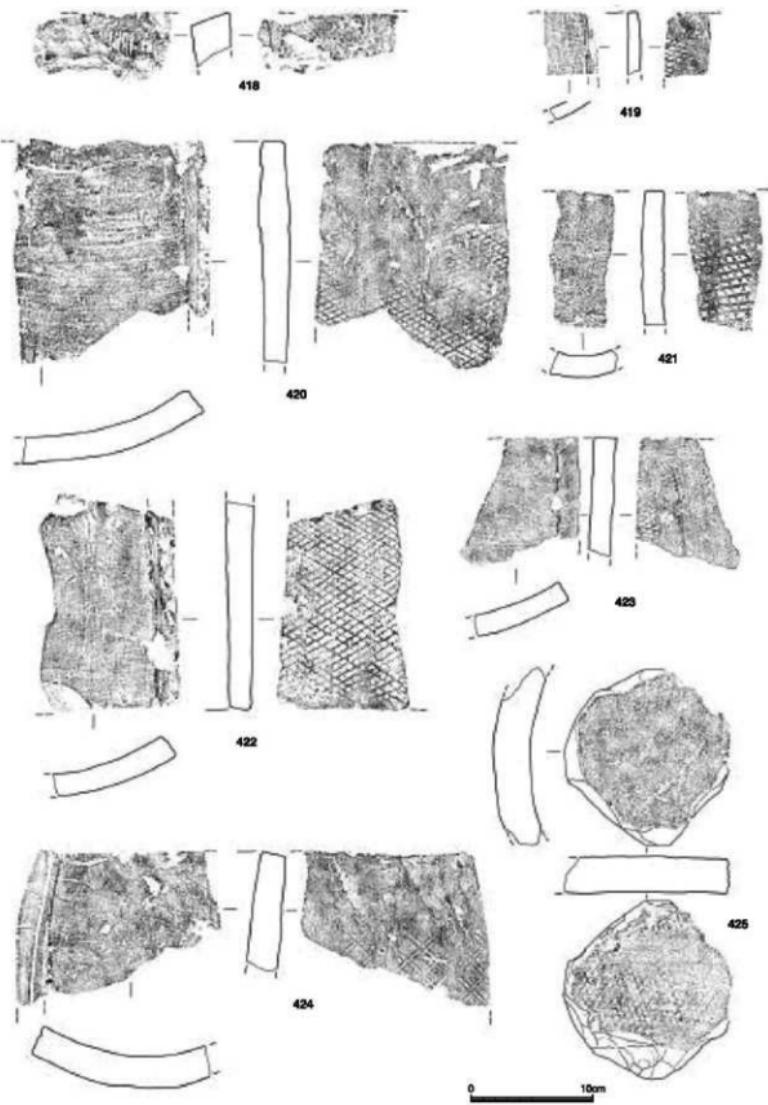


Fig.76 SD03洞出土遺物測量圖①(1/4)

284は底径8.4・285は8.8・286は11.0・287・288は高台が端に付き287は9.4・288は11.2cmを測る。290は斜格子叩きの壺。291は同様の平底瓶で底径14.3cm。292～295は壺蓋。292・293は返りは丸く292で径13.2・293で16.8cm。294は返りは不鮮明で径12.6・295は返りは無く径14.6cmを測る。296は口径23.6器高5cm強の浅い鉢で混入の陶質土器。297・298は高台壺蓋。297は底径15.6cm。298は23.6cmを測る。Fig.69は黒色土器・瓦器。外底は全てヘラ切り。299～306・308～310は黒色土器A類。299～306・308は。299は口径13.4・300は13.8・301は浅く16.8・302・303は高い高台でともに底径8.0・304は底径7.4cmで外底に板圧痕を残す。305は底径8.2cm。306・308は低小高台で306は径6.7・308は6.5cmで外

底に「\*」状のヘラ記号を記す。

309は浅い壺で口径13.2器高3.1cm。  
310は皿で口径9.8器高1.0cm。外底に板圧痕を残す。311～323は黒色土器B類塊。311は外反口縁に低い体部、広い高台で口径14.6器高4.0cm。312は口径17.4cm・313は15.0・314は13.8・315は深い体部で口径13.6・316は聞く体部に外反口縁、やや狭まる高台で口径11.64器高4.9cm。317は口径13.5・318は屈曲する深い体部で口径14.4cm。319は高い高台で底径9.6cm。320は低小高台で底径6.1・321・322・323は低い高台で321は径7.8cm。外底に板圧痕。322は径10.4・323は7.6cm。307・324～328は瓦器。307・324は塊。307は底径7.2・324は6.5cmを測る。325～328は皿。325・326は丸底気味の平底。325で口径9.6器高1.7・326で口径10.4器高2.0cm。327・328は平底で327で口径9.2器高1.6・328で口径8.8器高1.7cm。Fig.70～72は土師器。塊・壺・皿の外底は全てヘラ切り。329～331は高台壺。329は深い体部で底径6.9cm。330は外反口縁に低い体部と広い高台で復原口径15.6器高4.5cm。331は大壺で高い高台を持ち底径14.8cm。332～337・342は塊。何れも低い体部で332

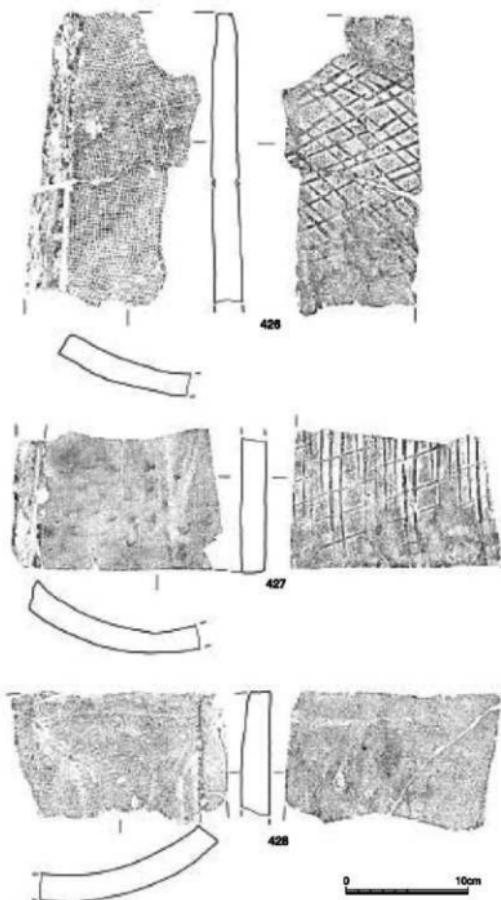


Fig.77 S D03洞出土遺物実測図②(1/4)

は口径14.8器高5.9・333は $16.0 \times 5.0$ ・334は $13.9 \times 4.3$ ・335は $16.0 \times 5.8$ ・336は $15.4 \times 5.5$ ・337は $14.2 \times 4.6$ cmを測り、外底に板压痕が残る。342は口径15.0cm。338～341は壊。338は口径12.6器高3.2cmで外底に板压痕が残る。339は $13.0 \times 3.8$ ・340は $12.4 \times 3.2$ ・341は $13.2 \times 3.4$ cm。343～347は丸底壊。343は底部の丸みが強く口径13.6器高3.5cm・344は $15.5 \times 3.6$ ・345～347は丸みが緩く345は $16.0 \times 3.0$ ・346は $15.4 \times 3.3$ ・347は $16.4 \times 3.4$ cmを測る。Fig.71-348～350は壊。348は口径12.4器高2.4cm。349は $12.3 \times 2.6$ ・350は $12.0 \times 2.3$ cmを測る。351～370は壊。351は器壁が厚く体部が開き口径10.4器高2.2cm・352は $11.2 \times 1.9$ cm板压痕が残る。353は $10.2 \times 2.2$ で板压痕。354は低く体部が開き $11.2 \times 1.9$ ・355は器壁が厚く $9.8 \times 1.5$ ・356は $9.0 \times 1.5$ ・357は灯明皿で $10.5 \times 1.9$ ・板压痕。358は薄く開き $10.5 \times 1.1$ ・板压痕。359は $9.8 \times 1.1$ ・360は器壁が厚く $10.4 \times 1.2$ ・361は $10.5 \times 1.0$ ・362は深い丸底で $11.6 \times 2.4$ ・363は浅い丸底で $9.6 \times 1.7$ で板压痕。364は $10.0 \times 1.5$ ・365は $9.0 \times 1.2$ ・366は高台付で $10.9 \times 2.3$ ・367～370は盃托で367は高台付 $12.2 \times 2.0$ ・368は $9.7 \times 1.0$ ・369は $10.2 \times 1.0$ ・370は器壁が厚く $12.6 \times 1.0$ cmを測る。Fig.72-371は鉄鉢形で口径26.4cm。外面口縁下は回転ヘラ削り。372・373は壊。口径30.3・24.4cmを測る。

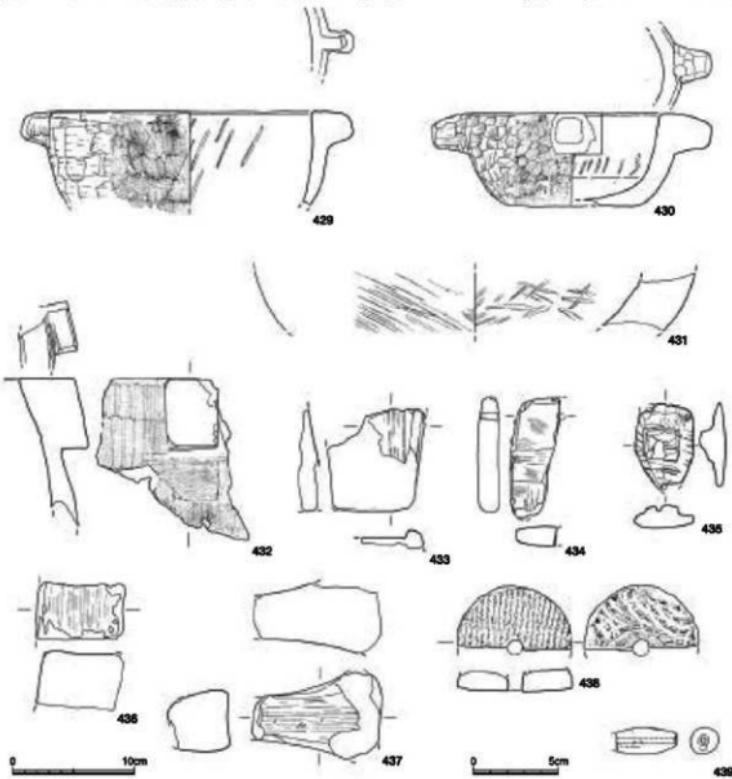


Fig.78 S D03溝出土遺物実測図13(1/4・249・250-1/3)

374は小型瓶で径5.2cm。375・376は大型の鉢・盤の獸脚で獸面の造作が上下逆となっている。  
底面までの高さ6.5cm。377～379は玄界灘式の壺で377は口径15.5cm。内面に平行弧の當具痕が残る。

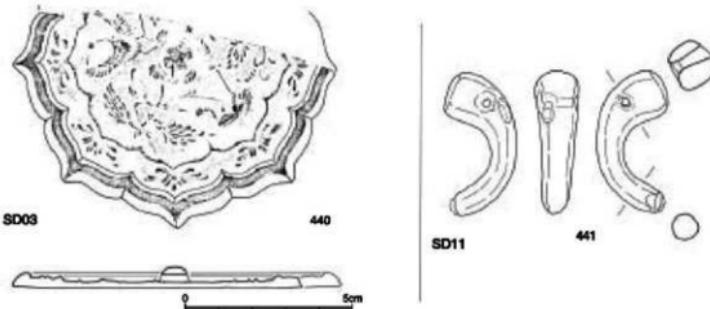


Fig.79 S D 03・11満出土八種鏡・銅製勾玉実測図(2/3)

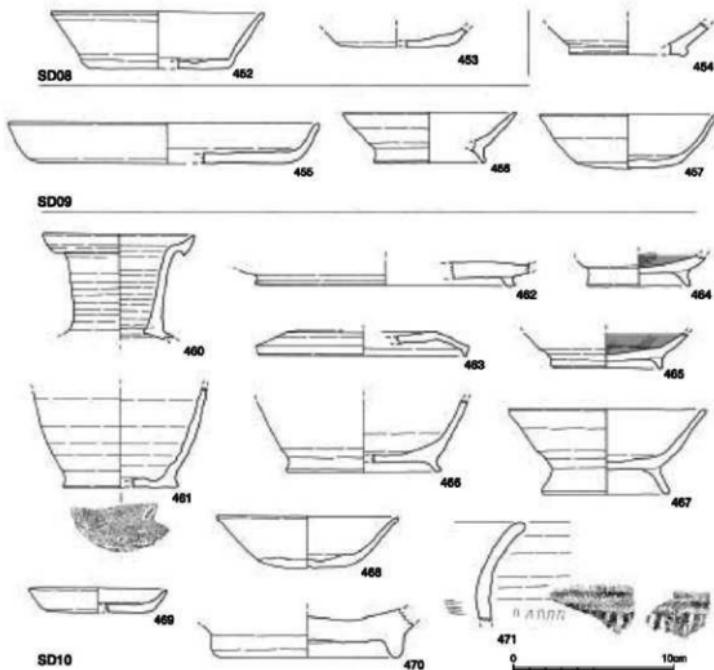


Fig.80 S D 08・09・10満出土遺物実測図(1/3)

古墳時代の混入品。378・379は外面粗い平行叩きの胴部片。Fig.73は最上面の洪水粗砂層出土。380・381は越州窯系青磁。380はⅢ類合子蓋。黄褐色で口径7.0器高1.4cm。381はⅠ類輪高台壺。底径7.0cm。382は陶器瓶の底部で径14.0cm。内外露胎で赤橙色。外底は糸切り後ナデ消し。383～387は須恵器。383は把手付壺（鎮）。胴径20.0cm。384～387は高台壺。384は底径9.8・385は9.0・386は7.3・387は7.2cmを測る。388～390は黒色土器A類塊。388は底径7.5・389は7.0cmで外底にヘラ記号を記す。390は低小高台で径7.2cmを測る。391～393は黒色土器B類塊。391は小塊で口径12.8cm。392は底径8.0で板压痕を残す。393は6.8cmを測る。394～404は土師器。394は高台壺で口径12.6器高4.8cm。395・396は壺。低い体部やや広く高い高台で395で口径15.0器高6.5・396で14.2×6.0cmを測る。397・398は壺。397で11.0×2.4・398で10.2×2.2cm。399は小塊で11.5×3.0cm。400は丸底壺で15.4×4.5cm。401は皿で9.2×1.0cm。402は獸脚付の鉢・盤で底径21.2cm。403・404は玄界灘式の壺片で外面に粗い平行叩きを施す。Fig.74～77は瓦。鬼瓦以外全て側面内側中位までの分割ヘラ切り痕を有す。405・406は単弁8葉で中房に1+4の蓮子を置く軒丸瓦。外区は一段低く連珠文を施す。407は扁行唐草文軒平瓦。上外区は素文。408～411は鬼瓦片。408は上縁部。409は左下縁で陽起鋸歯文を施す。410は右上縁か。

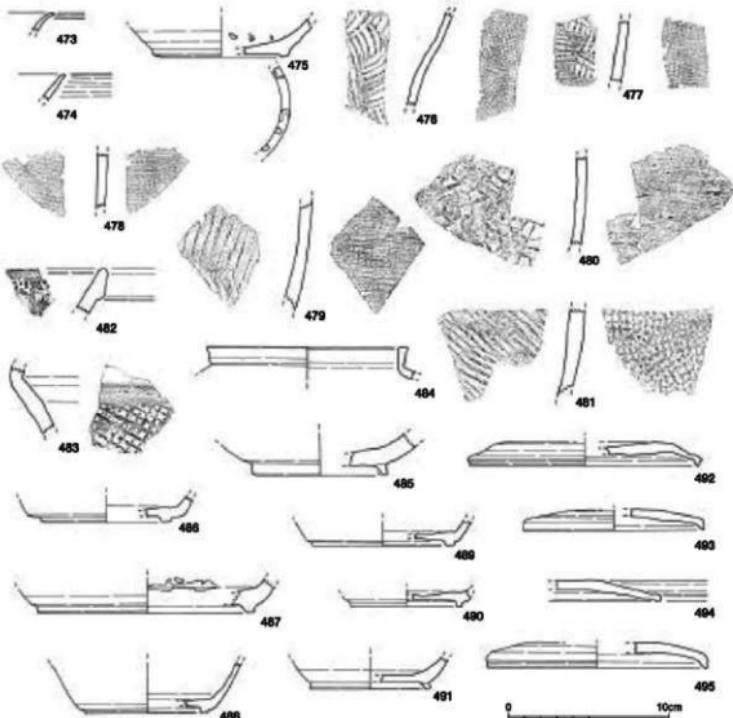


Fig.81 SD11洞出土遺物実測図①(1/3)

411は409上位の小片。412～417は丸瓦。412は7類のナデ消し。413は3Ab類の中斜格子叩。414は3Aa類の小斜格子叩。415・416は3Ab類の中斜格子叩。417は5類の縦平行線に半数の斜格子叩。Fig.76・77は平瓦。418は0類繩目叩。厚い作りで厚3.3cmを測る。419～423は3Aa類の小斜格子叩。419は薄く厚1.0cm。424は本遺跡では珍しい3Ba類の複線斜格子叩。425は3Aa類の破片を円形に打ち欠き整形した瓦玉で12.0×14.9×3.3cmを測る。Fig.77-426は3Ab類の中斜格子叩。427は縦平行線に半数の右上がり平行線格子叩。428は7類のナデ消し。Fig.78は石製品・土製品。429～435は滑石製石鍋。全てI類で方柱状の把手を持つ。429は2.6×3.0×1.7cmの板状の把手で口径23.5cm。430は浅いやや小型の石鍋でSD01の152と同個体。口径15.0器高7.8cmを測る。把手が3.4×2.8×3.5cmの角錐状に四方に延びる。431は径36.6cmの大型品の体下部で器壁が極めて厚く4.2cmを測る。432も大型品の把手片で深い体部で内湾する。433～435は破片の再加工品。433は硯の右下小片で海部分を欠く。434は温石の半欠品で、上部の径6mmの穿孔部から破損する。残存で10.1×3.6×1.8cm。435はスタンプ状

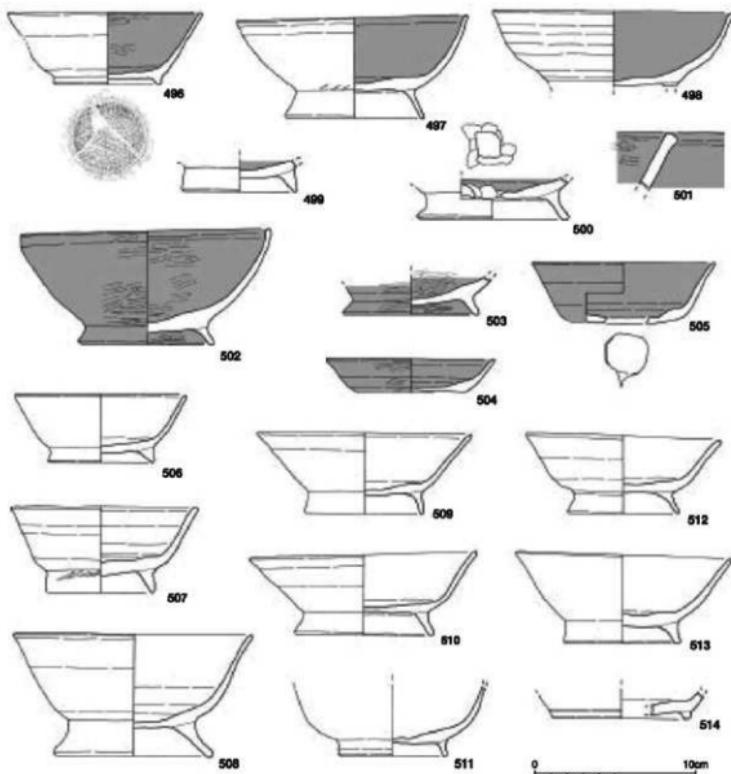


Fig.82 SD11洞出土物実測図②(1/3)

製品で中央に $2.6 \times 2.8$ cmの把手を削りだし、先端・基部隅に径3~4mm程の孔を穿つ。下面は摩滅し光沢を持つ。436・437は砥石。ともに砂岩の中～荒砥で436は4分割され砥面は2面しか残らない。437は断面 $7.5 \times 7.5$ cm程の方形で4面を使用。中央が大きく減る。438は須恵器壺破片を打裂後周縁を擦って円形に整形した、径7.5厚1.4cmの紡錘車。439は紡錘形の管状土錐。3.7×2.0cm孔径3.0mm。Fig.79-440はSD03東側中位壁面に密着して検出された（巻頭4-1・PL.22）草花亀鶴文八稜鏡の半欠品で、

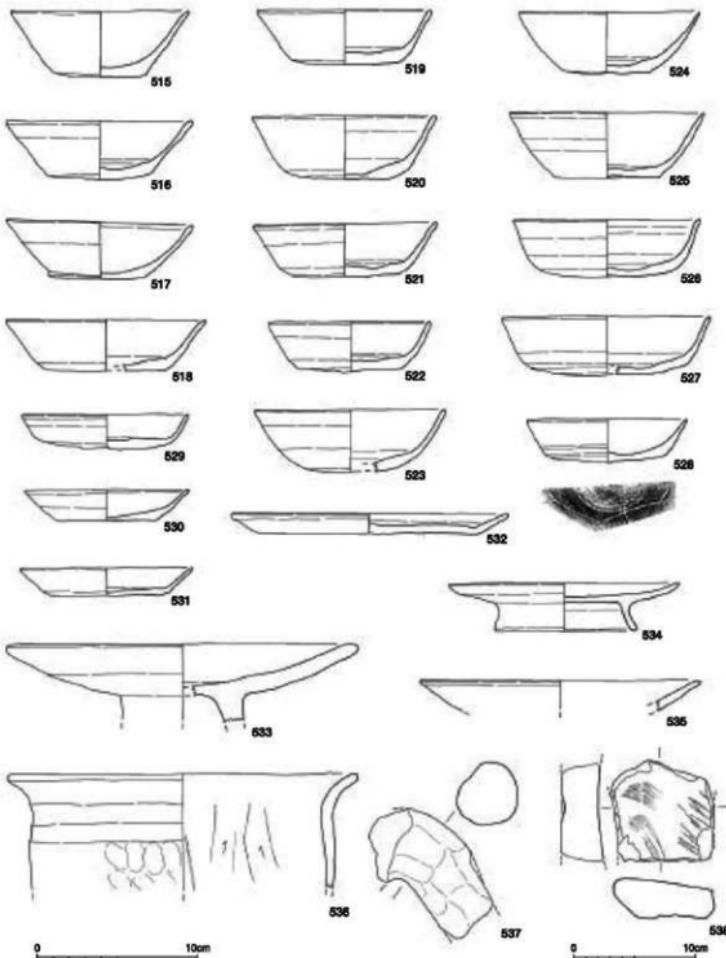


Fig.83 SD11溝出土遺物実測図③(1/3・538-1/4)

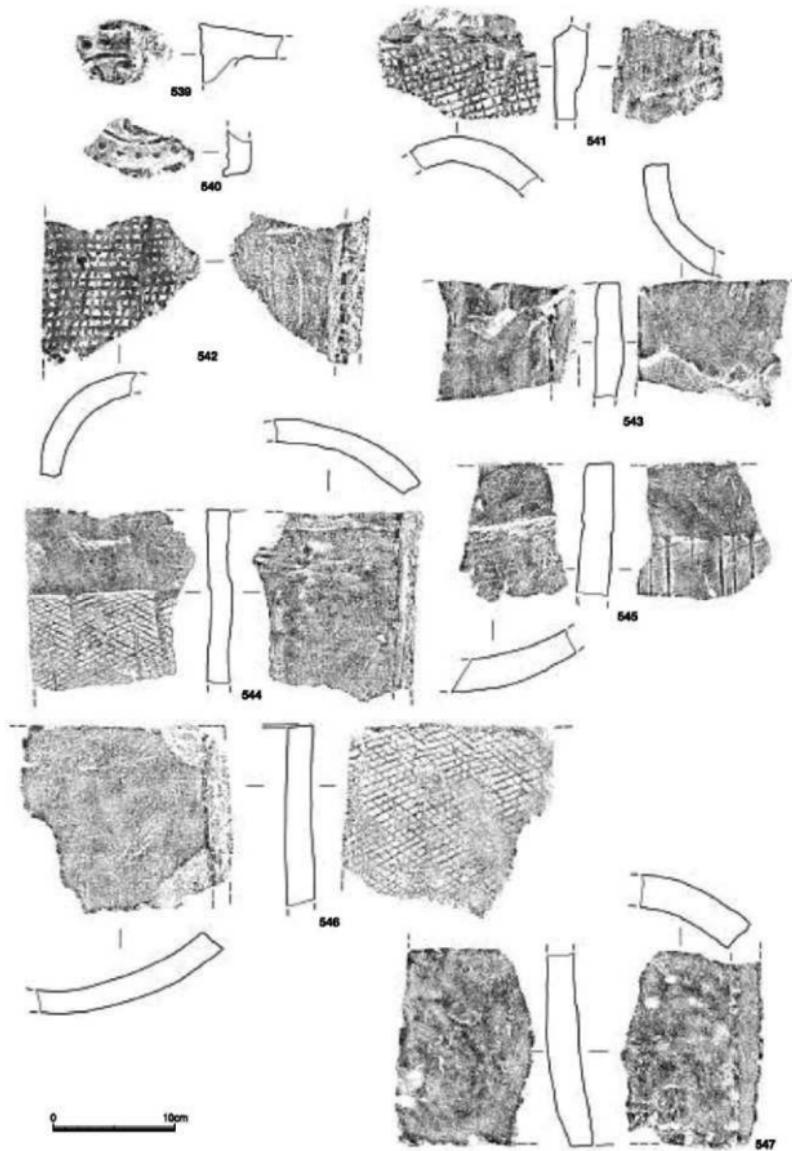


Fig.84 SD 11洞出土遺物測圖④(1/4)

復原径10.6平縁高5.7cm鉢脇の最薄部で1.8mmを測る。外区に花文を配し、径12.8高6.5mmの亀鉢周りの径7.3cmの内区に3羽の鶴と3本の花卉を配する。鏡面は平坦で縁より1cm程が若干反る。外縁外側と内稜間は凹面に削り棱を突起させる。外縁と外区境・内区境にはヘラ削痕が多く残り、全体的に造作は粗い。銅質は白銀色で良好。

PL.39-442～449は鉄滓。製錬滓・塊形滓・炉壁などコンテナ9箱分検出している。451は牛齒。

以上10世紀末～12世紀初をピークとし、8世紀代がこれに次ぐ。

**SD08 (Fig.49 PL.19～21)** SD08は、方形区画最北側を東流し北側に分流したSD03からさらに北東に分岐した溝で、D群SD36～38に連なる。SD07に切られる。最大幅0.8最深部0.25mを測る。

**出土遺物 (Fig.80 PL.40)** Fig.80-452・453は土師器坏。外底はヘラ切り。452は口径14.5・器高3.8cm。453は底径8.4cm。PL.40-458・459は鉄滓。以上9世紀初～後半の時期を示す。

**SD09 (Fig.49 PL.19～21)** SD09は、方形区画北西の東西方向に位置し、SD01・03・10に切られ

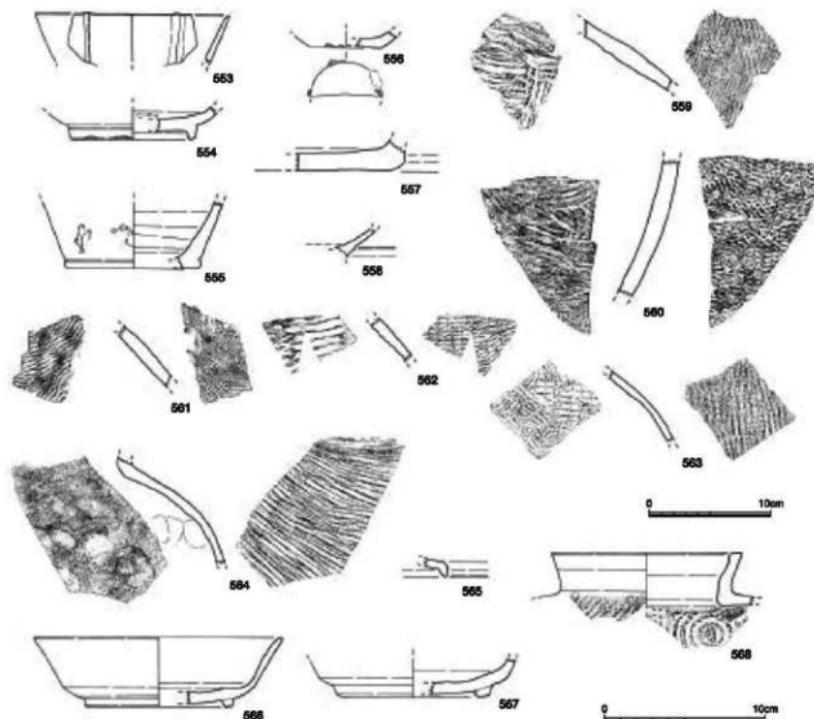


Fig.85 SD13溝出土遺物実測図①(1/3・559～564-1/4)

る。最大幅0.6最深部0.25mを測る。

出土遺物 (Fig.80) Fig.80-455は須恵器盤で口径21.0器高2.8cm。456・457は土師器。外底はヘラ切り。456は高台壺。口径11.8・器高3.4cm。457は壺。口径12.0・器高3.7cm。

以上8世紀から9世紀後半の時期を示す。

SD10 (Fig.49 PL.19~21) SD10は、方形区画北西の東西方向に位置し、SD01・03に切られ、SD09を切る。最大幅2.3最深部0.4mを測る。

出土遺物 (Fig.80 PL.40) Fig.80-460・461新羅無釉陶器瓶。460は二重口縁で径10.2cm。暗灰色。461は平底の底部で径7.68cm。暗灰色を呈し外底は右回転の糸切り。462・463は須恵器。462は高台付盤で底径17.6cm。463は壺蓋で口径14.0cm。返りの稜は明瞭。464・465は黒色土器A類境。外底はヘラ切り。464は小塊で底径7.0cm。465は低い高台で径7.4cm。見込みにヘラ当て痕が残る。466~472は土師器。壺・壺・皿の外底はヘラ切り。466・467は高台壺。466は低い高台で底径10.4cm。467は低く開く体部に高い高台で口径13.4器高8.6cm。468は丸底壺。口径12.2器高3.5cm。469は皿。口径9.2器高1.6cm。470は鉢底部。高台径13.0cm。471は玄界灘式甕。胴部外面に粗い平行叩内面に平行弧の當て具痕を残す。PL.40-472は鉄滓。コンテナ10箱出土。瓦はSD09・10で6片混入。

以上9世紀中～後半を中心に若干の8世紀・11世紀遺物を見る。

SD11 (Fig.49 PL.19~21・24) 方形区画北西隅のSD03の、5m程内側にこれに並行する溝でSD01

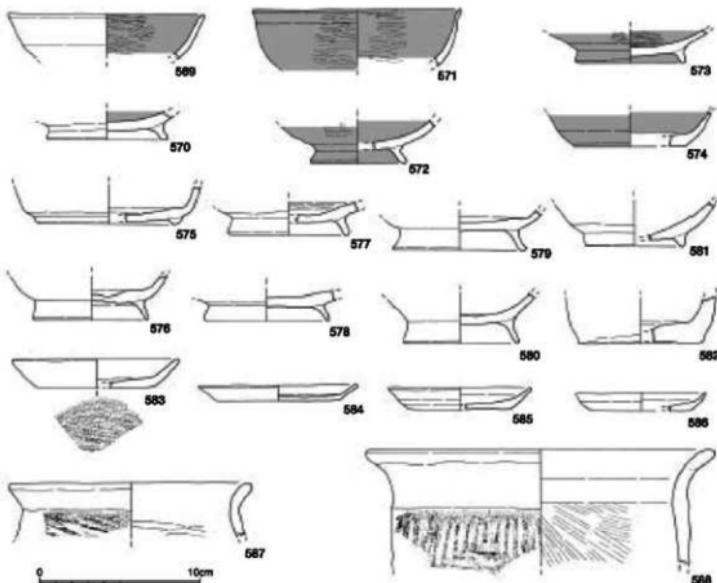


Fig.86 SD13溝出土遺物実測図②(1/3)

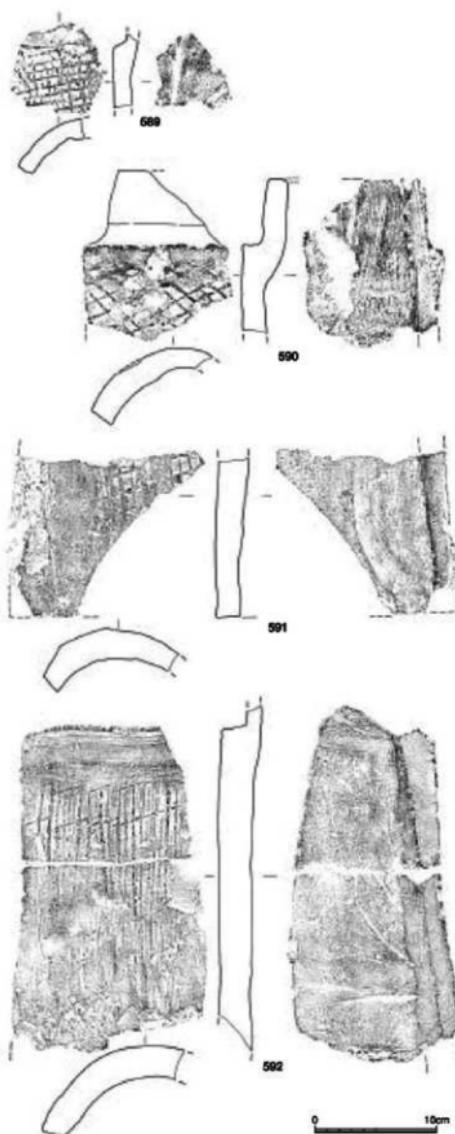


Fig.87 SD 13 漢出土遺物実測図③(1/4)

に切られ、建物SB08を切る。北西隅は洪水で北に抜ける。最大幅4.8最深部0.15mを測る。

**出土遺物 (Fig.81~84 PL.40・41)**

Fig.81-473~475は越州窯系青磁I類碗。473は外反口縁、474は直口口縁の小片。475は低い輪高台を斜めに削る。底径8.8cm。476~481は新羅無釉陶器甕。476・477は格子叩に網代状当具痕。478は平行叩に平行當具痕。479は平行叩に粗い平行當具痕。480は不定方向の平行叩に車輪状當具痕。481は格子叩に粗めの平行當具痕を有す。482~495は須恵器。482・483は甕。482は口縁小片で、内側に横書きの線刻で「□郡」と文字を刻む。483はSD03-290と同型の甕で外面に斜格子叩きを施す。484は直口口縁甕で口径13.0cm。485は高台付甕底部で径8.8cm。486~491は高台甕。486は底径8.2・487は高台が端に近く径14.0・488は8.0・489は9.0・490は7.2・491は高台が端に付き7.8cmを測る。492~495は壺蓋。492は返りの稜は明瞭で口径14.7・493は丸く11.8・494・495は不明瞭で495で14.4cmを測る。496~500は黒色土器A類。全て外底はヘラ切り。496~500は塊。496は口径12.7器高4.7cm。外底に板圧痕が残る。497は高い高台で口径15.0器高6.8cm。498は口径15.8cm。499は小さな高台で径7.6cm。500は径9.8cmで見込み中央に1.5cmの角孔を焼成後穿つ。501~505は黒色土器B類。全て外底はヘラ切り。501は鉢口縁。502・503は塊。502は口径16.3器高7.6cm。503は高台径8.8cm。504・505は壺。504は口径11.0器高2.1cm。外底に板圧痕。505は口径12.0cm。

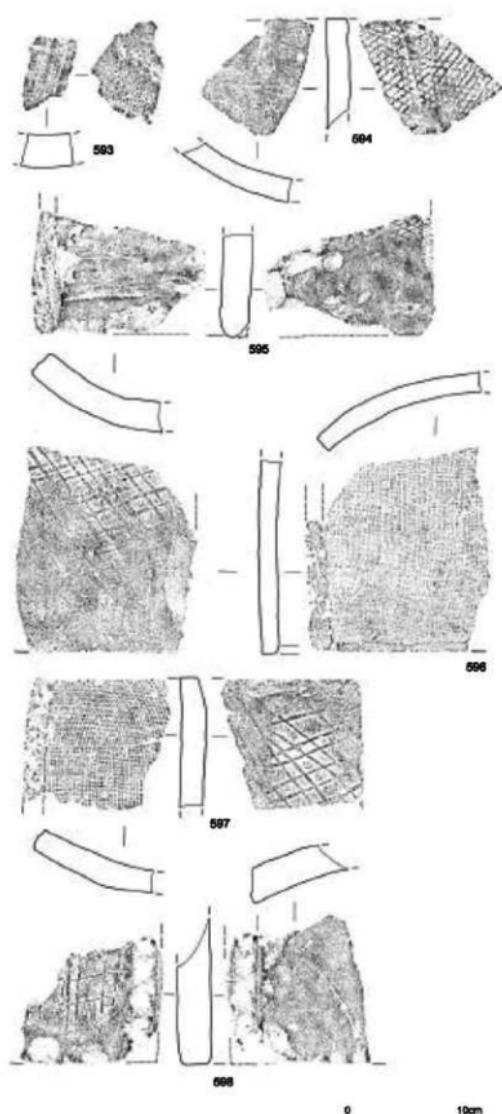


Fig.88 SD13溝出土遺物実測図④(1/4)

器高4.0cm。見込みに焼成後2.5cmの穿孔を行う。506～537は土師器。壺・塊・皿は全て外底ヘラ切り。506～510・512～514は高台壺。506～508は深い体部で506で口径11.2器高4.4・507は12.1×5.6・508は15.6×8.0・外底に板压痕。509～513は浅く開く体部で509は14.0×5.3・510は14.8×5.5・512は12.7×5.2・513は14.1×6.0・514は底径9.0cmを測る。511は塊で底径7.0cm。515～530は壺。515～521・524・525は開く体部で515は口径11.4器高4.2・516は12.0×3.8・517は12.0×3.9・518は12.8×7.6・519は11.2×3.5・520は11.8×4.1・521は11.8×3.5・524は11.8×4.9・525は12.4×4.2cm。522・526～528は浅めの体部で口縁が立ち上がる。522は口径11.4器高3.2・526は12.0×3.6・527は13.4×3.7・528は10.4×2.8cmを測り見込みにヘラ描きがある。523は丸い体部では口径12.2器高4.0cm。530は浅い壺で口径10.6器高2.0cm。531～535は皿。531は口径11.2器高1.8cm。532は口径17.8器高1.3cm。533～535は高台付で533は口径22.4cm。534は口径14.8器高3.0cm。535は口径18.0cm。536は甕で口径22.4cm。外面は指頭圧、内面はクテヘラ削りを施す。537は把手付鉢の把手か。538は砂岩製の中砥。自然礫を用いており断面8.6×3.2cmを測る。Fig.84は瓦。全て側面内側中位までの分割ヘラ切り痕を有す。539・540は軒丸瓦で、内区に間弁を持たない複弁で外区に連珠文を施す。SD01-113・114と同型式。541～543は丸瓦。541・542は3Aa類の小斜格子叩。

543は7類のナデ消し。544～547は平瓦。544は3Aa類の小斜格子叩で「伊賀作瓦」銘瓦に類似する。545は縱平行線に同数の右上がりの斜線の格子叩。546は3Aa類の小斜格子叩。547は7類のナデ消し。Fig.79-441は銅製勾玉。頭部で15.0×14.0・端部で8.0×8.9mmの隅丸角錐棒を曲げて造作したような形態で全長46.1mm・36gを測る。紐穴は鋳込みではなく両側からの穿孔。PL.41-548～552は鉄滓。コンテナ4箱分検出している。以上9世紀前半を中心に8世紀～11世紀遺物が混在する。

**SD13 (Fig.49 PL.19～21)** SD13は、方形区画西辺のSD01・SD11間に位置し、SD11を切る。最大幅0.95最深部0.13mを測る。

**出土遺物 (Fig.85～88 PL.42)** Fig.85-553～557は越州窯系青磁。553はI類小境で口径11.6cm。縁ヘラ押し線を有する。554はIII類輪高台塊。底径7.4cm。555はI類平底境で底径8.0cm。底部際～外底は露胎。556はI類小杯。全面施釉でゆるい上げ底。径4.4cm。557はII類大碗底部。558は灰釉皿。見込みは蛇の目に搔き取る。559～564は新羅無釉陶器甕。559は擬格子叩に網代状平行当具痕。560は擬格子叩に不定方向平行当具痕。561は擬格子叩に鱗状平行当具痕。562は擬格子叩に粗い平行当具痕。563は擬格子叩に網代状平行当具痕と格子状当具痕。564は粗い平行叩に無文当具痕。

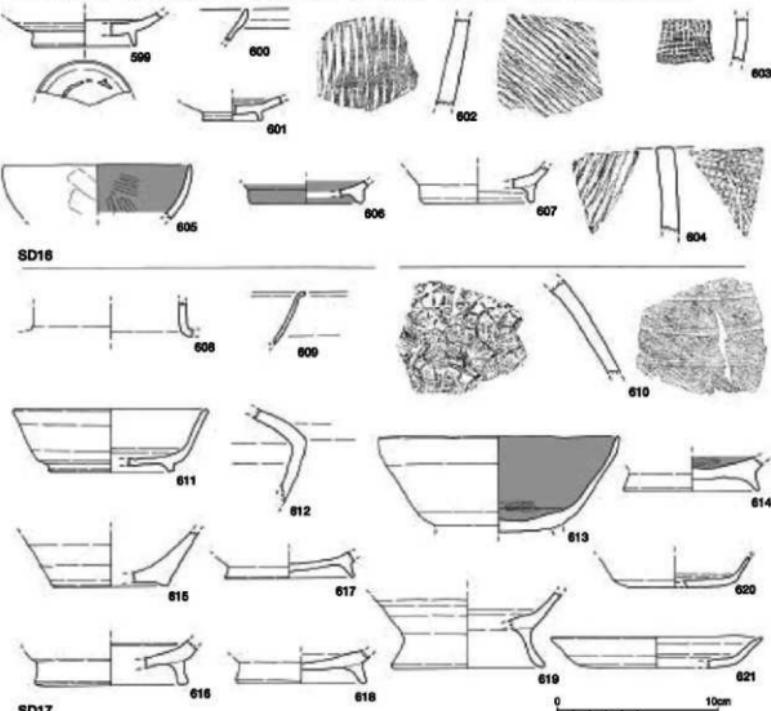


Fig.89 S D 16・17溝出土遺物実測図(1/3)

色調は561が褐灰色、他は暗灰～灰色を呈す。565～568は須恵器。565は壺蓋小片で返りの稜は明瞭。566・567は高台壺。566は低い体部で口径14.8器高4.1cm。567は底径9.2cm。568は直口口縁壺で口径11.2cm。外面に縱位平行叩、内面に同心円当具痕が残る。Fig.86-569・570は黒色土器A類焼。569は口径13.0cm。

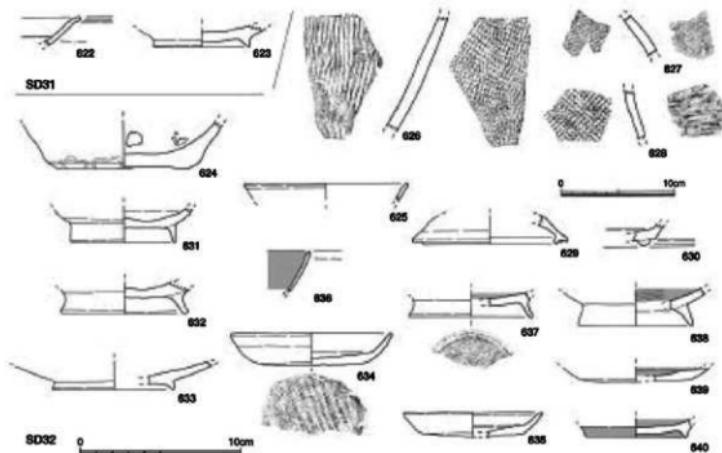


Fig.90 SD31・32溝出土遺物実測図1(1/3・626~628-1/4)

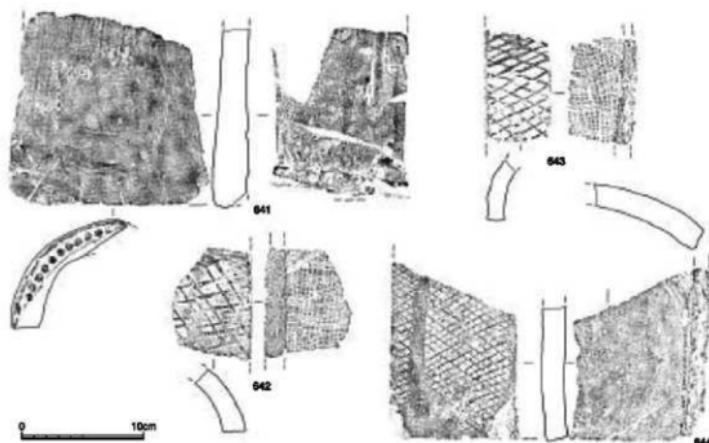


Fig.91 SD32溝出土遺物実測図2(1/4)

570は底径8.0cmで外底に板圧痕。571～574は黒色土器B類。571～573は塊。571は口径13.8・572は底径6.2・573は7.2cm。574は壺で底径7.2cm。575～588は土師器。壺・塊・皿は全て外底ヘラ切り。575は高台壺、底径9.6cm。576～581は塊底部。576・579は体部が立ち上がり576で径7.6・579で径8.8cm。577・578は体部が開き577で径8.0・578で径8.2cmで外底に板圧痕。580は高い高台で径7.6cm。581は低小な高台で径6.6cm。582は平底の瓶で径8.2cm外底はナデ消し。583～586は皿。583は口径11.0器高1.9cm。外底に板圧痕。584～586は小皿。584は口径10.4器高1.0cm。585は9.4×15・586は8.6×12cmを測る。587は玄界灘式甕で口径16.0cm。外面に平行叩内面に平行弧の当具痕。588は甕で口径23.0cm。外面に粗い平行叩内面にハケメ。Fig.87・88は瓦。側面内側中位までの分割ヘラ切り痕を有す。589～592は丸瓦。589は3Aa類の小斜格子叩。590は3Ab類の中斜格子叩。591は縦平行線に半数の斜格子叩の5類。592は縦平行線に半数の右上がり斜線の格子叩。側面ヘラナテ。593～598は平瓦。593は0類網目叩。594・595は3Aa類の小斜格子叩。596は3Ab類の中斜格子叩。597は右上がり平行線に放射線。598は縦平行線に半数の右上がり平行線の格子叩。鉄滓はコンテナ1箱弱検出。以上10世紀末～11世紀後半を中心とする。

**SD16 (Fig.49 PL.19～21)** SD16は、SD01の2m程東に、これに並行する小溝で方形区画内を北北東に流れる。獨立柱建物SB06に切られSB05を切る。最大幅0.6最深部0.15mを測る。

**出土遺物 (Fig.89 PL.42)** 599は越州窯系青磁Ⅲ類の輪高台碗。底径6.4cmで見込みに圓線を1条刻む。600は白磁I類碗の口縁小片。601は綠釉碗で見込みが段を成し全面施釉で疊付は露胎。胎土は灰色で底径3.6cm。602～604は新羅無釉陶器甕。602は斜位平行叩に継位平行當具痕。内面が平滑に摩滅しており、硯か鉢皿に転用。603は外面ナデ消し内面格子當具痕。604は格子目叩に斜位の粗い平行當具痕。605は黒色土器A類小塊。口径11.4cm。606は黒色土器B類塊。低小の高台で径7.0cmを測る。607は土師器塊で体部が立ち上がり底径7.0cmを測る。黒色土器・土師器外底は全てヘラ切り。瓦は平・丸瓦26片出土。以上10世紀末～11世紀後半を中心とする。

**SD17 (Fig.49 PL.19～21)** SD17は、方形区画の西を画するSD03の1m程西に、これに並行する小溝で土塹Sk38を切る。最大幅1.0最深部0.17mを測る。

**出土遺物 (Fig.89 PL.42)** 608は越州窯系青磁Ⅱ類の壺頸部。径9.4cm。609は白磁V類碗口縁小片。610は新羅無釉陶器甕。外面は平行叩後2条単位の沈線・内面は車輪状當具痕。611・612は須恵器。611は高台壺。口径11.8器高3.8cm。612は長頸壺肩部。613・614は黒色土器A類塊。613は口径14.6cm。614は低めの高台で径8.2cmを測る。615～621は土師器。外底は全てヘラ切り。615～618は塊。615は越州窯系青磁I類写しの塊。体部は直線的に開き器壁は極めて厚い。底径7.0cm。616～618は体部の立ち上がる塊で616は底径9.4・617は7.8・618は8.0cmを測る。619は高台壺。高い高台で体部が直線的に開き径9.4cmを測る。620は壺。丸みを帯びた平底で径7.6cm。621は皿。口径12.8器高1.9cm。瓦は平瓦片を若干検出。以上9世紀末～10世紀初を中心とする。

**SD31・32 (Fig.49 PL.19～21)** SD31・32は、SD02の南6m程内側で方形区画の北東を区画する広い溝SD32を、北に並行するSD31がこれを切る。SD31で最大幅1.3最深部0.15mを測る。SD32で最大幅6.0最深部0.46mを測る。

**出土遺物 (Fig.90・91 PL.43)** Fig.90-622・623はSD31出土。622は白磁I類皿。外面中位まで施釉。623は土師器壺。底径6.4cm。624からはSD32出土。624は越州窯系青磁I類平底碗。端を斜

めに削り径9.0cm。625は縁釉皿で口径11.0cm。胎土は灰色。626～628は新羅無釉陶器壺。626は格子目叩に平行当具痕。627は浅い平行叩後カキ目に平行当具痕。628は格子目叩に平行当具痕。629・630は須恵器。629は壺蓋で口径8.8cm。630は高台壺の底部片。631～635は土師器。外底は全てヘラ切り。631～633は壺。631・632はやや高い高台で631は底径7.6・632は8.4cm。633は低い高台で径8.0cm。634は壺。口径10.8器高2.2cm。外底に板压痕。635は皿。口径9.3器高1.7cm。636～639は黒色土器A類。636～638は壺。636は口縁小片。637は底径8.2cmで外底に桥目状のヘラ記号。638は7.6cm。639は壺で底径7.0cm。640は瓦器壺。低小な高台で径6.6cm。Fig.91は瓦。側面内側中位までの分割ヘラ切り痕を有す。641は単弁8葉の軒丸瓦の外区で、一段低く、連珠文を施す。凸面は縱平行線に半数の右上がり平行線の格子叩。側面はヘラナデ。642・643は3Ab類、中斜格子叩の丸瓦。642は側面ヘラナデ。644は3Aa類小斜格子叩平瓦。以上9世紀末～12世紀初の遺物が混在する。

(2).土壤 (SK) 土壤は区画内でSK07・08・09・35・99・295の6基検出され、土取り状の不整形な大型で浅い土壤が目立ち、まとまった遺物の出土は少ない。

SK07・08・09 (Fig.92) 区画内北東側に南北に3基が連なって、SK08を07・09が切る。土取り状の浅い不整形土壤で、SK08で $5.74 \times 2.85$ 深さ0.25m。07で $4.68 \times 2.82$ 深さ0.17m。09が $3.65 \times 3.48$ 深さ0.57mを測る。これを建物SB27・28が切る。

出土遺物 (Fig.97) 645はSK08出土土師器壺。口径12.0器高3.5cm。灯蓋に用いられ口唇に數カ所灯心の焼き付きがある。9世紀中～後半。他に土師器高台壺・黒色土器B類・平瓦片等が出土。

SK35 (Fig.92) 区画内北西に位置し溝SD11に切られ建物SB08と切り合い関係にある。1.08×0.7mを測る。遺物は固化不能な土師器・須恵器・黒色土器・石鍋片・鐵滓が出土している。11世紀

SK99 (Fig.92) SK07・08・09の南東5m程に位置し大半が調査区外にある。現況で3.03深さ0.25

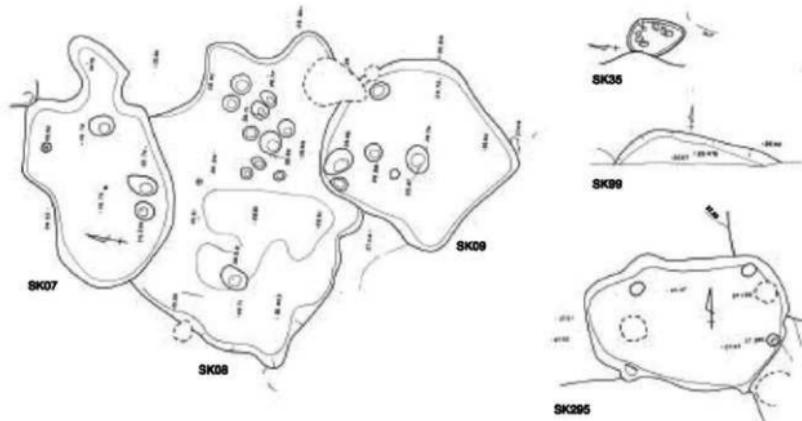


Fig.92 S K07～09・35・99・295土坑出土状況実測図(1/100)

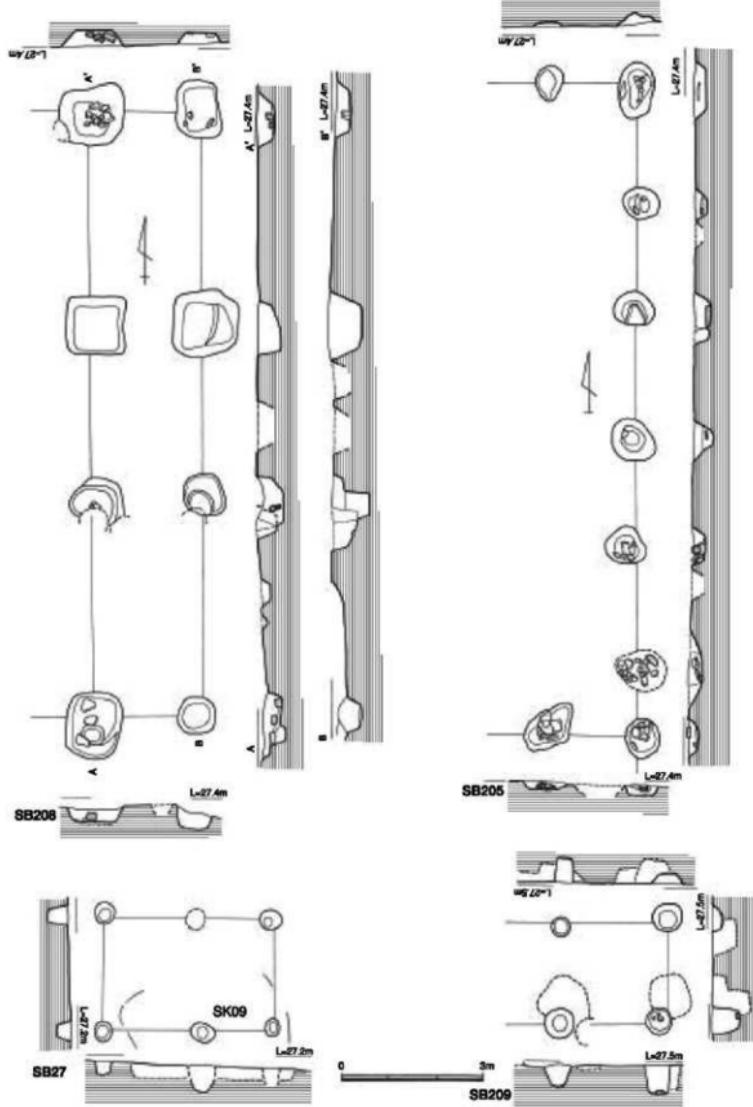


Fig.93 S B27 · 204 · 208 · 209 摨立性建物出土状況實測図(1/100)

を測る。遺物は固化不能な土師器・須恵器片が少量出土している。

**SK295 (Fig.92)** 区画内中央近く、建物SB05の南1m程に位置する。3.72×2.48深さ0.44mを測る。遺物は土師器・須恵器・黒色土器・石鍋・瓦片・鉄滓が出土している。11世紀末～12世紀初。

(3)掘立柱建物 (SB) 掘立柱建物は区画内で礎石建物の可能性があるSB204・208の2棟を中心とした、区画溝(磁北)に沿うSB05・06・07・08・28・209の東西棟8棟、地形等高線に沿う40°程西偏するSB27・201・202・203・204の5棟を検出している。1×1間は堅穴住居の可能性があり除外した。柱穴は無数にあり、十分な検討を尽くしたとは言えず、増える可能性は多大である。

**SB208 (Fig.93 PL.25・26)** 区画中央に位置し2号支線道路区の西側で検出された主屋である。SB205の南に2m間隔を開け軒を揃えて並列し、東西棟SB209に切られる。南北3間東西1間以上12.65×3.1m+aで東に庇を持つか縦柱建物の可能性がある。第9次調査区最大規模の建物である。方位は0°にとる。東西の柱間は2.3m程南北はさらに広く3.7~4.5mを測る。堀方は大きく、ほぼ隅丸方形が占め径80~125深さ22~72cmを測る。北の2穴と一部に栗石状の小石の集積があり(PL.26-2)、瓦の出

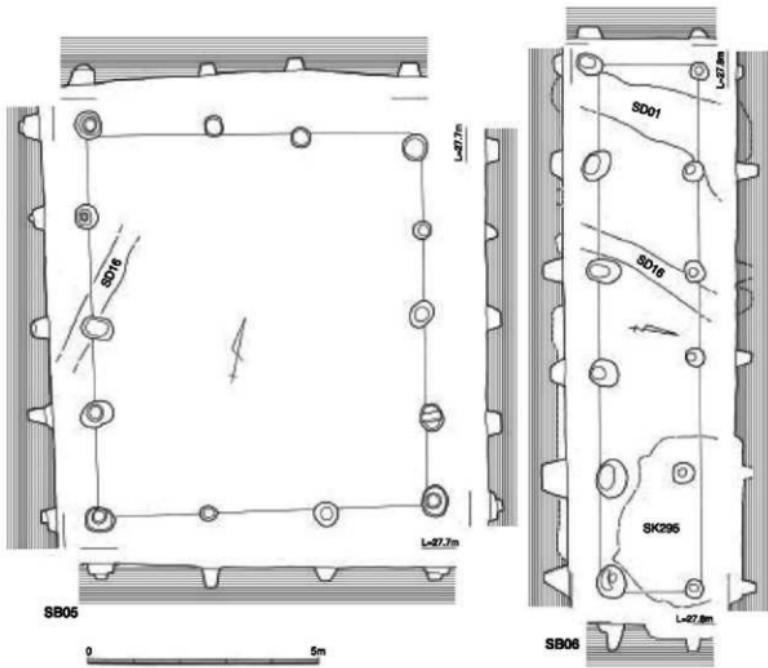


Fig.94 S B05・06掘立柱建物出土状況実測図(1/100)

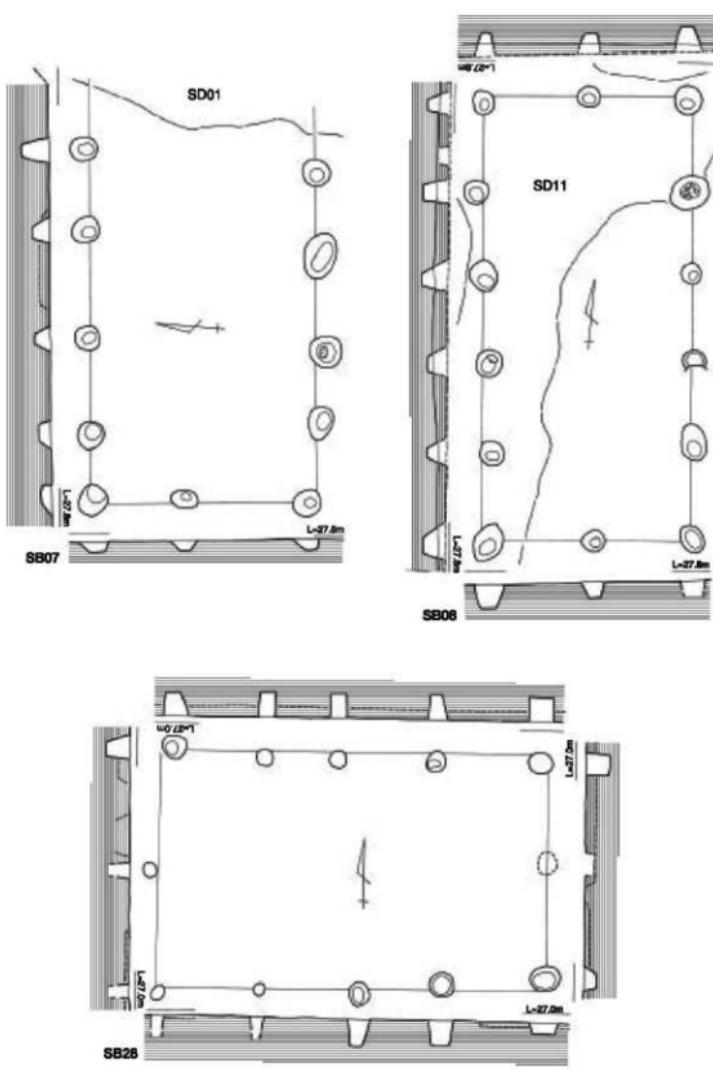


Fig.95 S B07 · 08 · 28 標立柱建物出土状況実測図(1/100)

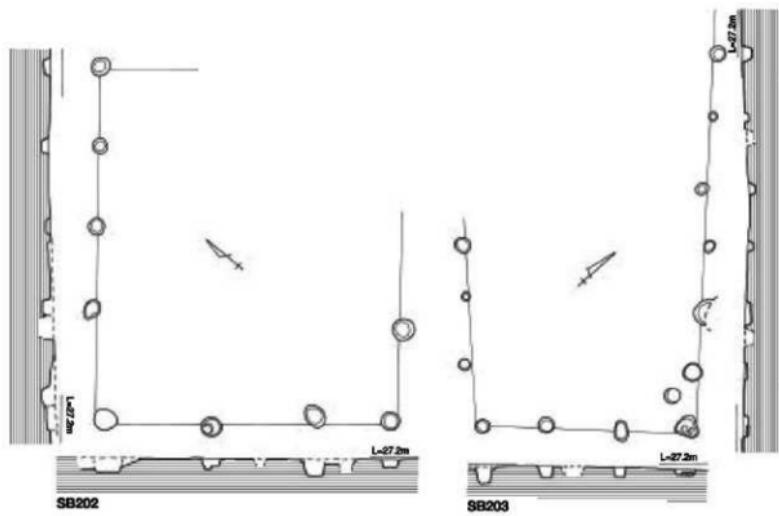
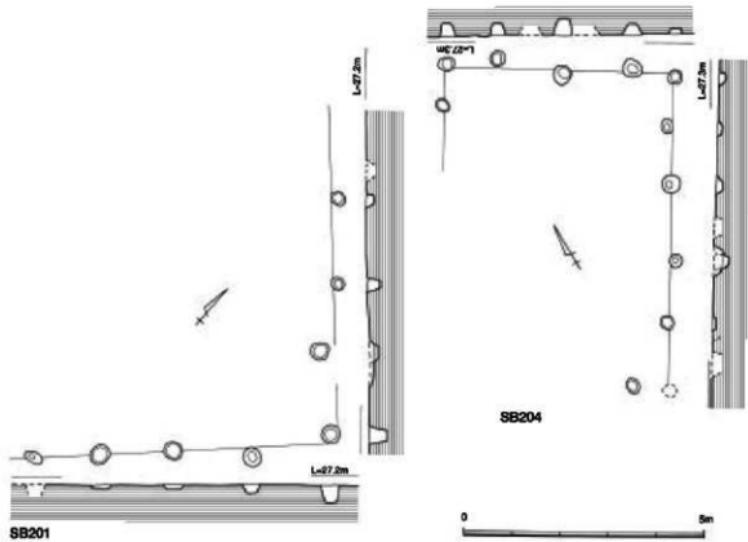


Fig.96 S B 201 · 202 · 203 · 204 据立柱建物出土状況測図(1/100)

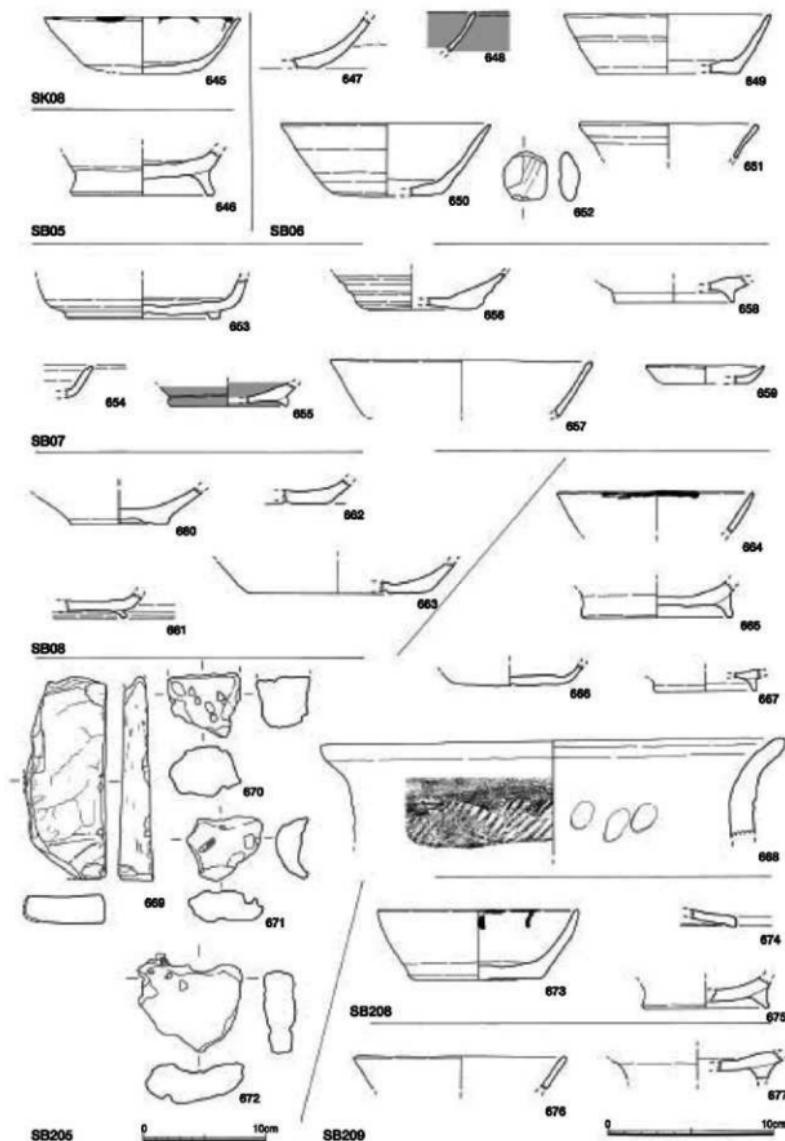


Fig.97 S K08土坑·S B05~08·205·208·209振立柱建物出土遺物實測圖(1/3·669~672-1/4)

土を考慮すると礎石下の栗石の可能性が高い。一部壺棺を破壊している。

出土遺物 (Fig.97) 673~675は土師器。673は壺で口径12.2cm器高4.2cm。外底はヘラ切り。灯蓋として使われ、口唇に數か所灯心の焼き付きがある。674は壺蓋で返りは沈線化する。675は高台壺で底径7.8cmを測る。以上9世紀中~後半の時期を示す。

SB205 (Fig.93 PL.25・26) SB208の北に2m間隔を開け軒を揃えて並列する主屋でSB208とともに第9次調査区最大規模の建物である。南北6間東西1間以上13.7×2.9m+aで方位は0°にとる。東西南北とも柱間は1.8~2.6m程。堀方も小さく、円形で径60~120cm深さ15~35cmを測る。南側の柱穴にSB208同様に栗石状の小石の集積があり (PL.26-2) 、ともに礎石建物の可能性が高い。

出土遺物 (Fig.97 PL.43) 664~668は土師器。664・666は壺。664は口径12.0cm。灯蓋で、口唇に灯心痕がある。666は外底ヘラ切りで底径7.0cm。665は高台壺。底径9.2cmで外底はヘラ切りで板压痕。667は壺。底径6.2cm。668は壺で外面に粗い平行叩を施す。口径28.4cm。669は黒色泥岩製の仕上げ砥石で、両側が剥離し断面2.8×6.6cmの板状となる。670~672は鉄滓で670は要鍊滓・671・672は塊形滓。他に漆皿・焼土塊・羽口等が出土する。以上9世紀中~後半を中心とする。

SB209 (Fig.93 PL.25・26) SB208の南側を東西方向に切る1×1間以上21×3.1m+aで西の調査区外に延びる。柱間は桁行が若干広い。方位はN-87°-Eにとる。堀方も小さく、円形で径40~60cm深さ25~50cmを測る。

出土遺物 (Fig.97) 676は土師器壺で口径13.0cm。677は高台壺。底径9.6cmを測る。

以上9世紀初~前半を中心とするが、9世紀中~後半のSB208を切っており、これに後出する。

SB05 (Fig.94 PL.23) 北の中央西寄りにSB08と軒を揃えて位置する南北棟で、4×3間8.4×7.4mを測る。柱間は1.8~2.4mで梁間が若干広い。方位はN-12.5°-Wにとる。堀方も円形で径35~70cm深さ25~30cmを測る。柱径は30cm弱。10世紀末~11世紀後半のSD16に切られる。

出土遺物 (Fig.97) 646は土師器高台壺で外底はヘラ切り。やや高い高台で底径8.8cm。他に須恵器壺等が出土する。以上9世紀中~後半を中心とする。

SB06 (Fig.94 PL.20) SB05・07間の南2.5~5mに位置する東西棟で、5×1間11.5×2.2mを測る長屋で、柱間は1.8~2.2mを測る。方位はN-81.5°-Eにとる。堀方も小さく、円形で径40~75cm深さ20~60cmを測る。10世紀末~11世紀後半のSD16を切る。

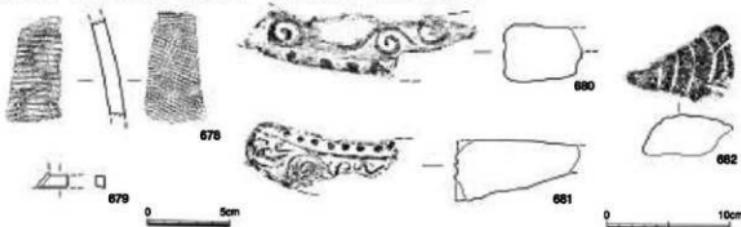


Fig.98 第2号支線道路出土遺物実測図(1/4・678・679-1/3)

出土遺物 (Fig.97) 647は平底の楕円陶器灯籠底部。体部下位は露胎。胎土は灰色。648は黒色土器A類塊。649～651は土師器坏。649は低い体部で口径12.6器高3.6cm。650は体部が開き口径12.8器高4.4cm。651は器壁が薄く口径11.0cm。652は土師器壺の土器片円盤。2.6×3.0×1.1cm。他に鉄滓・焼土塊・砥石等が出土。

以上 10世紀末～11世紀後半のSD16・11世紀末～12世紀初のSD01を切るが、9世紀前半の資料を主とする。

SB07 (Fig.95 PL.24) 区画北西の、SB05から西6mに位置する東西棟で、2×4間以上4.8×7.25+2mを測り、東を11世紀末～12世紀初のSD01に切られる。軒を描えて同規模のSB28が東33mに並行し、南5mにはSB06が並行する。柱間は1.4～2.2mを測り梁間が広め。方位はN-82°～Eにとる。堀方は円形で径55～85深さ20～60cm。10世紀末～11世紀後半のSD16を切る。

出土遺物 (Fig.97) 653・654は須恵器。653は高台壺で底径9.4cm。654は皿小片で器高2.0cm。655は瓦器塊。底径7.0cm。656～659は土師器。656～657は壺。656は底径7.0・657は口径16.0cm。658は低い高台の壺。底径7.2cm。659は皿。口径7.2器高1.1cm。他に鉄滓・焼土塊が出土。

以上 11世紀～12世紀初の資料を主とする。

SB08 (Fig.95 PL.24) 区画北西隅に位置する南北棟で、5×2間9.1×74.3mを測り、北西部を9世紀前半のSD11に切られる。軒を描えてSB05が東16mに並行する。柱間は桁行が1.8・梁間が2.2mを測る。方位はN-6.5°～Wにとる。堀方は円形で径40～80深さ35～50cmを測る。

出土遺物 (Fig.97) 660は蛇目高台の越州窯系青磁I類碗。底径6.0cm。661は須恵器高台壺底部片。662・663は土師器坏。外底はヘラ切りで662は板压痕が残る。663は底径11.0cm。

以上9世紀初～後半の資料が見受けられる。

SB28 (Fig.95) 区画北東に位置する東西棟で、4×2間7.9×5.0mを測り、9世紀中～後半の土器SK07・08を切る。軒を描えて同規模のSB07が西33mに並行する。柱間は桁行が1.5～2.0・梁間が2.2mを測り

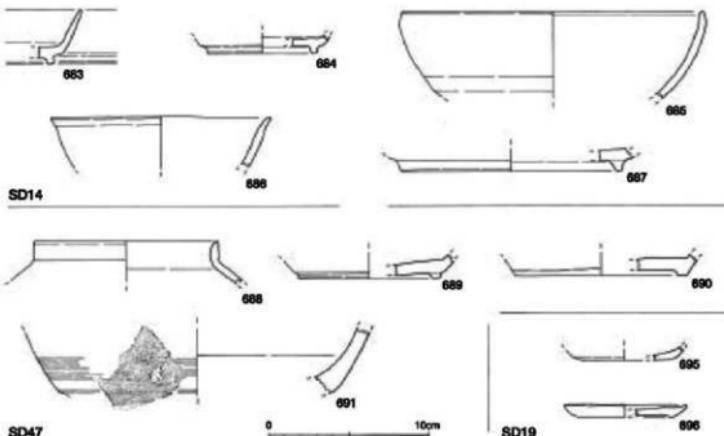


Fig.99 S D 14・19・47 漢出土地図(1/3)

広い。方位はN-82.5°-Eにとる。堀方は円形で径25~60深さ20~50cmを測る。遺物の出土は無いが、9世紀中~後半の土壙SK07・08を切る事からこれ以降である。

**SB27 (Fig.93)** SB28南西に隣接し2×1間3.8×2.6mを測る。9世紀中~後半の土壙SK08・09を切る。柱間は桁行が1.4~2.1を測る。方位はN-54°-Eにとり地形の等高線に沿う。堀方は円形で径30~45深さ30~40cmを測る。遺物の出土は無いが、9世紀中~後半の土壙SK08・09を切り、同方向の建物が南北棟と切り合い関係にあることからこれより後出する可能性が高い。

**SB201 (Fig.96)** 主屋SB205の北で、地形方向に軸を探りこれと切り合う4棟の建物群の1棟で最北に位置する。南東に2m空けて同規模と思われるSB202が軒を描えて南東に隣接する。西半分が調査区外で明確ではないが4×3間6.2×5.0mを測ると思われる。SB203と切り合い関係にある。柱間は1.4~1.8を測る。方位はN-48°-Eにとる。堀方は円形で径25~40深さ8~35cmを測る。遺物は須恵器の小片が出土するが、小さな柱穴規模から中世の可能性が高い。

**SB202 (Fig.96)** 同規模と思われるSB201の南東に2m空けて軒を描えて南東に隣接する。地形方向のN-49°-Eに方位をとり、4×3間7.35×6.3mを測る。直交方向のSB203と切り合い関係にある。柱間は1.6~2.2mを測る。堀方は円形で径25~45深さ13~34cmを測る。柱は径18cm程か。遺物は須恵器・土師器の小片が出土するが、SB201同様中世の可能性が高い。

**SB203 (Fig.96)** 並立するSB201・202の直交方向に切り合う建物で6+a×3間9.2+a×4.4mを測る。柱間は1.0~1.8mと他より狭い。方位はN-46.5°-Wにとる。堀方は円形で径15~35深さ10~35cmと小さい。遺物は須恵器・土師器の小片が出土するが、中世の可能性が高い。

**SB204 (Fig.96)** 主屋SB205の北で、これと切り合う建物で、SB203の南西の直交方向に1m空けて軒を描えて接するよう位置する。5×4間6.6×4.7mを測る。柱間は0.8~1.3mとさらに狭い。方位はN-27°-Eにとる。堀方は円形で径25~35深さ8~35cmと小さい。遺物は須恵器・土師器の小片が出土するが、同様に中世の可能性が高い。

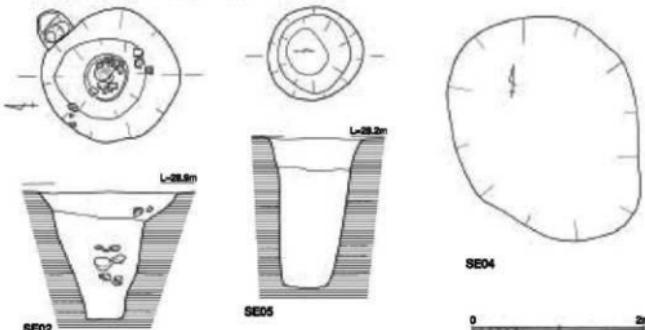


Fig.100 S E02・04・05井戸出土状況実測図(1/50)

(4).その他の遺物 (Fig.98 PL.43) 2号支線道路部検出面資料で、678新羅無釉陶器甕小片で格子目印に鱗状平行当具痕。679は黒石製甕方下端部片。現況で $1.7 \times 0.7 \times 0.6$ cmを測る。681・682は軒平瓦。681は額なしで内区に子葉を持つ扁行唐草文・上外区に連珠文、680は額付で扁行唐草文に下外区に連珠文を施す。682は鬼瓦の眉部分で平行弧線で表現する。

## 2.B群

A群の北西部、西は2号排水路1区境のSD01と東はSD14に挟まれた区域で、北東に延びる微高地の頂部に近い、遺構も地形に輪を探るものが多く、溝はSD14・19・47・48の4条、建物はSB17・18・20・24・25・26の6棟、土壙はSK38・39・46・47・51・52・55・68・70・71・72の11基、井戸は02・04・05・06・SP2736の4基、道路状遺構SX01・02の2条を検出し、特色ある遺構が多い。

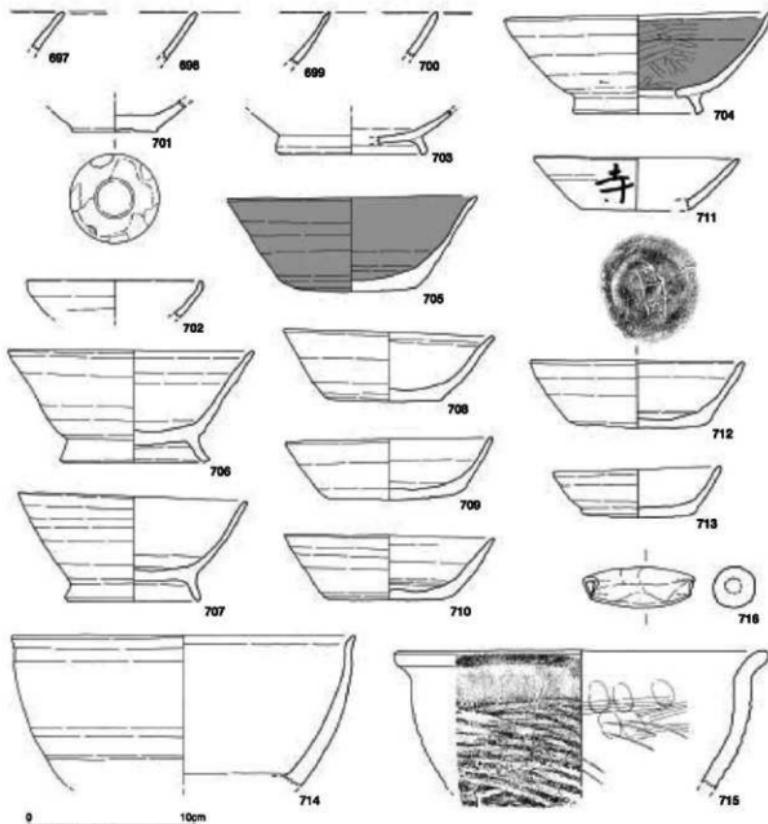


Fig.101 S E02井戸出土遺物実測図(1/3)

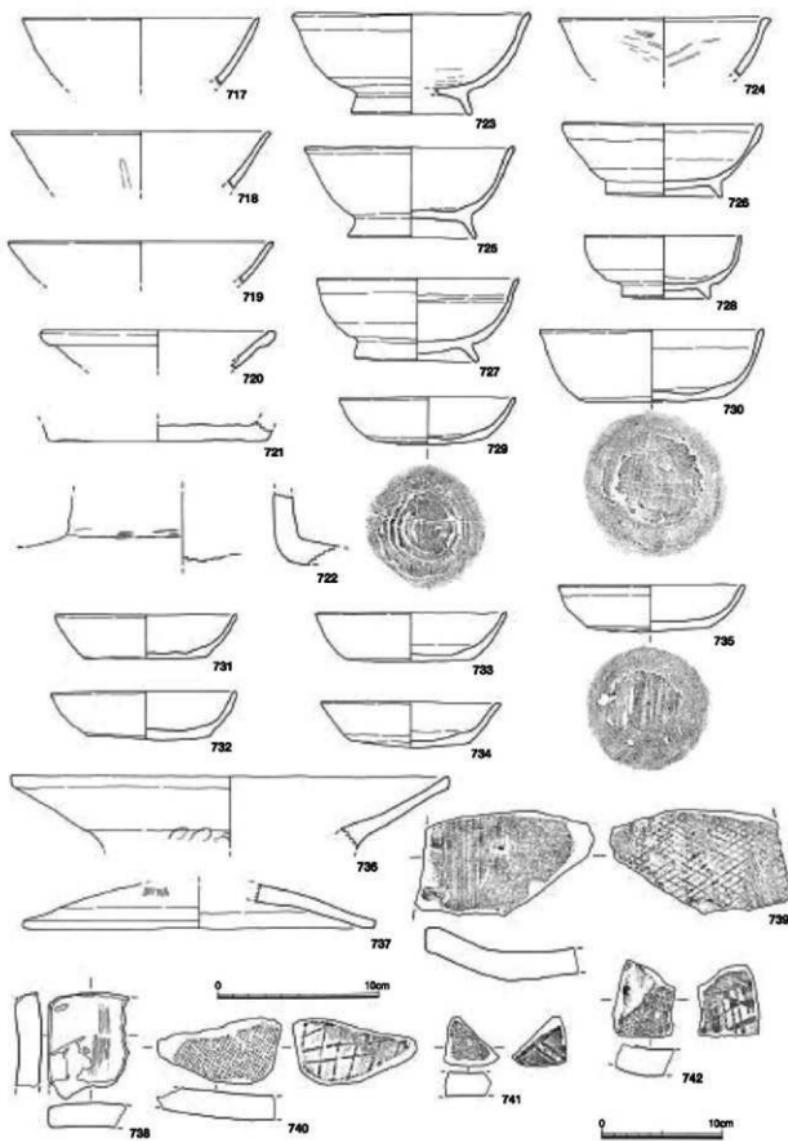


Fig. 102 S E04井戸出土遺物実測図(1/3・738~742-1/4)

(1)溝 (SD) 溝はA群に比べ小規模で、地形に規制され、等高線に直交方向のSD19・47・48、並行するSD14・15がある。

**SD14 (Fig.49)** SD14は、方形区画北西から等高線に並行して北東に弧を描いて流れる小溝で最大幅0.8最深部0.24mを測る。

出土遺物 (Fig.99 PL.42) 683~685は須恵器。683・684高台坏。683は器高3.5・684は底径7.0cmを測る。685は鉢で口径19.0cm。体部下位は回転ヘラ削り。686・687は土師器。686は碗で口径14.0・687は高台付盤で底径14.0cm。以上8世紀代を主とし9世紀中~後半までの資料を含む。

**SD47** (Fig.49) SD47は、B群中央を等高線の直交方向、北東に流れる溝で調査区中央部で消滅する。途中までSD48が並行する。最大幅25mを測る。

出土遺物 (Fig.99 PL42) 688~691は須惠器。688直口口縁壺。口径11.6cm。689・690は高台壺。689は底径9.0・690は11.2cmを測る。691は鉢で底部脇はカキメ調整。PL.42-692~694は合鉄鉄滓。以上8世紀後半~末を主とする。

**SD19 (Fig.49)** SD19は、調査区北西端の道路状SX01の北西3m程に並行する小溝で、等高線の直交方向、北東に流れる。最大幅0.65深さ0.15mを測る。

出土遺物 (Fig.99) 695・696は土師器皿。695は底径5.6cm。696は口径7.8器高0.7cmを測る。他に須恵器・土師器臺小片を出土。以上11世紀末~12世紀初と考えられる。

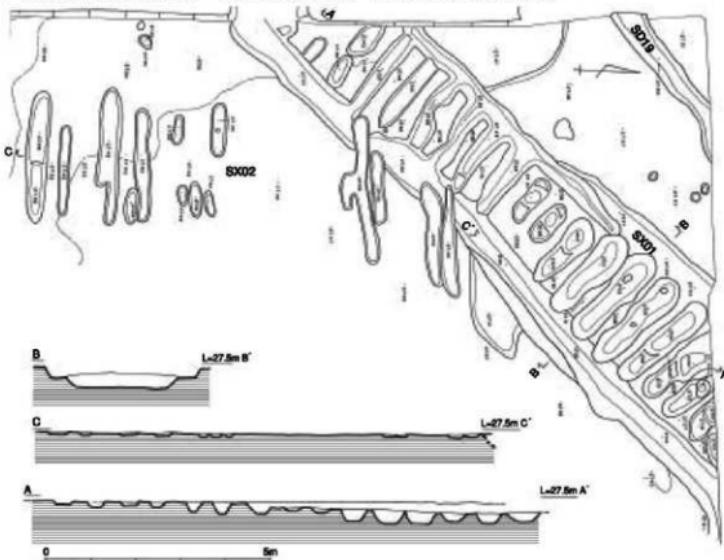


Fig.103 SX01·02土壤出土状况实测图(1/100)

(2).土壤 (SK) 土壌はSK38・39・46・47・51・52・55・68・70・71・72の11基が検出され、西の建物SB26と東のSB17の間50m程にこのうち7基が直線的に分布する。A群に比べ3m前後的小振りな土壌が多い。まとまった遺物の出土は少ない。

(3).井戸 (SE) 井戸は7基中02・04・05・06・SP2736の4基が分布し、方形区画に近いSE05・06と、後線上に分布する建物・土壌群中に他の3基が分布する。なかでもSP2736は建物SB24に取り込まれた特異なあり方を示す。遺物は土師器壺を中心に、まとまった出土をするものが多い。

SE02 (Fig.100 PL.27) SE02は、後線上に分布する建物・土壌群中の東端SB18の南2mに位置する。径1.7m深さ30cm程の円形土壌を1.2m程さらに掘り下げる。底面から30cm程が径45cmの円筒状となり曲物を井筒とした可能性がある。遺物は底面から50・80・120cm程の3箇所に集中する

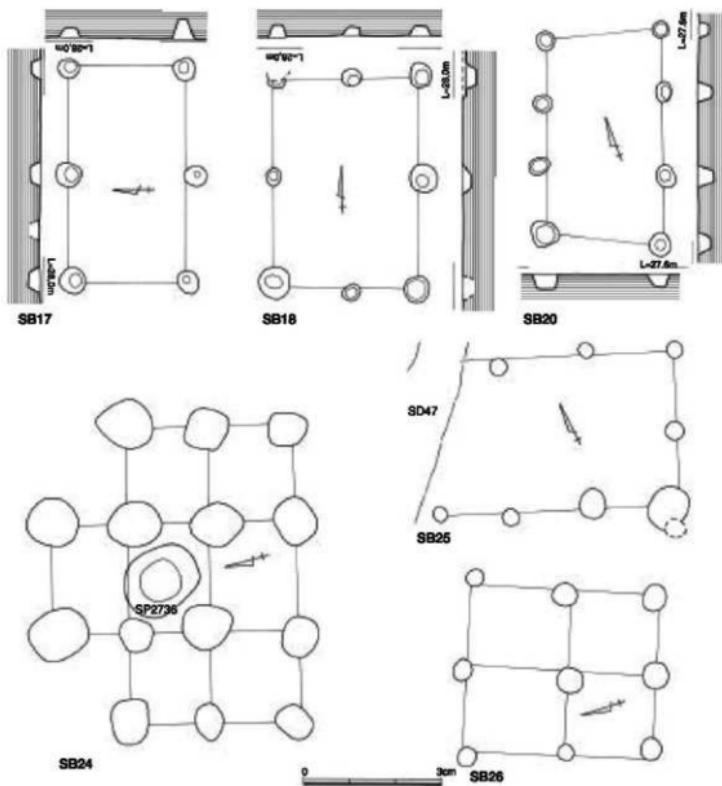


Fig.104 S B 17・18・20・24・25・26獨立柱建物出土状況実測図(1/100)

出土遺物 (Fig.101) 697~701は越州窯系青磁碗。700がII類他はI類。701は蛇目高台で径5.2cm。702は綠褐釉陶器皿。口径10.4cm。703は灰釉碗。見込み・外面は露胎。底径9.0cm。704は黒色土器A塊。口径16.2器高6.1cm。見込みを円形に打ち欠く。705は黒色土器B類塊。口径15.0器高5.8cm外底ヘラ切り。706~715は土師器。甕以外の外底ヘラ切り。706・707は高台付坏。706は口径14.7器高6.7・707は13.7×6.5cmを測る。708~713は坏。口径10.0~12.8器高3.1~4.4cmを測り、711は外面に「寺」の墨書き・712は見込みに「月」のヘラ書き・713には外底に板压痕がある。714は口径20.6cmの鉢。715は口径22.5cmの玄界灘式甕。716は6.4×2.4cmの管状土錐。他に鐵滓・焼土塊が出土。以上9世紀前半の時期を示し、若干11世紀代の資料を含む。

SE04 (Fig.100) SE04は、北東に延びる稜線上に分布する建物・土塙群中の西側、井戸を囲む特殊な建物SB24の北2mに位置する。径2.75×2.2mの円形で、土塙SK51を切る。内部の詳細は図・写真がなく不明。

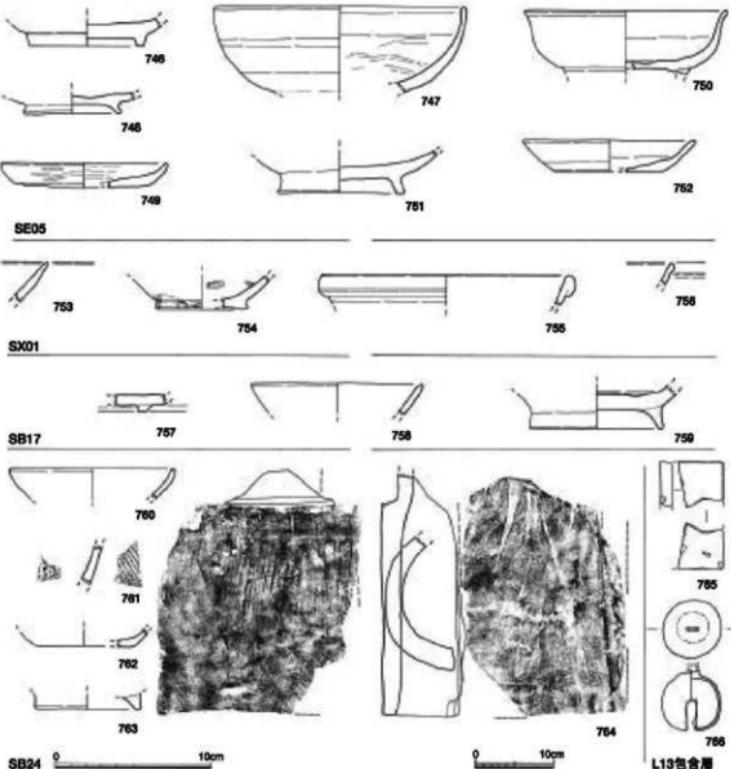


Fig.105 S E04井戸・SX01道路状遺構・SB17・24櫛立柱建物出土遺物実測図(1/3・764-1/6)

**出土遺物** (Fig.102 PL.45) 717～719は越州窯系I類青磁碗。717が口径14.6・718は16.0で縁ヘラ押し線を有す。719は16.4cm。720は白磁I類碗。口径13.0cm。721は無釉陶器瓶底部。722は綠釉壺肩部。径14.4cmで胎土は灰白色。723は黒色土器A塊。口径14.8器高6.3cm。724は黒色土器B類?。口径13.2cm。725～737は土師器。外底は全てヘラ切り。725～728は塊。725は口径13.0器高5.6cm。726は12.4×4.5・727は12.5×5.1・728は9.7×3.9cm。729～735は壺。口径11.0～13.8器高2.7～4.5cmを測り、730・734・735は板压痕を残す。736は脚付盤。口径27.2cm。737は蓋で口径21.8cm。738は滑石石鍋転用の温石。739～742は平瓦。739は3Aa類小斜格子叩。740は3Ab類中斜格子叩。741は3B類二重格子叩か。742は5類叩。PL.45-743～745は鉄滓。

以上9世紀末～10世紀初を中心とする。

**SE05** (Fig.100 PL.28) SE05は、方形区画西24m程に位置する。径1.1m深さ1.75mの小型の円形掘り方で、底面で55×45cmを測る。図示はされていないが、写真には底近くに方形に立ち上がる壁面と板・棒材が幾つか写り込んでおり、方形板組の井筒の可能性がある。

**出土遺物** (Fig.105 PL.45) 746は越州窯系I類輪高台碗。底径7.4cm。747は黒色土器A塊。口径16.2cm。748・749は黒色土器B類。748は塊で低小さな高台。底径6.2cm。749は皿。口径10.6器高1.6cm。外底はヘラ切り。750～752は土師器。外底は全てヘラ切り。750・751は塊。750は口径13.0cm。低い体部で、高台を欠く。751はやや高い高台で底径8.1cm。752は皿。口径11.0器高2.0cm。

以上10世紀末～11世紀初を中心とする。

**(4).道路状遺構 (SX)** 道路状遺構は、北東方向の地形に沿うSB26～SB20間の幅30m長さ100m程の帶状に土壙・井戸・溝とともに分布する。調査当時は道路としての認識はなく、カンナガシ等の遺歴遺構等を考え不明遺構として取り扱い、SX01に重なるSX02の波板状遺構は、並列する土壙SK58～67として取り扱っている。

**SX01** (Fig.103) 調査区北西隅で検出され、現況で幅2.8～4.0m長15.3mを測り、等高線に直交のN-38.5°～Eに直線的に延びる。溝SD47・48がほぼ平行する。全体を25cm程掘り下げ中央に2.5×0.6m深さ20～30cm程の60～80cm間隔で並列する波板状遺構を掘削する。記憶では砂質の強い覆土であったように思う。

**出土遺物** (Fig.105) 753・754は越州窯系I類碗。754は蛇目高台で径5.8cm。755・756は白磁碗。755はIV類で口径16.0cm。756はI類の玉縁口縁片。他に須恵器・土師器黒色土器小片が少量出土。

以上8世紀末～10世紀中を中心とする。755はSX02からの混入が考えられる。

**SX02** (Fig.103) 道路状遺構SX01に、南北方向N-6.5°～Eに重なる遺構で、並列する波板状遺構のみが残存すると思われる。SX01同程度の構造とすると幅4m程に復原される。遺物は須恵器・土師器の他瓦器塊の小片が目立ち、内容的にもSX01に後出する。

**(5).掘立柱建物 (SB)** 掘立柱建物はSB17・18・20・24・25・26の6棟を検出。東西棟はSB17・18で、他は北東方向の地形に沿う帶状に他の遺構群とともに分布する。SB24・26以外は梁間1・2間の小型側柱建物である。

**SB17** (Fig.104) 群の東寄りに位置し1×2間の建物で4.7×2.5mを測る。棟をN-90°～Wにとる。場所は円形でやや大きく径45～55深さ18～26cmを測る。

**出土遺物** (Fig.105) 757は須恵器高台壺底部片。758・759は土師器。758は壺で口径11.0cm。759はやや高い高台壺で底径8.6cm。他に鉄滓2点出土。以上9世紀前半～10世紀初を示す。

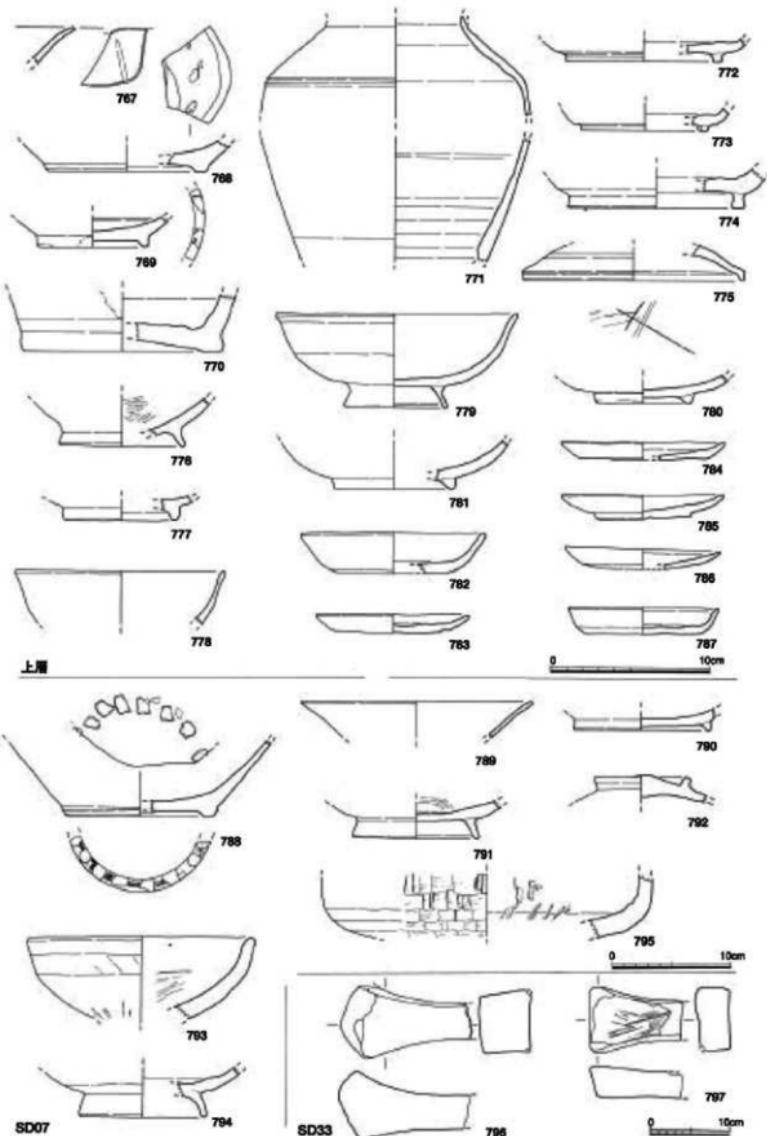


Fig.106 SD07・33溝出土遺物実測図・1(1/3・771・795~797-1/4)

**SB18 (Fig.104)** 軒を描えてSB17の東7m、井戸SE02の北2mに位置し、一連の遺構群の可能性がある。2×2間4.5×3.15mを測る南北棟で方位をN-1°-Wとする。柱間は桁行が2.0~2.2、梁間が1.4~1.8mと狭く堀方は円形でやや大きく径34~65深さ20~28cmを測る。

遺物は須恵器・土師器の小片が出土する。8~9世紀。

**SB20 (Fig.104)** 群の北側に位置し、3×1間5.1×2.75mを測る。方位をN-24.5°-Eとする。柱間は桁行が1.4~1.7mと狭い。堀方は円形でやや大きく径38~55深さ22~34cmを測る。

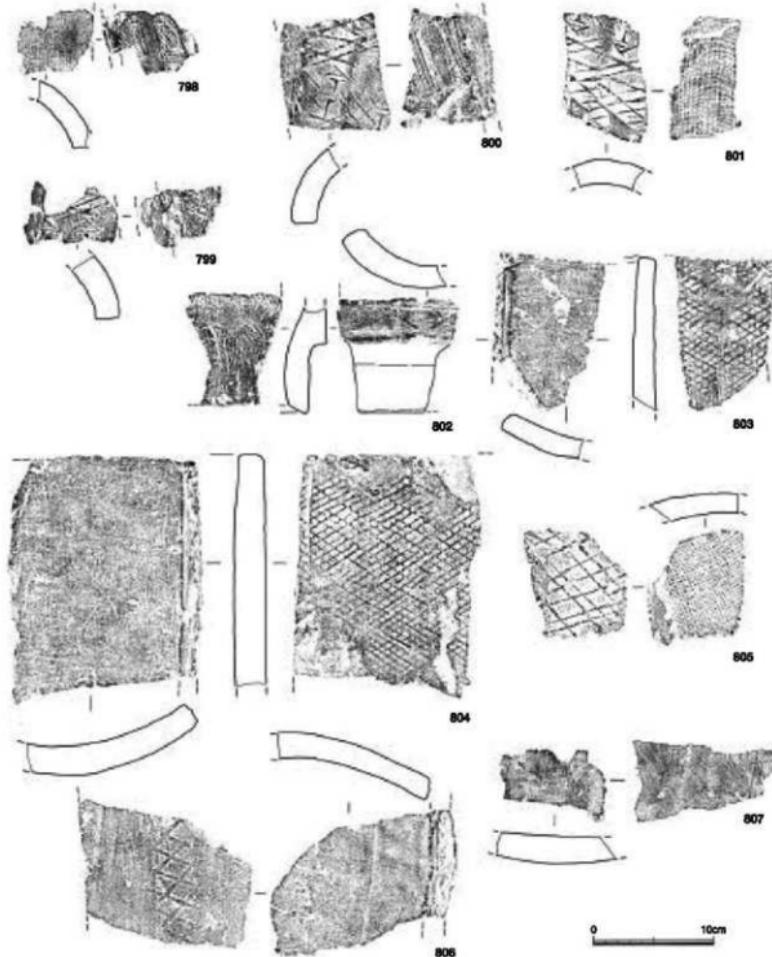


Fig.107 SD07溝出土遺物実測図・2(1/4)

遺物は須恵器・土師器の小片が出土する。8~9世紀。

**SB24 (Fig.104 PL.28)** 群の西側に位置し、 $3 \times 2$ 間 $6.4 \times 3.7m$ を測る大型の建物。北の平側中央に $1 \times 1$ 間の庇を持つ。方位をN- $76.5^\circ$ -Wにとる。柱間は桁行が $2.0 \sim 2.3$ 、梁間が $1.8m$ と狭く、堀方は円形で大きく、径 $70 \sim 125cm$ を測る。詳細な図が無く写真から深さ $50 \sim 60cm$ 程と思われる。庇と身舎間中央に、 $1.35 \times 1.75m$ の円形の掘方に径 $0.85m$ の井筒と思われる井戸を設ける。

**出土遺物 (Fig.105 PL.45)** 760~763は柱穴出土。760は黄味を帯びた白磁II類皿。口径 $12.6cm$ 。761は須恵器毫小片。763は塊で低小さな高台。底径 $6.8cm$ 。762は皿。外底ヘラ切りで径 $6.0cm$ 。764は井筒出土の丸瓦で縦平行線に半数の右上がり平行線格子叩を粗くナデ消す7類。丈の短い瓦で胴部長 $27.5$ 復原径 $19cm$ 。以上11世紀後半~12世紀初を示す。

**SB25 (Fig.104)** 群の南西端に位置し、8世紀後~末のSD47に切られる。 $3 \times 2$ 間 $5.6 \times 3.25m$ 柱間は $1.5 \sim 1.9m$ を測る。方位をN- $66^\circ$ -Wにとる。堀方は円形で径 $30 \sim 65cm$ を測る。

遺物の出土は無いがは8世紀後~末のSD47に切られ、これに前出する。

**SB26 (Fig.104)** SB25に軒を揃え北西 $5m$ に位置する、 $2 \times 2$ 間 $4.1 \times 3.8m$ の縦柱建物。柱間は $1.65 \times 2.15m$ 、方位をN- $22.5^\circ$ -Eにとる。堀方は円形で径 $35 \sim 50cm$ を測る。遺物の出土は無い。

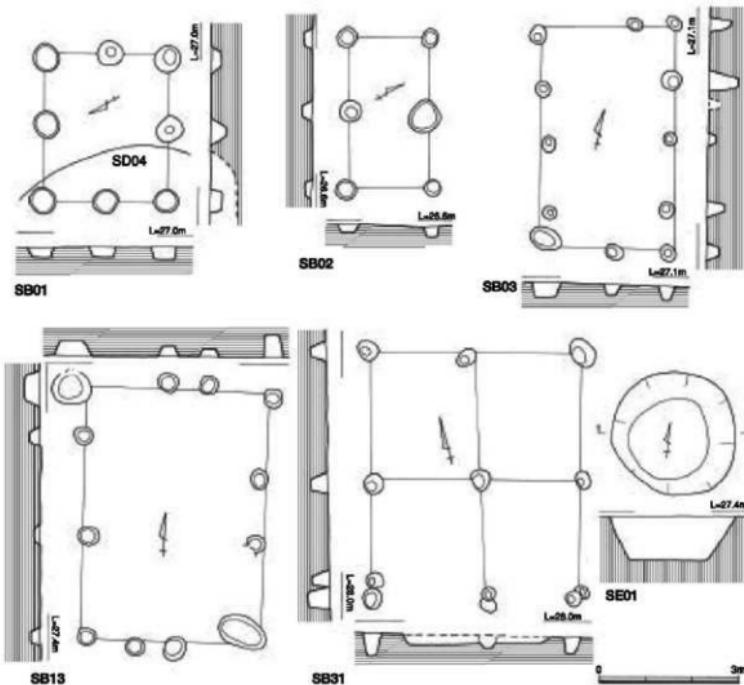


Fig.108 S C01住居跡・S B01~03・13・31掘立柱建物出土状況実測図(1/100)

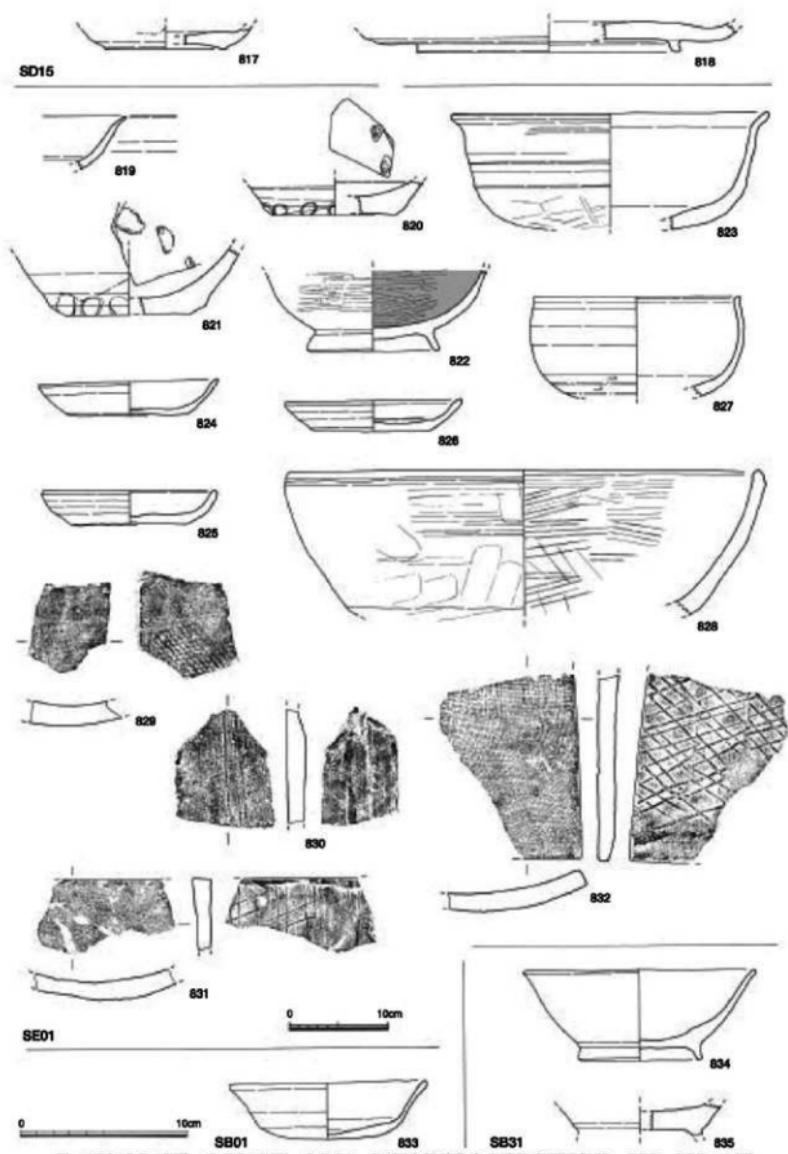


Fig.109 SD15溝・SE01井戸・SB01・31標立柱建物出土遺物実測図(1/3・829~832-1/5)

(6).検出面出土遺物 (Fig.105 PL.45) 765は黄白色の石帶鉈尾破片。現況で $28\times27\times7$ mmを測る。表・側面は平滑に研磨され裏面は粗研ぎで3カ所に鼻孔状のかがり穴を穿孔する。766は銅鉈の半欠品で、鉈の上半も欠く。径2.5残高2.5cmを測る。

### 3). C群

A群の北部西半、地形に並行するSD14とSD07に挟まれた区域で、東とA群側の南に遺構が集中する。溝はSD07・15・33・35の4条、建物はSB01・02・03・13・31の5棟、土塙はSK16・40・41の3基、井戸はSE01の1基を検出した。

(1).溝 (SD) 溝はSD14とSD07が45~60mの間をとり地形に並行して北西に流れる。SD33・35はSD07の南北両側に並行し、これに切られる。南端でSD02と重なる部分で東に折れSD42・43に連なる可能性がある。

**SD07** (Fig.49) 方形区画北東隅のSD01から北西に等高線に並行して弧を描いて流れる大溝で最大幅7.6最深部0.33mを測る。

出土遺物 (Fig.106・107 PL.46) 767・768は越州窯系青磁碗 I類。767は輪高台で径9.8cm。768は輪花で下に縦ヘラ押し線を施す。769は白磁 I類碗で輪高台。径7.0cm。770は平底の黒褐釉陶器瓶。771~775は須恵器。771は瓶。772・773は高台壺。774は壺底部。775は壺蓋。776は黒色土器A類塊。777・778は黒色土器B類塊。777は低小高台。778は口径13.2cm。779~787は土師器。壺・皿の外底は全てヘラ切り。779~781は壺。779は口径15.2器高6.4cm。780・781は低小高台。782は壺口径11.6器高2.5cm。783~787は皿。783は口径9.6器高1.2・784は10.2×1.1・785は外底に板压痕10.2×1.5・786は9.8×1.4・787は9.4×1.6cm。788~794は下層粘質土層出土。788は越州窯系青磁碗 I類。789は縁軸皿。口径14.6cm胎土は灰色。790・792は須恵器。790は高台壺。792は輪状摘み蓋。径6.1cm。791は黒色土器A類塊。793・794は土師器塊。795は石鍋底部。径28cm。Fig.107は瓦。116片24.9kg出土。798~800は丸瓦。798は1類縁目叩。799~801は3Ac右上がり複線大斜格子「今行」銘叩。802~807は平瓦。802~804は3Aa小斜格子叩。805・806は中斜格子叩。807は5類縦平行線に半数右上がりの格子叩。PL.46-808~813は基石。814・815は鉄滓。816は土製送風管。以上10世紀前半~11世紀後半までの資料を含む。

**SD15** (Fig.49) SD14の南、4m東で並行し、SD08に切られる。最大幅2.1最深部0.15mを測る。出土遺物 (Fig.106 PL.46) 817は越州窯系青磁 I類皿で全面施釉。底径7.2cm。818は須恵器盤で底径15.8cm。以上8世紀末~9世紀初と思われる。

**SD33・35** (Fig.49) SD07の南半30mの両側に45mの間隔で並行し、これに切られSD34・36・38を切る。南端でSD02と重なる部分で東に折れ、同間隔のSD42・43に連なる可能性がある。最大幅1.1最深部0.11mを測る。出土遺物 (Fig.106 PL.46) 796・797は砂岩製の荒砥。796で断面9.5×8.5cm。797は分割され断面8.4×4.0cm。他に須恵器・土師器小片が出土。9世紀代か。

(2).土塙 (SK) 土塙はSK16・40・41の3基が検出され、SD03・14に近接して分布する。1.76~4.9mの浅い不定形で、須恵器・土師器片・瓦・鉄滓等が出土する。9~11世紀。

(3).井戸 (SE) 井戸はSE01の1基のみが、中央SD03に近接して位置する。

**SE01** (Fig.108) 径1.48×1.3m深さ80cm程の円形の掘り方である。

出土遺物 (Fig.109 PL.46) 819～821は越州窯系青磁I類。819は皿。820・821は平底碗。822は黒色土器A類碗。823～828は土師器。823は塊。824～826は皿。827は壺で古墳時代の混入。828は鉢。829～832は平瓦。829は3Aa小斜格子叩。830・831は5類縦平行線に右上がり平行線の格子叩。832は3Ab中斜格子叩。以上10世紀末～11世紀初を中心とする。

(4)掘立柱建物 (SB) 掘立柱建物はSB01・02・03・13・31の5棟を検出。南北棟はSB03・13で、他は北東方向の地形に沿い東側に分布する。SB31以外は梁間1～3間の小型掘立柱建物である。

**SB01** (Fig.108 PL.29) 中央の東寄りに位置する2×2間の建物で3.1×2.2mを測る。棟をN-57°-Wにとる。柱間は1.25～1.6mで梁間が狭い。堀方は円形でやや大きくて約55cmで描い深さも20～30cmと近い。柱は径20cm弱を測る。出土遺物 (Fig.109) 833は土師器壺で口径11.8cm器高3.5cm。外底はへら切り。他に須恵器・土師器小片・砥石が出土する。9世紀中～後半。

**SB02** (Fig.108 PL.29) SB01の北東9m、SD07に接してこれに沿う。2×1間の建物で3.3×1.8mを測る。棟をN-68°-Wにとる。柱間は1.6～1.8mで桁行が狭い。堀方は円形で径30～65cmで深さ15～20cmを測る。遺物は須恵器・土師器小片が出土する。10～11世紀か。

**SB03** (Fig.108 PL.29) 南端中央東寄りに位置し、SD03に接してこれに沿う南北棟。4×2間4.8×2.9mを測り、棟をN-14°-Wにとる。柱間は0.9～1.4mでまとまりがない。堀方は円形で径25～40cmで深さ16～60cmを測る。遺物は須恵器・土師器小片が出土する。11世紀か。

**SB13** (Fig.108 PL.29) 北西側のSD14の屈曲部近くに位置する南北棟で、3×3間5.4×3.8mを測り、棟を0°にとる。柱間は0.8～2.15mでまとまりがない。堀方は円形で径35～70cmで深さ18～45cmを測る。

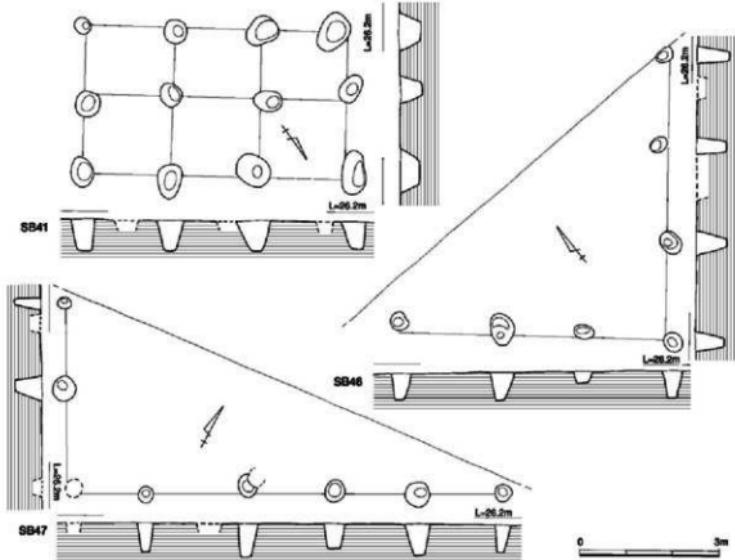


Fig.110 S B41・46・47掘立柱建物出土状況実測図(1/100)

遺物は須恵器・土師器小片が出土する。9世紀末～10世紀初か。

SB31 (Fig.108) 南西隅近くに位置する、 $2 \times 2$ 間 $5.25 \times 4.5m$ の純柱建物。柱間は $1.95 \times 2.7m$ 、方位をN-14°～Eにとる。南梁側の柱穴が切り合っており1度建て替えが行われる。端方は円形で径28～60cmで深さ25～50cmを測る。出土遺物 (Fig.109) 834・835は土師器高台壺で、835は口径13.8cm高5.4cm。他に須恵器・黒色土器小片・鉄滓が出土する。9世紀末～10世紀初。

#### 4). D群

A群の北部東半、地形に並行するSD07と磁北方向のSD40に挟まれた区域で、南北両端に遺構が集中する。溝はSD34・36・37・38・40の5条、建物はSB41・46・47の3棟、土塁はSK01・68の2

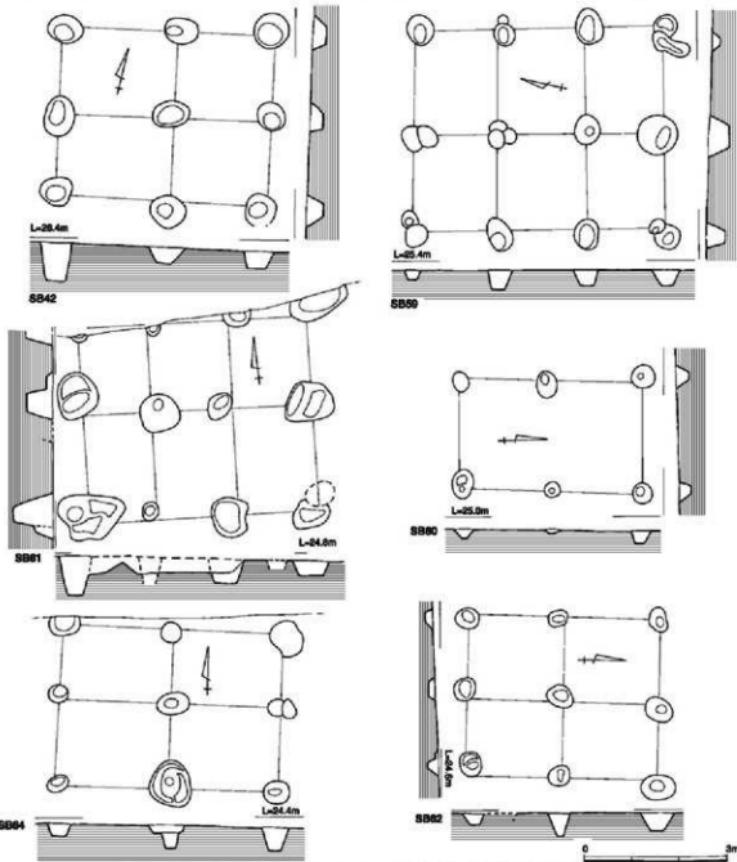


Fig.111 S B42・59・60～62・64櫛立柱建物出土状況実測図(1/100)

基、井戸はSE07の1基を検出した。

(1)溝 (SD) 溝は方形区画の東西溝SD02とこれの東端で北に屈曲して東の区画をつくるSD40が北流する。南にSD08から北東に延び、SD40に切られるSD36・37・38の小溝がある。

SD36・37・38 (Fig.49) SD08の延長上に位置し、等高線に直交して北東に延びる小溝で、SD07・33・40に切られる。最大幅0.5~1.0最深部0.1~0.3mを測る。

出土遺物 (Fig.112) 836・837はSD36出土の須恵器。836は壺蓋で口径14.5cm高1.7cm。837は高台壺で、底径8.0cm。他に土師器・黒色土器・瓦小片を出土する。9世紀か。

SD40 (Fig.49) 方形区画の東西溝SD02の東端で北に屈曲して磁北方向に流れ東の区画をつくる溝で最大幅1.8最深部0.31mを測る。遺物は須恵器・土師器小片が出土する。10~11世紀。

(2)土壤 (SK) 土壌はSK01・68の2基が南北両端で検出された。1.98~4.0mの浅い不定形で、SK01からの遺物の出土はないがSK68から須恵器・土師器・黒色土器片・瓦片等が出土する。10世紀。

(3)井戸 (SE) 井戸はSE07の1基のみが、SD38の北東隅に、これに沿い近接して位置する。径1.45×0.8m深さ160cm程の隅丸方形の掘り方で、他の円形と異なりトイレ造構に似る。遺物は須恵器・土師器片等が出土する。9世紀か。

(4)掘立柱建物 (SB) 掘立柱建物は北東部でSB41・46・47の3棟を検出。いずれも北東方向の地形に沿い北側に分布する。SB41は総柱、SB46・47は側柱建物で切り合い関係にある。

SB41 (Fig.110 PL.30) 北部中央に位置する3×2間5.8×3.2mの総柱建物で、棟をN-48°-WにとりSD38に平行する。柱間は梁間1.45~1.75桁行1.85mで梁間が狭い。端方は円形でやや大きく径35~60深さ45~65cmを測る。遺物は須恵器・土師器片等が出土する。9世紀か。

SB46 (Fig.110 PL.30) SB41の北東6mにこれに並行して位置し、半分が調査区外に延びる。3+a×3+a間6.3+a×6.4+a mの側柱建物で、棟をN-50°-Wにとる。柱間は1.8~2.2mを測り、端方は円形で径30~55深さ55~65cmを測る。遺物は須恵器・土師器片等が出土する。

SB47 (Fig.110 PL.30) 調査区北端でSB46と切り合い、同様に全体の半分が調査区外に延びる。5+a×2+a間9.2+a×4.4+a mの側柱建物で、棟をN-62.5°-Eにとる。柱間は1.8~2.2mを測り、端方は円形で径30~55深さ25~55cmを測る。遺物は須恵器・土師器片等が出土する。。

## 5). E群

方形区画北東の、南北溝SD40と東西溝SD42・43に方形に区画された区域で、北東部に総柱建物の倉庫群が分布する。溝はSD39・42・43の3条、建物はSB42・59・60・61・62の6棟、土壌・井戸の検出はない。

(1)溝 (SD) 溝は方形区画の西を画する南北溝SD40と、約5m間隔で並行し南を画する東西溝SD42・43、D群SD36の延長に位置し北東に延びるSD39があり、何れもA群に比べ小溝である。

SD42・43 (Fig.49 PL.30) 約5m間隔で並行し南を画する東西溝で、西端部はA群区画溝に接する前に途切れ、55m程並行して東部は北東に開く。SD42は建物SB42に切られ、SD43西部は2条が分流する。規模・残存状況から、D群SD33・35がこれらに連なる可能性がある。最大幅0.3~1.3最深部0.16~

0.35mを測る。

出土遺物 (Fig.112 PL.47) 838～845はSD42出土。838は土師器塊。839は新羅無釉陶器壺小片。840は黒色土器A類塊。841は黒色土器B類塊。842～845は瓦器塊他に瓦小片出土。846はSD43出土新羅無釉陶器壺小片。以上10世紀から11世紀末～12世紀初の時期を示す。

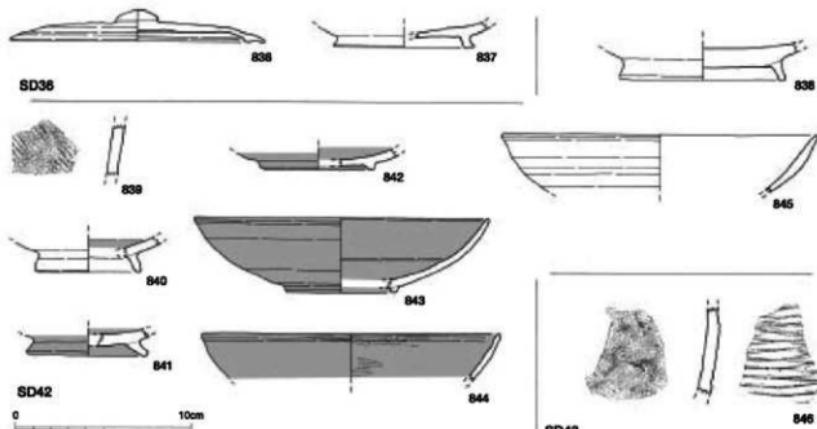


Fig.112 S D36・42・43溝出土遺物実測図(1/3)

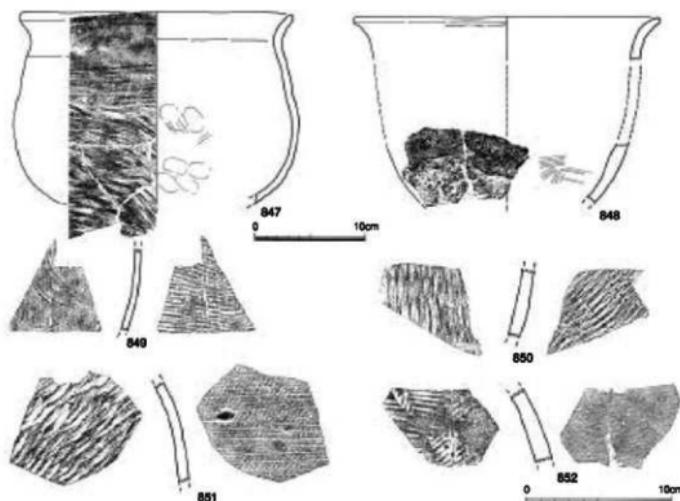


Fig.113 その他遺構の出土遺物実測図(1/3・847～848-1/4)

**SD39** (Fig.49) D群SD36の延長に位置し、北東に延びる小溝で、最大幅0.4最深部0.14mを測る。遺物は白磁皿・須恵器・土師器小片が出土する。11世紀後半～12世紀前半。

(2)掘立柱建物 (SB) 掘立柱建物は北東部でSB59・60・61・62の5棟、南西部でSB42の1棟、計6棟を検出した。いずれも縦柱の倉庫で倉庫群を形づくっている。磁北に近い方位をとるが、配置に規則性はない。

**SB42** (Fig.111) 南西隅に位置し区画溝SD42を切る。 $2 \times 2$ 間 $4.4 \times 3.7$ mの縦柱建物で、棟をN- $80^\circ$ -Eにとる。柱間は梁間1.7～1.85桁行2.05～2.4mで梁間が狭い。堀方は円形でやや大きく径55～75深さ30～80cmを測る。遺物は須恵器・土師器小片等が出土する。12世紀か。

**SB59** (Fig.111) 北東に分布する倉庫群の南端に位置する $3 \times 2$ 間 $5.3 \times 4.3$ mの縦柱建物で、棟をN- $11^\circ$ -Wにとる。柱間は梁間2.0～2.25桁行1.6～1.94mで桁行が狭い。堀方は円形で径35～85深さ18～40cmを測る。柱穴数個が切り合っており建て替えが成される。遺物の出土はない。

**SB60** (Fig.111) SB59の東6m程に位置する $2 \times 1$ 間 $3.9 \times 2.3$ mの小型の建物で、棟をN- $7^\circ$ -Wにとる。柱間は桁行1.8～1.9mで桁行が狭い。堀方は小さな円形で径30～45深さ8～26cmを測る。遺物は須恵器・土師器・瓦器小片が出土する。11～12世紀。

**SB61** (Fig.111) 調査区北端に位置する $3 \times 2$ 間 $4.7 \times 4.1$ mの縦柱建物で、棟をN- $8^\circ$ -Eにとる。柱間は梁間1.85～2.25桁行1.4～1.7mで桁行が狭い。堀方は大きな円形で径70～95深さ30～85cmを測る。遺物は須恵器・土師器・黒色土器B類小片が出土する。11世紀か。

**SB62** (Fig.111) 倉庫群の中間に位置する $\times 2$ 間 $4.2 \times 3.4$ mの縦柱建物で、棟をN- $3.5^\circ$ -Eにとる。柱間は梁間1.6～1.8桁行2.1mで梁間が狭い。堀方は円形で径40～70深さ15～35cmを測る。遺物は須恵器・土師器・黒色土器B類小片が出土する。11世紀か。

**SB64** (Fig.111) 調査区北東端に位置する縦柱建物で半分は調査区外に延びる。 $2 \times 2 + a$ 間 $4.7 \times 3.3 + a$ mを測り棟を $0^\circ$ にとる。柱間は梁間2.35桁行1.55～1.8mで桁行が狭い。堀方は円形で径40～90深さ25～50cmを測る。遺物は須恵器・土師器小片が出土する。

## 6). その他の資料 (Fig.113)

847～849はA群SK36出土。847は玄界灘式の壺。外面は粗い平行叩で煤が付着し内面は当具痕をナデ消し荒れる。848も製塙土器で外面下部は火熱で板状に剥離する。849は新羅無釉陶器壺小片。850

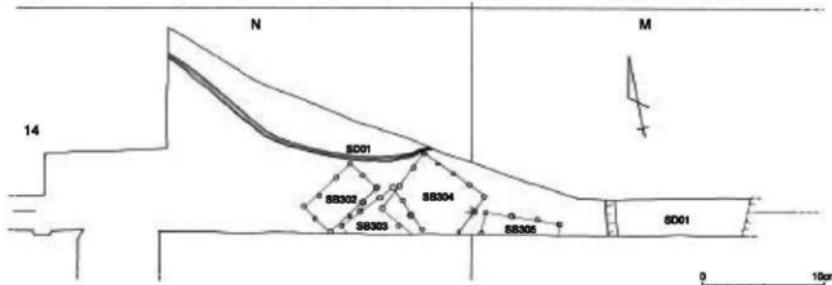


Fig. 114 第2号排水路1区遺構分布図(1/500)

～852も新羅無釉陶器壺で850はB群SK70出土。851・852は包含層出土。

## 2. 2号支線排水路1区 (Fig.56)

2号支線排水路区は本体工事区1～3区の南に接して、東西方向に幅3m長さ510mにわたる調査区で、本体3区の西側130m程までを1区、本体1区の東60～90mの範囲を2区とした。

1区は本体3区との間に小河川SD01をはさんでおり、地形的には4区と同一の低台地に立地する。調査区はS27号墳部分で第12次調査区と交差する。標高は29m程である。古代～中世の遺構は掘立柱建物SB302～305の4棟、小溝SD01と小河川SD01を検出している。小溝と小河川を同じ遺構名で取り上げたため混在しているが殆どの資料は小河川SD01からの出土である。

2区からは当該期の遺構は検出されていない。

(1)溝・小河川 (SD) 溝SD01は調査区西部の北に広がる部分に南北に弧を描いて検出され、小河川SD01は3区との間に30m程の幅で検出され、多量の鉄滓を出土した。

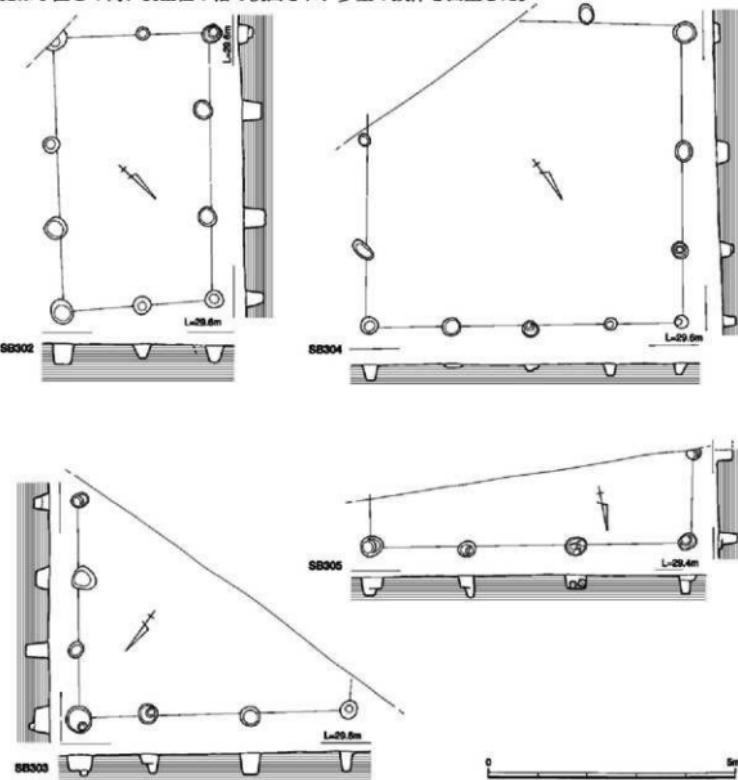


Fig.115 S B302～305掘立柱建物出土状況実測図(1/100)

溝SD01 (Fig.114) 建物群の北で検出され現況で長さ24m、南西に緩く弧を描いて延び、最大幅0.35最深部0.35mを測る。出土遺物は特定できない。

小河川SD01 (Fig.114 PL.31) 建物群の東、3区との間に30m程の幅で北に流れる小河川で、幅3mの調査分でコンテナ54箱の鉄滓を検出している。

出土遺物 (Fig.116 PL.48) 853～856は越州窯系青磁碗。853・855はI類。856はII類。854はIII類。857は白磁V類碗。858はIV類碗。859は越州窯系瓶胴部。860・861は須恵器高台坏。862は土師器高台坏。863～865は瓦。863は単弁8葉の軒丸瓦。864は複弁8葉の軒丸瓦。865は扁行唐草文軒平瓦。866は鉄滓が接着した輪羽口。867は粘板岩製仕上げ砥石。PL48-868は鉄滓。

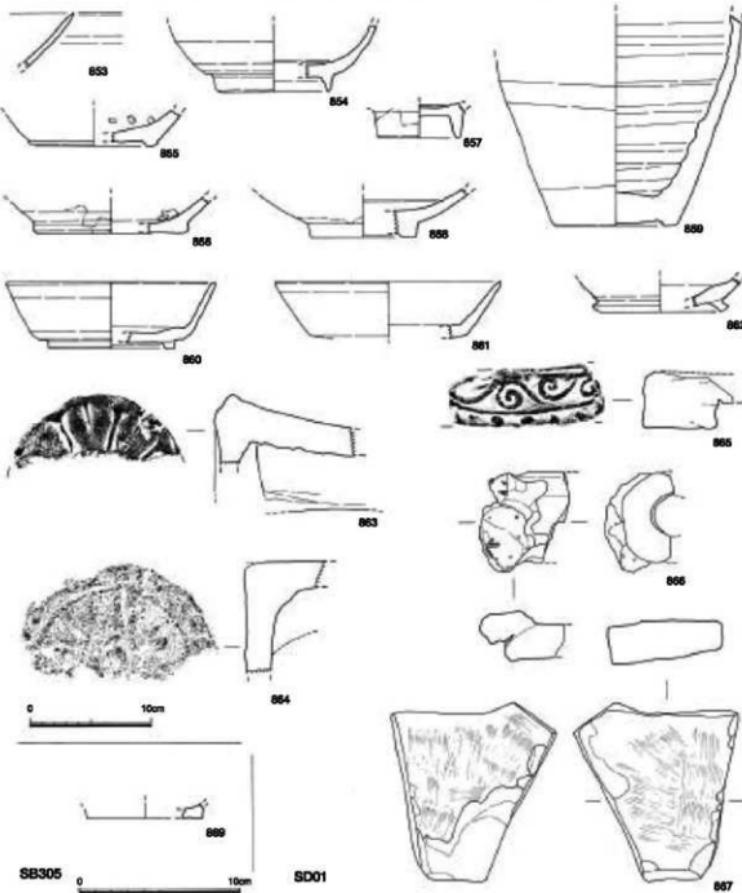


Fig.116 第2号排水路1区出土遺物実測図(1/3・863～865・867-1/4)

以上10世紀後半から11世紀末～12世紀初の時期を示す。

(2).掘立柱建物(SB) 掘立柱建物は溝・小河川間でSB302～305の4棟を検出。全て側柱建物で柱穴は小さく、中世の可能性が高い。いずれも北東方向の地形に沿うが規則的な配置ではない。SB302～304は切り合い関係にある。

**SB302 (Fig.115)** 建物群の西端に位置する3×2間5.4×3.05mの建物で、棟をN-38°-Eにとり柱間は梁間1.35～1.75桁行1.7～2.2mで梁間が狭い。堀方は円形で小さく径35～45深さ28～40cmを測る。柱径は12cm程。遺物は土師器壺片が出土する。

**SB303 (Fig.115)** SB302の東に接してSB304と切り合って位置する3+a×3+a間5.4+a×4.4+a mの建物で、棟をN-47°-Eにとり柱間は1.35～2.0mを測る。堀方は円形で小さく径30～50深さ28～46cmを測る。柱径は16cm程。遺物は須恵器・土師器・黒色土器片が出土する。

**SB304 (Fig.115)** 建物群の中央にSB303と切り合って位置する4×3間6.35×6.0mの建物で、棟をN-58°-Eにとり柱間は梁間で1.4～2.0桁行で1.5～1.7mを測る。堀方は円形で径30～50深さ25～46cmを測る。

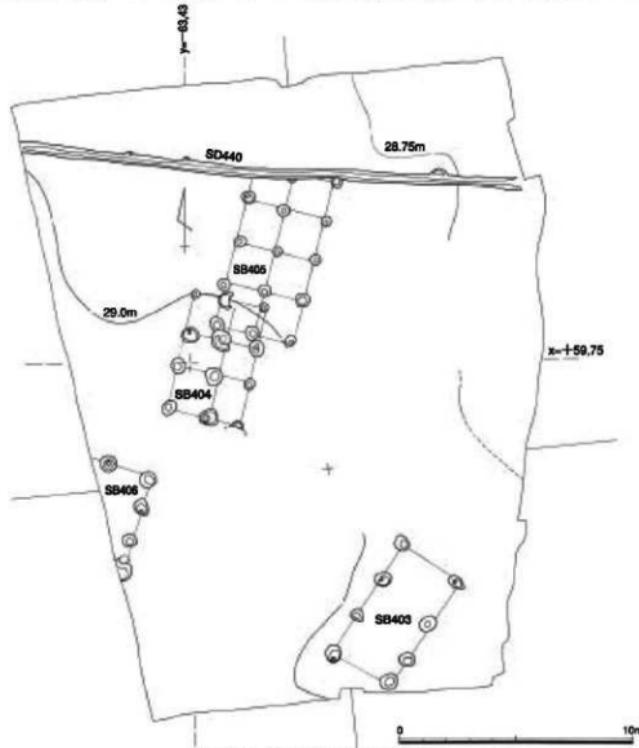


Fig.117 4区遺構分布図(1/200)

柱径は16cm程。遺物は須恵器・土師器片が出土する。

**SB305 (Fig.115)** 建物群の東端に位置する $3 \times 1 + a$ 間 $6.5 \times 1.8 + a$ mの建物で、棟をN-85°-Wにとり柱間は1.8~2.2mを測る。烟方は円形で小さく径30~45深さ8~35cmを測る。一つには根石を据える。柱径は15~20cm程。出土遺物 (Fig.116) 869は土師器皿で外底は糸切り。底径7.2cm。PL.48-869・870は鉄滓。14~15世紀。

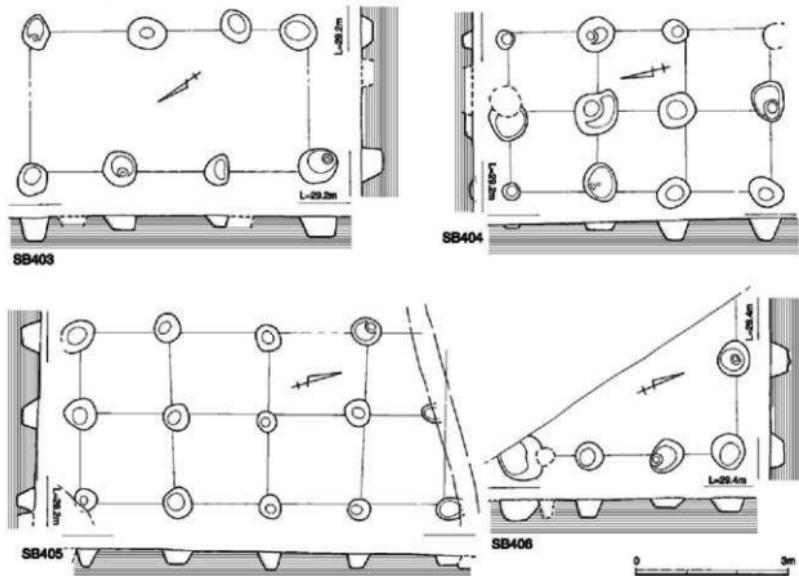


Fig.118 SB403・404・405・406実測図 (1/100)

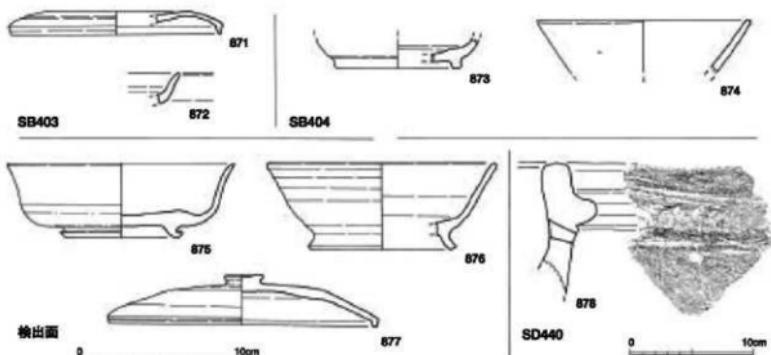


Fig.119 第2号排水路4区出土遺物実測図(1/3・878-1/4)

### 3. 4区 (Fig.117)

4区は3区の北西約100m、第12次（野方・金武線8次）調査I'区の東に隣接する。標高は29m程度である。現地表の等高線と第11次調査・2号排水路1区で検出された小河川を合わせると、1~3区が立地する低台地の北の、別個の低台地上に立地している。

(1)掘立柱建物 (SB) 516m<sup>2</sup>の狭い調査区に、古墳時代の大型掘立柱建物SB401・402跡地を東西・北の三方で囲むように、これに沿ったやや大型の建物SB403~406の4棟を検出した。

**SB403 (Fig.118 PL.31)** 跡地東に位置する3×1間5.5×2.75mの総柱建物で柱間は桁行で1.4~2.3m。方位をN-34°-Eにとり、堀方は大きな円形で径60~70深さ30~45cmを測る。出土遺物 (Fig.119)

871・872は須恵器。871は壺蓋で口径12.6cm。872は皿口縁片で器高約2cm。他に土師器小片等が出土。8世紀前半~中頃。

**SB404 (Fig.118 PL.31)** 跡地北に位置する3×2間5.15×3.2mの総柱建物で、SB405を切る。柱間は梁間で1.6桁行で1.65~1.75mで良く揃う。方位をN-13°-Eにとり、堀方は大きな円形で径35~85深さ5~45cmを測る。

**出土遺物 (Fig.119)** 873は須恵器高台壺。底径7.6cm。874は土師器壺。口径12.8cm。他に鉄片・鉄滓等が出土。8世紀後半~末。

**SB405 (Fig.118 PL.31)** 跡地北に位置しSB403に切られる4×2間7.2×3.4mの総柱建物。柱間

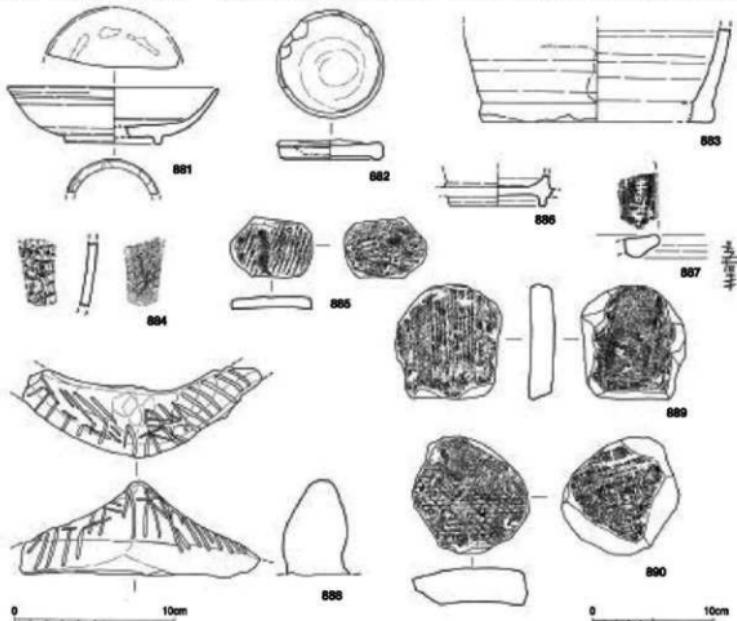


Fig.120 第9次調査出土地点不明遺物実測図(1/3・888~890-1/4)

は渠間で1.6~1.75桁行で1.6~1.85mで比較的良く揃う。方位をN-26°-Eにとり、堀方は円形で径40~65深さ18~35cmを測る。遺物の出土はない。8世紀前半~中頃か。

**SB406** (Fig.118 PL.31) 跡地西に位置する側柱建物で大部分が西の調査区外に広がる。現況で $3 + a \times 1 + a$  間4.3 +  $a \times 2.6 + a$  mを測り、柱間は1.4~1.9m。方位をN-20°-Eにとり、堀方は大きな円形で径55~90深さ18~35cmを測る。遺物の出土はない。

## (2). その他の遺物。 (Fig.119 PL.48)

Fig.119はその他の遺構・検出面等からの出土遺物。875~877は検出面出土須恵器。875・876は高台壺。875は口径13.8器高4.5cm。876は口径14.0器高5.3cm。877は壺蓋。口径16.2器高3.1cm。878は近世溝SD440混入の石鍋片で、唯一の銅付きである。

## 4. 出土地点不明資料 (Fig.120)

881は越州窯系青磁I類皿。口径13.0cm。882は白磁I類皿高台を用いた瓦玉。883は褐釉水注の底部か。径14.2cm。884は新羅無釉陶器壺小片で内面に格子当具痕。885は同破片の土器片円盤。886は須恵質托上塊。887は赤焼き須恵器壺口縁片で内面にヘラ書き文字がある。888は鬼瓦の頂部庇部分。889はO類繩目叩瓦片の瓦玉。890は3Aa小斜格子叩瓦片の瓦玉。

## 5. 小結

本報告では第9次調査の古代~中世の生活遺構の報告を行った。

74×100m程の方形区画内のA群で溝13条・建物14棟・土壙6基の計33基、B群は溝4条・建物6棟・土壙11基・井戸5基・道路状遺構2条の計28基で井戸集中区となっている。C群は溝4条・建物5棟・土壙3基・井戸1基の計13基、D群で溝5条・建物3棟・土壙2基・井戸1基の計11基、E群は溝3条・総柱建物6棟の計9基で西・南を矩形に区画された倉庫地区といえる。2号排水路1区は溝・小河川2条・中世建物4棟計6基、4区で建物4棟、総計106基の遺構を検出した。

遺構の主体は溝と建物で、溝は8世紀~12世紀初までの多量の遺物が混在し、一方建物は出土遺物が少なく時期比定を難しくしているが、あえて、時期毎の遺物量の多少・方位・切り合い等で判断して、8世紀代をI期・9世紀代をII期・遺物総量の増加開始期と瓦の1遺構当たりkg単位の出土が始まる時期を礎石建物方形区画遺構開始期と見なして9世紀後葉~10世紀初をIII期・10世紀をIV期・廃絶期の11世紀~12世紀初をV期として分布を見ると (Fig.121)、I期は4区の掘立柱建物4棟を中心に調査区西部に掘立柱建物7棟・小溝4条・土壙3基が散漫に分布し、地形の規制を受けている。4区は7世紀から引き継ぎ集落の中心を成している。II期は、4区は廃絶され1~3区西半に分布が移る。掘立柱建物3棟・小溝8条・土壙9基・井戸1基が分布し遺構の増加が始まる。磁北への規制も始まり、建物・井戸が一つのまとまりとなる。方形区画遺構開始期のIII期は1~3区中央に74×100m程の方形区画溝5条・区画中央南の南北方向に礎石建物SB205・208が軒を揃えて並列し、北側東西方向に桁行4~5間の側柱建物が3棟配置される。区画外の遺構は散漫で土壙2基・井戸1基が分布し、北西60m程の後線方向には道路状遺構SX01が位置する。北側の建物2棟も該期の可能性がある。IV期は継続された区画溝に東・北・北西に新たに区画溝が増加され11条に、区画内礎石建物は継続され、北西に2棟側柱建物が配置される。北のC区に2棟・D区に1棟・北東E区に5棟が配置され倉庫群を成す。土壙はB群を主に4基が、井戸は1基B群に分布する。道路状遺構SX01も継続され、2号排水路1区の小河川SD01では多量の鉄滓の堆積が始まる。

V期は各遺構が継続後11世紀末～12世紀初めに一斉に廃絶が始まり、方形区画A群のみで1,864片370.2kgにものぼる瓦が廃棄される。9次調査区での総検出量422kgの内88%をA群のみで占めており、A群に瓦葺建物が存在したことは間違いない。「今行」銘瓦は斜ヶ浦瓦窯である。遺構は溝15条・建物8棟・土壙3基・井戸1基が分布し道路状遺構SX01は南北方向のSX02に切り替わる。

遺物は多量の瓦の他、コンテナ394箱の鉄滓を検出。明確なものでもII期10箱・III期～14箱・IV期～63箱あり、II期以降継続的に製鉄が行われる。他に187点の越州窯系青磁・52点の邢窯・定窯系白磁・長沙窯系青磁・綠釉・灰釉・新羅無釉陶器・硯・「寺」「群」等の墨書き・刻書き土器・海の中道遺跡にも出土する八棱鏡・2点の石帶等官衙を裏付ける多量の遺物を検出した。

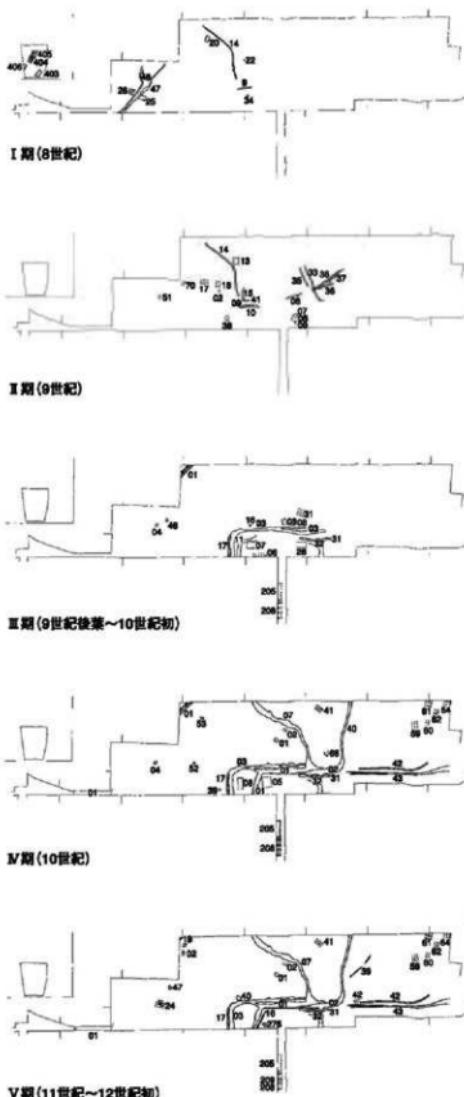


Fig.121 9次調査時期別遺跡分布図

## 第六章 おわりに

本報告では吉武遺跡群第4・6・9次調査での古代～近世の調査報告を行った。中心は8世紀から11世紀にわたる製鉄を作りうる官衙遺跡群で、9世紀後葉以降、9次調査区に道路状遺構を伴う、東西74mの溝に囲まれた方形区画に瓦葺きの礎石建物を擁する政府（政所）区・北東4次調査区にまたがって80m程の区画の正倉区・北西に井戸群の厨区・南6次調査Ⅲ区に鍛冶炉群の工房区とて分けられた官衙遺跡であることが判明した。早良平野での瓦葺きの唯一の官衙遺跡である。

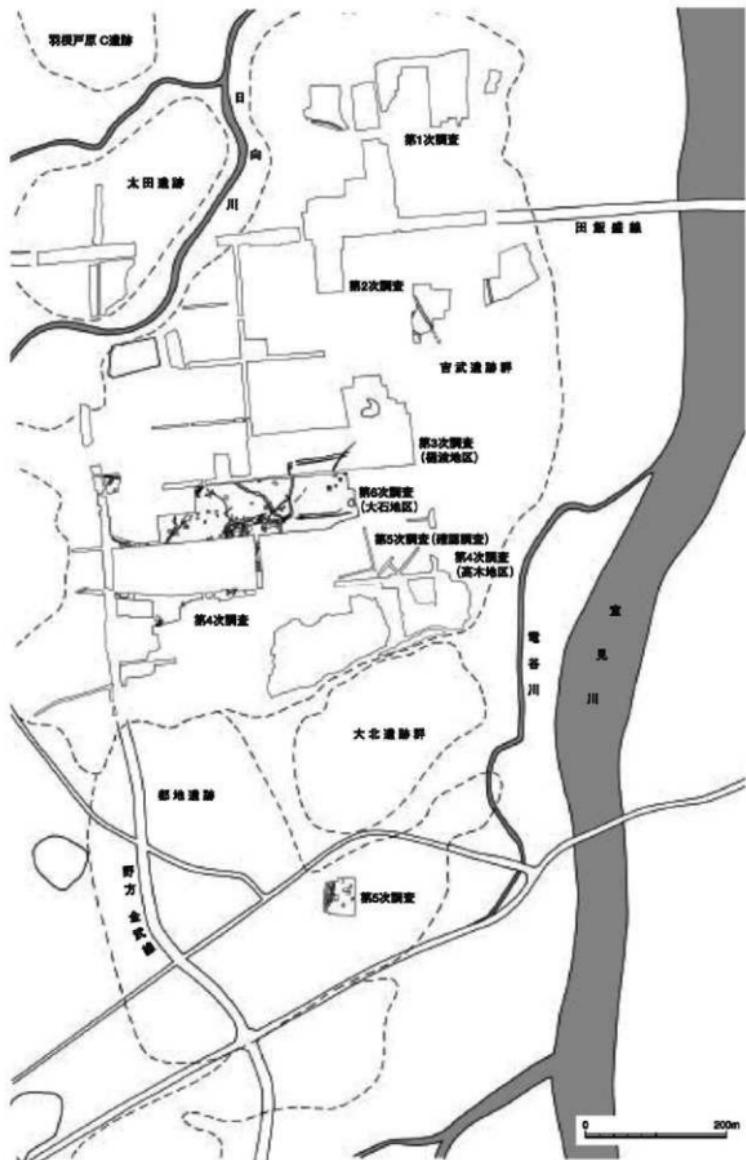


Fig.102 周辺古代・中世・近世遺構分布図 (1/4000)

Tab.2 9次調查 古代～近世土壤一覧表

Tab.3 9次關寶 古代～近世遺一覽表

Tab.4 9次調査 古代～近世井戸一覧表

井戸番号	地点	井深	底径(底面積×底深(m))	形	主な出土遺物	備考	井戸番号	底面積
S8001	C	10C木 -11C	1.48×1.3×0.08	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等		109	
S8002	B	170×1.66×1.38	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等		100-101	27	
S8003	B	-11C木 -11C木	2.8×2.25	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等		100-102	26
S8004	B	9C木 -11C木	4.3×(5.4×7.4)	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等	SD51に切られる。	100-103	
S8005	B	10C木 -11C木	1.20×1.15×0.90	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等		100-105	28
S8006	B	古代	3.00×3.42×1.25	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等			
S8007	D	9C?	1.45×0.80×1.60	円形	施用青磁(盤・瓶・瓶底器等)・土器類(灰・黑・褐色土器類)・灰津・灰土・灰瓦等			

Tab.5 9次調査 古代～近世建物一覧表

井戸番号	地点	井深	底径(底面積×底深(m))	形	主な出土遺物	備考	井戸番号	底面積
S8001	C	10C?	2×2-(3.1×2.0)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰・白)・土器類(灰・白・褐色)		108-109	29
S8002	C	10-11C?	2×1-(3.3×1.8)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰・白等)		108	
S8003	C	10C-11C?	4×3-(4.8×1.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)		108	29
S8004	A	9C木 -11C木	4.3×(5.4×7.4)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・施用青磁(灰)・土器類(灰・白等)・灰津・灰土・灰瓦等	SD16に切られる。	94-97	23
S8005	A	9C木?	5×1-(1.5×2.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・施用青磁(灰)・土器類(灰・白等)・灰津・灰土・灰瓦等	SD16に切られる。	94-97	
S8006	A	9C木?	4×1-(7.23×4.8)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・施用青磁(灰)・土器類(灰・白等)・灰津・灰土・灰瓦等	SD16に切られる。	94-97	
S8007	A	9C-10C木?	4×1-(7.23×4.8)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰・白等)・高台等・圓筒形土器(灰)・灰津	SD11に切られる。	95-97	24
S8008	A	9C木-1號	5×2-(9.1×4.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・施用青磁(灰・白等)・高台等・土器類(灰)	SD11に切られる。	95-97	24
S8013	C	9C?	3×3-(5.4×3.9)	楕円形	?	施用青磁(灰)・土器類(灰)	108	
S8017	B	9C?	2×1-(4.7×3.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰・白等)	SD10に切られる。	104-105	
S8018	B	9C?	2×3-(4.5×3.15)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	104		
S8020	B	8-9C	3×1-(5.1×2.7)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰土	SD16に切られる。	104	
S8021	B	11C木-12C木?	3×2-(5.4×3.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰土	井戸S8023等内部に残る。	104-105	27
S8025	B	8-9C	3×2-(5.6×4×1.25)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	104		
S8026	B	8-9C	2×2-(4.1×1.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)	104		
S8027	A	9C木?	2×1-(5.5×3.6)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)	SD08-09を切る。	95	
S8028	A	9C木?	4×3-(5.0×6×7.9×5.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)	SD07-08を切る。	95	
S8031	C	9C木-10C木?	2×3-(5.2×3×4.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・高环・灰环・灰瓦等・土器類(灰)・灰津・灰白等・高台等・圆筒形(灰)・黑色A	SD10-109		
S8041	D	10C	3×2-(5.8×3.0)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰・白等)・土器類(灰・白等)・灰津・灰土	110	30	
S8042	E	11C?	2×2-(4.4×3.2)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	111		
S8046	D	古代	1×1+(5.3×5.5×4.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	SD047と切り合う。	110	30
S8047	D	古代	1×2+(5.3×5.5×4.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	SD046と切り合う。	110	30
S8050	B	10-11C	3×3-(5.3×3.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)			
S8051	B	10-11C	2×2-(4.5×3.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	111		
S8052	B	10-11C	2×2-(5.2×4.5×4.55)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	111		
S8053	B	10-11C	2×2-(4.3×3.4)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	111		
S8054	B	10-11C	2×2-(4.5×3.3×4.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	111		
S8055	A	中世?	2×2-(5.4×3.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD033と切り合う。	95	
S8056	A	中世?	4×3-(7.35×4.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)	95		
S8057	A	中世?	6×4-(3.2×3.2)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	SD036と切り合う。	95	
S8058	A	中世?	5×4-(6.6×4.7)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	SD037と切り合う。	95-96	
S8059	A	9C木-11C	4×3-(4.13×3.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD038と切られる。	97	25-26
S8060	A	9C木-11C	3×1+(1.02×3.1+1.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD039と切られる。	97	25-26
S8061	A	9C木-11C	3×1+(1.02×3.1+1.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD039と切られる。	97	25-26
S8062	A	9C木-11C	3×1+(1.02×3.1+1.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD039と切られる。	97	25-26
S8063	A	11C	1×2+(5.1×3.2)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD040と切られる。	97	25-26
S8065	中世?	3×2-(5.4×3.9)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)		112		
S8066	中世?	3×2-(5.4×3.9×2.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD039と切り合う。	113		
S8067	中世?	4×3-(6.35×4.6)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)	SD039と切り合う。	113		
S8068	14-15C	3×1+(6.5×1.8×4)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	113			
S8069	4K	BC前-1P	3×1-(5.5×2.75)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	113		
S8070	4K	BC前-1木	3×2-(5.15×3.2)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD405を切る。	113	
S8071	4K	BC前-1P	4×2-(7.3×3.4)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)・土器類(灰)・灰津・灰瓦等	SD404に切られる。	113	
S8072	4K	BC前-1中?	3×1+(4.2×3.2+2.5)	楕円形	N&P-W 施用青磁(灰)	113		

図 版

PLATES



1. 桶渡近世墓地検出状況（東から）



2. 桶渡近世墓地検出状況（南から）



1. 桶波近世墓地東側検出状況（南から）



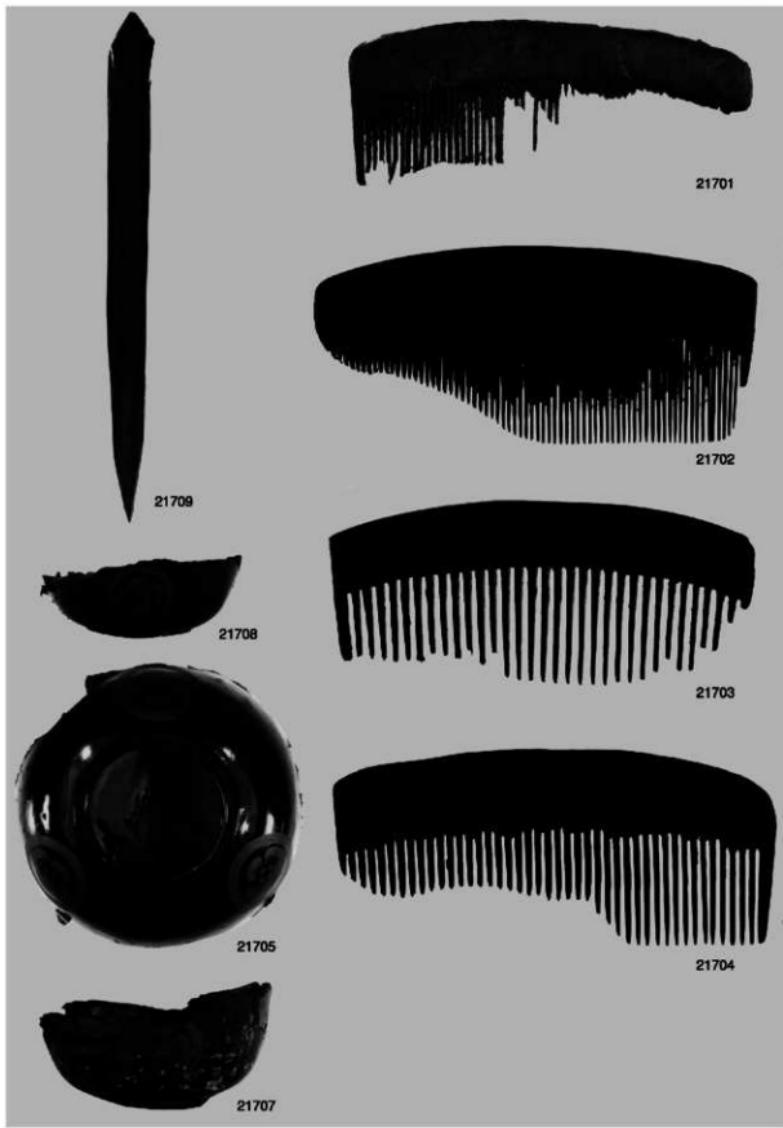
2. 桶波近世墓地埋置状況断面（北から）



1. 横渡近世仮塚墓埋置状況断面（北から）（後円部墳丘西側土層断面）



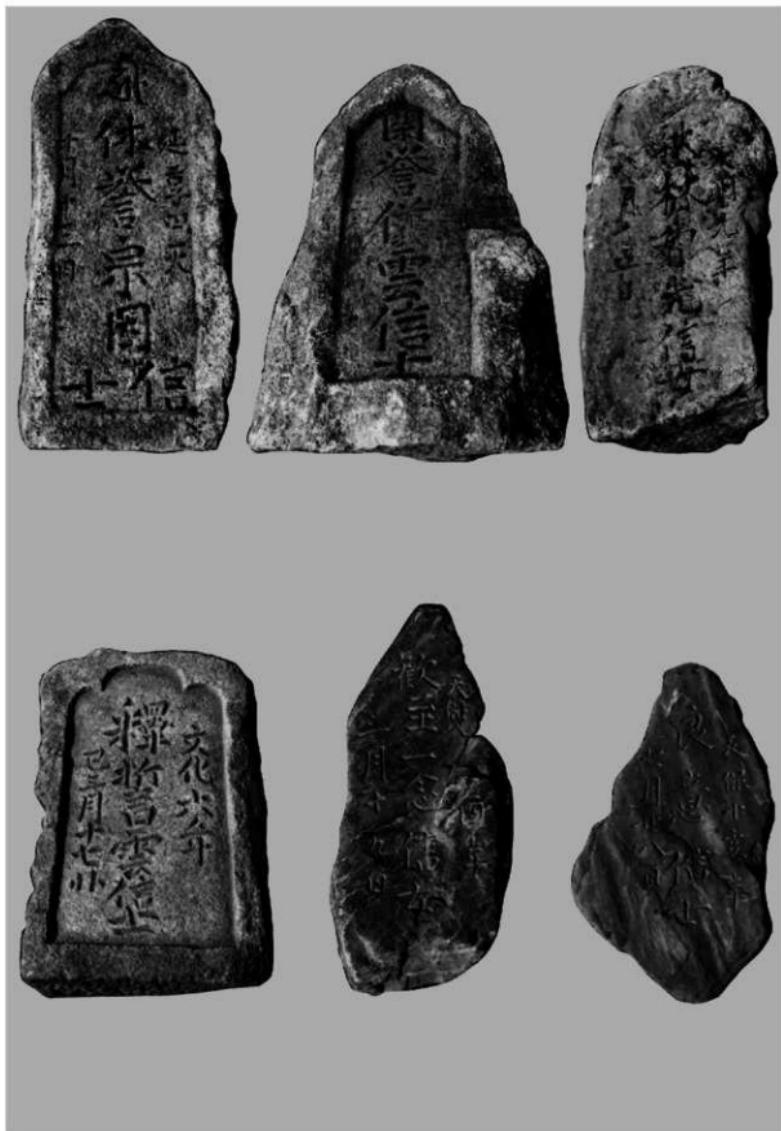
2. 墳丘墓の近世墓出土状況



桶波近世仮塚墓・I-11地区SD01満出土木製品



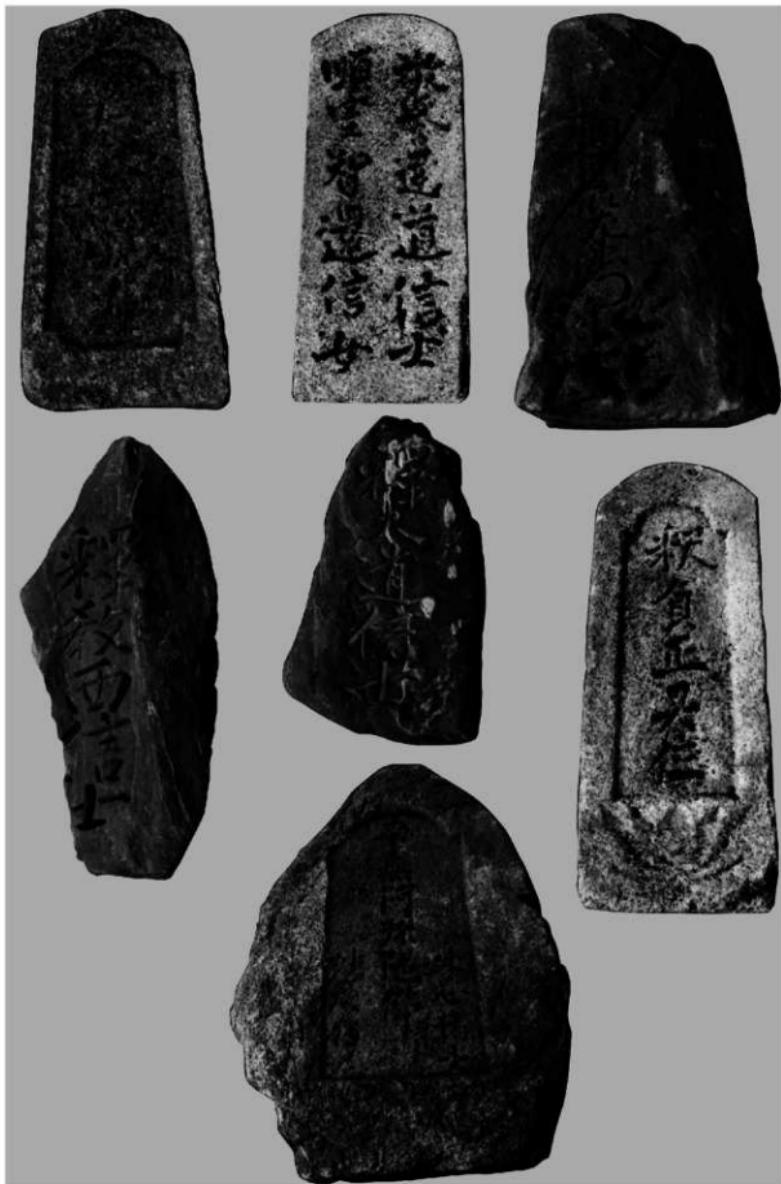
横浪近世墓地の墓石碑①



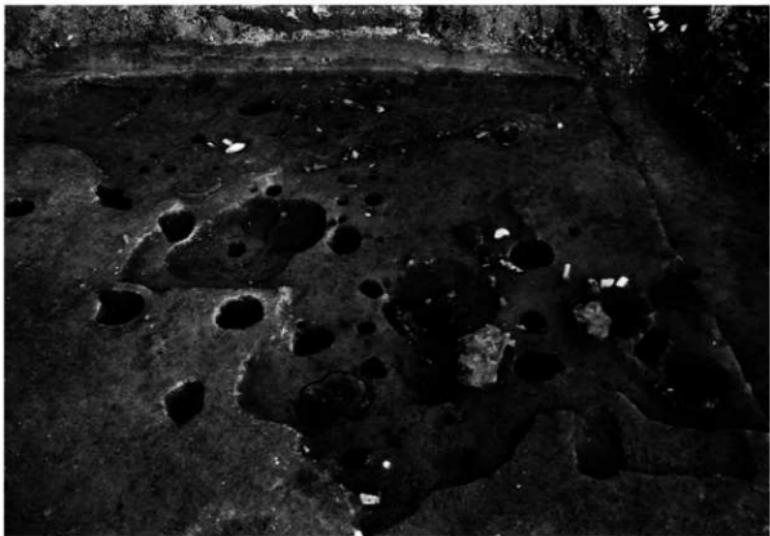
横浪近世墓地の墓石碑②



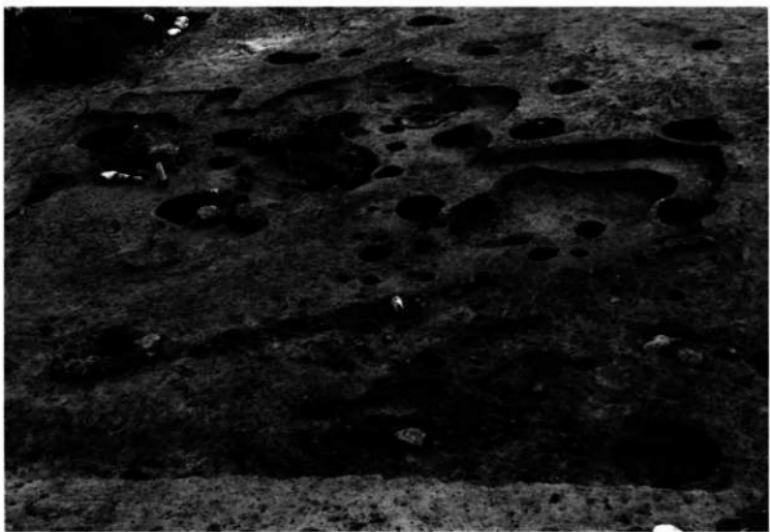
横渡近世墓地の墓石碑③



樋渡近世墓地の墓石碑④



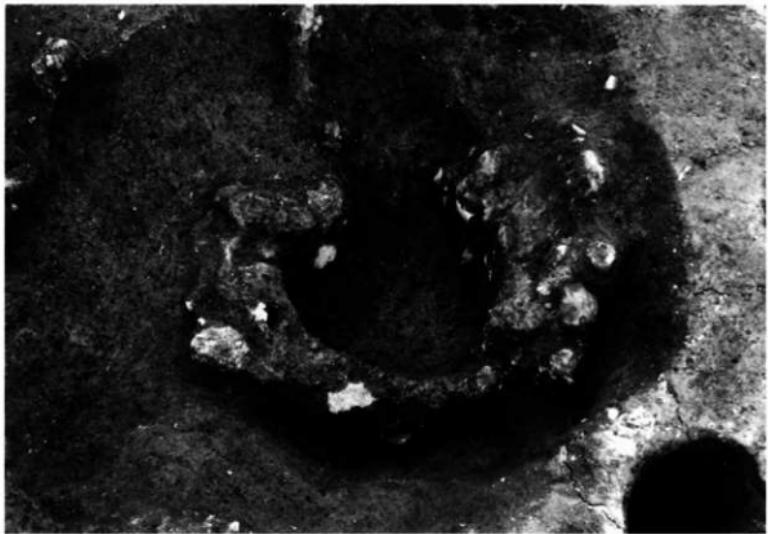
1. LM-16地区炉跡群全景（西から）



2. LM-16地区炉跡群全景（南西から）



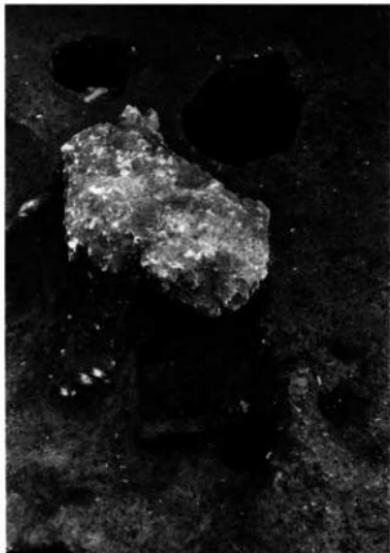
1. LM-16地区炉跡群全景（北から）



2. 第1号炉跡出土状況（東から）



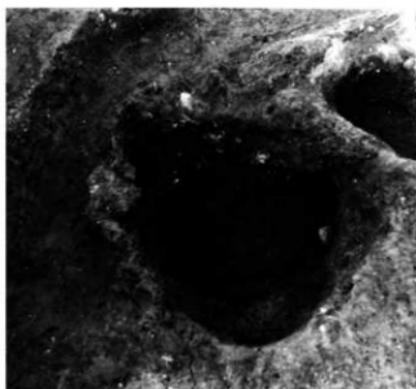
第1・2号炉跡出土状況（東から）



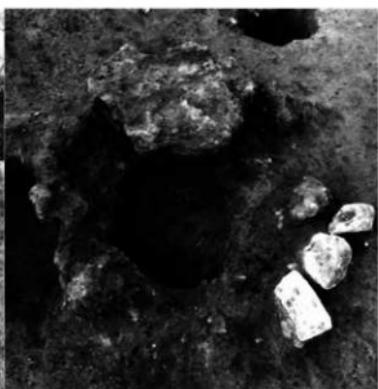
1. 第2号炉跡出土状況（南西から）



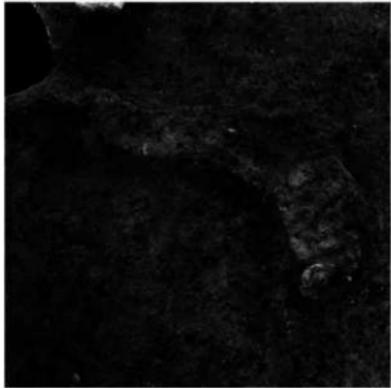
2. 第6号炉跡出土状況（西から）



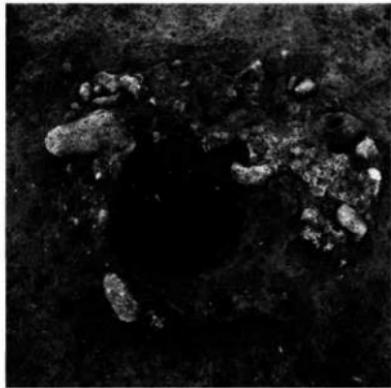
3. 第4号炉跡出土状況（南から）



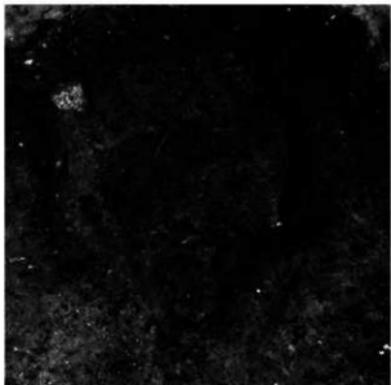
4. 第5号炉跡出土状況（南から）



1. 第7号炉跡出土状況（北から）



2. 第8号炉跡出土状況（西から）



4. 第10号炉跡出土状況（北東から）

3. 第9号炉跡出土状況（北から）

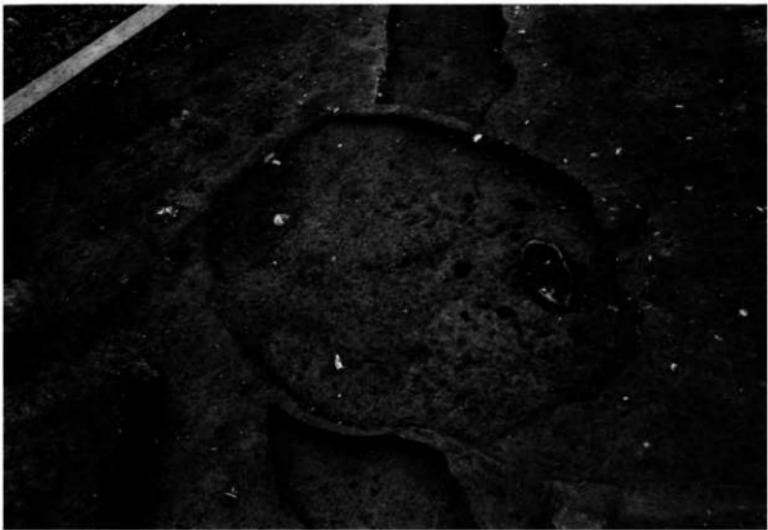


6. 第13号炉跡出土状況（西から）

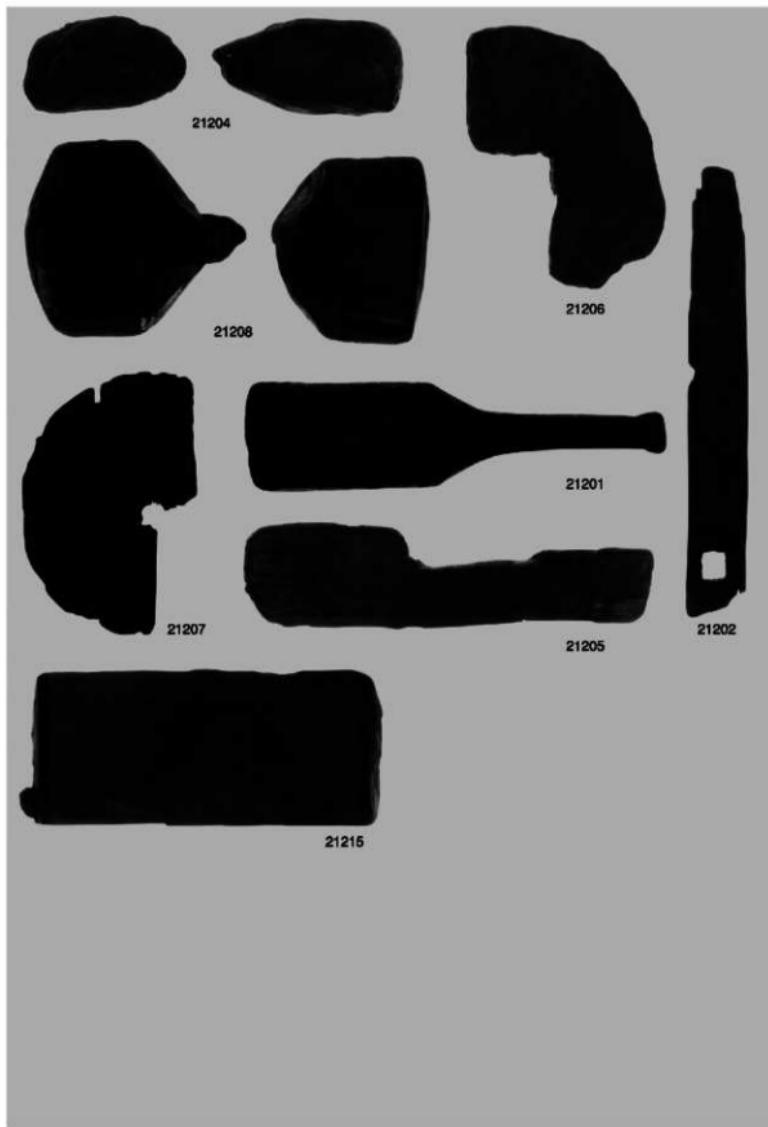
5. 第13号炉跡出土状況（東から）



1. LM-16地区SB85建物出土状況（北から）



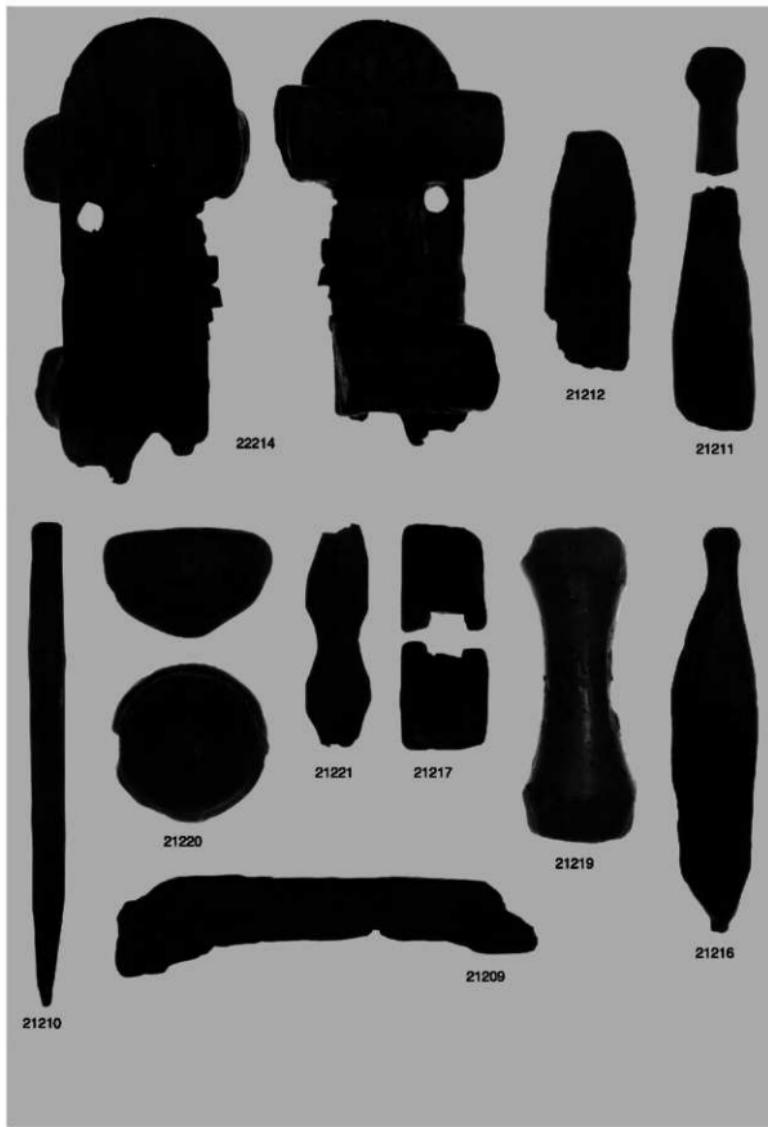
2. LM-16地区SK256土坑出土状況（西から）



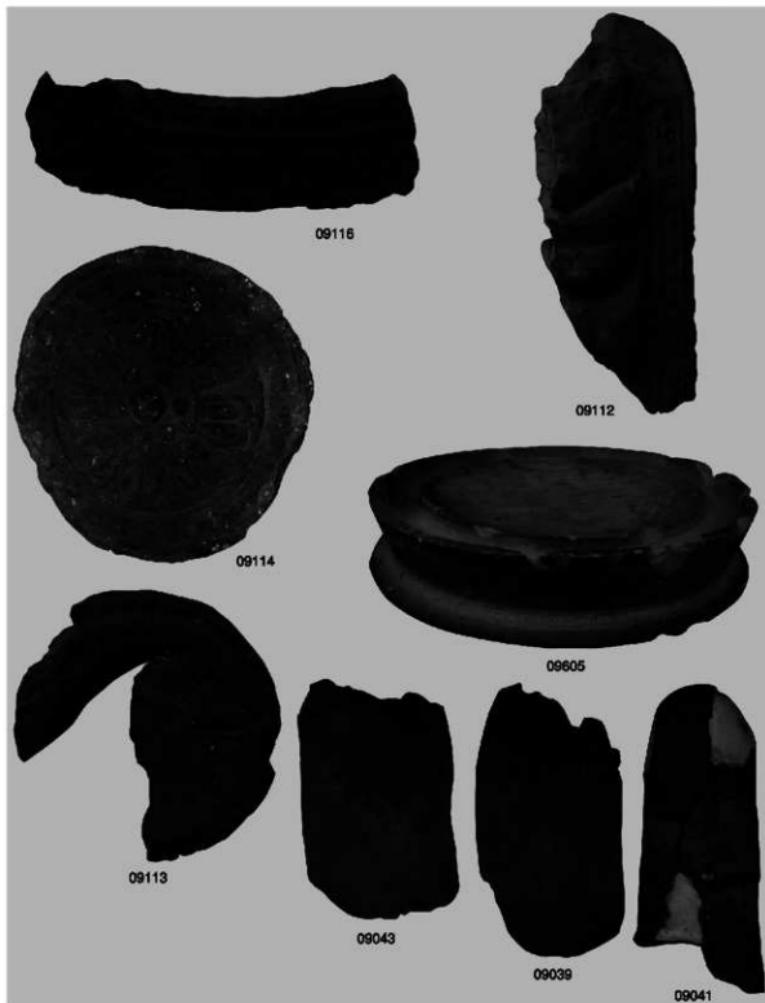
1号幹線道路第2区調査区SD02b溝出土木器類

1号幹線道路第2区調査区SD02b層出土木製箋





1号幹線道路第3区調査区SD05溝出土木器類



第6次調査出土の鏡・瓦・羽口



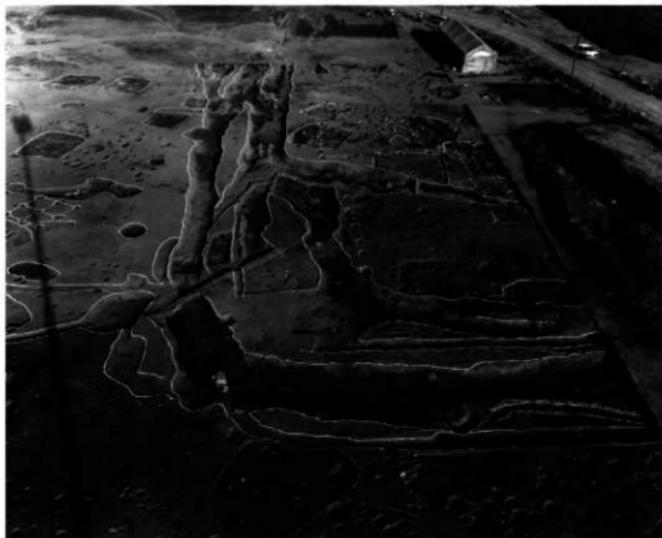
1. 方形区画溝と飯盛山（東から）



1. A群西半部全景（東から）



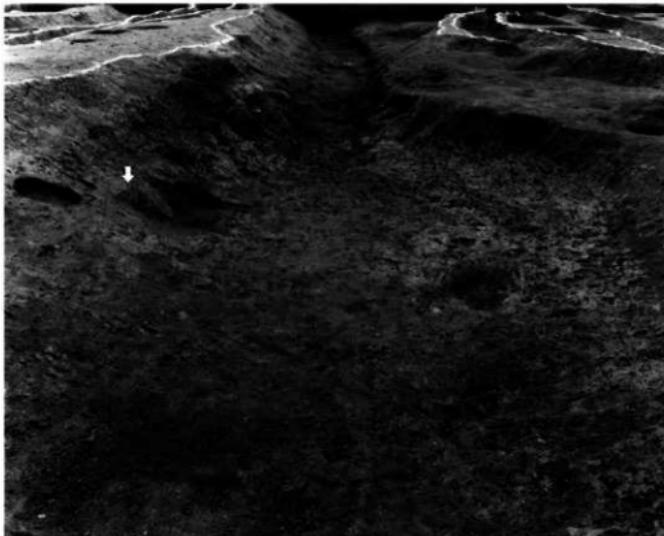
2. A群西半部全景（南から）



1. A群西半部全景（西から）



2. A群区画溝（東から）



1. SD03内八稜鏡出土位置（北から）



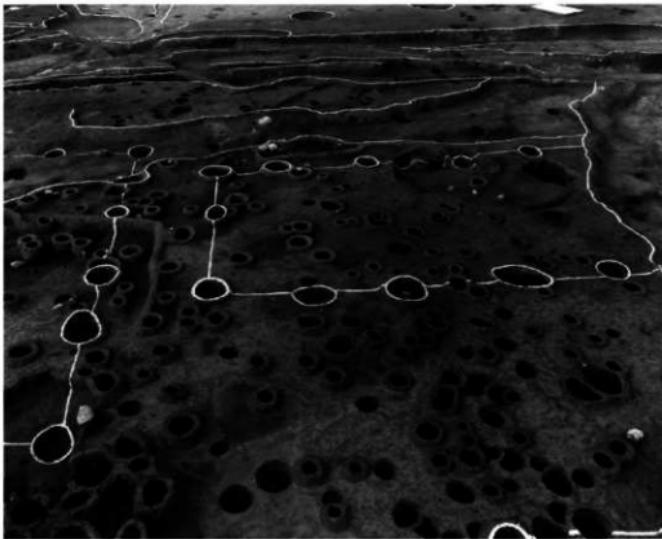
2. SD03内八稜鏡出土状況（東から）



1. SD11内勾玉出土状況（北西から）



2. A群SB04・05SD01・16（東から）



1. A群SB07（南から）



2. A群SB08（南から）



1. 2号支線道路区（南から）



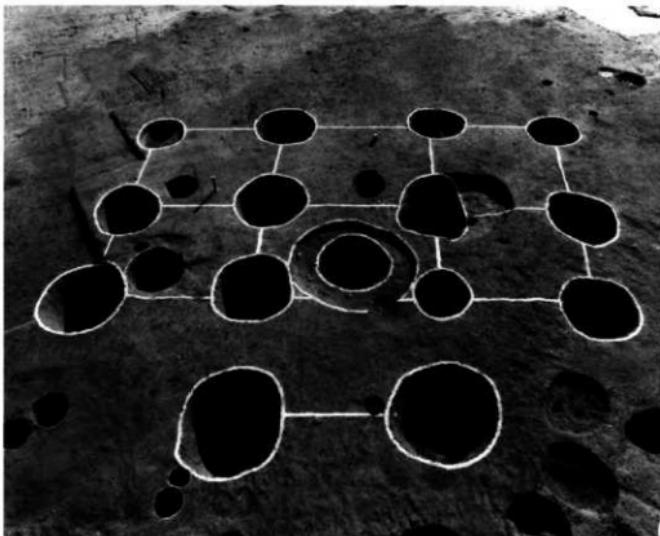
2. SB205・208（南から）



1. SB208人物対比（南から）



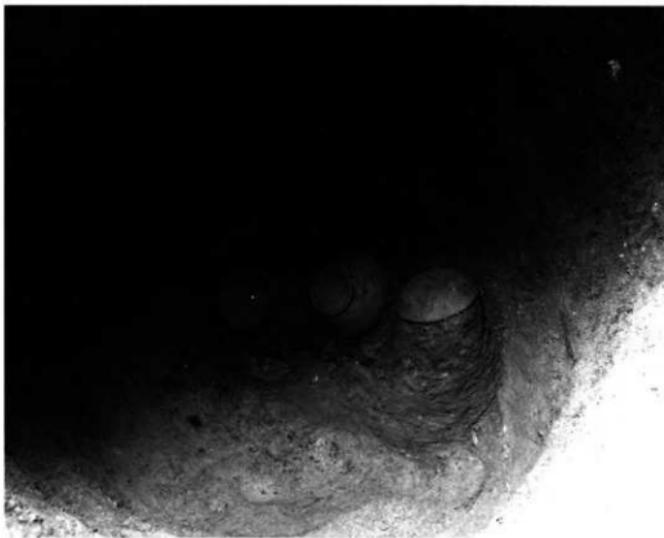
2. SB205（左）SB208（右）礎石根石出土状況（西から）



1. B群SB24（北から）



2. B群SE02（北から）



1. B群SE03（南から）



2. B群SE05（東から）



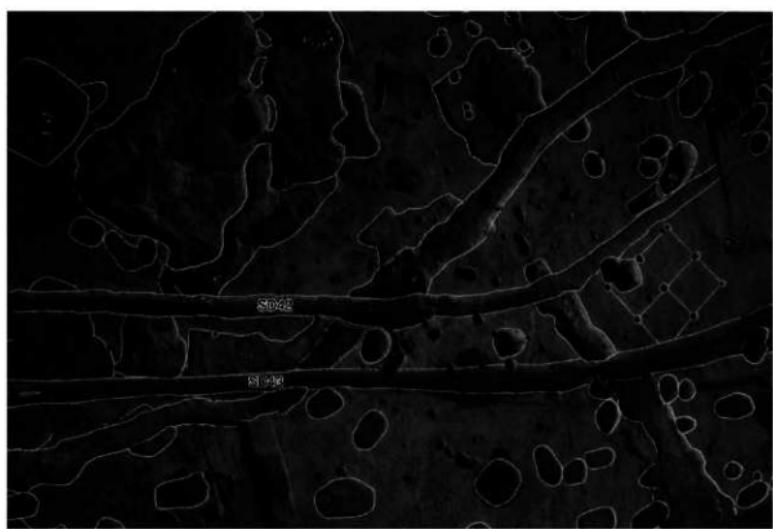
1. C群全景（南東から）



2. C群SB03・01（南から）



1. D群SB41・46・47（南西から）



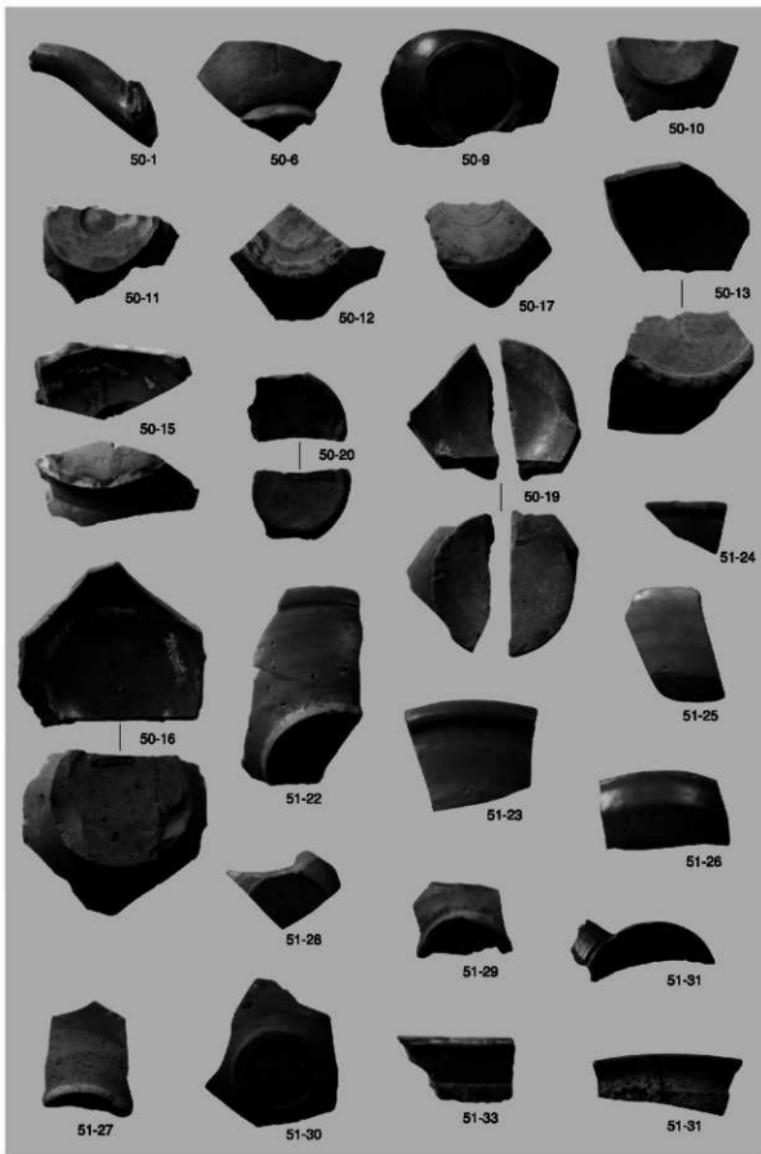
2. E群SD42・43（南から）



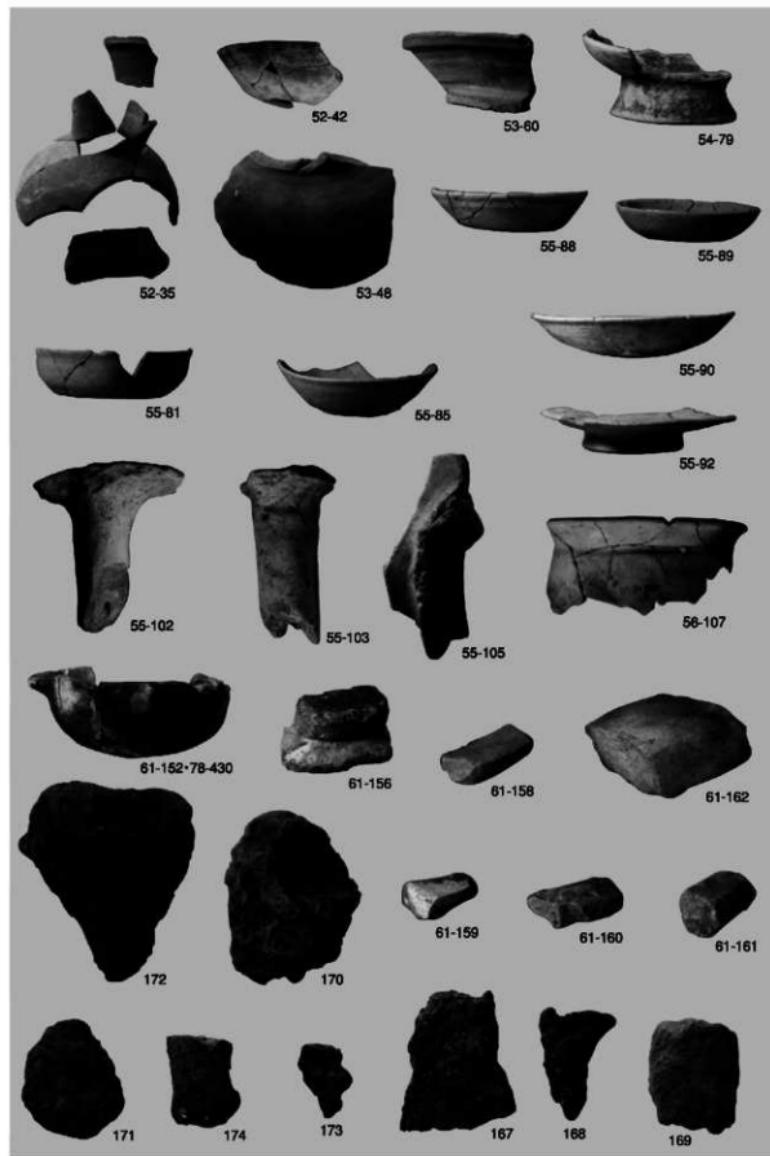
### 1. 2号支線排水路1区SD01鉄津出土状況（西から）



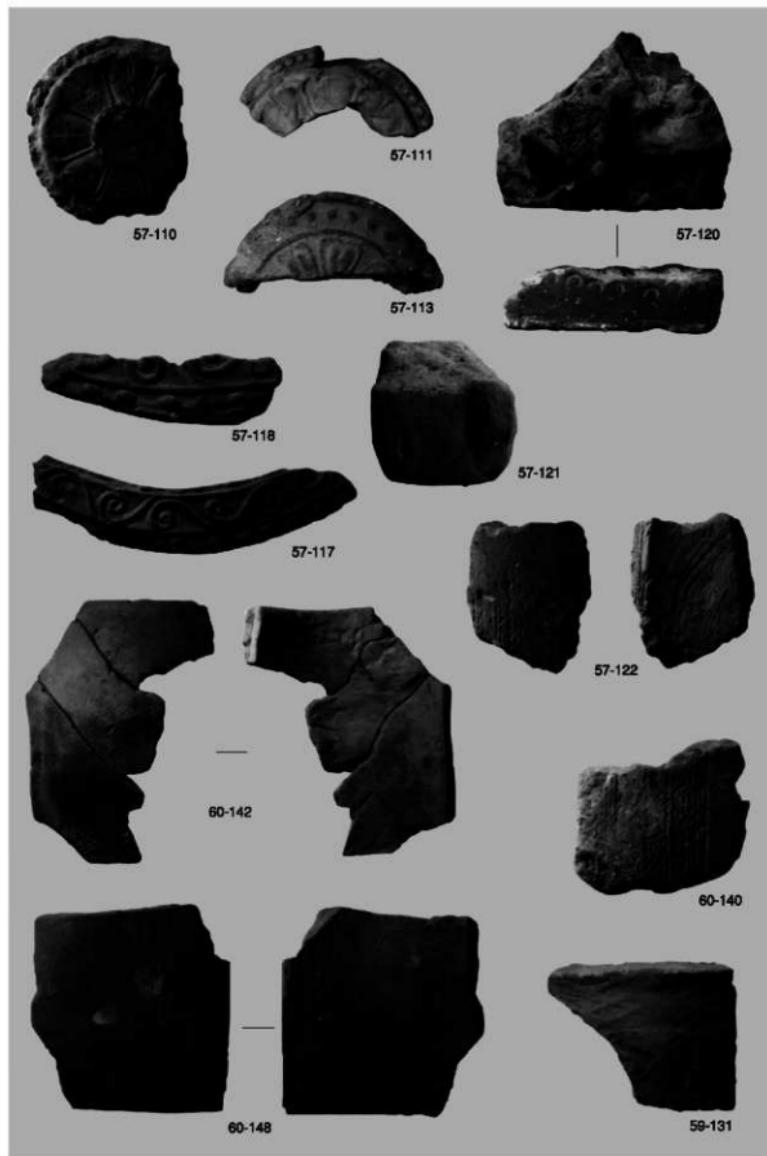
## 2. 4区全景（西から）



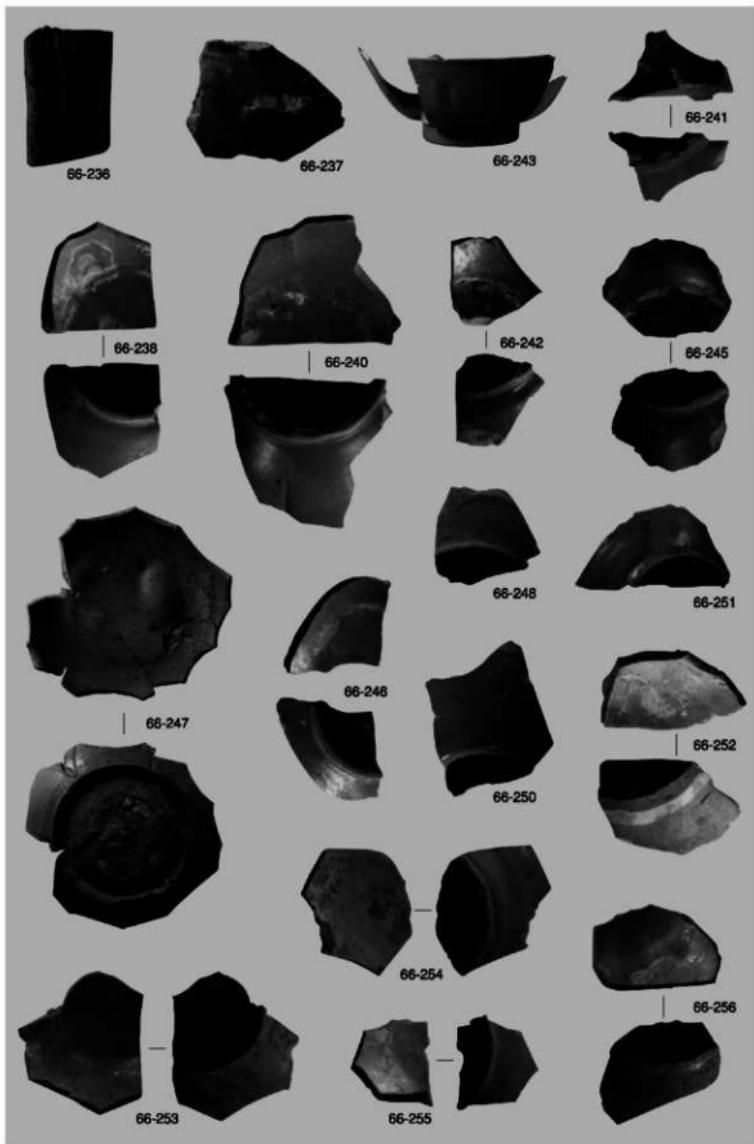
SD01出土陶磁器

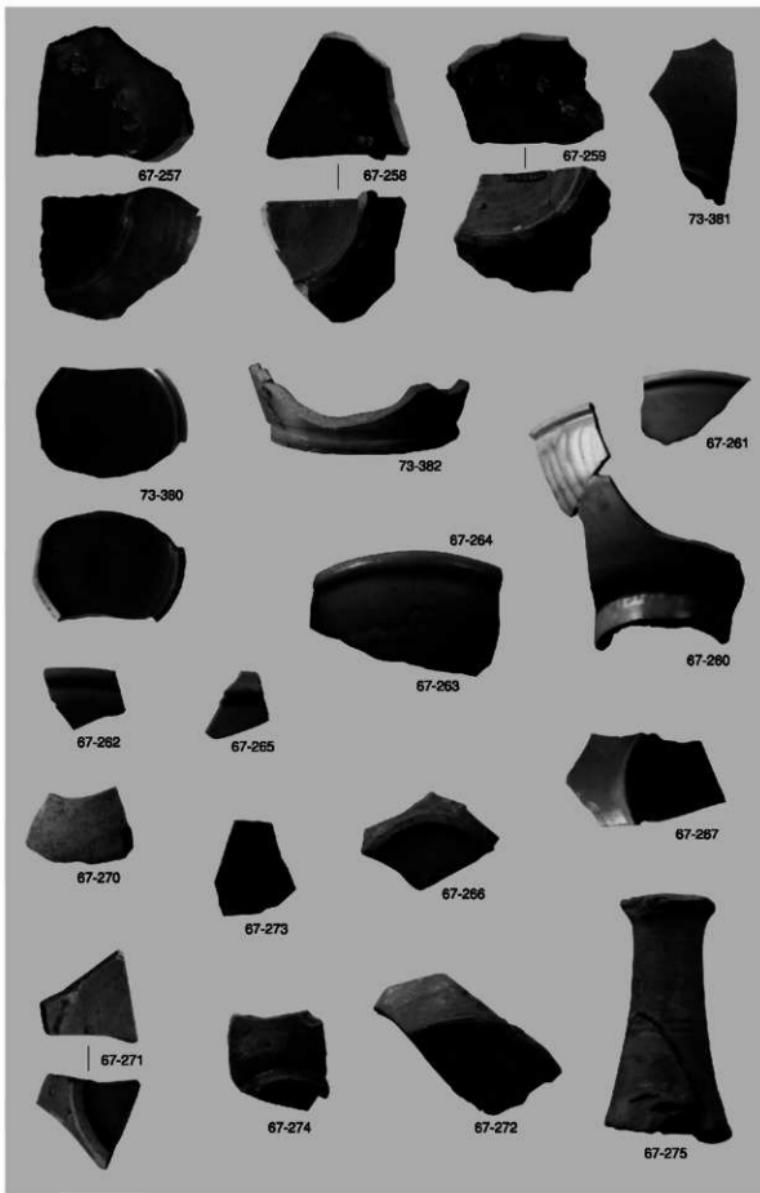


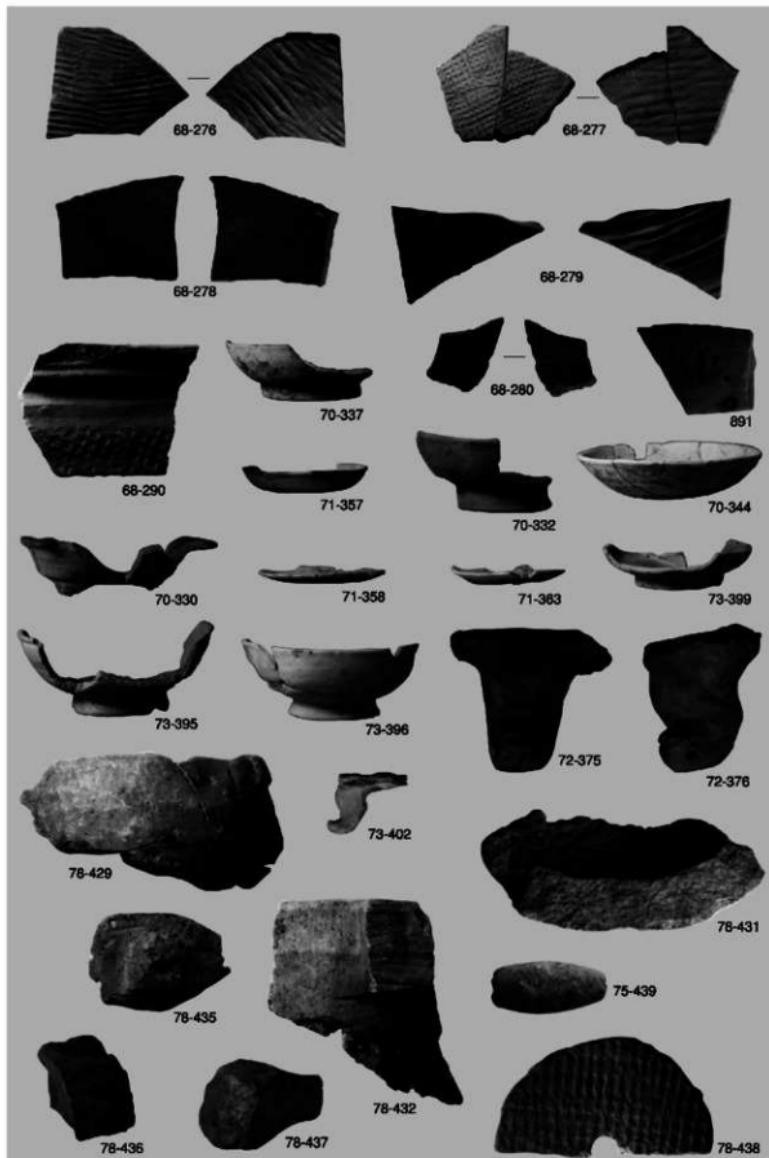
SD01出土土器・石器・鐵滓

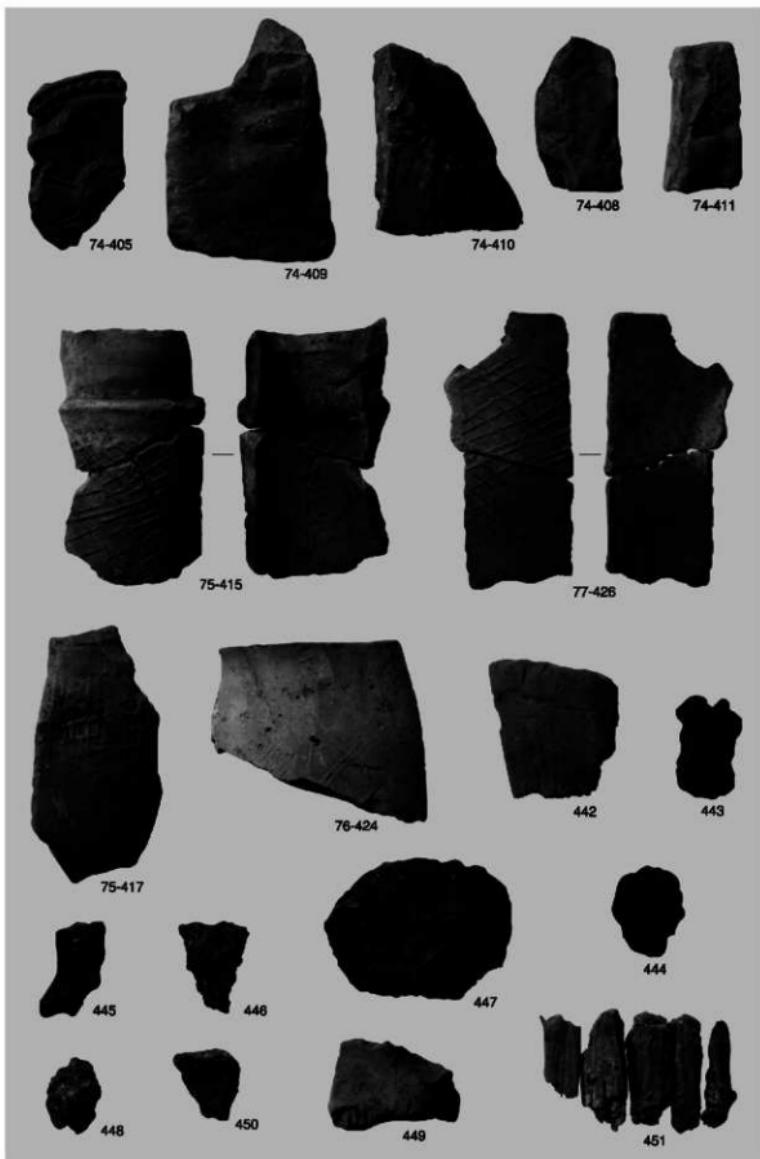




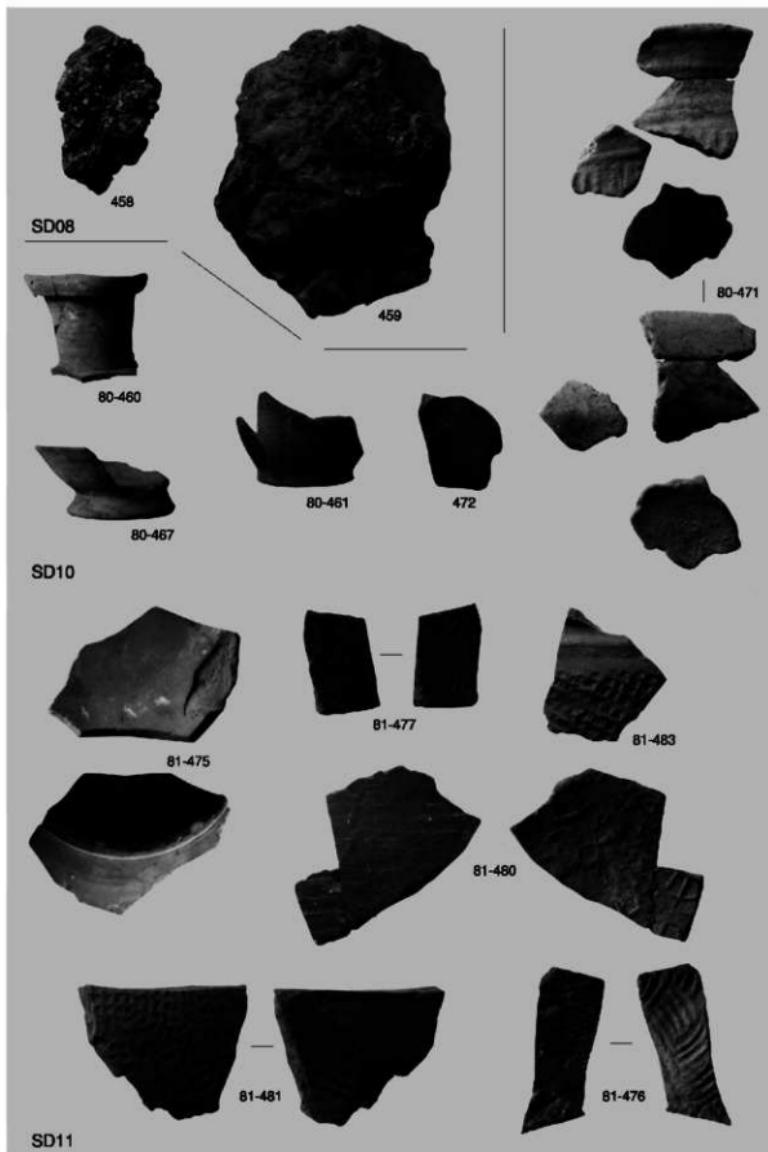




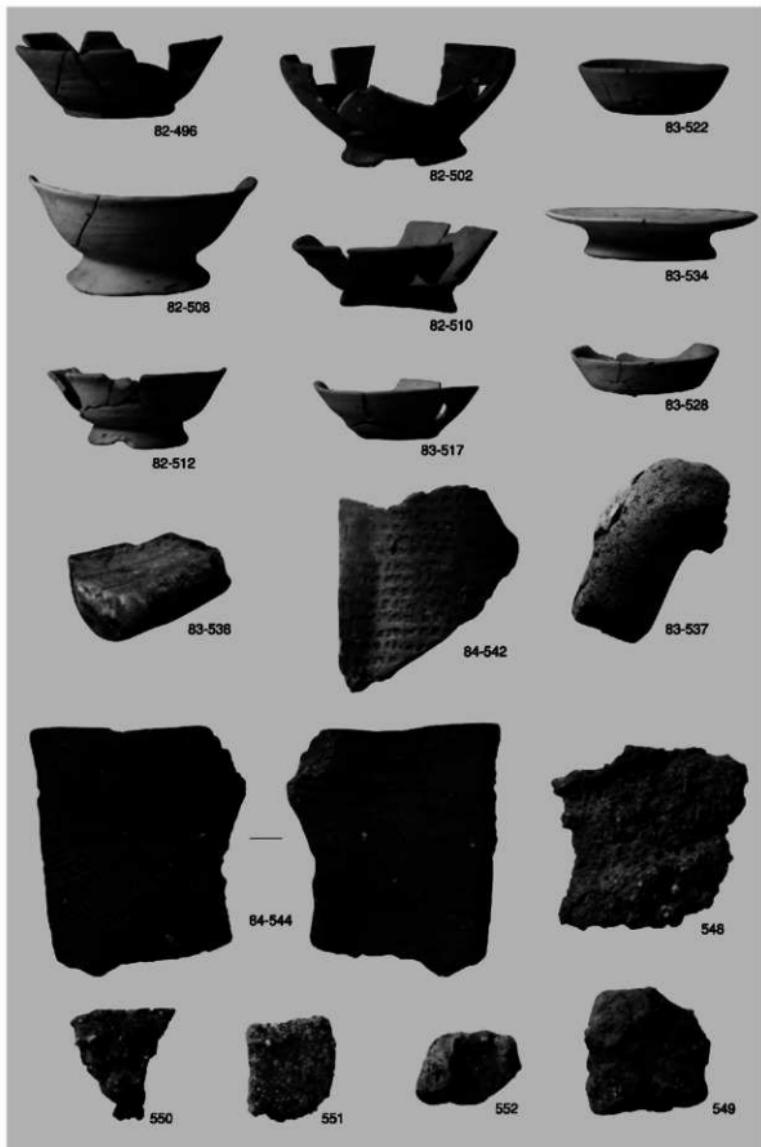




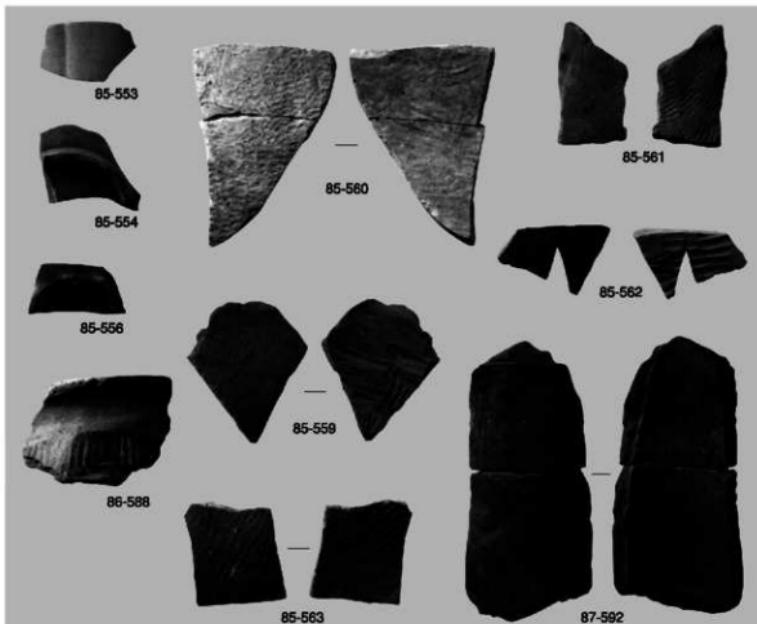
SD03出土瓦・鉄滓・歯齒



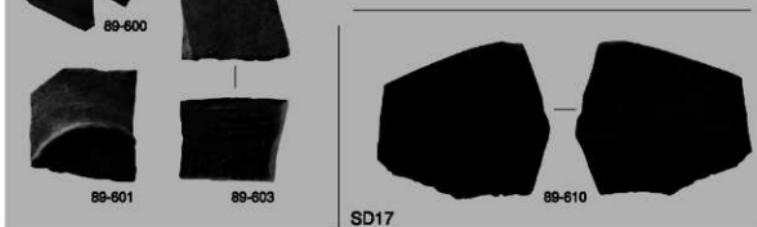
SD08・10・11出土遺物



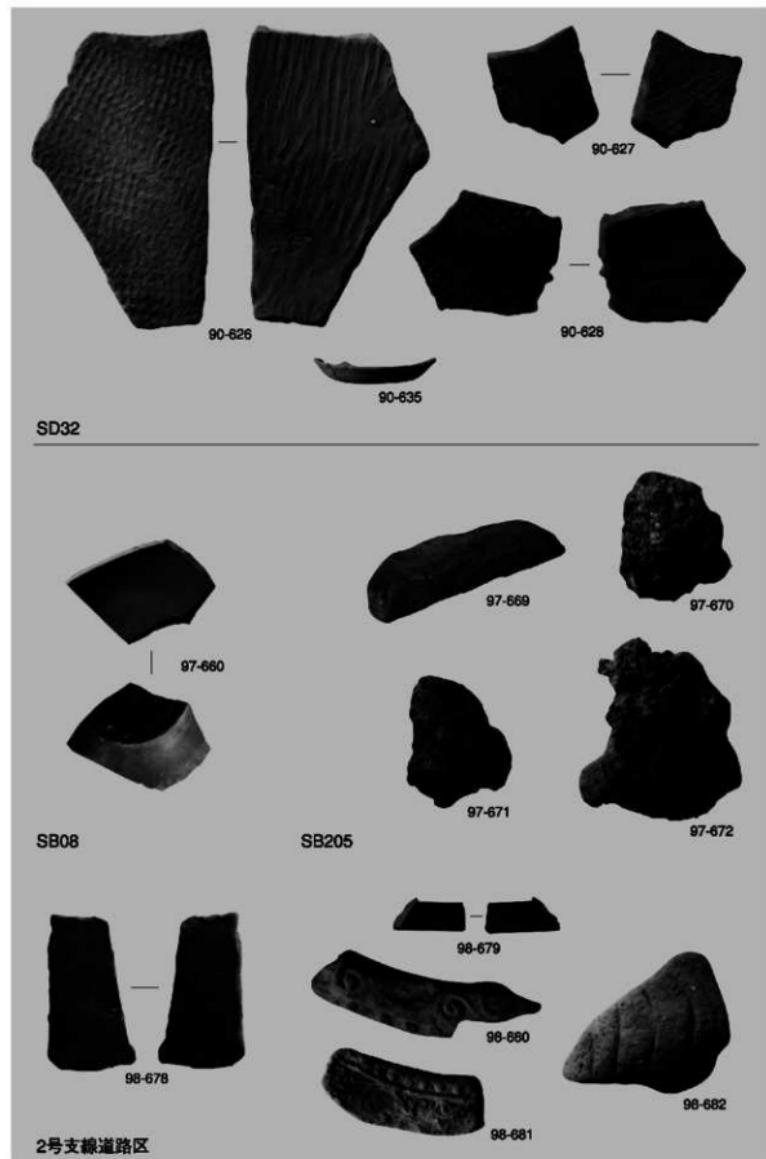
SD11出土遺物-2



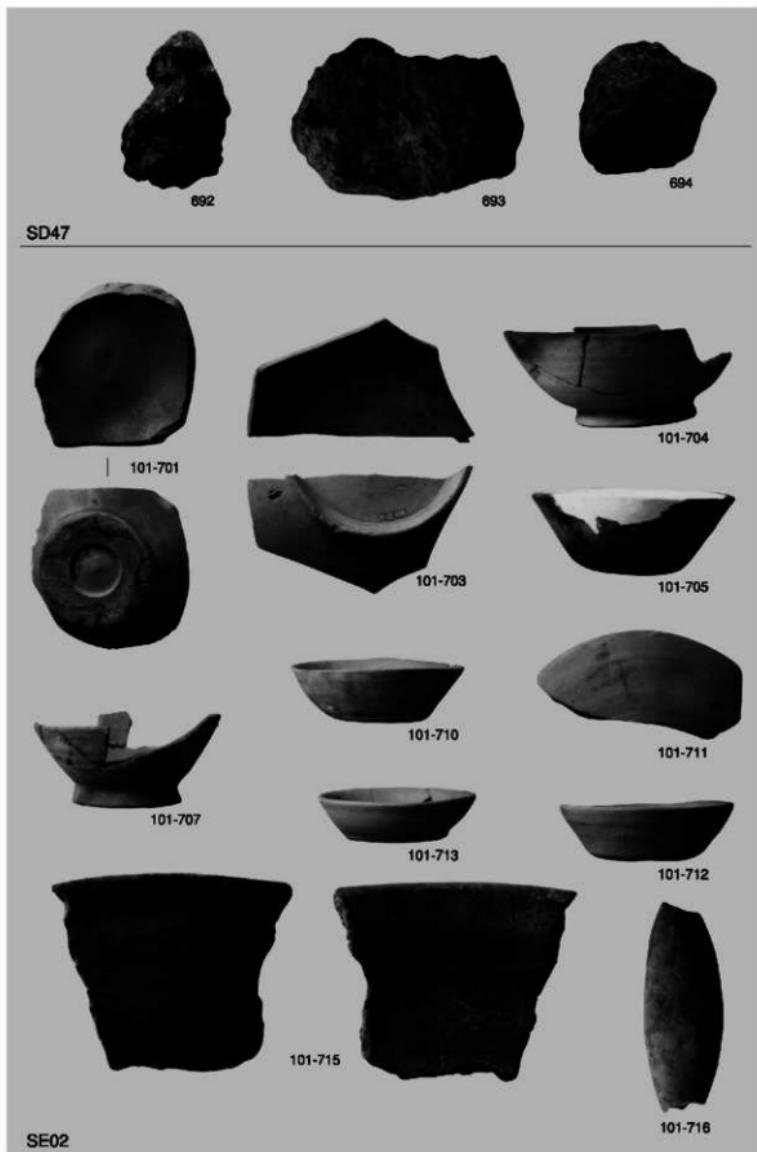
SD13  
SD16

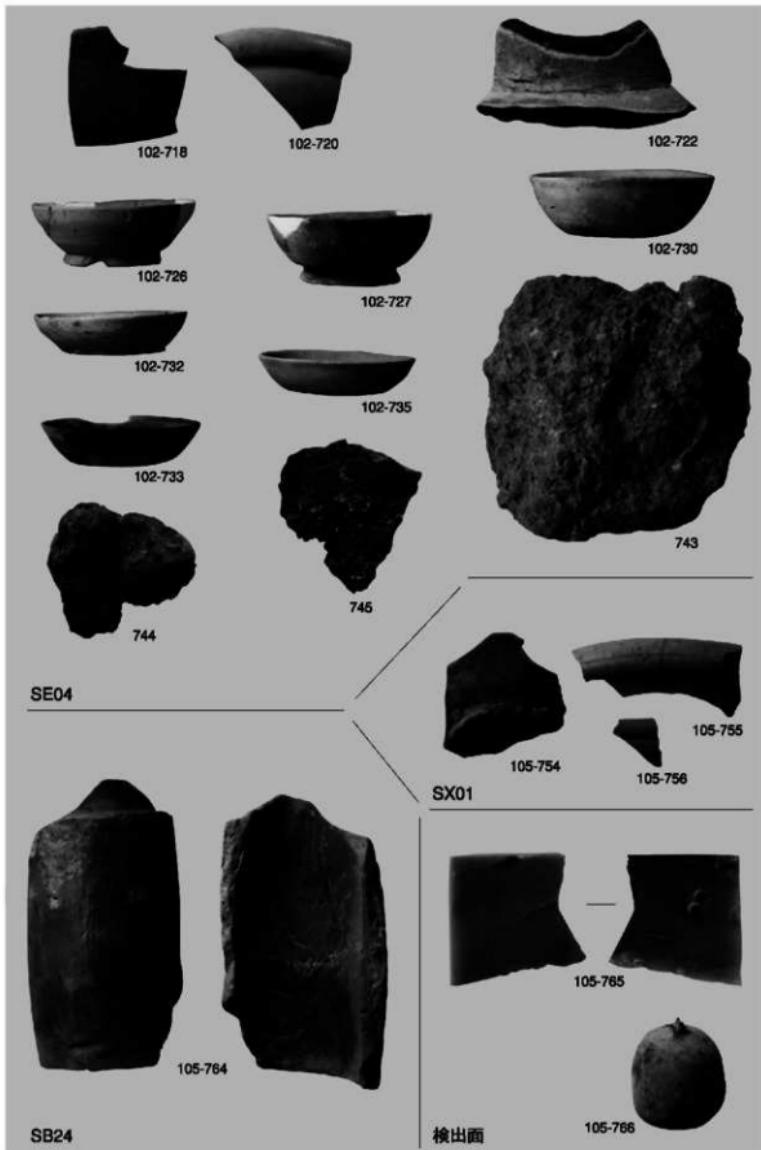


SD13・16・17出土遺物

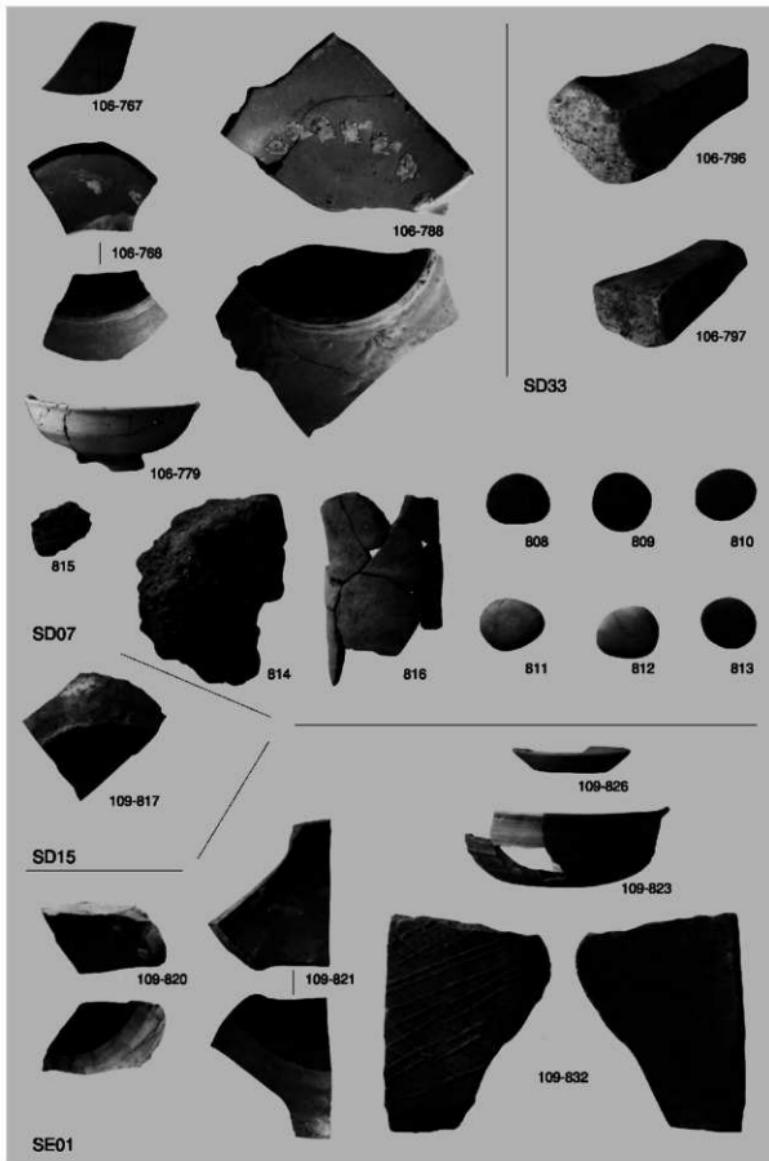


SD32・SB08・205・2号支線道路区出土遺物

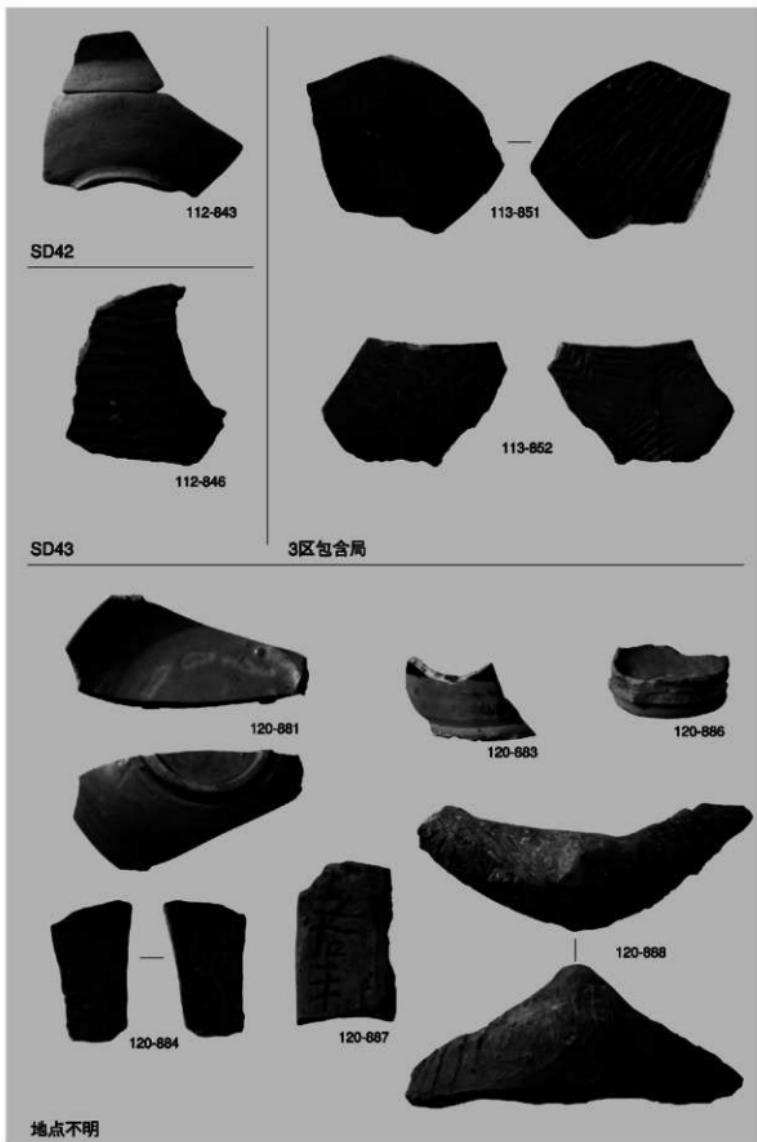




SE04・SX01・SB24・検出面出土遺物



SD07・15・33・SE01出土遺物



SD42・43・3区包含局・出土地点不明遺物



## 報告書抄録

ふりがな	よしたけいせきぐん							
書名	吉武遺跡群							
副書名	飯盛・吉武遺場整備事業関係調査報告書 13 -古代～近世-							
巻次	XXIX							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書第965集							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	加藤良彦、横山邦雄							
編集機関	福岡市教育委員会 埋蔵文化財課							
所在地	〒810-0043 福岡市中央区天神一丁目8-1 TEL092-711-4667							
発行年月日	20070330							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
よしたけいせきぐん 吉武遺跡群 第4・6・9次	ふくおかし ひじく 福岡市西区 大字飯盛・ 吉武内	市町村	遺跡番号	8335 40132	33° 8446 8535	130° 32° 27°	1983.09.12 ~ 1986.03.31	84.000 遺場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
吉武遺跡群	官衙	古代	建物群・土坑 溝・道路状遺構	須恵器・土師器 円面鏡・越州青磁	官衙もしくは寺院			
	生産跡	中世	旧河川など					
	墓地	近世						

## 吉武遺跡群 XIX

飯盛・吉武圓場整備事業関係調査報告書 13

福岡市埋蔵文化財調査報告書第965集

古代-近世編

2007年3月30日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 今井印刷株式会社  
福岡市中央区赤坂1丁目2番18号